



SD

空間デザイン ISSN 0563-0991
第432号 2000年9月1日発行 (毎月1回1日発行)
昭和40年7月5日創刊 登録第100号

Space Design

0009

Monthly Journal of Art and Architecture

特集

木造モダニズム 1930s—50s

素材を転換させた日本の発想

Modernism in Wooden Construction 1930s to 1950s

Japanese Approaches Transform Materials

木造表現のパラダイム／モダニティの構築／インターナショナル리티の超越

金井兼次／アントニン・レーモンド／藤井厚二／ブルーノ・タウト

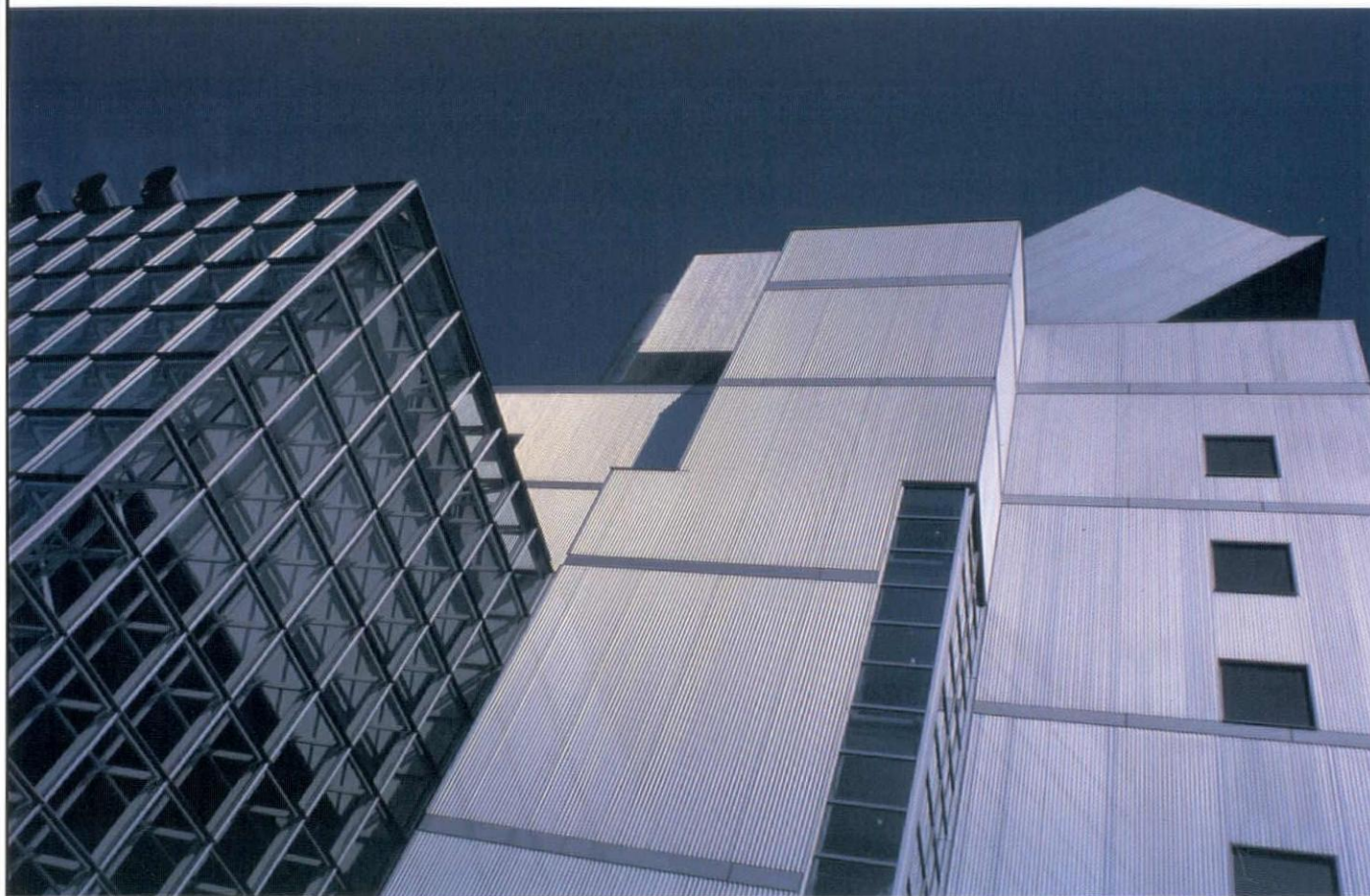
堀口捨己／白井晟一／前川國男／土浦亀城／増沢 洵／松村正恒

文：大川三雄／矢代真己／田所辰之助／濱崎良実／黒沢 隆／写真：清水 襄

対談：黒沢 隆×内藤 廣

Design & Technology

デザイン&テクノロジー



YKK APは、建物の表情を構成する開口部のアルミサッシやカーテンウォールなど、
完成度の高い建築パーツをトータルなシステムで建築に融合させること、
つまり、現代建築が求める時代のニーズにデザイン&テクノロジーの設計対応で
お応えすることを企業テーマに掲げています。



USAKI



検針の大崎が初めて実用化

電力線通信方式集中検針システム
POWER LINE CARRIER-ONE-O

びい えろ しい いち まる

PLC-10

カンタン

シンプル

ローコスト

の電力線通信検針システム

リニューアルetc.
既設の建物に
お手軽に
導入できます。

電力線通信方式とは？

通信経路として、屋内配電線を利用します。
ですから……

専用のケーブルの敷設が不要なので……

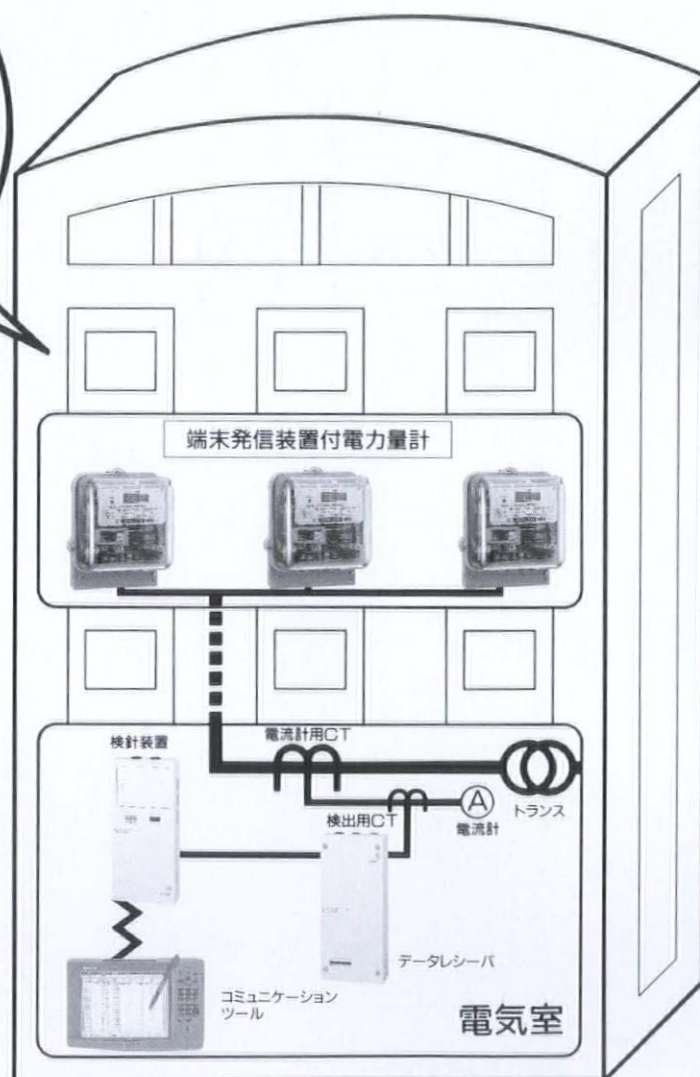
- 工事が簡単
- システムがシンプル
- 導入がローコスト
- 既設の建物(ビル、寮など)に手軽に導入できる
- 増設にも即対応可能

コンパクトだから……

- 設置場所を選ばない

検針の大崎だから

- 電気のほか水道、ガスも検針



大崎電気工業株式会社

本 社 〒141-8646 東京都品川区東五反田2-2-7

システム・機器営業部 営業課 ☎03-3443-7176 FAX03-3443-0265

大阪支店 ☎06-6373-2556

営業所 札幌 ☎011-251-6622 / 仙台 ☎022-223-3747 / 北関東 ☎048-653-5901

広島 ☎082-243-1611 / 沖縄 ☎098-832-7406

もう一つのカジマを知ってください。

高層のビルを建てる。巨大なダムを造る。長い海底トンネルを掘る。確かにカジマの仕事ですが、しかしそれは、

ほんの一面にすぎません。私たちが四六時中生活する住まいの、

ここにも、あそこにも、意外なところにカジマの仕事が隠れています。

毎日が健康で、安心で、しかも快適に暮らせるために、

マンションや住宅用につくられた沢山の建材や工法たち。環境に配慮しつつ、

これからの高齢化する社会に向けて、カジマは何ができるのか。

そんな気持ちで、住空間に役立つ商品を開発しています。



健康に暮らせる住まいづくりへ。

住まいは健康を大きく左右します。湿気や結露、カビなどの発生は住まいを損なうだけでなく、そこに暮らす人々の健康にも影響を与えます。鹿島は、空気中の水分を吸ったり吐いたり、脱臭機能ももつ天然素材「ゼオライト」に注目。耐火性にも優れたこのゼオライト建材は、室内の湿度を一年中快適な状態に保ち、健康住宅を実現する夢の建材です。



ゼオライト建材



自然を身近に感じる快適環境づくりへ。

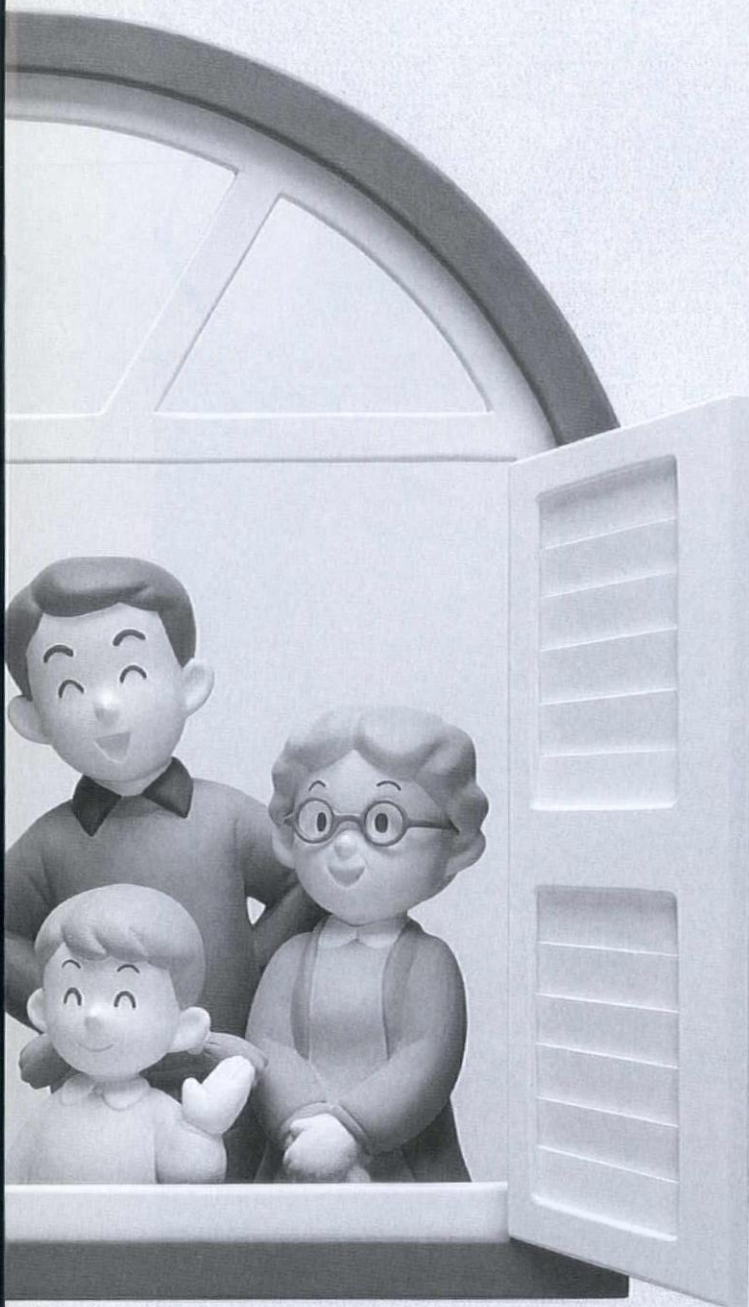
ガーデニングを楽しむ人がたいへんな勢いで増えています。庭やベランダで自然を楽しむのはとても素晴らしいこと。鹿島の「ケイソイル」「草花名人」は、バルコニーや屋上庭園にぴったりの、軽くて保水性の高い人工土壌です。重さの条件が厳しい屋上やベランダ、バルコニーでも、緑豊かな自然を育てることができ、生活に潤いを与えます。



エコヒーリングガーデン

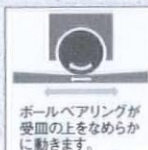


ひとの、ふだんへ。



地震や火災に負けない安心空間づくりへ。

住まいを考えると、地震への対策が不可欠です。壊れない住まいを目指すのであれば、構造を強くすれば解決します。しかし、家具の転倒などによる被害は防ぐことができません。鹿島の「戸建住宅免震システム」は、建物と基礎との間に設置するボールベアリングを活用。建物に伝わる地震エネルギーを1/5以下に減らし、安全で安心な住まいを実現します。



100年をつくる会社

鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社:東京都港区元赤坂1-2-7 〒107-8388

ホームページ <http://www.kajima.co.jp/>

四

季

会

宴

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル 鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:
ホテル 鹿島ノ森 予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最大
800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざま8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル

HOTEL
East
21
TOKYO

地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683代 FAX 03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興夢科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

本社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06)6762-5661 FAX(06)6762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714



ネットビジネスを一緒に育てます。

インターネットでビジネスチャンスを広げるのに欠かせない、ASP—アプリケーション・サービス・プロバイダ。
ビジネスBIGLOBEは、あらゆるビジネス環境、ニーズを踏まえた多彩なメニューで、あなたのネットビジネスを一緒に育てます。

EC [電子ショップサービス]

店舗開設機能や高度なセキュリティによるクレジット決済などで、短期間にオンライン販売を実現します。

EDI [EDIサービス]

資材の調達や商品販売などのWeb化で、取引やマーケティング活動をスピーディにします。

Web Community [コミュニティサービス]

会員制機構によるきめ細かな情報サービスで、One to Oneマーケティングを実現します。

Hosting [ホスティングサービス]

ホームページによる情報発信や電子メールサービスを、快適な環境で提供します。

DB [データベースサービス]

豊富なコンテンツの品揃えにより、企業経営に役立つビジネス情報を提供します。

ISP [インターネット接続サービス]

あなたの企業のニーズに合ったインターネット環境を、幅広いバリエーションで提供します。

VPN [VPNサービス]

インターネットを通して、外出先・自宅から、セキュリティを保ったまま社内LANにアクセス可能。イントラネットの広域化を実現します。



ASPについて詳しくは
<http://biz.biglobe.ne.jp/asp/>

新サービス
スタート

インターネットをこれから始めたい企業の皆様へ。

その先のビジネスチャンスへ。つなぐことから始まる「インターネット・ビジネス」

BIGLOBE マイ・インターネット

電話がなければビジネスができないように、インターネットがないとビジネスができない時代になってきています。NECは全国約170万社の中堅企業やSOHOの皆様を応援します。例えば、自社アドレスを持つことも、ホームページを立ち上げることも、社員全員がEメールアドレスを持つことも、そしてインターネット・ビジネスへ広げていくことも、NECにお任せください。

マイ・インターネットについて詳しくは <http://www.biglobe.net/>

ネットビジネスのベストパートナーへ。ビッググローブ。

BIGLOBE

<http://www.biglobe.com/>

より快適な
水環境を
めざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

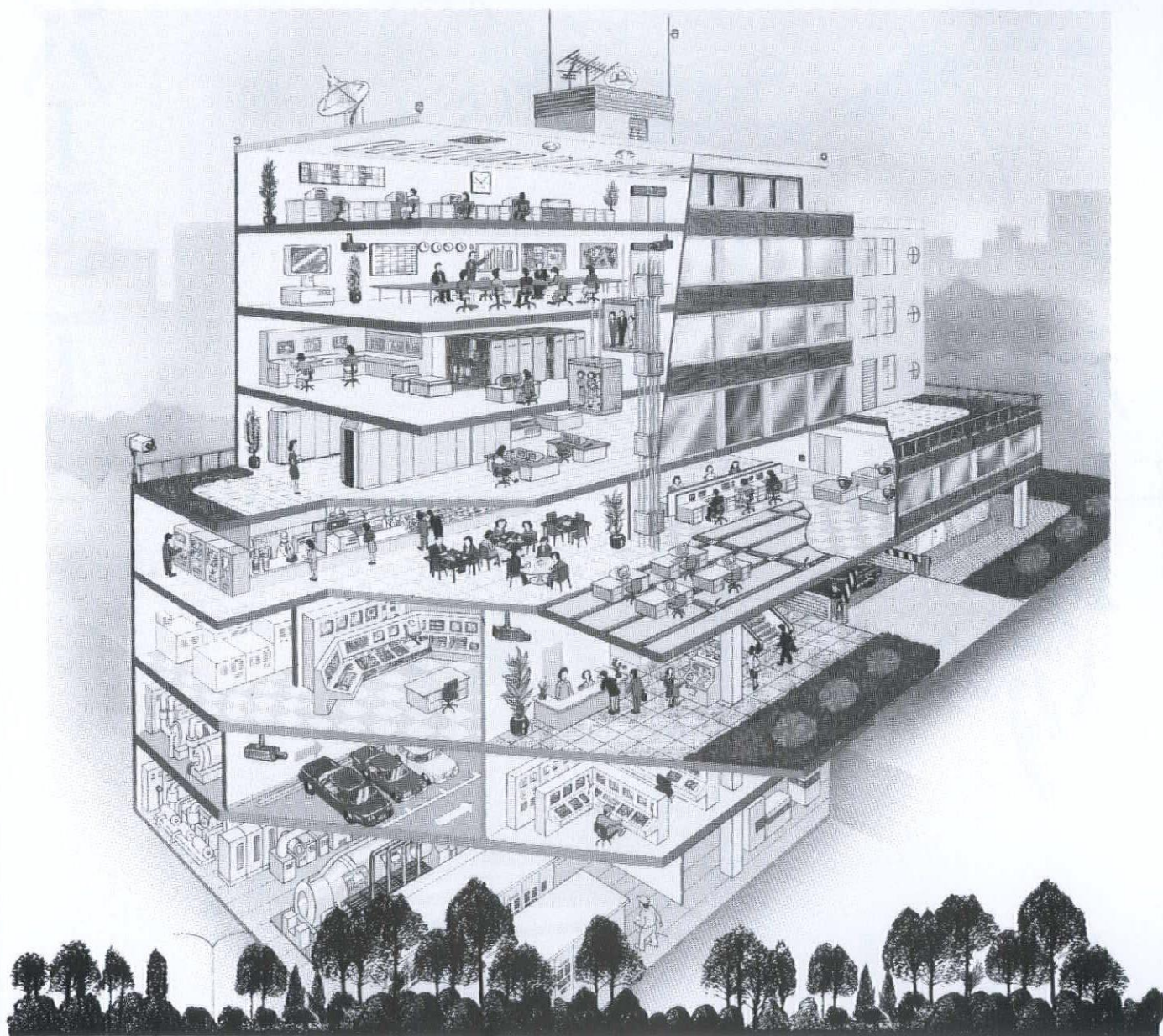
株式会社西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋 事業内容/給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工



快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…

内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

本社 〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。

TOE/NEC

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本店/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06)6305-2181
名古屋支店/名古屋市中区千代3-1-32 〒455-0011 ☎(052)659-1123

夢×技=無限大

YUME  TRONICS

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

何時もあなたの街で、
お会いしている
クリア。私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。

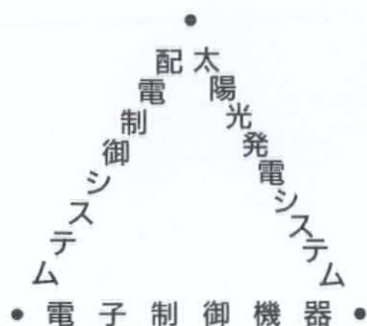


創業1919 あなたの街でお会いしています

K 栗原工業株式会社

本社/〒530-0017 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(6313)1101
東京本店/〒105-0012 東京都港区芝大門1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

見えない電気を交通整理 それはKAWADEN



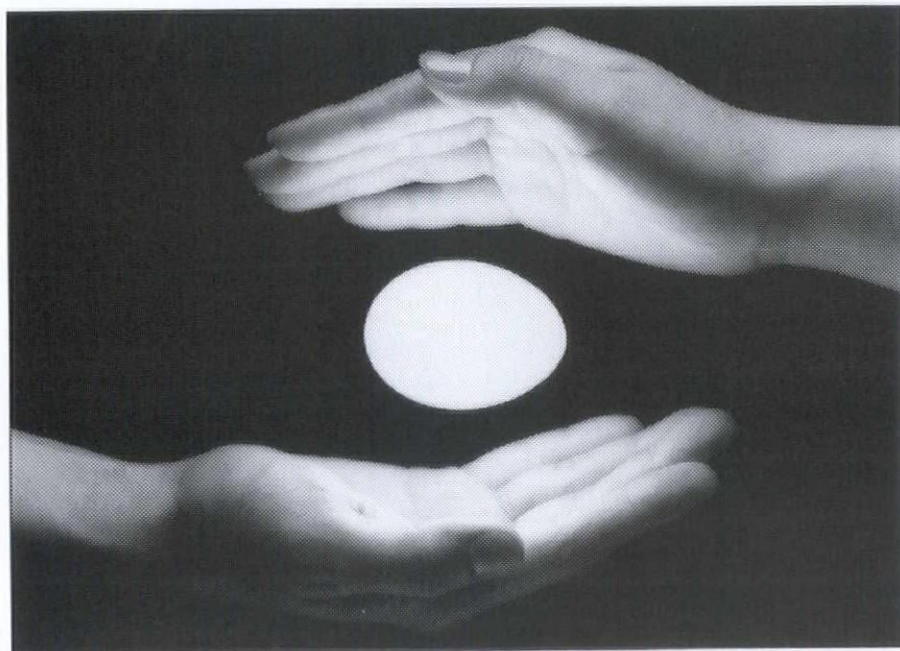
川崎電気株式会社

- 東京本社／東京都大田区南蒲田 2-16-2
テクノポートカマタ C-5階
- 本社／山形県南陽市小岩沢 225



SANKEN
ENVIRONMENTAL ENGINEERING

設備は手にとって選べません。 だから……



大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式会社

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸股町1-35-8 TEL.03-3667-3431

20歳過ぎたら 健診を。 人間の話では ありません。



働きざかりのビルを診断、中から元気にする。関電工でリニューアル。
コンピューターや通信機器など、加速する技術の進歩に追われて息切れしているのは、私たち人間だけではありません。あなたが働いているそのビルも、電気配線など様々な設備の面で、中から疲れやすくなっています。だから、関電工でリニューアルを。ビルの内部を診断した上で、設計、施工してビル内環境をリフレッシュします。関電工はビルの設備に関するプロフェッショナル。新しいビルの電気設備から、今あるビルのメンテナンスまで、最高の技術力でお応えします。ビルをきちんと長生きさせるために、ビルのドクター関電工にお任せください。

ビルの誕生からリニューアルまで
総合設備の

関電工

本社〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号

0010

特集

改造建築

公共建築の改造手法

日本では、既存の建築に新たに手を加え再生させることよりも、まったく新しく建築をつくることの方が、設計行為の主要な仕事と捉えられてきた。しかし海外、特にヨーロッパでは、既存の建物の価値を認め、その環境を尊重しながら新たな用途に変換することが、長い歴史の中で当然のこととして続けられてきた。現在の社会状況を見ると、日本でもこうした視点をもった設計行為が重要なこととして認識されつつある。本特集では、こうした建築の増改築をテーマとした秀作を紹介し、その設計手法に触れながら、今後の可能性を探る。

紹介作品：

ドイツ連邦議事堂／ノーマン・フォスター、ビベラッハ市立図書館／ボリス・ボドレッカ、フランクフルト21プロジェクト／フォン・ゲルカン&マルク、リヨン・オペラ座／ジャン・ヌーヴェル、ドゥスブルグ美術館／ヘルツォーク&ド・ムーロン、ヴェネトン・アート・スクール／安藤忠雄、リール現代美術館／イーボス&ヴィタール、パリ自然史博物館／ポール・シュメトフ、東京大学工学部増改築／香山壽夫、スイス国際決済銀行／伊東豊雄、バルセロナ現代文化センター／ピアブラーナ&ピノン、他。

インタビュー：

ボリス・ボドレッカ、フォン・ゲルカン、ポール・シュメトフ、イーボス&ヴィタール、安藤忠雄、香山壽夫、伊東豊雄、フランチェスコ・ダル・コ、他。

監修・インタビュアー：

宮脇勝十 千葉大学宮脇研究室

ドイツ連邦議事堂／ノーマン・フォスター



0007

特集

ツール・ド・ロマネスク 中世の光と空間II: フランス建築巡礼

フランス中南部のロマネスク建築を紹介した前回特集(9610号)につづき、本号ではフランス西部の4つの巡礼路にそって、中世ロマネスクの教会建築を紹介し、ロマネスク文化へ多角的に光をあてる。

●文=櫻井義夫(建築家)、羽生修二(東海大学教授)、長塚安司(東海大学教授)、田窪恭二(美術家)、山田健(ワイン・ライター)

●企画協力=櫻井義夫 ●写真=堀内広治

●巡礼路と作品=

ヴェズレー⇄ボー: サント・マドレーヌ聖堂、他。

バリ⇄トゥール⇄ボー: サン・ジル礼拝堂、サン・ジュネ教会、サン・テニャン僧会教会、サン・ニコラ教会、他。

ル・ビュイ⇄ボー: ノートルダム大聖堂、他。

アルル⇄サン・ジル⇄ハカ: サン・ジル修道院、他。

トピックス:

エコロジー・エクスプレス 水戸岡鋭治の最新列車デザイン
取材・構成=磯 達雄 文=森山明子

玉座考 古代スツールにみる玉座の性格

文=服部等作

定価=2000円/本体1905円



0008

特集

本 20世紀ブックデザインの精鋭

ブックデザインとは、周到に計画され、論理立てられた「構築物」に他ならない。「紙束とインク」に過ぎないはずの「本」に魔力を吹き込んできた20世紀のブックデザインを一望。形態と構造の極限に挑んだ出版物の数々を紹介し、この不死身のメディアの可能性を探る。

●北園克衛: 奇跡のデザインワーク

詩集『空気の箱』、自装詩集: 『白の断片』、『煙の直線』、『黒い火』、『VOU』、プラスチック・ボエム、他。

●進化するフォルム: 2000年のDTP

『VISIONAIRE』、tomato、fuel、『漢聲』、他。

●造本実験の世紀: 「本」を超えるために

連鎖するウサギ穴、「リアル」への道標、ポップアップ・スキャンダル、黒いページ、ウルムの遺産、箱の中の解放区、フルクサス・アネックス、アーティスト・ブックからの跳躍

●本の置かれている場所 ●SD特選必携書

●インタビュー=杉浦康平

デザインプロセスに潜む構造

●文=金澤一志、山口信博、蜂賀 亨、渡部千春、方 振寧、たかばやすお、北橋朋也

●監修=金澤一志 ●写真=藤井 保、新 良太

特別定価=2300円/本体2190円



鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13

電話：03-5561-2550

振替：00160-2-180883

Home Page Address:

http://www.kajima-publishing.co.jp/

index.htm

年間定期購読料

26,000円（特別定価号+消費税、送料込み）

SD
Space Design

SDバックナンバー常備店

東京

八重洲ブックセンター 03-8231-8203

三省堂本店(神田) 03-3233-3314

書泉グランデ 03-3295-0011

紀伊国屋本店 03-3354-0131

大盛堂書店 03-3463-0511

大阪

旭屋書店本店 99-999-9999

柳々堂 06-443-0167

札幌/旭屋書店 011-241-3007

横浜/有隣堂本店 045-261-1231

京都/大福堂書店 075-231-3036

9810 オフィス環境の近未来 2000円
最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品=電通
インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文=仲
隆介、他。[京町屋再生の手法——時を超えて生きる空間を求
めて]

9811 「白」と「透明」の詩：
モダンデザインの秀作 135 3000円
白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち
135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートル
ド・ヴェースガルト、柳宗理、他。

9812 SDレビュー1998 2000円
第17回SDレビュー誌発表
小特集4題：[シャルロット・ベリアン] [「ハブニング」展]
[アハルトの空間構成] [メタルシート・ストラクチャーによ
る遠藤秀平の近作]

9901 環境共生の現在 2700円
プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代の
ヴィジョンを示唆する。
エムシャーパーク、東京ガス〈アースポート〉、世田谷区環境
共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。

9902 ダッチ・モデル：
建築・都市・ランドスケープ 2000円
オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって
探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼ
ン、メカノ、ケース・クリスティアンス、他。

9903 木の空間：
木素材による快適建築 2000円
次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙
海光、インテンシオナリーズ、河西立雄、葛西潔、みかんぐ
み、H DESIGN、他。

9904 ガウディの愛弟子ジュジョールの夢 2000円
ジュジョールの造った作品を、写真とオリジナル・ドロー
イングで紹介する。撮影=鈴木久雄、文=丹下敬明、他。[ドナ
ルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー]

9905 換発するマテリアリティ：
素材の進化とデザインの可能性 2500円
国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、
そのデザインに用いられた素材の応用の「手法」、「技術」を分
析する。素材史年表、素材地図1999、他。

9906 小川晋一：
Transbody / Super traffic 2000円
小川晋一の13年間の仕事を、実作、計画案、展覧会への出品
作品を通して紹介する。作品=キュビストの家、ミニマリスト
の家、他。文=鶴沢隆、岡河貢、小川晋一、他。

9907 学校建築：
個性を育む環境創出へ向けて 2500円
学校建築設計の手引きとして、今後の学校建築に求められる
事項を解説し、事例を現地レポートを交え紹介する。文=上野
淳、他。座談会=瑞昭代+佐藤学+船越徹+小嶋一浩+上野淳。

9908 階段：
Beyond Function 2000円
近年の国内の階段、21作品を、「起伏」、「移ろい」、「軽み」、
「天空」といった4つのキーワードで緩やかに分類しながら、
階段をめぐる詩集のような形で紹介する。
文=渡辺武信、下村純一。



9909
ベルリン・トポグラフィ
今世紀最後の首都移転が展開さ
れている、ハイポテンシャルな
状況をドキュメントする。文=
内山佳代子、杉本俊多、山下昌
彦、飯島洋一、花田和幸、他。
個性の彩る集住群：長野市今井
ニュータウンの試み
2000円



9910
東京リノベーション
スペースの再生転用の事例を紹
介するとともに、その手法やス
ペースの新しい可能性を探る。
企画編集協力=粕谷姫中
写真=村角創一
岡田川再生とリバーサイドス
ペース 写真=加藤高六
2000円



9911
ジャパニーズ・プロダクツ99
インディペンデントな活動を展
開するデザイナーを中心に紹介
し、日本におけるプロダクト・
デザインの可能性を探る。
企画協力・文=川上典子、青山
玲、写真=高山幸三
2300円



9912
SDレビュー1999
第18回SDレビュー1999入選
展の結果を審査員のコメントと
共に誌上発表する。
エリック・ブリュッグマンの建
築 文=ユハニ・パルスマー、
田中雅美、他。
ハブニング展1999/2000
2000円



0001
横 文彦 1993-1999
1999年から最新作までの作品を
進行中のプロジェクトを含め、
豊富な写真、スケッチ、図面を
紹介する。
文=横文彦、D. スチュワート、
富永 謙
対談=横文彦×門内輝行
4100円



0002
コミュニケーション・キッチン
建築家によるキッチンスペース、
メーカーのキッチン機器を紹介
しながら、国内で実現できるキ
ッチンスペースの可能性を探る。
文=黒田秀雄、下島資子、他。原
談=黒田秀雄×葛西潔×東利恵
2000円



0003
リカルド・ボフィール 1995-2000
クラシシズムとモダニズムの現
代的融合の表現をめざして活動
を展開するリカルド・ボフィー
ールの近年の主要作品、プロジェ
クトを紹介する。
文=リカルド・ボフィール、飯
島洋一、櫻井義夫、志村直賢。
2000円



0004
歴史的都市を読む
近代都市への反省を踏まえ、改
めて今、歴史的都市に注目し、
都市の形成、空間構造の魅力に
ついてフィールドワークの成果
をレポートする。
対談=長尾重武×陣内秀信
監修=陣内秀信。
2000円



0005
ヒューマノイド・インターフェイス
メディア化されたインターフェ
イスは、センサー・情報処理能
力・運動能力を備えて身体と関
わる。このようなメディア化を
ともなったテクノロジーと身体
の新たな関わり方を考察する。
編集協力=小田切博、他。
2000円



0006
クライン・ダイサム・
アーキテクト
クライン・ダイサム・アーキテ
クトの、これまでのデザイン活
動の全貌を紹介する。
文=伊東豊雄、渡部千春、萩原
修、西沢立衛、クライン・ダイ
サム・アーキテクト。
2000円



0007
ツール・ド・ロマネスク
中世の光と空間をテーマに、フ
ランス西部の巡礼路にそって、
ロマネスク教会建築を紹介する。
企画協力=櫻井義夫 写真=堀
内広治 文=羽生修二、長塚安
司、田窪泰二、山田 健。
2000円



0008
本 20世紀ブックデザインの精髄
北園克衛の「空気の箱」[VOU]他、
[VISIONAIRE]、[漢聲]、[tomato]、
[fuel]、[フルクサス・アネックス]、
「ウルムの遺産」、他。文=蜂賀
亨、渡部千春、方振寧、北橋朋
也、他。インタビュー=杉浦康平。
監修=全澤一志
2300円



9905 Alluring Materiality:

Evolution of Materials and Their Potential for Design

Takes up some examples of material and technical design from Japan and overseas and analyzes the applied methods and techniques hidden in the design. Also includes "A Chronology of Materials" and "The Map of Materials 1999." ¥2,500



9906 Sinichi Ogawa: Transbody / Super traffic:

Introduces 13 years of Sinichi Ogawa's achievements through Cubist House and Minimalist House and other completed works, plans, and works submitted to exhibitions. Text: Takashi Uzawa, Mitsugu Okagawa, Sinichi Ogawa, and others.

¥2,000



9907 School Architecture:

Toward Environments That Foster Individuality

Offered as a guide for the architectural design of schools, this issue comments on topics to be addressed in school architecture from now on, combined with on-site reports of specific examples. Text: Jun Ueno et al.

¥2,500



9908 Stairs: Beyond Function

Introduces 21 recent Japanese stair designs in the manner of a poetic anthology, dividing the works loosely in four categories: "undulation", "transition", "lightness", and "open above". Text by Takenobu Watanabe and Junichi Shimomura.

¥2,000



9909 Berlin Topography

The century's last transfer of a capital city is taking place. This issue documents the high potential of this move. Text: Kayoko Uchiyama, Toshimasa Sugimoto, Masahiko Yamashita, Youichi Iijima, Kazuyuki Hanada, and others.

Distinctive Housing Complexes: The Imai New Town Experiment in Nagano ¥2,000



9910 Tokyo Renovation:

Introduces several cases of space renovation and reuse and explores the methods used and the new possibilities of space they offer. Editorial Cooperation: Hijun Kasuya. Photographs: Soichi Murazumi.

Reviving the Sumida and Riverside Space. Photograph: Karoku Kato ¥2,000



9911 Japanese Products 99:

Their Independent Situation

Introduces mainly designers engaged in independent activities, and explores the potential of product design in Japan. Editorial cooperation and text by Noriko Kawakami and Akira Aoyama. Photographs by Kozo Takayama ¥2,300



9912 SD Review 1999:

Introduces the results of the 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings, along with comments from the screening committee.

Erik Byggman's Architecture: Texts by Juhani Pallasmaa and others.

HAPPENING 1999/2000 ¥2,000



0001 Fumihiko Maki 1993-1999:

Introduces a generous selection of photographs, sketches, and drawings of Maki's most recent works from 1993. Texts by Maki, David B. Stewart and Yuzuru Tominaga. Discussion: Teruyuki Monnai and Fumihiko Maki.

¥4,100



0002 Kitchen for Communication:

Introduces kitchen spaces designed by architects and kitchen furniture by manufacturers and explores the potential of kitchen spaces in Japan. Texts by Hideo Kuroda, Motoko Shimojima, etc. Discussion: Hideo Kuroda, Kiyoshi Kasai, and Rie Azuma.

¥2,000



0003 Ricardo Bofill 1995-2000:

Introduces leading works and projects of Ricardo Bofill, whose recent activity aims at a contemporary union of classicism and modernism. Texts by Ricardo Bofill, Yohichi Iijima, Yoshio Sakurai, and Naoaki Shimura.

¥2,000



0004 Reading the Historical City:

Introduces the results of fieldwork-based analysis of historic cities, reporting on how the cities emerged as well as how their spatial structure gives them special appeal, from a critical perspective on the modern city. Dialogue: Shigetake Nagao and Hidenobu Jinnai. Editorial supervision: Hidenobu Jinnai. ¥2,000



0005 The Humanoid Interface:

The media of the man-machine interface now utilize sensors, information processing capabilities, and motor capabilities. This issue considers the technologies of these media and their new relationship to the human body. Editorial cooperation: Hiroshi Odagiri and others. ¥2,000



0006 Klein Dytham architecture:

Presents an overall view of the design activities to date of Klein Dytham architecture. Texts by Toyo Ito, Chiharu Watabe, Shu Hagiwara, Ryue Nishizawa, and Klein Dytham Architecture.

¥2,000



0007 Pilgrimage to Romanesque Architecture in France:

Following pilgrim routes in Western France, this issue introduces the themes of light and space in the Romanesque religious architecture of the Middle Ages. Cooperation: Yoshio Sakurai. Photographs: Kouji Horiuchi.

¥2,000



0008 Selected Bookworks in the 20th Century:

Katsue Kitasono: Kuki no Hako (Poetry Book) and VOU. VISIONAIRE and Hansheng. "tomato", "fuel", and "Fluxus Annex".

Texts by Toru Hachiga, Chiharu Watabe, Fang Zhenning, Tomoya Kitahashi. Interview with Kohei Sugiura.

Cooperation: Hitoshi Kanazawa. ¥2,300



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武蔵 庵、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磁き込まれた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織陣 I、III、他。

3800円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解明する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILLAGE、ラビリンズ、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新 ③ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかに流れて分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジヨルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、辰別山寮、虚白庵、他。論文=磯崎新、針生一郎、浅野敦一郎、白井昱磨。座談=大江宏十藤井正一郎+宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の風。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新 ④ 1985-1991 part 2

part 1同様、自らの「目録」と共に作品を紹介してゆく。チーム デイズニールビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディウム、[蝶々夫人]舞台美術、他。

4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒保宏、宇佐美圭司、他。

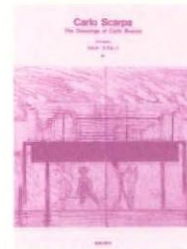
4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥敏。対談：今川孝英 X 安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地进行と主要作品のドローイング約150点を収録。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増設案、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



横文彦 ②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多様性を加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒保宏、宇佐美圭司、他。全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品=熱海の家、ボスボラス海峽に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と書画、他。

2575円



安藤忠雄 ③ アンビルト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクト II、Iギャラリー、太田の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように空を舞う建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡、中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ボンダクリオショールーム他。

3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザールーその歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレンコの形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、バリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦 X 裏原啓 X 小澤恵一、他。

5000円

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2551

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107-8345, Japan
tel: 81-3-5561-2551

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyoo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiko Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoen Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

0009

都市・建築・芸術の総合誌

スペースデザイン 第432号
2000年9月号

SD

Space Design

編集長：相川幸二
副編集長：
高木伸哉 松口 隆
編集スタッフ：
川崎 勝 石田貴子
伏見佳子
制作協力：久世 健
株式会社シンクス
発行人：井田隆章
発行所：鹿島出版会
107-8345
東京都港区赤坂6丁目5番13号電話：
03-5561-2551 営業
03-5561-2555 編集
FAX：
03-5561-2561 営業
03-5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
URL：http://www.
kajima-publishing.co.jp

005

特集

木造モダニズム 1930s-50s

素材を転換させた日本の発想

企画協力：大川三雄・矢代真己・田所辰之助・濱寄良実

写真：清水 襄

012

今、なぜ木造モダニズムか
文：大川三雄

014

年譜：木造モダニズムの振幅

016

対談：木造のとき
黒沢 隆×内藤 廣
聞き手：大川三雄

020

木造表現のパラダイム

022

構造と表象のオルタナティヴ

蹴足男子カルメル会修院聖堂／今井兼次
井上邸、東京聖十字教会、新発田カトリック教会、
聖ポール教会／アントニン・レーモンド

028

「木」の構造とデザイン
文：濱寄良実

030

トラディショナル・シークエンス

日向別邸／ブルーノ・タウト 聴竹居／藤井厚二
八勝館御幸の間／堀口捨己
旅館「稲住温泉」の4つの離れ／白井晟一

035

伝統との共振
文：大川三雄

038

「切妻屋根」というロゴス

前川自邸／前川國男
秋の宮村役場／白井晟一

042

納得／説得という形態言語
文：濱寄良実

044

トピックス：モダンデザインにおける匿名性原理の消長
文：黒沢 隆

054

モダニティの構築

056

「パウエン」IN NIPPON

土浦自邸／土浦亀城

056

「機能拡張」された
「技術＝トロッケン・パウ」のかたち
文：矢代真己

064

木造「コア」イズム

コアのあるH氏の住まい／増沢 洵
試作小住宅／白井晟一

064

積極的「コア」／消極的「コア」
文：渡辺研司

070

コラム：コア＝中心という思想

072

戦時下テクノロジー

072

テクノクラシー・ユートピアの両義性
文：田所辰之助

078

インターナショナルリティの超越

八幡浜市立病院伝染病棟、日土小学校
江戸岡小学校、川ノ内小学校、八幡浜市立図書館／
松村正恒（八幡浜市役所）

078

生活世界の構築
文：田所辰之助

087

コラム：松村正恒の学校建築

089

知られざる名作 もうひとつの閑室をめぐる
西澤英和

094

SDレビュー2000：展覧会開催のお知らせ

097

第7回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展
第5回レポート

101

水陸両用居住のためのデザイン
石田壽一・九州芸術工科大学石田研究室

106

書評
植田 実

107

新刊紹介

108

お知らせ

印刷・製本：凸版印刷株式会社
174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号
電話：03-3968-5111 案内取次店：トーハン・日販・大阪屋・大洋社・栗田出版販売・
誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社定価：2,000円 [本体1,905円]
年間直接購読料：26,000円
特別定価号＋送料込み表紙：前川自邸（前川國男）
表紙写真：清水 襄
撮影協力：江戸東京たてもの園
デザイン：
山口デザイン事務所／山口信博・齋藤亜季子・長谷川タ美子

0009

Monthly Journal of
Art and Architecture

No. 432
September 2000

SD

Space Design

Chief Editor: Koji Aikawa
Editors: Shinya Takagi, Ryu Matsuguchi
Associate Editors: Masaru Kawashima,
Takako Ishida, Yoshiko Fushimi
Production Cooperation: Takeshi Kuze, Digital Studio Thinks
Publisher: Takaaki Ida

005

Special Feature

Modernism in Wooden Construction 1930 to 1950

Japanese Approaches Transform Materials

cooperation: Mitsuo Ohkawa, Masaki Yashiro, Shinnosuke Tadokoro, Yoshimi Hamazaki

photo: Joe Shimizu

012

Why Modernism in Wood Construction Now?
text: Mitsuo Ohkawa

014

Chronology:
Changing Times in Modern Wood Architecture

020

Paradigms of Expression in Wood

022

Alternatives of Structure and Representation
Church of the Senzoku Carmel Society Monastery /
Kenji Imai
Inoue House, etc / Antonin Raymond

030

Traditional Sequences
Hyuga House / Bruno Taut
Chochikukyo / Koji Fujii
Miyuki-no-ma, Hasshokan / Sutemi Horiguchi, etc

038

The Logos of the Gabled Roof
Mayekawa House / Kunio Mayekawa
Akinomiya Town Hall / Seiichi Shirai

016

Discussion:
The Past, Present,
and Future of Architecture in Wood
Takashi Kurosawa × Hiroshi Naito
interviewer: Mitsuo Ohkawa

028

Structure and Design in Wood
text: Yoshimi Hamazaki

035

Resonance with Tradition
text: Mitsuo Ohkawa

042

The Logos of Logic/Rhetoric
text: Yoshimi Hamazaki

044

Topics: The Rise and Fall of the Anonymity Principle in Modern Design
text: Takashi Kurosawa

054

The Construction of Modernity

056

"Bauen/Construction" in Japan
Tsuchiura House / Kameki Tsuchiura

056

The Forms of Bricolage "Technology = Trockenbau"
text: Masaki Yashiro

064

The Ideology of the Wood Core
Hara House / Makoto Masuzawa
Experimental Small House / Seiichi Shirai

064

Positive Cores and Negative Cores
text: Kenji Watanabe

070

Column: The Philosophy of the Core

072

Wartime Technology

072

The Double Meanings of the Technocracy Utopia
text: Shinnosuke Tadokoro

078

The Transcendence of Internationality

Yawatahama Municipal Hospital,
Hizuchi Elementary School, etc /
Masatsune Matsumura (Yawatahama City Office)

078

Construction of Worlds for Daily Life
text: Shinnosuke Tadokoro

087

Column: Matsumura's School Architecture

089

Unknown Masterpieces: Another Quiet Room
text: Hidekazu Nishizawa

094

SD Review 2000: Upcoming Exhibitions

097

La Biennale di 2000 Report 5

101

Amphibious Living: Floating Flop / Competition phase
Toshikazu Ishida and K.I.D.I

106

Books Review
Makoto Ueda

107

Books information

108

Announcement

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.

6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan
TEL: +81 3 5561 2551 [Management],
+81 3 5561 2555 [Editing]
FAX: +81 3 5561 2561 [Management],
+81 3 5561 2565 [Editing]
TELEX: 02422467 KAJIMA J
URL: <http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm>

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 2

Cover: <Mayekawa House> Kunio Mayekawa
Photo: Joe Shimizu
Cooperation: Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum
Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office

MOKUZO

Modernism in Wooden Construction 1930s to 1950s

特集

木造モダニズム

素材を転換させた日本の発想：1930-50's

Japanese Approaches Transform Materials

MODERNISM

企画協力：大川三雄・矢代真己・十田所蔵之助・十濱善良実

写真：清水 薫

Cooperation: Mitsuo Ohkawa, Masaki Yashiro, Shimotsuke Tadokoro, Yoshimi Hamazaki

Photo: Joe Shimizu

コンクリートや鉄から生まれた
モダンスタイルの空間を木造で実現する。

それはじつは
1930～50年代の日本でも
ひとつの完成された姿をみせていた。

それは「和」のスタイルではなく
「木」素材のあらゆる可能性を示唆した
秀逸な試み。

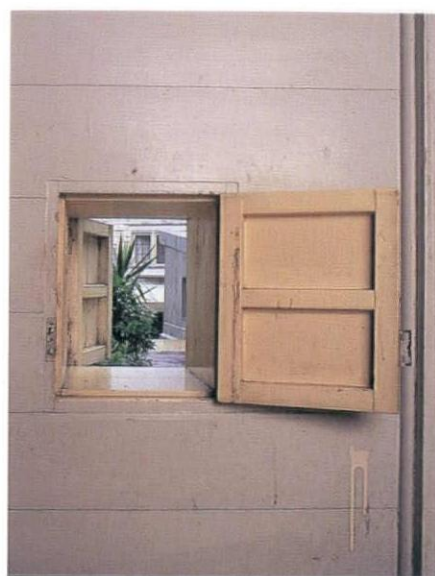
江戸国小学校／松村正恒（八幡浜市役所）／1933

土浦自邸／土浦竜城／1935





土浦自邸／土浦亀城／1935



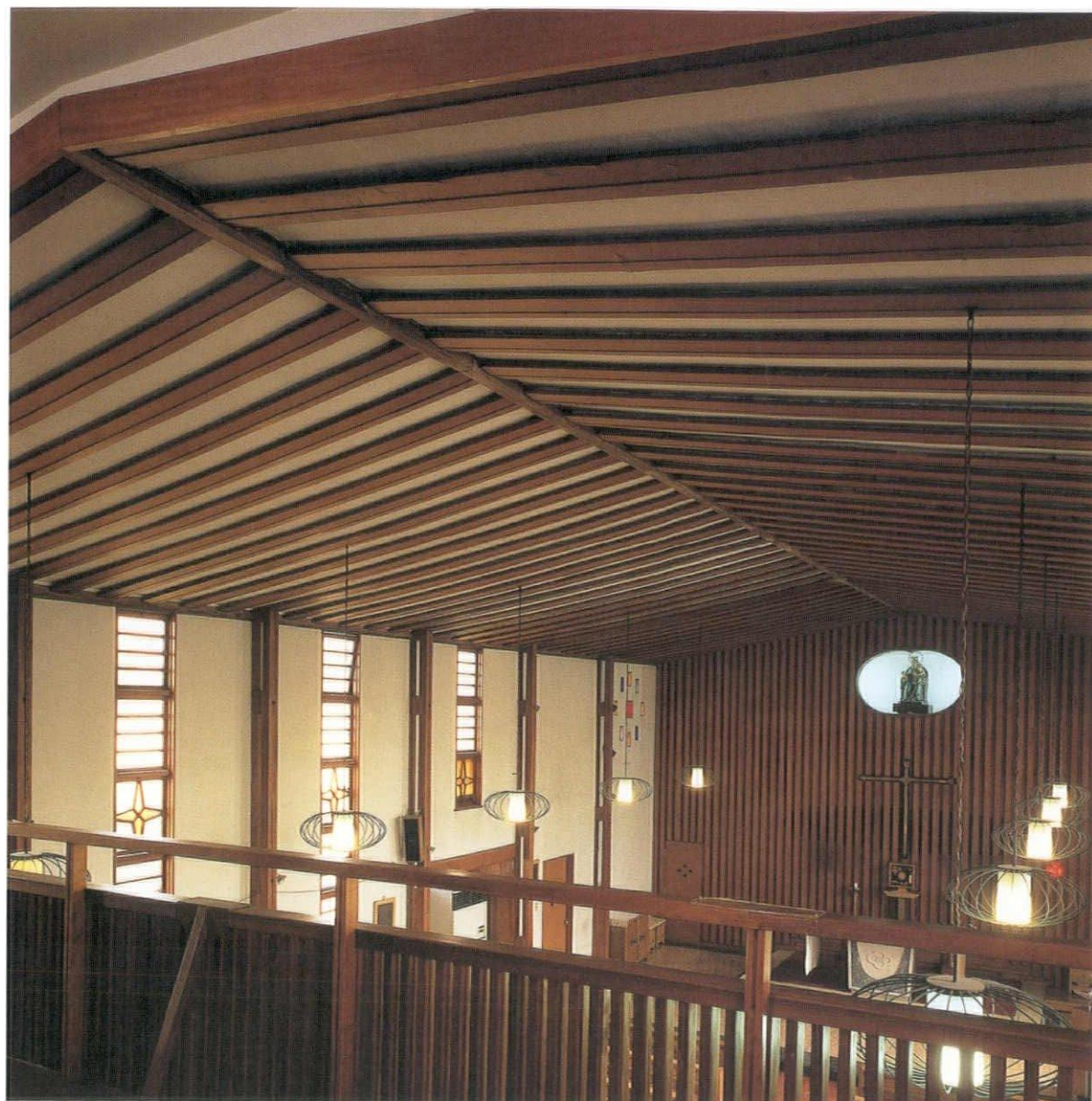
江戸岡小学校／松村正恒（八幡浜市役所）／1953



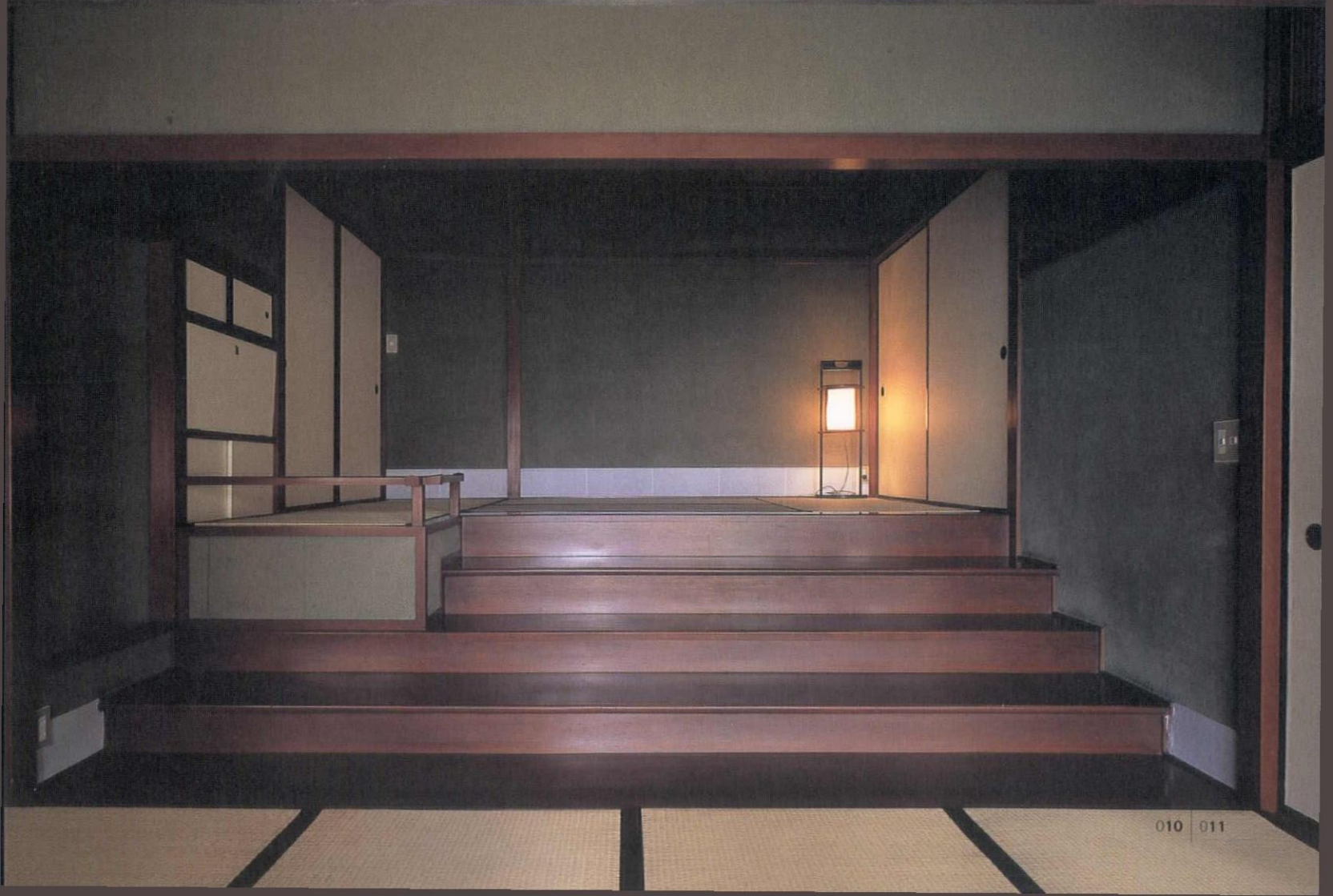


八幡浜市立病院伝染病棟／松村正恒（八幡浜市役所）／1954





跣足男子カルメル会修院聖堂／今井兼次／1959



今、なぜ木造モダニズムか

大川三雄

「木造モダニズム」というテーマに至った経緯について、少し説明を加えておきたい。執筆者である大川、矢代、田所、濱岸の4人は、以前から別誌の企画において、日本のモダニズム建築を再読する作業を行ってきた。2年間あまりの連載で30点近いモダニズム作品を選出し、現地取材を行ったうえで、テーマに沿って論述することを試みた。建物の選出にあたっては建築類型、建設年、建設場所、そして設計者などを念頭におき、日本のモダニズム建築の変遷及び概要が把握できることを主眼としてきた。

その作業のなかで、予想外に豊かな表情をもつ多くの木造作品に出会うことになった。最初の出会いは、ブルーノ・タウトのパトロンとしてしられる群馬県高崎市の井上房一郎の邸宅であった。アントニン・レーモンドの〈群馬音楽センター〉の取材に訪れた際、なにげなく寄らせていただいたものである。そこには、今は取り壊されてしまったレーモンドの〈麻布のアトリエ兼住宅〉と同一の、いわばレプリカ住宅が存在していたのである。そうした意外性のみならず、レーモンド風木造丸太の生み出す空間は、住み手の文化的生活の痕跡と相まって、魅力的で芳醇な香りをもって我々を迎えてくれたのである。

もうひとつの出会いとして松村正恒の一連の木造作品がある。以前から噂で聞き及んでいた〈日土小学校〉の取材を行った際、あまり紹介されていないほかの松村作品を拝見する機会に恵まれた。それらはいずれも不思議な魅力をもち、木造モダニズムの大きな可能性を示唆するものばかりであった。

一方、上記の雑誌連載が終わりかけたところから、モダニズム建築の記録や保存を主眼とする国際的組織DOCOMOMOの活動に参加させていただくことになった。DOCOMOMOの詳細は別誌に譲るが、この活動の一環として日本におけるモダニズム建築20点の選定作業を行い、かつ、それを中心として「文化遺産としてのモダニズム建築展」を〈鎌倉近代美術館〉で開催することとなったのである。DOCOMOMO日本支部が選んだ現存する20選のなかには、〈聴竹居〉(1927)、〈土浦亀城自邸〉(1935)、〈八勝館御幸の間〉(1950)、〈コアのあるH氏の住まい〉(1953)、〈日土小学校〉(1958)という5点の木造作品がふくまれている。技術における革新性を求めたモダニズムの動向からするとRC造の作品が中心となることは当然

であったが、意外にも1/4の確率で50年から60年を経た木造作品が選出される結果となったのである。RC造の作品でさえ痛み具合は激しく、その存続が危ぶまれるなか、かえって優れた木造作品のもつ継続性が認識される結果となった。

こうした経緯を経て、木造モダニズムの再評価という気運が浮かび上がってきたのである。そして、ここ数年の間に実見できた木造モダニズム作品を中心に、その流れの全容を捉えなおすことを目的として、今回の特集は企画されたのである。

改めて、木造モダニズムとは何かを問うことから始めてみたい。日本においては、木造を対象とした場合、意識するしないにかかわらず「和風」の問題が浮上してくる。木造＝和風という連想は、2000年におよぶ日本建築の歴史そのものが木造建築技術の歴史であったことに由来している。しかし、幕末・明治にはじまる洋風建築の導入過程にもなって、木造技術は徐々に表舞台から追いやられてきた。大学の建築教育のなかでの比重は大幅に減少され、全国の大学において木造を研究する専門家が消えていった事実が、その衰退過程を象徴している。

しかし、それは本当に衰退過程であったのか。日本における木造の近代化過程は、正確には木造技術の新たな発展と展開の過程と捉えるべきではないか。近代社会のなかで生き残るべく、木造技術はさまざまな変化と変質を繰り返し、その過程で多くの優れた木造作品を生み出してきた。そのことを念頭に、もう一度、木造の近代を再認識すべきであると考えている。近代技術との出会いに触発された木造技術は、職人のレベルとともに、昭和初期において建築史上最高の水準に達していたという指摘もある。つまり、近代化はある一面では木造技術を育ててきたことも事実なのである。

洋小屋と和小屋の葛藤、トラス架構や筋交い、金物の導入をめぐる葛藤、また職人レベルで継承されてきた伝統的木構造に対し、建築アカデミー側からの指導による新しい木構造の提唱とその法制化といった問題など、両者の間にさまざまな確執を生み出してきた。そうした葛藤をくり返し、姿形を大きく変えながら、今日まで木造技術は生き延びてきたのである。耐震と耐火、そして防火への配慮は、木構造にもっとも大きな変質を迫るものであった。たとえば、内田祥三の提唱した木造モルタ

ル塗りの防火構造によって、真壁の美しさを誇ってきた日本の住宅風景が一変してしまった事実はよく知られている。風景ばかりではない。一般の人々の木造に対する認識に至っては、「在来工法」といった名称さえどのような内容を指し示すのが今では曖昧となり、伝統的構法との差異もさだかではなくなってしまったのである。

その一方で、木造は決して受身の姿勢で変質を迫られてきただけではなかった。戦時態勢下の日本に、外国より新興木構造が紹介されるようになると、それを積極的に吸収・消化する果敢な活動が展開され、ジベル等の金物の使用により木造大架構も可能となっていた。さらには、資材不足が背景にあったとはいえ、近代建築家たちは欧米諸国に展開されつつあったモダニズム建築を、木造技術によって成立させる積極的な試みを展開してきた。しかもその活動は、単にデザインのみならず新しい空間構成や生産システムの提案にまでおよんでいたのである。その成果の数々は、本特集のなかで紹介されている通りである。

次頁の年譜は、今回とりあげた木造モダニズム作品を時系列に添って配列したものである。もちろん、木造モダニズムの全容を網羅したものではない。表の左端に近づくほど伝統性や土着性への志向が強く、右端ほど生産・システムといった普遍性への志向が強い傾向を示している。結果として、左端には藤井厚二や堀口捨巳、吉田五十八、村野藤吾、谷口吉郎といった建築家たちの和風色の強い作品が並ぶことになった。それよりもやや右手には、A.レーモンドの木造とそれを継承したグループの作品系統が含まれている。〈前川自邸〉、〈飯箸邸〉、といった作品は、わずかに和風の雰囲気を残してはいるが、書院や数寄屋といった形式性よりも、民家的造形に傾斜している点に特徴がある。さらにその右手にある作品群からは、和風の雰囲気はすっかり姿を消している。と同時に、近代建築の空間性が木造技術によって達成され、コルビュジエの空間からミースの空間までもふくむ多様な展開がみられ、木造モダニズムの精華ともいえる作品傾向を示している。右端には規格化や工業化を強く志向した作品が並んでいるが、空間よりもシステムを重視している点が特徴で、吉田鉄郎、小坂秀雄、国方秀男へとうけ継がれた通信省による木造モダニズム作品がここに位置している。

「清貧の美学」という言葉は、戦前から戦後にかけた窮乏の時代に育まれた日本のモダニズム建築を、もっとも的確に表現するものであろう。そして、この美学こそが、世界でも例の少ない独自のモダニズム建築を生み出してきたのである。本特集は、そうした日本における木造モダニズムの幅広い諸相を、現存作品を中心に、ヴィジュアルに紹介することを重視した。くわえて、第1章「木造表現のパラダイム」および第2章「モダニティの構築」においては、表現の問題や時代背景、そして構法といった多角的な側面からの検証を試みた。第3章「インターナショナル리티の超越」では、松村正恒という建築家を通じて、戦前と戦後のモダニズムの連続性について考察している。モダニズムの潮流が地方の小都市において実を結んだ稀有な例であり、モダニズムの時空間を超えた広がりテーマとなっている。また、建築家・黒澤隆の論考をトビックスとして掲載した。黒澤は私にとっては先輩であり、ほかの執筆者にとっては直接の師匠にあたる。学部の講義のなかで時折断片的に触れられてきた黒沢流の木造モダニズムの流れを体系的かつ縦横に論じていただいた。さらに今回の特集にあわせるかたちで、構造家・西澤英和氏の大きな「発掘」があった。〈聴竹居〉に併設されたもうひとつの〈しられざる閑室〉である。優れた構造学者であるとともに建築史にも造詣が深く、伝統的技術の今日的な可能性をテーマとしている西澤氏には、この発掘的な研究成果を特別記事として論考を寄せていただいた。

鉄筋コンクリート造は、建築の20世紀を切り開いてきた技術である。20世紀の終焉を迎える今、地球環境やゴミの問題とともにRC技術は大きな変換を迫られているが、この不思議の能力を秘めた技術を、今後も人類は決して捨て去ることはないと思う。一方、いったんは駆逐されたかにみえた木造建築技術は、20世紀末においてますますその可能性が再評価されつつある。木造という技術がRC造との共存によって21世紀の新しい建築の姿に大きな影響を与えるものとなることを夢み、本特集がそのためのきっかけになることを希っている。

(おおかわ・みつお／建築史家、日本大学理工学部専任講師)

年譜：木造モダニズムの振幅

モダニズム、木という素材、技術、伝統、社会背景、思想……さまざまな要素と共振する「木造モダニズム」の諸相。そのひとつの断面としての「リージョナリズム」／「インターナショナリズム」というキーワードと、そこでの作品群の振幅。これらが欧米モダニズムと向き合いながら展開されたことはいままでのないが、同時に日本国内の木造技術の変容と、木造関連法規の制度化とも密接な関係をもっていたのである。

作成：小林謙太郎（日本大学大学院）

リージョナリズム

インターナショナリズム

1927	● 睦竹居（藤井自邸）／藤井厚二	
1930		
1931		● 市浦自邸（第一）／市浦 健 ● 土浦自邸（第一）／土浦電城
1932		
1933	● 軽井沢夏の家／Aレーモンド	● 山越自邸（ドモ・ディナミカ）／山路邦彦
1934	● 聖ポール教会／Aレーモンド	
1935		● 土浦自邸（第二）／土浦電城 ● 大阪中央郵便局梅田分室 ● 谷口自邸／谷口吉郎 ● 通信省大手町分室／通信省（吉田鉄郎）
1936	● 梓屋六左衛門別邸／吉田五十八 ● 日向別邸（RC+木造）／B.タウト ● 万平ホテル／久米権九郎 ● 守屋邸／前川國男 ● 吉仁所邸／蔵田周忠 ● 阿部邸／市浦 健	
1937	● 城山荘／久米権九郎	● 地寅寮／安口雄己
1938	● 秋元邸／立原清造	
1939		● 若狭邸（RC+木造）／安口雄己 ● 電気試験所第一部芝浦分室 ／通信省（小坂秀雄）
1940	● 岩波別邸（借標荘）／吉田五十八	● 岸記念体育館／前川國男＋丹下健三 ● 飯箸邸／飯箸孝三 ● 組立建築（～50）／飯箸孝三
1941		
1942	● 前川自邸／前川國男	● 九州日満建築技術工費成所／前川國男
1943		● 高等海員養成所／通信省（吉田鉄郎） ● 灯台寮男子部・女子部／通信省（吉田鉄郎）
1944	● 吉田自邸／吉田五十八	
1945		
1946		● プレモス型組立住宅／前川國男
1947	● 藤村記念堂／谷口吉郎	● 紀伊國屋書店／前川國男
1948		● 高島屋和歌山支店／飯箸孝三 ● 慶應義塾大学附属病院／前川國男
1949	● 秋の宮村役場／白井展一	● 大手町電報電話局／電気通信省（国方秀） ● 慶應義塾大学（第3校舎）4号館／谷口吉郎 ● 川ノ内小学校／八幡浜市役所（松村正徳）
1950	● 八幡館御幸の間／安口雄己	● No.3（立体最小限住居）／池辺 雄 ● 森博士の家／清家 清 ● 八幡浜市立図書館／八幡浜市役所（松村正徳） ● 東京通信病院高等看護学院／郵政省（小坂秀雄）
1951		
1952	● 井上邸／Aレーモンド ● 竹田教授の家／清家 清	● 増沢自邸（最小限住居）／増沢 清 ● 仙台地方簡易保険局 ／郵政省（小坂秀雄）
1953	● コアのあるH氏のすまい／増沢 清 ● 試作小住宅／白井展一	● 江戸岡小学校／八幡浜市役所（松村正徳） ● 丹下自邸／丹下健三
1954	● カニングハム邸／Aレーモンド	● No.20／池辺雄 ● 八幡浜市立病院伝染病棟／八幡浜市役所（松村正徳）
1955	● サンパウロ博日本館／安口雄己	
1956		● 栗の木のある家／生田 勉
1957	● 佐伯氏軽井沢別邸／谷口吉郎	
1958		● 亀甲の家／生田 勉 ● 日土小学校／八幡浜市役所（松村正徳）
1959	● 都ホテル佳水園／村野藤吾 ● 鉄道男子カルメル会修院聖堂／今井兼文 ● 旅館「稲住温泉」の4つの離れ（～63）／白井展一	
1960		
1961	● 東京聖十字架教会／Aレーモンド ● 牟礼の家／生田 勉	
1965	● 新発田カトリック教会／Aレーモンド	



⑧



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮



1



2



3



4



5



6



7

国内一般事項（技術・法制）

木造住宅の規格・乾式工法・組立工法の研究始まる

剛・柔構造論対立（～36）

木造規準調査委員会設立
室戸台風

「鉄鋼工作物築造許可規則」制定

「木造二階建小学校校舎一案」（木造規準調査委員会）

「木造建物建築統制規則」制定

新興木構造に関する研究・実施が本格化する

「木材統制規則」制定
太平洋戦争（～45）
木構造計算規準委員会設立
「工作物築造統制規則」制定

「木構造計算規準（案）」（木構造計算規準委員会）

量産組立住宅の研究つく（～50）

「臨時建築等制限規則」制定

福井地震

木材、セメント、鉄鋼2次製品の統制撤廃

「建築基準法」制定
住宅金融公庫設立

「建築基準法」改正
伊勢湾台風

「集成材構造設計規準」制定

おもなモダニズム作品（木造以外）

1927

1930

1931

1932

1933

1934

1935

1936

1937

1938

1939

1940

1941

1942

1943

1944

1945

1946

1947

1948

1949

1950

1951

1952

1953

1954

1955

1956

1957

1958

1959

1960

1961

1965

ファン・ネレ建築工場/J.A.プリンクマン+L.C.ファン・デル・フルフト
チューゲントハット邸/ミース・ファン・デル・ローエ

サヴォア邸/ル・コルビュジエ
東京中央郵便局/通信省（吉田鉄郎）
スイス学生会館/ル・コルビュジエ

バイミオのサナトリウム/A.アアルト

日本歯科大学専門学校附属病院/山口文象

サルスエラ競馬場/E.トロハ

カサ・デル・ファッショ/G.テラーニ
落水荘（カウフマン邸）/F.L.ライト

東京通信病院/通信省（山田 守）
パリ万国博覧会日本館/坂倉準三
大島測候所/堀口捨己

ジョンソン・ワックス本社/F.L.ライト
大阪中央郵便局/通信省（吉田鉄郎）
森の火葬場/E.G.アスブルンド+S.レヴェレンツ

ローマ新都市EUR/M.ピアチェンティニほか

プロイヤー邸/M.プロイヤー

ガラスの家/P.ジョンソン

ファンスワース邸/ミース・ファン・デル・ローエ

神奈川県立近代美術館/坂倉準三
リーダーズダイジェスト東京支社/A.レーモンド
ユニテ・ダビタシオン/ル・コルビュジエ

関東通信病院第一病棟/日本電信電話公社（国方秀男）

私の家/清家清
神奈川県立図書館・音楽堂/前川國男

ロンシャン礼拝堂/ル・コルビュジエ
広島平和会館陳列館・本館・公会堂/丹下健三

秩父セメント第2工場/谷口吉郎+日建設計

No.38（石津邸）/池辺 陽

スカイハウス/菊竹清訓
香川県庁舎/丹下健三

グッゲンハイム美術館/F.L.ライト

ブラジリア議事堂/O.ニーマイヤー

群馬音楽センター/A.レーモンド



11



12



13



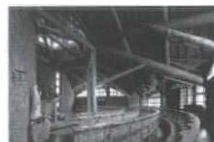
14



15



16



17

黒沢 隆×内藤 廣
聞き手：大川三雄

木造というフロー

大川 内藤さんは、今回取り上げた1930～50年代の「木造モダニズム」について、どう考えていらっしゃるんですか。

内藤 正直な話し、あまり知らなかったんですよ。あの時代の木造の作品について興味はありますが、特別注目していたわけではなかったんです。

大川 意外ですね（笑）。

内藤 でも最近、藤井厚二の〈聴竹居〉（1927）の話を野沢正光さんから聴いて、合理的に考えつつ、様式も考えていくあの時代の姿勢に興味をもったんですね。実はすごくロジカルな考え方の延長にできているものなんだと。それで実際に見てみたいと思っているんです。

僕は基本的に「木造」というものに先入観がなく、歴史的にこうだから木造が好きだ、ということもない。ただ、木造については僕自身の体験的な原風景があるんです。

物心ついたころというのは、東京に「木賃アパート」が建ち並びはじめていたときでした。木賃アパートは不燃化のために、モルタルで仕上げられて、壁にヒビが入っていたりする。子供のころ、木造ときくと神社仏閣だったのですが、大学生になって周囲を見渡すと、風景の主役がこうした木賃アパートにとって替わられていたんです。このイメージが僕のなかにある。

それと、ヨーロッパから帰ってきたとき、近所の上棟式を見て、「木造ってきれいだな」「システムとして美しいな」と感じたんです。しかし、目を追うにしたがって、木賃アパートに近づいていってしまう。「これはなんなんだろう」「なんでこんな風になっちゃったんだろう」と思いました。

大川 確かに美しくない。

内藤 そんなわけで、過去の建物に関する木造表現をあまり考えたことがないんです。

黒沢 確かに、木造がモルタルリシンという外装をまとうのは、自殺行為であっ

「木造モダニズム」が形成された背景とその今日性とは、
そして木造建築の可能性とは――

本特集で独自の木造モダニズム論を展開している黒沢隆氏。
木の特性を活かした現代建築をつくり続ける内藤廣氏。
両氏に木造への想いを語っていただいた。

たと思います。

吉田五十八の「モルタルリシン掻き落とし」という構法は1930年代に、もうすでに使用されているわけですが、これは東京市の条例や市街地建築物規制法に耐火性の要求が入っていたためでしょう。これが、そのまま戦後に引き継がれていくわけです。吉田五十八はあの表現にたどり着くまでに、カンスイといって台湾産の大理石の粉を混ぜてそれを掻き落とすといった、大変な技術開発をやっていました。それが大壁に発展していくひとつのきっかけになったと私は考えていますが、実はこれが木造の自殺行為でした。

でもね、赤坂に吉田の料亭がふたつ残っているそうですが、つい最近見た人によると、クラックが一本も入っていないそうです。それも戦後初期の作品にです。だから、彼の全否定ができるわけではないのですが、都市の耐火を進めたのと同時に、ほかの木造家屋の退化（耐久性の劣化）もずいぶん進んだと思いますね。

内藤 不燃化を進めた構造学者・田辺平学さんの自邸を訪問したとき、今のプレハブと較べても非常にきれいな、細い柱でスチールのプレスが入った構造の写真を見せていただいたんですね。田辺さんは基本的には東京の不燃化を考えていたのですが、この自邸の柱は、木造の柱に近い柱だったんです。

黒沢 PS（プレストレスト）コンクリートの柱なんですか。

内藤 ええ。木造構法とPSなどを組み合わせようとしていたんでしょう。木造には建築家の作品という表のフローに、不燃化という裏のフローがいつもついてまわっているのだと思います。戦後の小規模住宅のコンペ作品をみると、すべて木造です。誰もコンクリートで建てようとはしなかった。コストの点からも木造を選んだんでしょう。

黒沢 確かにそうです。60年代に入って、資産家が登場すると、吉田五十八が

鉄筋コンクリートで〈鈴木邸〉をつくってみせて、みんなが真似するわけですよ。ほぼ同時期に堀口捨巳の〈岩波邸〉があったり。

構法×都市×モダニズム

大川 戦前に戻って、〈土浦亀城自邸〉（1935）ははいかがですか。

内藤 確かにきれいですが、日本建築の苦しいところが見えてしまう。そこに込められたヴィジョンと、それを実現した実体がねじれているような感じがしていますね。木造でつく成ことは、建築をなりたさせる仕組みのベースだったのでしょうか。

黒沢 僕は〈土浦自邸〉を見たときから、木造でなりたっていると思いましたから、そういう思いのギャップはないんですね。

内藤 しかしあのころの海外の建築雑誌には、白い壁で、窓がある住宅などが載っています。日本では、それを一生懸命に木造で翻訳しようとしているように見えてしまう。

黒沢 そういう風に見ることもできると思いますが、当時の国内の建築雑誌には〈木目セメント板〉とか〈大平スレート板〉といった広告が堂々と載っています。ということは、グロビウスらが主導していたトロツケンバウの素材みたいなものが、日本でも十分に国産化できていたということです。そういう前提があるのではないのでしょうか。そのなかで、大壁の木造というのが〈土浦自邸〉だと思っています。

真壁と大壁というのは本質の異なった表現です。真壁はある意味「伝統」だと言えます。がしかし、ここで問題なのは「民芸風」を「伝統」と言えるかということです。〈前川國男自邸〉（1942）は民芸風です。木造真壁というのは日本人のお家芸ですから、そういう意味で、前川の自邸は、そこからの離脱だったのだと思います。しかし、〈土浦自邸〉は、最初にトロツケンバウと考えられている。



黒沢 隆 (建築家)



内藤 廣 (建築家)



大川三雄 (建築史家)

真壁のトロッケンバウはありえない。ですから、真壁系列の家と大壁系列の家とは木造であっても別のものであると考えています。

大壁系列の家では下地の構造として木造が使われているという意識があった。しかもその下地は、鉄などに取り替えることもできる。ただし、コンクリートではない。もともと、僕はトロッケンバウというのは「組積造ではない」という意味だと考えています。だからヨーロッパと、日本でのトロッケンバウは違うものだと考えています。

内藤 トロッケンバウというのは構法の問題ですね。それと、「不燃化」というものがバインドされ、木造モダニズムの表現に至ったわけですか。

黒沢 日本の場合、モルタルを塗ったらトロッケンバウではないと解釈していましたから、大壁のものを、今、「不燃」といったのは、実は「難燃」程度ではないでしょうか。

内藤 都市的な要請と、トロッケンバウという構法的なものが手を結び、そこにさらにモダニズムの様式が加わってくる。しかし難燃化というと、必然的に柱を外に出さない大壁になりますよね。そうすると大壁であるトロッケンバウになるのではないかと思います。そこで様々な要素がねじれていますね。

ハーフティンバーという回路

黒沢 シュトゥットガルトのヴァイセンホーフ・ジードルンク (1927) は〈ミース棟〉がとても面白いと思う。〈ミース棟〉は鉄骨造ですが、鉄骨と鉄骨の間に中空ブロックを積んだ壁を充填し、その上にモルタルを塗っています。室内には3つのモジュールがあり、すべて柱が見えている。鉄でつくと鉄を見せるのに、木でつくと木を見せないのはなぜか——これがさっき内藤さんのおっしゃった「なぜ木を使うのか」ということに対する答えになるかと思います。またその当時、一番お金のかかるのが鉄骨造だっ

た。そして木造の集合住宅から脱するのが、近代なのではないのでしょうか。意外かもしれませんが、組積造だったものを、効率が悪いので木造に建て替えて効率を良くするという例も、近世のロンドンには相当でてくるんですね。また、そこで多用されていたハーフティンバーは、部材の断面が、かなり大きいので燃えにくい。いわば、耐火の役割を果たしていたといえるでしょう。このことから、これを木造耐火建築というカテゴリーに入れてもいいかと思います。

こういった段階を脱して、集合住宅を供給しはじめたのがやはり近代代と思うんです。集合住宅となったら、「絶対木造ではいけない」というコンセンサスが、近代のごく初期にできたのではないかと思います。防音の問題とかもふくめて。ですから木造で許されるのは戸建て、あるいはセミディタッチト (2戸連棟) であると。

内藤 日本では様式的なものが先に入ってきて、性能的な話しは後になるのでしょうか。

黒沢 日本では集合住宅というと「長屋」でした。基本的に平屋だという大前提があるわけですね。ですから、木造であってもそれほど問題はない。その規範を超えるものが2階建ての「木質」であったのだと思います。木造というものが、住宅というドメスティック・アーキテクチャーの供給にとってきわめて自然な工法であるということは、日本もヨーロッパもアメリカも変わらないものだと認識しています。そのなかで、ドメスティックではなく「アーキテクチャー」という概念が「組積造」であるのが、ヨーロッパやアメリカだと思うんです。一方、日本は「アーキテクチャー」であって、昔から「木造」という伝統を持っていた。その上に組積造の西欧文明が入ってきたというわけです。

ちょっと話しは飛びますが、近代住宅 (モダン・ハウス/郊外立地の専用住宅) のイメージがどこから湧いてきたかとい

うとき、僕はハーフティンバー造りだと考えているんですよ。

内藤 土浦亀城ではないのですか？

黒沢 ええ。英国は少なくともほかの各国よりも70年くらい先行していたわけですが、その英国において、ロバート・ノーマン・ショーがつくっていたもののほとんどが、ハーフティンバーのついたものだったんです。そのうち〈リーズウッド〉 (1867) は『ビルディング・ニュース』という雑誌を通じて世界各国に紹介されて流行し、これによりハーフティンバー造りというものが、モダンハウス固有のイメージとして、まず定着したのだと思うんです。これ抜きには、昭和の田園調布開発や、各電鉄資本による郊外住宅地開発に、あれほどハーフティンバー造りが見られなかったと思います。

ハーフティンバー造り、大げさにいえばチューダー様式のリバイバルという住まいのあり方がこの木造モダニズムに関わっているのだと思います。

内藤 でもそれは木造以外もふくめて、すべてのモダニズムの建築に関わっているかとも思います。

黒沢 確かにそうでしょう。しかし、内容としてはこの木造モダニズムからすべてがはじまっている。

内藤 なるほど。逆にそういったベースをひっくりかえすことによって、モダニズムというひとつのものがあることですか。ハーフティンバー的な世界をひっくりかえすという。

黒沢 そうです。とはいっても、日本には民芸風が湧いてでてくる。それは、実はハーフティンバーと同じものだからそれが混ざってしまうわけです。

大川 初期の民芸風というと、どういったものがあるのですか。

黒沢 吉田五十八に即していけばかなりあるでしょう。1936年の〈杵屋六左右衛門邸〉をはじめ、〈加藤邸・番茶席〉、〈料亭浮月〉だとか、いくらでもあります。また、ほかにも戦後になると〈開新堂〉だとか大阪ロイヤルホテルの〈リー

チ・バー〉だとかあります。

たとえばダルムシュタット芸術家村の〈ペーレンス自邸〉(1901)。あのかたちは組積造でつくったハーフティンバーです。つまり、ロマンティズムなのです。アール・ヌーヴォーはどこまでも、この影響下にあるといえます。また影響下にある〈紫烟荘〉(堀口捨己、1926)は一見、民芸風にみえて、西欧民家風であったのです。

大川 昔、建築雑誌に民家風の作品が増える時代を年表にしたんです。そのでてくるきっかけは〈紫烟荘〉なんですよ。〈紫烟荘〉が紹介された後に、建築家による民家風の作品が、どつとでてきた。

今回、黒沢さんの論文のなかで吉田鉄郎の木造建築を「ロマンティック」とおっしゃってますよね。たとえば〈大阪中央郵便局梅田分室〉(1935) なんか。

黒沢 「昔懐かしい」という感じもロマンティックの一部だと考えているからです。

内藤 そういう意味ですか。僕は「本来あるべき実体はないけれども、それを求める気持ち」をロマンティズムと考えていますが、どちらかといえば失われたものに対する「あこがれ」のようなものだ。

黒沢 昔懐かしいってというのは明らかにロマンティズムの範囲に入っていると思いますね。縦羽目を使用するのもロマンティズムだと思います。

多矛盾系の技術

内藤 やはり僕は木造に関しては不思議な感じがしています。僕らが大学で習う近代建築史に、木造はあまりでてきません。「コルビュジエが何やった」などといった止まりで。なぜか……。

それは木造が「ままならないもの」だったからだと思うんです。スチールならこちらの思い通りになるのに、木は思った通りにならない。それでなじまなかったという気がするのですが。また、構造的にみても、力学的に矛盾しますよ

ね。最終的に仕口がでてきたり、軸力線がずれたりして、近代的なロジカルなものとはずれてしまう。誰も木造なりの力学的パラダイムを考えてこなかった。無矛盾というのが、近代的な構造計算方法の理想形です。テクノロジー的なモダンからいえば、そういった力学系でどこまで合理性が求められるかという話になるのではないのでしょうか。

黒沢 それは木造だけではないと思います。

20年代のコルビュジエは、例の「ドミノ構造」を根幹にすえて「近代建築の5原則」を説きます。これを骨組み構造だとコルはいい、自由な平面や自由な立面を実現する手段だと思っているのです。つまり、構造は下地にすぎない。

しかしアール・デコ以降変わっていき、それが近代建築の第3回目の大きな変容となった。それを特長づけるのがコルビュジエの〈ソビエトパレス〉(コンペ案、1931) だったのだと思います。その後〈スイス学生会館〉(1932) ができ、構造そのもののデザインが、建築設計の主題となっていきます。それまでは、そういう意識というものが誰にもなかったと思うんです。

内藤 グロピウスはどうですか。

黒沢 たとえば、デッサウのパウハウスさえも、立面も視覚補正を行っていて、構造体にある一定のグリッドを与えていくということはないですね。ただ、ペーレンスの〈ABGタービン工場〉(1910) は、非常に大きな空間を確保するために、構造体に特別な認知を与えているので下地とはいえないでしょう。

大川 さきほど内藤さんがおっしゃったように、構造の学問体系が当時の柔らかな技術を解析できなかったという感じは強いんですね。

内藤 それは今でもできないでいる。木造の力学的矛盾に関して、あるストラクチュア・エンジニアに聞いたのですが、ある力学系のなかで矛盾がひとつあればそこに応力が集中して破壊に至る。しか

し、100個という多矛盾の場合ならどうなるのかと聞くと、それは今の技術では計算できないといわれました。

木は半自然の材料なので不均質なのが当然です。しかし、そういうのがモダン的思考、いわば無矛盾の思考からするとなじまないわけです。材質がある程度一定のスチールとかコンクリートといったらわかるんでしょうけれど。しかし、実際に木造でつくっていくと、思いもしなかった側面が見えてくるという面白さもあるのは事実です。

しかし、これまでの木造作品をみると、致し方なく使っているようにどうしても感じてしまう。スチールやコンクリートを初期に使っているのは「戦う」という感じがしますが、木造を使いつつ「戦う」というのはどうでしょうか。半分は日本の情緒に、また日本の職能技術に依っているのではないかという気がして、前向きな感じがしないのです。

黒沢 そうですか。ただ前向きな木造というのを考えたときに、大断面を使ったり、集成材を使うといったものだけが前向きなものではないと思うんです。

和小屋というのは日本の建築文化の汚点だと考えています。美しい屋根のための人眼にさらすことのできない下地ではない。小屋裏という空間は、断熱ということ以外は無駄でしかない。戦後、桝木構造を採用することによって、表現は内から外から一致させることができるようになった。いまや、プランの精神は断面全体に及ぶようになった。これによって、木造はRCや鉄骨と並んで近代建築原理を追求しうる日の当たる構法のひとつとなった。こう思うのですが。

内藤 今日は今まで木造に関して散々なことをいってきましたが、僕はこれからは木造だと考えています。

今、木造といってもストラクチュア・エンジニアのレベルではスチールの力学体系に木を置き換えているだけです。剛接合にしてもピン接合にしても、基本的な計算はスチールをベースに組み立

てられています。「スティールを使うところを集成材に置き換えたらどうなりますか？」というのが現状です。ですから今後、木造には新たな可能性がたくさん残されていると考えられます。今、僕のところでトライしているのは木造剛接合です。大断面集成材の剛接合を、金物を使わないで行うというものです。これはひとつの例ですが、こうした、部分から全体の考えを直すというふうになったら面白いと思うんです。また、木造というテリトリーでそれを考えていくには最先端の技術と、職人の技術がどうしても必要になってきます。最先端の技術と伝統技術を会わせる場所としても、それらを組み合わせた次の世代の新しい技術を開発するのにも、非常にいい場だと思うんです。

「木」を使うこと

内藤 今回、黒沢さんの文章を読ませていただいて、やはり、木造に対するトラウマがあるように思うんです。トラウマを払拭しないと新しいところにはいけない気がします。ひとつは技術論、もうひとつは、構法とか情緒的な話しになると木造が「負け組」になってしまう点です。

スティールの軽量鉄骨の軸組などを見ると、かつての木造かと思うほどきれいです。このままでは最終的にかなわない。ですからそこに、非常に新しい技術体系を入れる、あるいは木造というのは循環素材ですから、社会学的なレベルで木を論じる、といったまったく新しい視点が必要だと思います。今までとは違う枠組みで論じていかないと、木に「勝ち」はないと思うんです。

黒沢 内藤さんは機能主義だね（笑）。

内藤 技術論からいわないと、トラウマにとらわれてしまうと思うんですよ。

黒沢 そちらの方がトラウマだと思うんだけど。

内藤 例えば、僕らが住んでいる日本という文化的土壌では、「木を使う」というとみんな涙を流して喜ぶわけですよ。

多少まずく使ってもOKなんですよね。やはり、木は「魅力」も含めて「危ない材料だな」と思うんです。

黒沢 そうかな。木だからデザインが下手であつたり、逆に使いかたがまずくても平気だというわけ？

内藤 そういうある種の文化的土壌のなかにいる、と考えるのが普通ではないですか。

黒沢 私は木を使うとき、自分を厳しくしていますから大丈夫です（笑）。

内藤 だから僕は気をつけてる（笑）。

黒沢 木造近代建築というのは伏流である、と認識してもそれはいいと思います。伏流だから目に当たってこなかった。でも日本人というのは木の使い方が本当に上手いんですね。

内藤 できてしまう。それがさっき僕が言った「危ない」ということなんですよ。

黒沢 でも、少なくとも内藤さんの世代までは木の使いかたが本当に上手かったんですよ。

大川 黒沢さんは、今回の論文に「匿名性」というタイトルをつけていましたが、どういう意図ですか。

黒沢 木造を使うという、何でもできてしまいます。ベニヤとか集成材に頼らないとすると、材料的な制約が生まれてくるわけですね。すると在庫（伝統）のなかにあるものを使わざるをえない。そういう意味では必ず継続性がでてくるわけですね。これが匿名性の原理になるとひとつ言えると思います。

また、近代建築のデザイン原理そのものに匿名性の時代があり、それがちょうど日本の窮乏時代と重なっていた。そういうことから、窮乏時代の日本の木造建築というのは、モダンデザインの一線にいたのだといえると思います。

内藤 木造における匿名性と、モダニズムにおける匿名性がそこで、重なったと。

黒沢 そう。第二次世界大戦を挟んで少なくとも前後20年間程度は重なっていた

と。

大川 それで、一端切れて68年ごろに再現するとおっしゃってますよね。

黒沢 そうです。それはチャールズ・ムーアの〈シーランチ・コンドミニアム〉（1965）のように、ハイスไตล์に対する草の根という表現でそうなるんですね。〈シーランチ〉では積極的に社会にでていって、ハイスไตล์の生活をしなかった人たちが住んだわけですね。

内藤 積極的な木造はありますか。

黒沢 丹下健三さんの自邸（1954）がそうでしょう。ほかはコストが導いた木造であり、積極的な木造ではない。

内藤 丹下さんがその「積極的な木造」に挑んだというのはどうしてでしょう。

黒沢 そのころ、清家清さんが自邸（1950）を鉄筋コンクリートでつくってますから、丹下さんも鉄筋コンクリートにしようと思えばできたわけです。しかし、丹下さんは積極的に木造にしたわけです。丹下さんがどこまで考えていたかは分からないけれど、日本は「一週遅れのトップ」という座をずっと保っていく原理をつくったわけです。

当時、ミースの〈ファンズワース邸〉（1950）というのは絶対的なものであった。みんな一斉に反応し、その反応のひとつが、〈丹下自邸〉であったわけです。ガラスの代わりに障子、フラットルーフの代わりに瓦をふいて味つけするという木造でしかありえなかったものです。だから積極的な木造といえます。

〈丹下邸〉というのは非常に良くできた優等生の回答で、その後の日本の復興原理というのが、まさにそこにあるわけですよ。

内藤 いや、今日はぜひぶん勉強させていただきました。

大川 ありがとうございます。

（2000年7月18日、於：鹿島出版会）



構 造 と 表 象 の オ ル タ ナ テ ィ ヴ

跣足男子カルメル会修院聖堂

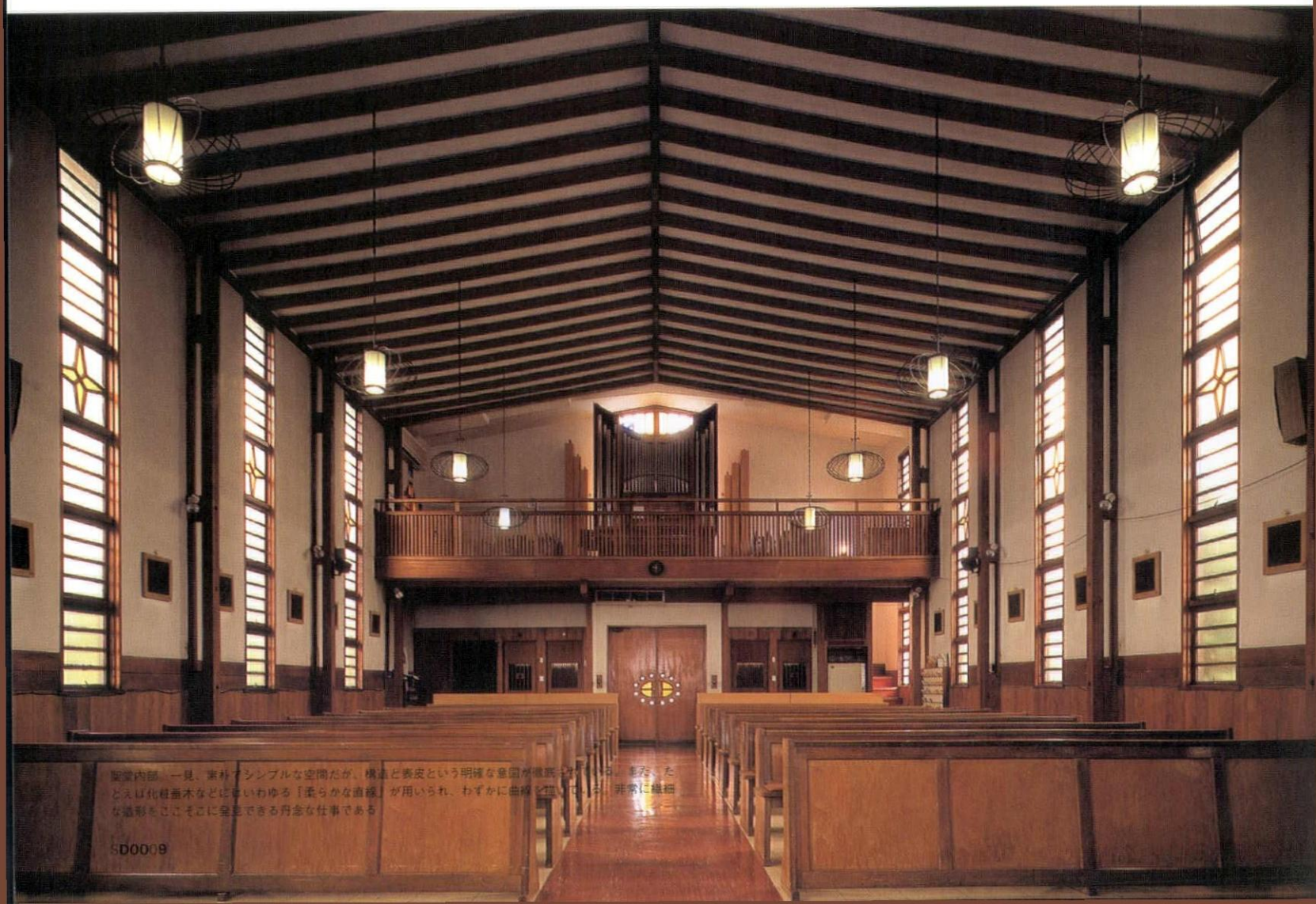
現・カルメル会カトリック上野毛教会

今井 兼 次

1959年



全景。左奥に鐘楼。和風ロマネスクといった佇まい



聖堂内部。一見、素朴でシンプルな空間だが、構造と彫刻という明確な意図が徹底されている。また、たとえば化粧画木などにはいわゆる「柔らかな直線」が用いられ、わずかに曲線を帯びている。非常に繊細な造形をここにそこに至らせる丹念な仕事である。

SD0009

木 造 表 現 の パ ラ ダ イ ム

木でモダニズムをつくるとき、転換されるのは素材だけではない。

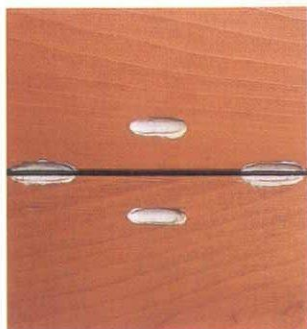
演出としての「表皮」、精神としての「丸太」
構造と表象のオルタナティヴ

書院、数寄屋、そして民家の継承と展開
トラディショナル・シークエンス

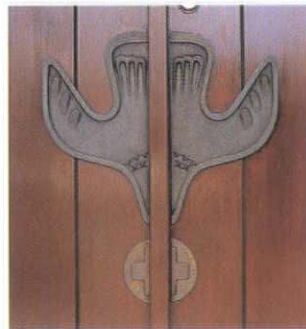
モダンとの格闘と融合のかたち
「切妻屋根」というロゴス



聖堂祭壇細部。縦格子、その背後の楕円状の窓が透ける造形＝和のイメージを上品に強調している



聖堂内部の横架材細部



正面玄関扉のディテール



聖堂入口扉のディテール

井 上 邸

アントニン・レーモンド
1952年



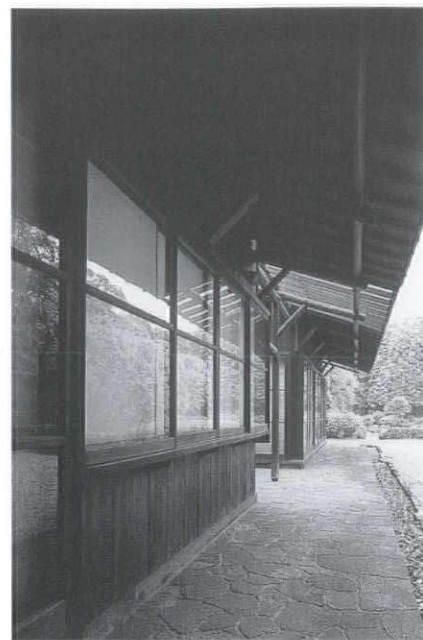
架構細部



居間。天井を仕上げず、棟木へと向かう登り梁など、構造体を露出。登り梁、母屋は杉の足場用丸太。壁材は定尺ラワン・ロータリー・ベニヤ



寝室。壁に並ぶのが可動式ソファ・ベッド。写真左手には食堂としてのパティオが続く



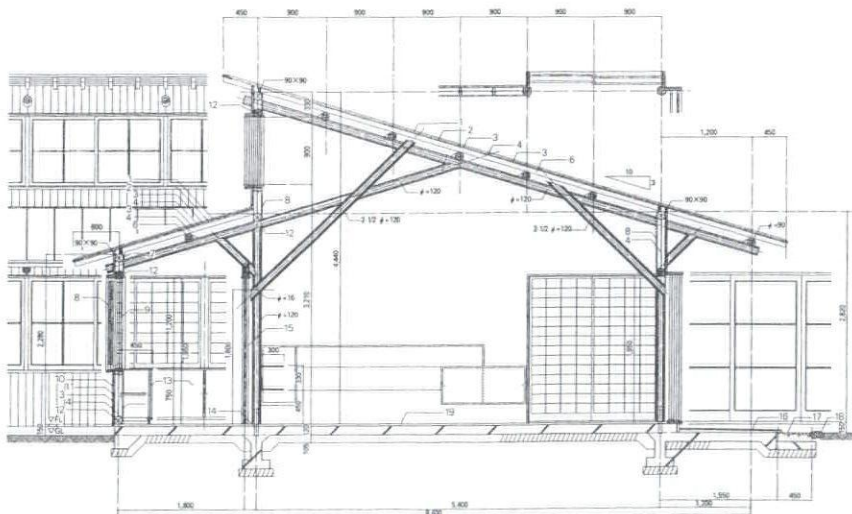
軒下。5尺（約1.5m）と底は深い



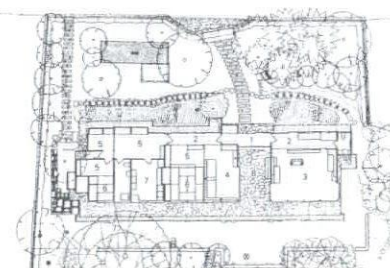
外観夕景。パティオを挟んで左手に寝室、右手が居間となっている



玄関へのアプローチ



断面図 S=1:100

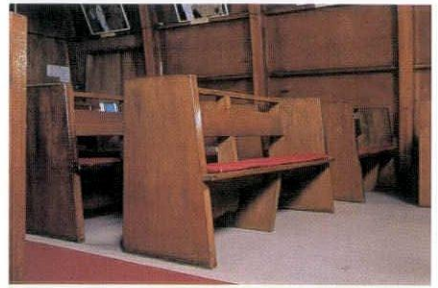


平面図 S=1:800

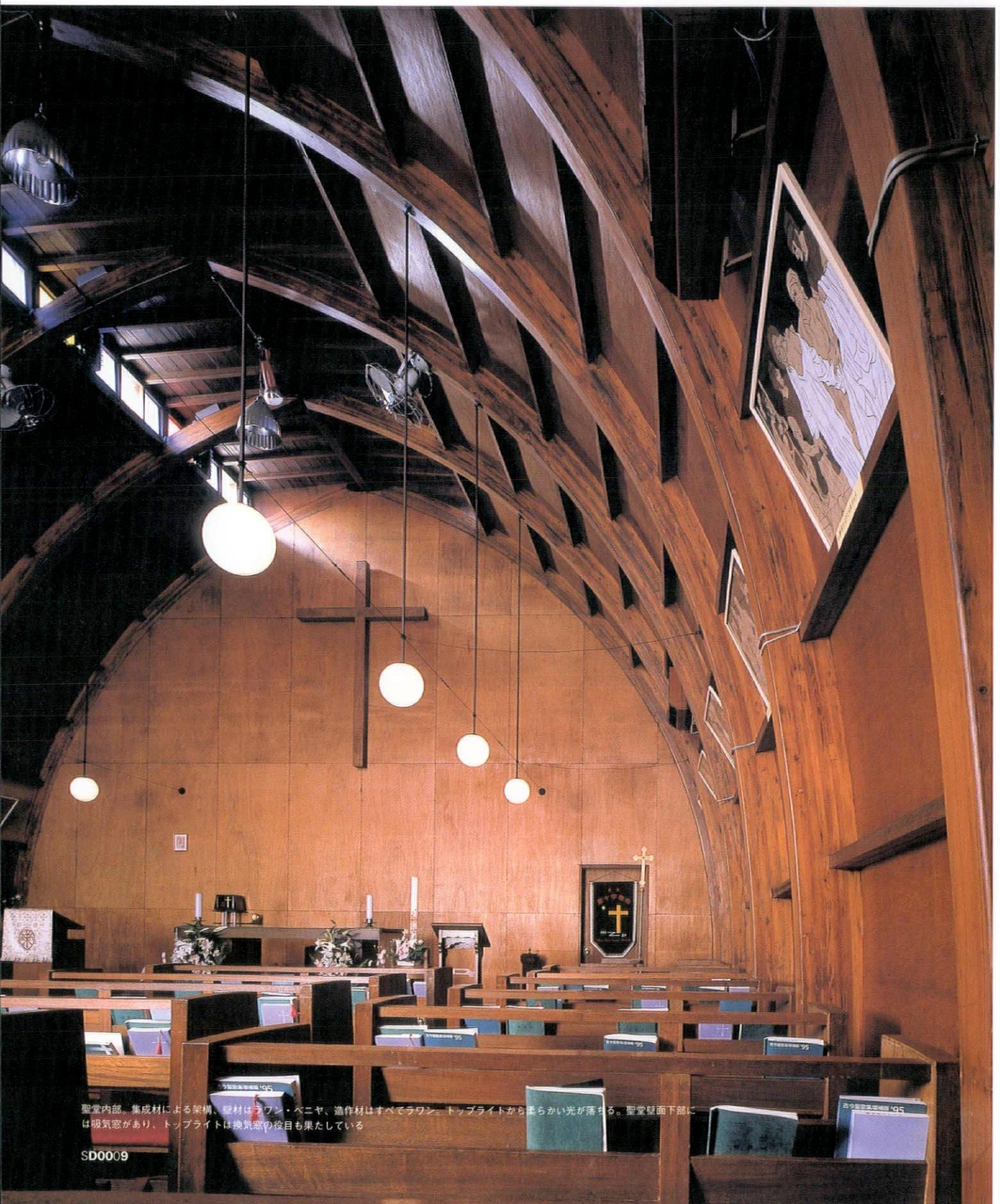
東京聖十字教会

アントニシ・レーモンド

1961年

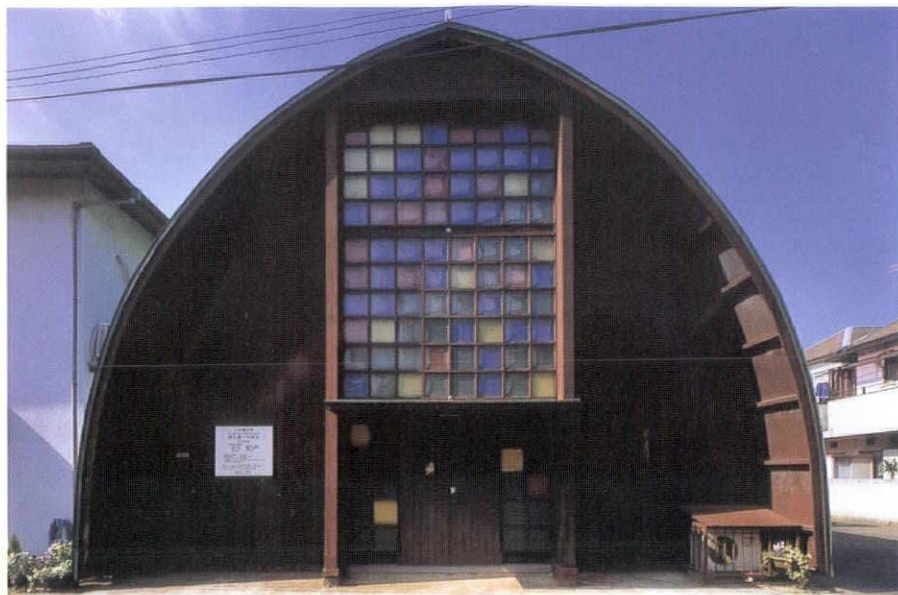


聖堂内の椅子

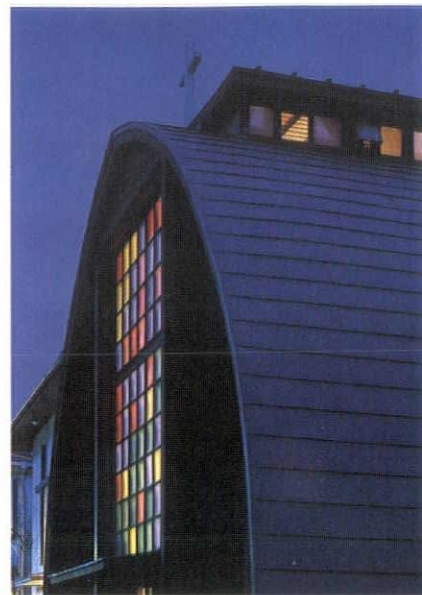


聖堂内部。集成材による架構、壁材はラワン・ベニヤ、造作材はすべてラワン。トップライトから柔らかい光が落ちる。聖堂壁面下部には吸気窓があり、トップライトは換気窓の役目も果たしている

SD0009



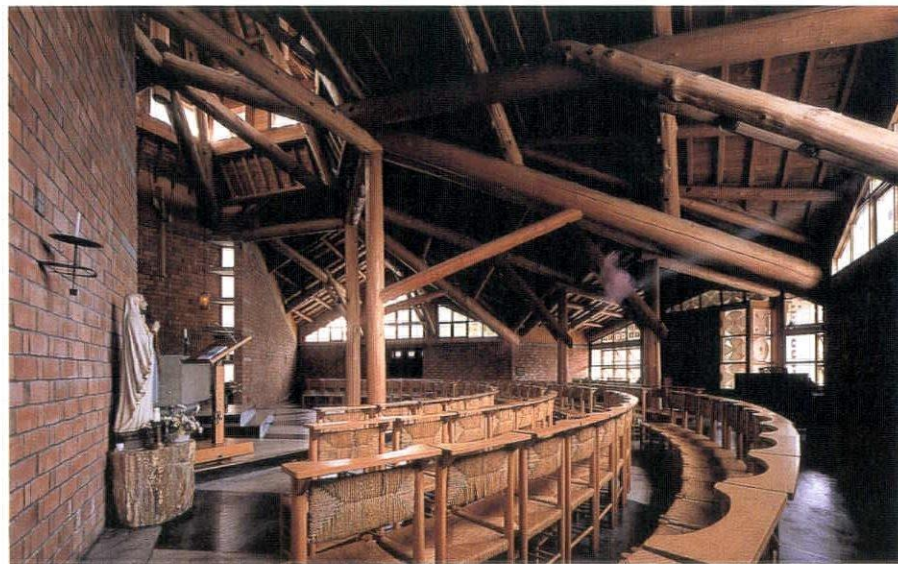
正面全景。外壁はラワン・ベニヤ張り、屋根材はカラー鉄板平葺



夜景。ステンドグラス部はカラー・アクリル板を使用

新発田カトリック教会

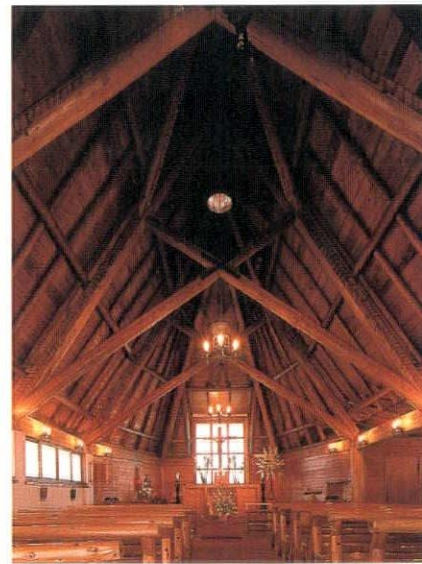
アントニン・レーモンド
1965年



聖堂内部

聖ポール教会（軽井沢）

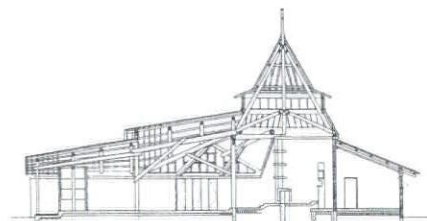
アントニン・レーモンド
1934年



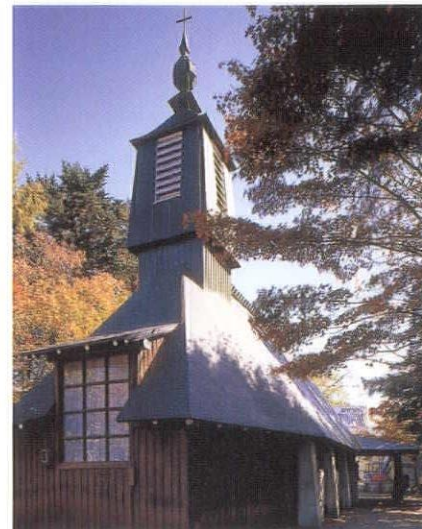
聖堂内部



聖堂全景



断面図 S=1:500



外観

濱寄良実

ホンネとタテマエ

何度かお聞きになったことがあるだろう。かつて外国人からよく耳にしたニホンジンに関する例の話である。

「今度、オタクへ遊びに行きます」というので、首を長くして来訪を待っている。一向に遊びに来たためしはなく、またごくまれにだが、いったとおりにすぐに遊びに来たかと思えば、手土産を「つまらないモノですが……」と差し出す。「来る気がないなら、行くなどというわず、つまらないモノなら、持ってくるな！ ニホンジンは不可解だ!？」と。

文化の相違だといってしまえばそれまでだが、何度聞いても気持ちのいい話ではない。日本人の言葉には、ウラとオモテ、つまりホンネとタテマエがある。「ともあれ、これは良くも悪くも日本人の特徴であり、文化である」と語気を強めて聞き直るしか術を知らず、とにかく実際、耳が痛かった記憶がある。

唐突にこんな話を持ち出したのはほかでもない、こうした日本の文化は、建築の問題にも重ね合わせて見る事が可能といえるからだ。

等式と不等式

「ただひとつの芸術、すなわち建築芸術においてのみ、精神の意力と避けがたい自然の力との大いなるせめぎ合いが和解を迎え、上へ向かう魂と下へ向かう重力との間の差し引き計算が、正確な等式に帰結する」¹⁾。

ドイツの哲学者で社会学者のゲオルク・ジンメルのことばである。

ここでいう「等式」とは、(構造)力学の等式であり、力学の法則を表わす数式にほかならない。建築はそれぞれに架構という具体的な形式をもって、われわれの眼前に立ち現われ、「等式」を現象させる。西洋には伝統的に、建築が、建設という人為と重力という自然の力との、拮抗の形象化であるとの概念がある。こうした人為と自然のせめぎ合いは、「荷重と支持の闘い (A. ショーベンハウエ

ル)」、「大地と世界の闘い (M. ハイデッカー)」とも表現されてきたように、つねに拮抗、つまり「等式」として認識される傾向があるようだ (すでにお気づきのことと思うが、実際、構造力学的には嘘があるのだが……)。

いずれにしても、力学の「等式」の形象化、あるいは視覚化という西洋建築の概念は、建築美の本質のひとつに規定され、そしてまたそのように認識されてきた。これはあくまでも西洋の様式建築の、組石造という文化に基づく構造美の概念である。

木構造の場合、とくに日本ではどのようなだろうか。

結論を先に述べれば、日本では必ずしも建築の構造美を、西洋のように、「等式」に集約させようという傾向はなかったといえそうだ。

日本伝統の木造建築の重要な特徴には、日本人の国民性に重なる、ホンネとタテマエという「構造」がある。別言すれば、日本では、力学の「等式」ではなく、「不等式」が好まれてきたとさえいえる。

たとえば伊勢神宮本殿 (内宮/外宮) の四周の10本の掘立柱、そして妻の2本の棟持柱である。伊勢神宮の構造は、「板校倉」で、四周の横板壁によって屋根が支持されている。掘立柱、および棟持柱は、実質的には、屋根も棟も支えていない。それは象徴として必要だったのである。また、五重塔などの心柱もしかり。塔の建設に使用された部材の中で最も長く、また太いにもかかわらず、構造上の機能はないといってもよい。民家の大黒柱とて同じである。原則では構造上最も重要とされ、一番断面が大きいのだが、実際にはその原則どおりの役割を果たす例はむしろ少ないという²⁾。

つまり、日本人には、建築の構造を「等式」として把握することによって建築を成立させていくのではなく、それに「象徴」という項を加えることで、むしろ「不等式」を形成しようとする性向が

ある。日本人は「等式」にではなく、いわば建築部材に込められた「神聖なるもの」という余剰=象徴、そこに建築の美を感じるようだ。これこそが、日本建築の「精神的なるもの」といえるかもしれない。

ニホンジンの木造モダニズム

日本建築の「精神的なるもの」を、日本のモダニズムという位相のなかで、最も鮮やかな手法で提示して見せた建築家のひとりが、アントニン・レーモンドである、と個人的には思っている。

大正・昭和戦前期に来日して多大な影響を及ぼした外国人建築家として、F.L. ライト、B. タウトと並び賞されるレーモンドだが、前二者と違うのは、在日期間が長かった、ということである。そして、誤解を恐れずにいうならば、レーモンドはニホンジンになったのである。そういってもよいほど、日本建築の「精神的なるもの」を捉えていた。

レーモンドは、伊勢を頂点に置き、日本の建築とその自然観を学び、自らの建築の5原則、すなわち「単純性」「経済性」「直截性」「率直性」「自然性」へと辿り着いた。これはいわゆるモダニストにみる合理主義、あるいは機能主義の帰結、つまりこれらにすべて回収される論理ではない。最後の「自然性」に注目すべきである。「自然性」とはデザインの背後にある「精神的理念」の表出にほかならない。「すべての材料は、必ず何等かの精神的真理の象徴として存在し、この真理を無視して、その材料を用いることは最大の悪趣味として斥けられる」とレーモンドはいうのだから³⁾。

したがって、レーモンドの一連の木造モダニズムは、「構造即表現」、いわゆる素朴な構造表現主義と見るべきではない。無駄を一切排除した架構の露出による構造の秩序という美学以上の何か、そこには「精神的なるもの」=「精神的理念」が、つまり「等式」を「不等式」にしてしまう項の存在=象徴性が感じられる。

その架構は、明らかに「等式」の視覚化ではなく、日本伝統の「構造象徴主義」とでもいうべき「不等式」なのである。そうした意味で、レーモンドの木造モダニズムにわれわれはいい知れぬ懐かしさを感じ、そして安堵感を覚え、空間の力、また構造美を感じるのだろう。

これが、日本の木造モダニズムというテーマに対してニホンジンが提出したみごとな解答のひとつである。

日本人の木造モダニズム

日本の木造モダニズムにおいて、同様の問題に異なる解答を示した日本人建築家として、ここではぜひとも今井兼次を挙げておきたい。

今井の木造モダニズムといっても、すぐに作品が思い浮かばないかもしれない。確かに今井に木造作品は少ない。個人的な話で恐縮だが、筆者の大学時代の後輩に熱狂的な今井ファンがいる。彼が結婚式を挙げた場所が、今井の手になる木造モダニズム＝〈跣足男子カルメル会修院聖堂〉（現・カルメル会カトリック上野毛教会）だった。式に列席した際、筆者も遅ればせながら初めてその存在を強く意識した。

これがとても面白い。素朴でありながら、清廉で、揺るぎない細部に支えられたまさに和風建築、それも数寄屋的な聖堂である。レーモンドの教会とは対照的なのである。そして、これも日本の木造モダニズムというテーマへのみごとな解答のひとつとなっている。

今井の聖堂はまったく屋根の架構を見せない。図面が残っていないようなので、小屋組などの詳細は不明だが、その手法には、まさにホンネとタテマエの美学が貫かれている。そこからわれわれは、日本伝統の木造建築の特徴を、とくに数寄屋のそれを看て取れる。構造家・川口衛のことは借りれば、これぞ「デザインのソフィスティケーション」といえるだろう⁴⁾。

川口は、日本伝統の木造建築の特徴と

して、「実質的な構造」と「表現」を自在に使い分けること、を挙げている。こうした日本建築の「ソフィスティケーションの技法」は大工棟梁によって「見事に分類され、駆使されてきた」という。そして彼らは、「実質的な意味で必要であるが表現したくない」部材に「野」の字を、逆に「実質的な役割は果たしていないが、あたかも役に立っているかのよう」に表現したい部材に「化粧」の字をつけた。「野小屋」「野縁」「野桁」「野垂木」「野母屋」が前者の例、「化粧柱」「化粧垂木」「化粧勾配」が後者の例である⁵⁾。

大江宏のことが頭を過る。

「日本の建築には、古来、野物と化粧というはっきりした概念規定が成り立っていた。野物がもつばら力を背負うことによって、化粧物は積極的に表現面に関与できるというメリットである。（中略）野物と化粧の別を失った建築は、舞台裏をもたない舞台にも等しい。あるいは演出の技法を禁じられた演劇に擬えた方がより適切だろう」⁶⁾。

「このような演出技法が数寄屋という、より柔軟な美的表現の可能性を和風建築のなかに広げていくことになったのである」⁷⁾。

今井といえば、A.ガウディ、R.シュタイナーへの傾倒の印象が強烈だが、実は一貫して「モダン」「日本的」という問題に、大江にさえ負けず劣らず、敏感な作家であった。この作品はまさにそうした事実を承服させるに充分な説得力をもつ。

今井の木造モダニズムには、まさに「数寄屋モダン」の名がふさわしい。同じく日本の伝統を意識しながら、レーモンドとはまったく異なる洗練された解答を提示した作家として、ぜひとも記憶しておくべきである。

日本の木造モダニズムの振幅

「ニホンジン」と「日本人」の木造モダニズム。どちらがより日本的か、という設問はナンセンスだろう。そのいずれも

が日本的なのだから。

あえて両者の差異を指摘するならば、前者には、よりプリミティブな象徴の美学に重点があり、後者には、ホンネとタテマエ、ウラとオモテをわきまえた「演出技法」の美学、あるいはそうした作法に重きがかったということだろう。

ともかく日本の木造モダニズムを構造とデザインという視点から考えるとき——ここでは土浦亀城の作品のような、ほかの構造形式のいわば代用品としての木造モダニズムは除外するが——、この「ニホンジン」と「日本人」の解答がその振幅を決定しているといえそうだ。

舞台裏まで見せ、あくまでも素朴なさりげなさを装い、それでいて落着いてよくよく見てみると、実際にはやや過剰演出気味な振る舞いであることを選択するのか、また対照的に作法に則って、ウラとオモテをわきまえた「演出技法」を採るのか。その間を揺れ動く軌跡がそのまま日本の木造モダニズムとはいえないか。（はまざき・よしみ／建築家、日本大学非常勤講師）

- 1) ゲオルク・ジンメル、川村二郎訳、『廃墟』、『ジンメル・エッセイ集』、1999年、平凡社
- 2) 川口衛、『木構造のデザイン』、『木の空間』、1992年12月号臨時増刊、新建築社
- 3) A.レーモンド、『日本建築に就いて』、『レーモンド作品集 1920～1935』、1935年、城南書院
- 4) 註2) に同じ。
- 5) 同上。
- 6) 大江宏、『野物と化粧』、『建築作法』、1989年、思潮社
- 7) 大江宏、『和風の表現』、『建築作法』、1989年、思潮社

トラディショナル・シーケンス



舞踏場より待合と日本間を望む。それぞれが自立性を持ちながら、分配的に連続した一室空間

SD0009

日向別邸

ブルーノ・タウト
1936年



竹材を使った舞踏室への入り口。竹の「桂垣」に対応させたタウトによる変奏曲



タウト設計の椅子



日本間の上段に設けられた書院



洋間の開口部。海への眺望が配慮

聴 竹 居

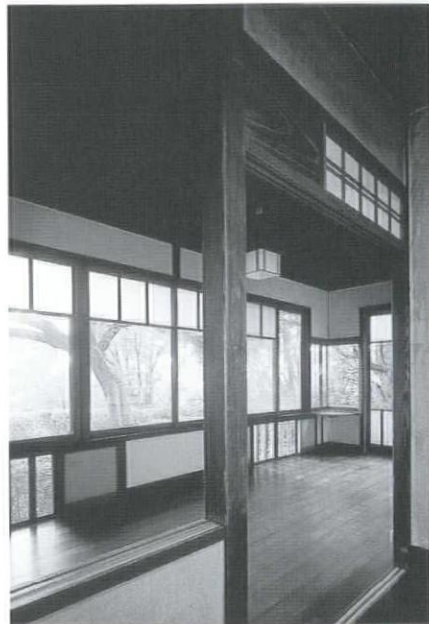
藤井厚二
1927年



南側外観。緩勾配の屋根が生み出す鋭いシルエット



応接室。造りつけソファと床の間の組み合わせ



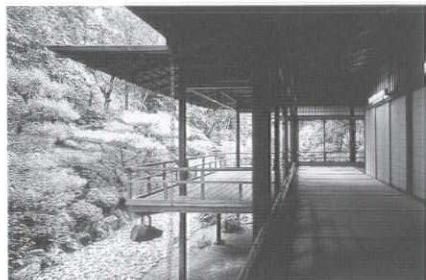
居間より日光室を見る。隅の柱を除いた横長連続窓の開口



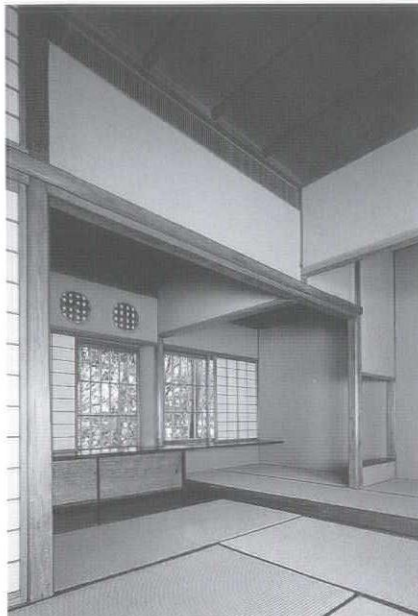
食事室より居間を見る。幾何学的な円弧で分節された空間

八勝館御幸の間

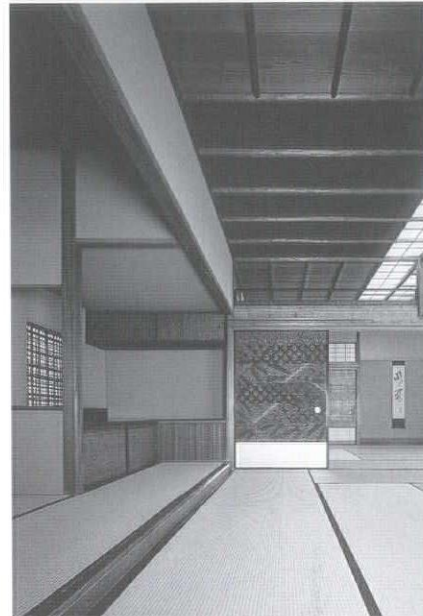
堀口捨己
1950年



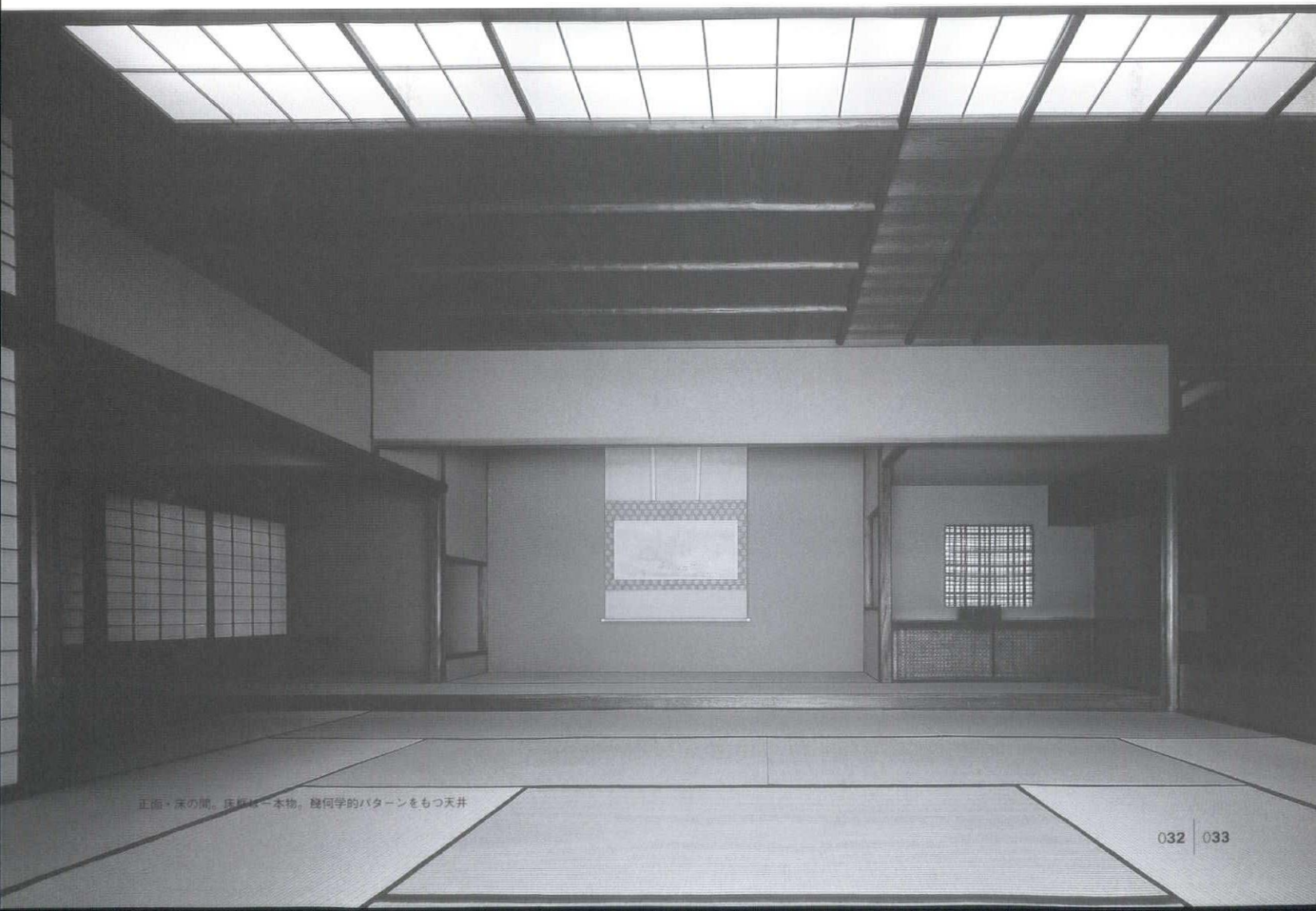
ピロティの上に浮かぶ露台。庭と建物のみごとな一体感



正面・床の間の左手に置かれた書院空間



左手に床の間。交叉状に配された天袋と地袋



正面・床の間。床間は一本物。幾何学的パターンをもつ天井



「杉亭」内部。太い部材と大きな開口を特徴とする真壁式大壁

旅館「稲住温泉」の4つの離れ

白井 屋一

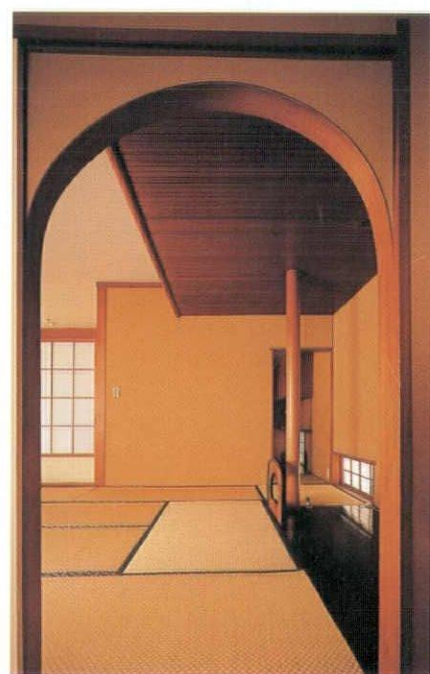
1959～63年



「閑鳥亭」アーチや襖の組合せが生み出す白井和風の世界



「嵐亭」和風座敷に付随した洋風デッキ



「漣亭」寝室から主座敷をみる。塗壁とアーチの組合せ

大川三雄

近代日本の建築家たちは何を“伝統”としてとらえ、それをどのように新しい時代に活かそうとしてきたのか。ここでは、その試みの諸相をさぐってみたい。建築界における伝統意識の芽ばえを語る場合、伊東忠太という人物、あるいは伊東がまとめた日本初の建築史論である『法隆寺建築論』（1893）のあたりからはじめることが多い。確かに、その後の日本建築史学の発展と伝統意識の問題はつねに不即不離の係にあり、神社仏閣からはじまり、徐々にその対象を拡大していった経緯がある。ここでは書院、数寄屋、そして民家の3つの位相にわけて伝統意識を探ってみたい。

書院をめぐる諸相

「宮内省内匠寮」という設計集団があった。もともと京都の禁裏に出入りしていた工匠集団を数多く抱えた組織で、維新後は皇室および皇族関連の作事を一手に担っていた組織である。伝統的木造技術に優れた工匠たちが、当初とりくんだのは皇室関連の御殿や御所、そして離宮や御用邸といった木造和風建築であった。その一連の作事は、1875（明治8）年に青山御所内に建てられた〈皇子御殿〉にはじまり、〈熱海御用邸〉（1888）、〈東宮御所〉（1892）、〈宮ノ下御用邸〉（1894）、〈日光御用邸〉（1893）とつづき、1900年の〈小田原御用邸〉のころまでつづいている。これらの造営は、洋風技術や洋風生活の影響をうけて和洋折衷が試みられたものも一部あるが、基本的には伝統的な木造建築技術を継承するものであった¹⁾。

これら内匠寮における和風関連の作事は、一見、19世紀をもって終了したかにみえるが、その後も舞台を移し、皇族たちの和風大邸宅の建設に従事するようになるのである。明治初年においては、洋風化の先鋒になっていた皇族たちも、日清日露の戦役（1894～95、1904～05）を経たころになると、世界の一等国との自覚から、自国の伝統を新たに創出

することの必要性を意識しはじめていた。そこには1888年に完成した〈明治宮殿〉の影響もあり、正式の儀式的場に和洋折衷技法がとりいれられることが定着しつつあったのである。

〈皇居宮殿〉、一般的に〈明治宮殿〉とよばれる建物は、長年にわたる紆余曲折を繰り返し、当初は洋風宮殿の予定であったものが1888（明治21）年に和風木造の宮殿として建設された。とくに〈表宮殿〉とよばれるものは、和風の外観ながら、内部はイス・テーブルによる洋風儀礼に対応した和洋折衷技法にもとづくものであった。いわば書院造とバロックとをくみあわせた和風バロックの室内意匠である。建設にあたったのは皇居御造営事務局で、宮内省内匠寮と工部省からの技術者で構成されていた。京都禁裏出身の多い宮内省に対し、工部省は江戸幕府に所属していた技術者が多い。その結果、皇居御造営事務局は東西の伝統的木造建築技術を継承する集団となった。その中心にあった木子清敬などによって明治期を代表する新しい宮殿建築が誕生したのである²⁾。

〈明治宮殿〉の影響は、またたく間に広がり、皇族邸宅として〈梨本宮邸〉や〈竹田宮邸〉（ともに1910）、そして〈北白川宮邸〉（1912）といった和風御殿の建設があいつぐことになった。さらに、こうした傾向は、他の華族やブルジョワたちの邸宅建築にも影響を与え、〈田中光顯邸（現・蕉雨園）〉（1897）、〈三井今井町本邸〉（1907）、〈浅野総一郎邸〉（1909）、〈藤田綱島邸（現・太閤園）〉（1914）といった壮大な和風御殿が建設されたのである。

1900～20年代、明治30年代から大正期にかけて建設された和風大邸宅の特徴は、和風表現が誇張されている点にあり、唐破風の車寄せや大小の書院、能舞台、複数の茶室や茶席などを備えた壮大な規模をもつものが多く、室内意匠には、和風意匠で洋式儀礼に対応する和洋折衷技法が採用されている。さらに、そ

こには、複数の棟による構成と照りや起りを組み合わせた屋根形式の採用等による空間のヒエラルキー構成や座敷飾りによる格式表現など、和洋を混ぜあわせたさまざまな儀礼や儀式に対応する様々な装置が組み込まれていた。そこには「原理としての書院造」が継承されているのである³⁾。

都市中流層による都市文化は、「今日は帝劇、明日は三越」の広告に代表されるような生活洋風化の風潮として広がっていたが、皇室と皇族、そして華族やブルジョワたちたちの世界では、書院造を原型として創案された和風御殿のなかで、伝統芸能の継承や新たな伝統の創出が試みられていたのである。

数寄屋をめぐる諸相

「近代数寄者」といわれる一群がかつて存在したことがある。茶道を趣味とする政・財・官界の要人で、潤沢な資金力によって茶道具や古美術を収集し、独自の茶風を築いた人々である。公の立場としては日本の近代化と洋風化を先導する立場にあった、三井物産の益田孝（鈍翁）、横浜の生糸商・原富太郎（三溪）、電力王として知られる松永安左衛門（耳庵）といった人々は、私生活において茶の湯を中心としたサロンを形成し、明治中期から昭和戦前期にかけて、独自の和風文化を展開していたのである⁴⁾。

そこでは数寄者である施主と大工との間で作事が行われるのが常であったが、ときには両者の間に「数寄屋建築師」と称する人物が介在することもあった。近代建築教育をうけた建築家が茶室や数寄屋に関心を抱くようになるのは大分あとのことである。

その嚆矢は、京都大学建築学科の創設者である武田五一で、1897（明治30）年に東京帝大の卒業論文として「茶室の沿革」をまとめ、2年後には「茶室建築に就いて」と題する論考を『建築雑誌』に連載した。建築家による茶室建築の記念碑的論考である。その後しばらく、武

田の論考につづくものはなかったが、住宅改良、生活改善の掛け声が高まった1916（大正5）年には、内務省神社局にあって社寺建築の造営にかかわってきた和風建築家・大江新太郎によって「数寄屋と住宅」という論考が発表されている³¹。大江は、「数寄屋の建築なり又は数寄屋建築を一般住宅に応用する」ことを主張し、間取り、造作建具、寸法といった各項目に添って検証を試みている。数寄屋の手法を一般住宅に応用することによって、機能的でありながら日本人の趣味にあった日本の近代住宅を創設することが可能であると考えていたのである。武田の論文が茶室建築の概説にとどまっていたのと比較すると、茶室の近代性に着目した大江の論考は、1920年代からはじまる、茶室・数寄屋とモダンデザインとの共通性への建築家の着目や、両者を融合する試みを指摘した先駆的なものといえる。大江はその後も、日本の伝統との共振をつづけ、昭和戦前期における最大最良の和風大邸宅〈岩崎鳥居坂邸〉（1929）や飛騨の民家を移築して書院風及び数寄屋風に改築した〈長尾鎌倉別邸（扇湖山荘）〉（1934）といった大作を手がけることになる。

上記の大江の主張に対し、いちちはやく実践をもって応えたのは武田五一の後継者と目された藤井厚二である。藤井は科学的方法に基づく5つの自邸「実験住宅」によって、日本人の趣味に合った近代住宅の創出を試みたが、その集大成が〈聴竹居〉（1927）であった。

数寄屋をめぐる伝統との共振は、昭和期にはいるとさらに加速度を増す。近代数寄者たちとの広範な交友関係のなかで育まれた堀口捨己は、数寄屋の体系化とその実践の仕事を展開し、大きな足跡を残すことになる。堀口の代表作となった〈八勝館御幸の間〉は、中京を代表する近代数寄者と堀口との出会いから生まれたものである。

〈八勝館御幸の間〉における近代性とは何か。ひとつは、構成主義的にまとめ

られた天井の意匠。それと、地形の形状を活かした内外空間の演出。そして、床の間廻りの巧みな構成の3点に顕著に現れでる。小高い丘全体を敷地とする八勝館にあって、〈御幸の間〉は敷地の最も低い所に位置する。決して良好な敷地とはいえないが、そこを逆手にとって、ピロティによってもちあげられた座敷空間からは、庭の植えこみがあたかも自然のスクリーンのように眼前に立ちあがって見える。しかも、張り出した露台の存在は、自然との触れ合いを強調する装置となっているのである。

床の間廻りの演出とは、長大の床框をそのままに使うことを前提に、床の間がつくられたことによる。横に長い床の間への処置として、むかって左手には床と直角方向にやや大きめの付書院をつくり、右手の方では、正面をむいた地袋に対し直角方向に天袋を配している。いわば、長い天秤の両脇に袋状の空間をぶら下げてバランスをとっている。このバランスの妙が、この座敷空間にある種の緊張感を与えているのである。

〈八勝館御幸の間〉は堀口が、その建築活動の初期から試みてきた“伝統的手法による近代的空間の創出”という課題に対する優れた解答のひとつであった。

民家をめぐる諸相

建築界に、「数寄屋」を再生させるきっかけをつくったのが京都大学の武田五一とすれば、「民家」を甦らせた功労者は早稲田大学の佐藤功一であろう。佐藤は、柳田國男らとともに「白芽会」を創設し、民家研究、とくに農村住宅の研究に先鞭をつけた。単に郷愁や興味ではなく、佐藤の生涯にわたるテーマであった住宅研究の一環としての意識からであり、その民家研究は弟子筋にあたる今和次郎へと継承されることとなる。

建築家たちにとっての創作活動の源として民家が意識されはじめたのはいつごろからであろうか。大正昭和戦前期にかけての建築雑誌を調べてみると、堀口捨

己による〈紫烟荘〉（1926）の存在が浮かびあがってくる。この作品が発表されて以後、各種の建築雑誌に民家風の住宅作品の掲載が増えはじめていたのである。

〈紫烟荘〉は、海外渡航より帰国した堀口が、オランダ建築に惹かれてつくりあげた作品で、アムステルダム派（デ・ステイル派）を彷彿とさせる直線的構成とが組み合わされた外観意匠を特徴とし、内部においても構成主義と日本の茶室空間とが溶けこまれたような意匠をもっている。この作品以後、堀口は、数寄屋の体系化を図る研究活動を続ける一方、建物と庭との空間構成や構成の美学にもとづいて和洋の融合を試みた住宅作品をつくりつづけることになる。それは、近代建築家の眼差しで、伝統的建築の中に新しい価値を見出そうとするものであった。

オランダの民家に着想をえた作品が、「日本の民家」の美を建築家に気づかせることになったわけだが、さらに近代的視点から「日本の民家」の特性を見なおす作業がさまざまな建築家によって試みられ、その結果として、木造表現の幅をさらに広げることとなった。A.レーモンドによる丸太架構の木造モダニズムは、そのなかでもっとも大きな成果のひとつである。

木造モダニズムにおける空間性

来日したB.タウトが日本に残した唯一の現存作品が〈日向別邸〉である。建築家として決して恵まれた仕事に従事できたわけではないが、ヨーロッパを代表する近代建築家のひとりが日本の文化に触れることから生まれた〈日向別邸〉は、その高名な著作に劣らぬ価値をもつものといえよう。漁り火のイメージにより、天井より吊り下げられた電球、ボルドーワインを思わせる深紅の壁紙といった要素に圧倒され、青い目に映った日本趣味の「ゲテモノ」としてうけとられることが多いが、近代社会のなかでの伝統や和風の問題を考えるうえで、このうえない格

好の素材なのである。

《日向別邸》は、熱海の海をみおろす斜面地に建っている。母屋の前に海を眺める庭を作る計画から、その人工庭園の下を利用した遊戯室として造られたものである。細長い一室型の空間とならざるをえなかったことが、逆に、この内部空間に近代性を与えることとなった。母屋の玄関脇より階段で地下におりると、竹で構成されたホールに至る。もっとも手前の部屋はダンスやビリヤードのための空間、その奥には家具化された階段をもつ洋風の空間、さらにその奥には、一段高いところに書院をおいた和室がつづいている。これら3つの部屋は、タウトの言によると、手前から「ベーターベン、モーツァルト、そしてバッハ」の音楽に対応する質をもつ空間が展開され、それぞれの固有性を保ちながら巧みに分節され、くの字型の細長い一室空間として構成されているのである⁶⁾。

3室それぞれの開口部の意匠も秀逸で、引戸、折畳式のガラリ戸、それに障子と部戸の採用によって遠景の海と島、近くの木々に対応させている。各部屋ともにディテールに対する思い入れはすさまじく、古建築に対し造詣の深い建築家・吉田鉄郎の助言や援助があつてはじめて可能となったものである。3年間の日本滞在中にタウトがえた日本建築に対する知識の集大成が《日向別邸》であった。

来日中のタウトは、多くの友人建築家に誘われて見学や訪問に忙しい毎日を送っていたが、1933年5月9日、京都大学を訪問したあとに、藤井厚二の自邸〈聴竹居〉を訪ねている。

「山裾に三棟の家屋がたっている。その一つは母屋で、極めて優雅な日本建築である、屋敷にのほろいかにも気持ちのよい階段と風雅な庭、芝生のまわりに植えこまれた灌木、家はまるでそのなかへそっくりはめ込まれているかのような印象、眺望その他の条件についても実に行きとどいた心遣いがしてある。(中略)藤井邸を下って停車場に赴く道すがらえ

も言われる風趣、すがすがしい大気だ。藤井氏は建築家というよりもむしろ小工匠だ。(中略)藤井氏は明かに繊細な感覚を具えた人ではあるが、しかし建築家としてはひどく感覚が欠けていると思う」⁷⁾。

ヨーロッパ近代建築の巨匠と日本近代住宅の先駆者との出会いは、上記のようであった。タウトらしい繊細な感覚で〈聴竹居〉の風趣なたたずまいを賞賛してはいるが、藤井の建築家としての資質には手厳しい言葉を残している。かつて堀勇良は、このエピソードに触れ、「タウトが藤井厚二に《小工匠》をみるのは、〈聴竹居〉にみられる空間の非創出性と匠術性においてであった」⁸⁾と論じた。卓見である。空間の非創出性とは、意図された空間性が感じられないということであり、匠術性とは、小手先の巧みなデザインのみが眼につくという意味であろう。

茶室や数寄屋の手法が書院と結びつくことによって、〈桂離宮〉に代表される「数寄屋風書院」が生みだされたことから明らかなように、数寄屋はあくまで手法として存在するもので、それ自体、何ら空間的な原理(プリンシプル)をもたないことに特徴がある。タウトは、〈聴竹居〉を在来工法による和風住宅に数寄屋の手法を加味した程度のものとして受け取ったのである。一室の中におけるイスザとユカザの共存、といった革新性は認めながらも、居間と諸室との空間のつながりに曖昧性を見ていたのに違いない。和風を超えた「木造モダニズム」を達成するためには、何よりも空間性の創出こそが不可欠の課題であったことをタウトの残したエピソードは伝えている。

伝統とは存在するものではなく、発見するものである。過去の遺産に新しい価値を見出す創造的行為である。どこに見出すかは、その時代性と個人の資質に関わる問題であり、そこに和風表現の幅が生まれてくる。書院、数寄屋、民家という3つの対象を並べてみると、そこには、

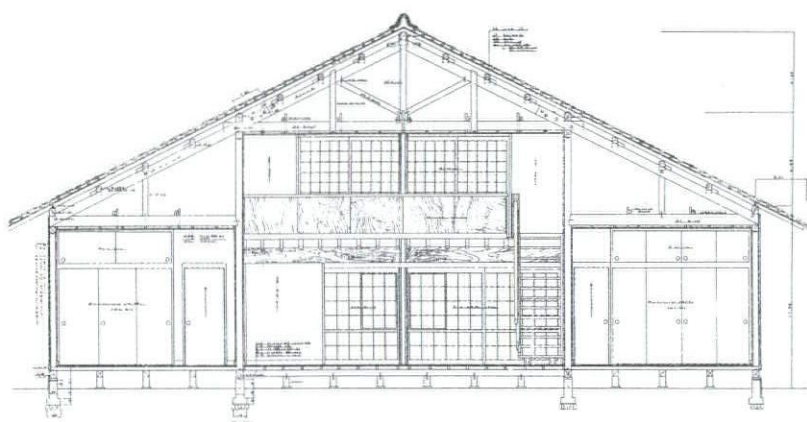
《原理としての書院》、《手法としての数寄屋》、《表現としての民家》という意識の諸相がかいまみえてくるのである。
(おおかわ・みつお)

- 1) 小野木重勝、『明治前期和風宮廷建築の技法に関する研究』、豊橋技術科学大学建築史研究室、1995年
- 2) 小野木重勝、『近代和風宮廷建築の技法に関する研究』、豊橋技術科学大学建築史研究室、1988年3月および『明治工業史 建築篇』、工学会編、1927年
- 3) 大川三雄、初田孝、藤谷陽悦『近代和風建築——伝統を超えた世界』、建築知識社、1992年
- 4) 熊倉功夫、『近代茶道史の研究』、日本放送出版協会、1980年
- 5) 大江新太郎、『数寄と建築』『住宅建築』、建築世界社、1916年
- 6) フルーノ・タウト、『熱海の家』『日本の建築』、育生社、1946年
- 7) フルーノ・タウト、『日本 タウトの日記 1933』、岩波書店、1975年
- 8) 近江 栄、堀 勇良、『日本の建築〔明治大正昭和〕10日本のモダニズム』、三省堂、1981年

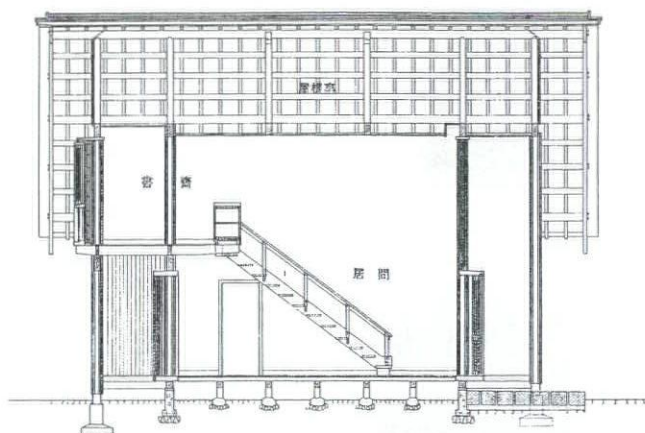
「切妻屋根」というロゴス

前川 自邸

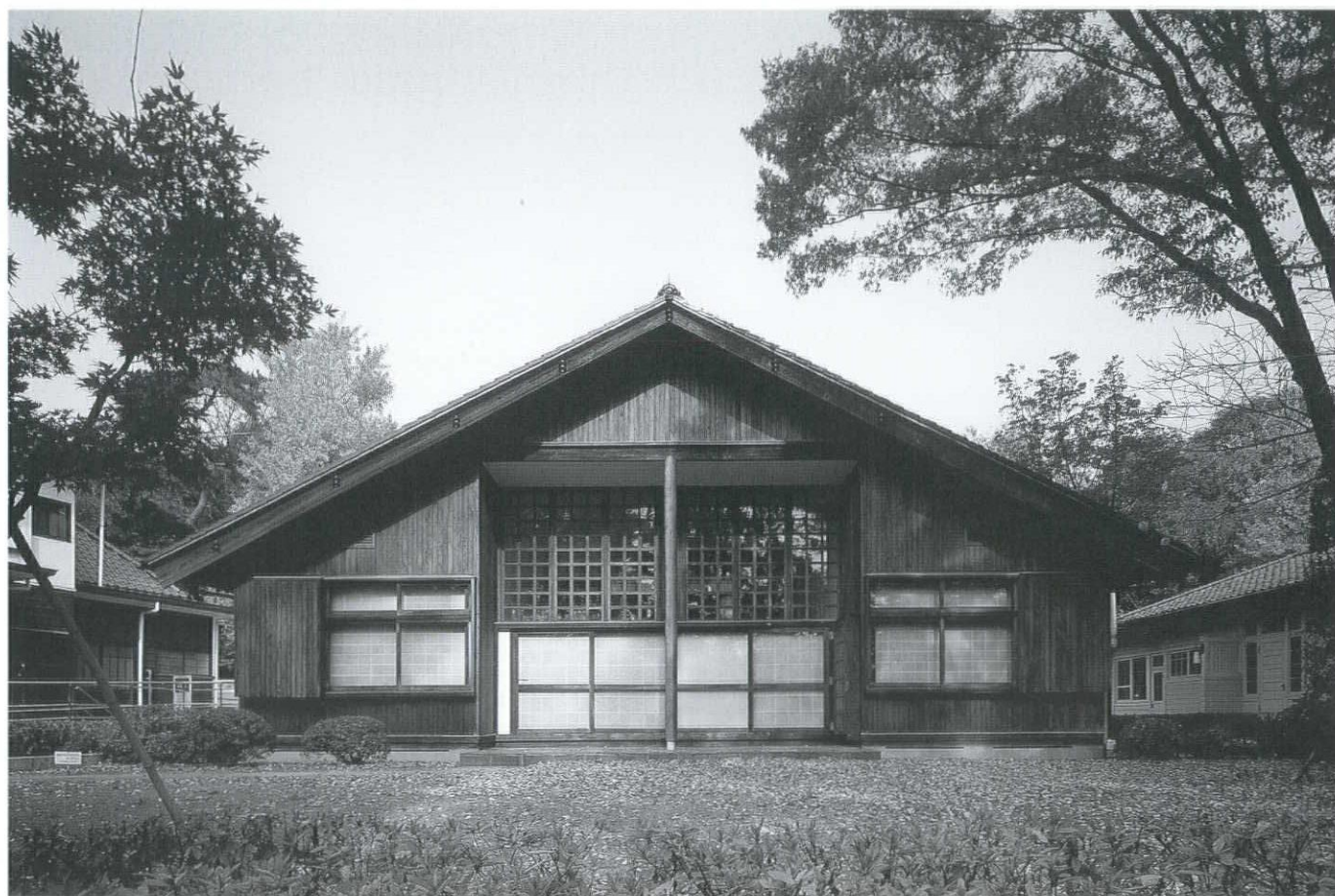
前川 國男
1942年



矩計図 S=1:150



断面図 S=1:150



庭側全景

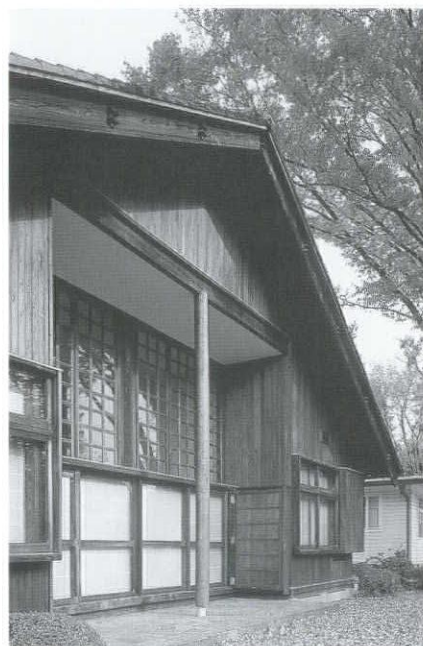




廊下より居間をみる



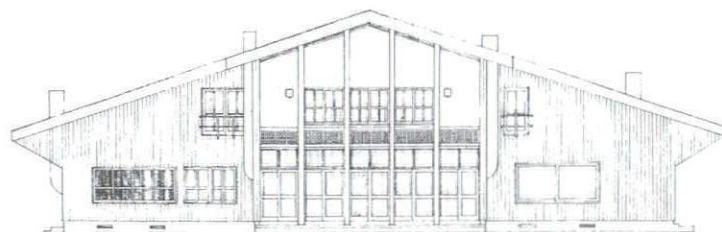
アプローチ側外部より居間をみる



庭側全景

秋の宮村役場

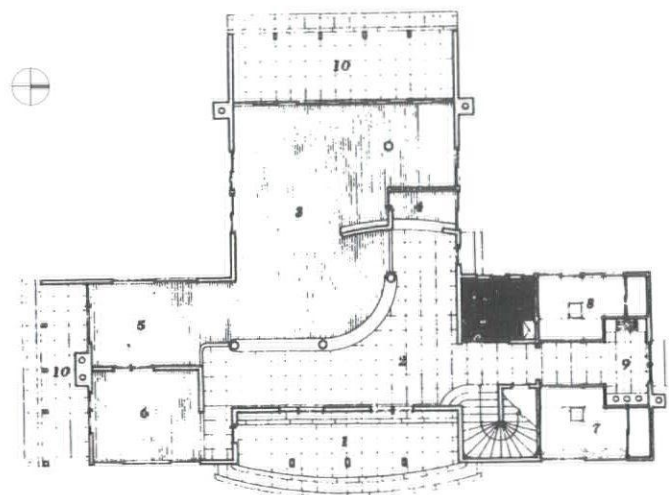
白井 屋一
1949年



西立面図 S=1:300



西側全景



1階平面図 S=1:300



東側全景

濱崎良実

形態言語の存在様式

陸屋根がモダニズムの建築の必須アイテムであったことは、いまさら確認することでもないだろう。またそれが、RC造、S造という構造方式を前提とし、そこから導き出された帰結＝形態言語であったことも、ここで改めていうまでもない。

日本では、たとえば大正初期にはじまるとされる民家への眼差しを含めた、気候風土という要請、戦時下の資材統制、またナショナリズムという精神風土など、いくつかの背景が考えられるのだが、勾配屋根、とくに「切妻屋根」という形態言語による木造モダニズムの多様な展開、すなわち存在様式がみられる。

元来、「切妻屋根」という形態言語の存在様式は、パルテノン神殿、伊勢神宮の名をあえて挙げるまでもなく、ロジック、グラマー、そしてレトリックの三本足によって支えられていた。しかし、その三本足は、近代日本において、実におもしろい接地の仕方をみせるのである。

戦前、そして戦後の大きな流れをふまえたうえで、日本の木造モダニズム、とくに「切妻屋根」という形態言語との関連で、即座に思い出される作品といえは、〈前川國男自邸〉(1942)であり、坂倉準三の〈飯箸邸〉(1941)だろう。前者の設計を担当した当時の前川事務所所員の、〈「飯箸邸」を参照した〉、という内容の証言を引くまでもなく、両者には共通点が多い¹⁾。

ここでは、とくに前者を例にとり、「切妻屋根」の形態言語の三本足を、まずはその接地状況を見てみたい。

前川國男自邸の三本足

日本人建築家の第一世代は西洋様式建築のヴォキャブラリーと作法を学んだ。伊東忠太や武田五一らの第二世代も、第一世代の西洋への盲従という態度を批判しながら、ヴォキャブラリーの検索に耽っていたという点では、第一世代と同様であった。つまり建築の空間への視座は未だ芽生えてはいなかった。そうした点で

いうと、〈前川自邸〉は、〈土浦亀城自邸〉(1935)とともに、記憶に留めるべき、戦後の展開の、いわば原点ともいえる存在であろう。

すなわち、ここでのロジックは、空間である。これは、床面積100m²という戦時体制下の面積制限、また資材統制の産物ともいえるのだが、そこにはル・コルビュジエのアトリエ仕込みの、空間という建築の内容＝ヴォリュームへの意識の現われが看取される。

プランは明快で、空間構成の意図も同様である。吹き抜けを中央に、両脇に個室などを配し、天井高の関係がそのままに、「切妻屋根」という形態言語に重なっている。換言すれば、ここでは「切妻屋根」が可能とするヴォリュームとの整合性＝一致というロジックがある。しかし、それは「切妻屋根」のグラマー違反によって、はじめて成立している。

「切妻屋根」のグラマーでは、「切妻屋根」の建築は、通常、妻入りで、平面長手方向を平とするのが原則だ。当然、部屋は平側に開口部を採るかたちで、リニアに配置されていくことになる。〈前川自邸〉は、そのグラマーを破っている。いわば近代の合理という名の掟破りで、これを建築的構想といってもよい²⁾。

それでは、〈前川自邸〉のレトリックとは何なのか。

伊勢神宮、また民家の合理的な解釈なのか、あるいはコルビュジエのもとに学んだ手法(ピロティ)の木造での実験なのか、はたまたアントニン・レーモンドの〈夏の家〉(1933)の空間のコペルニクス的展開……。答えは、そのすべてでもあり、またそれで〈前川自邸〉のすべてを語りつくしたことになるだろう。

ここでは、実際、さまざまなレトリックが仕掛けられている。あえて答えを出すことに意味があるようにも思えない。

しかしながらやはり、きわめて感覚的な物言いが許されるのならば、つぎのようについてみたい誘惑には駆られる。つ

まり、〈前川自邸〉の「切妻屋根」の形態言語はロジックによって強く支えられている、と。これは空間を志向する強力なロジックそのものなのであって、ほかの2本足、すなわちグラマー、レトリックは前川にとっては二義的な＝補助的なものに過ぎないのではないかと。すでに述べたように、グラマーは転倒され——たしかにこの転倒は、画期的で、逆にこれなしにはロジックが成り立たないのだが——、レトリックは多様にすぎて、何通りもの解釈を生み出してしまふ。

ともかく、〈前川自邸〉の形態言語は、ロジックにその重さの大部分を支えられ、グラマーは接地せずにロジックという足を補助し、そしてレトリックとはいえば、その先端がいくつにも枝別れして、地面に吸収されていっているかにみえる。それらの枝は、戦争という地面下で、根へとメタモルフォーゼし、戦後に再び地表へ出ている。そして、それぞれの先端には、美しくも魅力的な木造モダニズムの花を咲かせる茎となってもいる。清家清、増沢洵といった花の名前も見えてくる。もちろん、大地にしっかり接地された〈前川自邸〉のロジックという足の衝撃も、戦後の花へとたしかに響いた。

レトリック 説得術の「切妻屋根」

もうひとり、「切妻屋根」という形態言語の使い手(そういつても語弊はないだろう)で、気になる建築家がいる。白井晟一である。

結論から先に述べよう。前川とは対照的だ。白井の「切妻屋根」という形態言語の三本足は、まるで宙に浮いているかのような。それも見事なまでに、そして真空状態で。漂っているのではなく、微動だにせず、静止している。雑音は一切聞こえてこない。ロジック、グラマー、レトリックという三本足のうち、レトリックにかなり重心が傾いている。しかし、もっとも巧みに三本足が均衡を保っているかのように装い、立っているかに思われる。



飯箸邸、坂倉準三、1941年

たしかに場合によっては、というよりも逆に、そしてつねに、前川とはまったく異なる意味でグラマーは逸脱され、そしてロジックは破綻しているとさえいってよい。レトリックの強靱さがほかの2本の足の摩擦をゼロにまでもっていき、なお3本とも接地してバランスを崩さないでいる体をなさしている。

ロジック、またはグラマーと形態言語との直接的連関は、ほとんどの場合、まったく見えない。《秋の宮村役場》(1949)の平面をみるだけでも、それは明らかだろう。あくまでもレトリック。これぞ白井をレトリシアンと呼べる所以である。

白井にとっての形態言語は、レトリックにはかならず、繰り返すが、ロジック、グラマーは荷重を負っていない。逆にそれほど、レトリックが強いゆえに、外観はあくまでも、ロジックとグラマーが固守されているようにみえる。

白井の強力なレトリックには、多くの人々が惹きつけられてきた。白井の建築から感じる、えもいわれぬ力はこのレトリックの力であり、それは見てはならない魔力、相矛盾するすべてのものをすべて統制してしまう力でもある。これを説得力といってもよい。そのレトリック＝説得力こそが、そのまま有無をいわず形態言語そのものとなっている。

白井の「切妻屋根」のロゴスは、すべてを統合する、聖なる、そして危険な魔術＝説得術である。それは、ロゴスの原初的存在様式にもっとも近い。

はじめにロゴスありき／劇場の偶像

「切妻屋根」という形態言語は、バルテノン神殿、伊勢神宮と、そもそも始源的な、あるいは原初的なものである。そして穿ったもののいい方をすれば、いわゆる「劇場の偶像(F.ペーコン)」ともいえるかたちで、歴史に繰り返して登場してきた。

忘れていたことを思い出そう。

はじめにロゴスありき。

ロゴスは理念であり、象徴なのであ

て、つまりそこに空間はなかった。人間はその内部に入る、すなわち内部空間に入ることは許されなかった。「切妻屋根」という形態言語に包まれるのは叶わぬことで、それを外から眺めることのみが許されていた。

プリミティヴ・ハット。

人間が神聖なる領域を侵したことによって、ロゴスは解体しはじめた。つまり、ロゴスの存在様式——ロジック、グラマー、レトリック——のバランスが崩れ始めた、というわけである。

ともかく、人間が介入すること、すなわち空間という機能を持った気積を想定することは本来冒涇に近い行為ということなのか。実際、そうした行為自体とロゴス解体の阻止は相容れない関係にある。

日本の木造モダニズムにみる「切妻屋根」という形態言語は、現実には、さまざまな展開を見せたことは、はじめに述べた通りである。聖域をただ侵犯するのは、ただ「劇場の偶像」と化するほかない。「キッチン」、あるいは「紛い物」の謗りを逃れない。もちろんこれは「切妻屋根」という形態言語の存在様式にのみ有効な論理ではない。

歴史に残る「切妻屋根」の形態言語による作品には、そうした観点からすれば、あるいはその存在様式の三位一体の解体への意識が明確なかたちで存在すること、そして何らかのかたちで「劇場の偶像」化を回避したという共通点、があるのかもしれない。

合理／非合理の「切妻屋根」

前川は自邸で、聖域を(おそらく、その罪を意識しつつ)侵犯しながら、空間というロジックに重きをおいて「劇場の偶像」化を逃れている。つまり完全に、民家ではなく、コルビュジエでもなく、レーモンドでもなく、そして伊勢でもない、という意味において。もっとも前川の場合、時代とその背景が異なれば、まったく違った解答をみせたであろうし、またそもそも聖域を侵犯する行為自体を

辞退していた可能性は高いのだが。それは、戦後になって、前川が同様の試みをみせなかったことと辻褃が合う。

一方、白井はもっとも大胆であった。「切妻屋根」という形態言語をレトリックそのものへと転倒させ、完全に聖域を侵犯しながらも、それでいてなお、「キッチン」、「紛い物」、すなわち俗とならない術＝レトリックを操った。それは、陳腐な物言いだ、いわば名人芸なのであって、白井晟一という存在の一回性に帰着する。

いずれにせよ、〈前川自邸〉を合理の、そして白井の一連の木造切妻屋根の作品を非合理の形態言語と呼べるだろう。もちろん〈前川自邸〉の合理は、ロジック＝空間の合理であって、たとえば民家風でありながら架構を隠すあたりなどに、グラマー、レトリックの非合理さを見せはするが、許容範囲だ。前川には納得し、白井には説得される。

しかし、ともかくこの両者が、日本の木造モダニズムにおける「切妻屋根」という形態言語の両極にあるといえそう。前川か、白井か。すなわち納得か、説得か。究極的にはこれが「切妻屋根」のオルタナティブである。すでに紙面に余裕はないが、坂倉の〈飯箸邸〉についていえば、それは合理＝空間というロジックが「切妻屋根」というロゴスを超越した事例であったことだけを最後につけ加えておきたい。

木造モダニズムの、「切妻屋根」という形態言語の魅力(＝合理)と魔力(＝非合理)は、それぞれこの両者のうちにある。建築家はなお、この両者を常に意識せざるをえないだろう。そして、この両者の狭間を彷徨うほかない。(はまざき・よしみ)

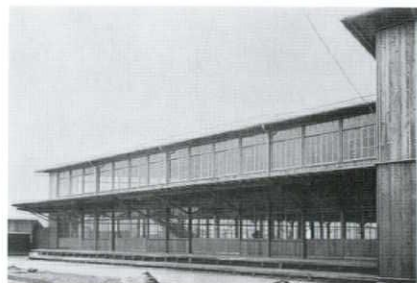
- 1) 『前川國男邸復元工事報告書』、1999年、東京都江戸東京博物館分館江戸東京たてもの園
- 2) 黒沢隆、「建築における構想I」、『近代・時代の中の住居』、1990年、リクルート出版

トピックス：

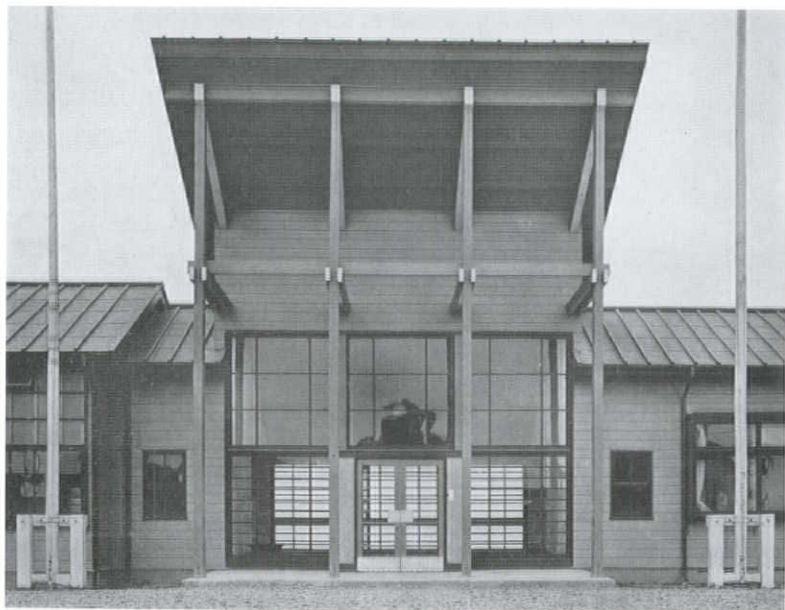
アノニマス
モダンデザインにおける匿名性原理の消長

窮乏日本が編み出したもうひとつの近代建築

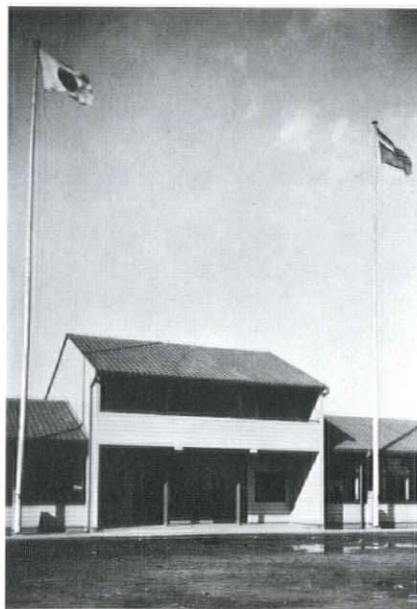
黒沢 隆



左上、右上：大阪中央郵便局梅田分室／逓信省（吉田鉄郎）／1935



秋田日満技術工養成所／前川國男／1938



九州日満鉱業技術員養成所／前川國男／1939

ゼロ戦だった時代

この初夏に風邪をこじらして寝込んだ。一日中ねむれるわけでもなく、書架からなにげなく手にして読みかえた本は、柳田邦男の『零式戦闘機』（文藝春秋、1977）だった。飛行機の話はとにかく元気がでるのである。何日かけて、結局、読み通してしまった。それで風邪をさらにこじらしたような気がする――。

ときに1931（昭和6）年。大恐慌下で列強各国は経済のブロック化をすすめるとともに、軍縮機運もすすんだ。

第一次大戦後のワシントン軍縮会議（1920～21）で定めた列強各国の海軍主力艦の建造中止期間の満了により、補助艦保有量も制限、英・米・日で10対10対7の比率が成立している（ロンドン軍縮会議）。ちなみに、英・米・日・仏・伊の主力艦の保有枠を5対5対3対1.67対1.67ときめていたのである。大恐慌から抜け出る方策を各国とも模索していたが、巨大な中国市場への関心はいやがうえでもたかまってもいた。

当時の日本経済にとって、対英米比10対7だの、5対3だのの軍艦の保有は容易なことではない。すでに国家予算の3割をこえた軍事費が歳出されているのである。強硬派にとっては、この劣勢を挽回するために、合理派にとっては、より有効な武装を実現するために、空軍力の確立は急務だった。当時の世界情勢をみても、空軍という戦力はまだ補助的であって、あたかも、複葉機から単葉機へ、軽くて加工性のよい木骨羽衣張り機から全金属製機への移行段階にあった。たとえば引込脚はまだ実験段階にあり、重いメカを積んで空力特性をあげるより、空力特性を犠牲にしても軽くつくったほうが実のあった時代でもあった。ようするに、十分な馬力に恵まれた航空機用の軽量エンジンを各国ともつくれなかった時代、まさに黎明期だった。

「第一次海軍軍備補充計画」は1931年3月の帝国議会で成立、36年までの6カ年に当時の4億2400万円をつぎ込んで、軍縮条約の制限内で海軍の補強を意図したものであって、その主眼は空軍力の確立だった。「航空立国」が叫ばれ、「航空自立」が問われたのである。

それまで外国人技術家を招聘しての開発や製造権を買っての国産化だったが、これで戦争となって勝てるはずもないことを、この年9月に勃発した満州事変を通じて日本は骨身にしみた。帝国海軍は

まず要求性能をきかせ、三菱、中島、川西などのメーカーに試作を競わせて量産化にもち込む方針をとったのである。

まず「七試計画」から始まった（昭和7年という意味）。しかし、この時点では川西の3座水上偵察機（フロートつき、「94式」）が採用となっただけで、各社とも要求性能に達せず、不発に終わった。

つづく「九試計画」では飛躍がある。三菱は96式陸上攻撃機（陸上飛行場から発着）、96式艦上戦闘機（空母から発着可能）、川西は97式大型飛行艇などの世界水準を抜く傑作機が生みだされた。この成果によって、海軍は外国の優秀機のサンプル購入をやめている。

あとのゼロ戦や二式大艇（4発飛行艇）などの大傑作機は、この「九試計画」の次世代機として、当時、この世にありえないような超高性能を求めた軍用機群だった。その要求のあまりの過酷さに、同期の一式陸攻は防弾装備を欠いた長距離爆撃機となって、やがて、ワンショット・ライターの異名をとることもなる。

柳田邦男は、ここに日本の用兵思想の稚拙さと国力の限界をみた。それは後進国が先進国に追いつくがろうとして、はからずも露呈させた無理にほかならない。

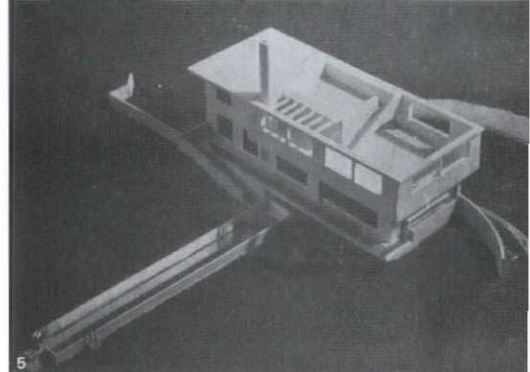
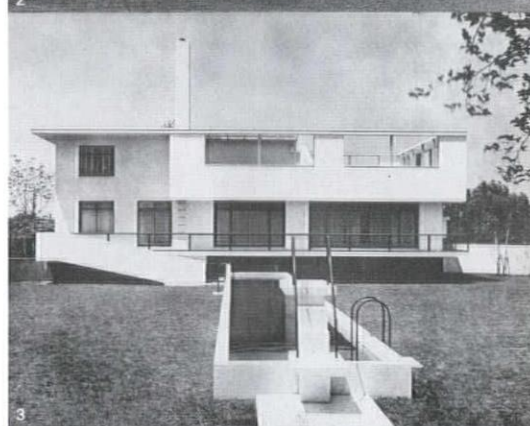
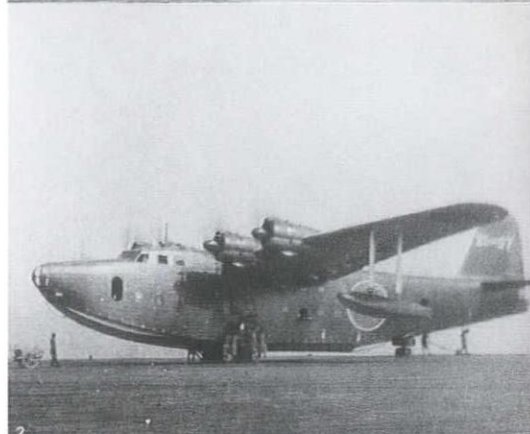
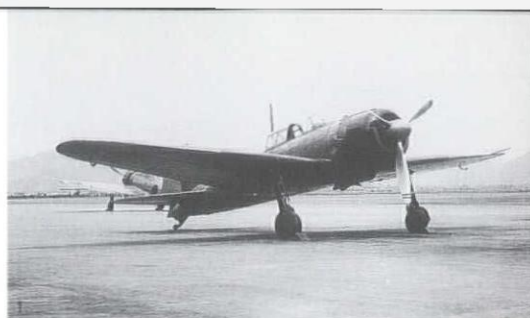
柳田は、このあと『零戦燃ゆ』飛翔編、熱闘編を重ねて、その後の日米自動車戦争の結末を占おうとするのだが、経済競争と技術競争の顛末の方は、アメリカを脱工業化に追いやり、そこから情報化戦争を逆にしかけられることになって、末は藪のなかであろう。

若狭邸の秘密

アールヌーボーをモダンデザインの第1期、アールデコを第2期とすれば、1930年代はまさにその第3期だった。

それは、架構の視覚化を前面に押したて、機能と形態との整合の仲介をこれに果たさせようとする一大転換期だったのである。とはいえ、ヨーロッパは1938年から大戦に突入する。この第3期は、結局、大戦をまたいで50年代いっぱいにかけて完結することになる。だから、それは大戦前から復興期までのデザイン風土ともなった。

20年代の最末期は〈バルセロナ博ドイッ館〉（L.ミース・ファン・デル・ローエ、1929）や〈ファン・ネレ煙草工場〉（J.A.ブリンクマン＋L.C.ファン・デル・フルフト、1930）の大傑作でかざられるが、30年代にはいると、この



1：ゼロ戦（零式艦上戦闘機）／1939
2：二式大型飛行艇／1937
3, 4, 5：若狭邸（RC十木造）／堀口捨己／1937

水準が毎年ならぶことになる。

1931 (昭和6) 年

サヴォア邸 (ル・コルビュジエ)、
ソヴィエト・パレス

(コンペ案、ル・コルビュジエ)、
ガラスの家 (P.シャロー)、

東京中央郵便局 (通信省/吉田鉄郎)

1932 (昭和7) 年

スイス学生会館 (ル・コルビュジエ)

1933 (昭和8) 年

パイミオのサナトリウム (A.アアルト)

1935 (昭和10) 年

マドリッド競馬場 (E.トロハ)

1936 (昭和11) 年

落水荘 (F.L.ライト)、

カサ・デル・ファッショ (G.テラーニ)

1937 (昭和12) 年

東京通信病院 (通信省/山田守)、

パリ万博日本館 (坂倉準三)

1938 (昭和13) 年

大島測候所 (堀口捨己)

1939 (昭和14) 年

ジョンソン・ワックス本社 (F.L.ライト)

1940 (昭和15) 年

森の斎場 (E.G.アスプルンド)

溜息がでる。すごいものだ。と同時に、日本の軍用機の性能が国際水準を抜こうとしているまさにそのとき、日本のモダンデザインもまた世界の水準に達し、これをリードしはじめたのである。

そのような意味では、堀口捨己の〈若狭邸〉は、ゼロ戦にほかならない。戸建てのモダンハウスという種類のなかで、その水準はあきらかに世界をリードしている。鉄筋コンクリートの構造体とデザインとの関連、透明ガラスとガラスブロックとのサッシワーク。ランプのある屋上の構成。飛込台のある1レーンのおしゃれなプール。敷地の高低差を利用して正南面させた配置に看とれる計画水準。いずれも国産の技術と計画原理¹⁾であって、それは完全にグローバルな水準であると同時に、それを抜こうとしていた。

しかし、この家は全部がRC造ではない。3階は木造なのである。工事の準備は37年から始まったが、同年10月20日には「鉄鋼工作物築造許可規則」(商工省令第24号)が施行され、鉄骨や鉄筋で建てられる建物は、ごくわずかとなった。総動員臨戦体制のもと、限られた資材はあげて戦時動員されることになったのである。竣工は39年。かろうじて間にあった普請だった。ゼロ戦はいくまでもなく全金属製であり、その抜きんできた

高性能は軽量化のかぎりをつくした設計に担保されている。これを達成した技術は、超超ジュラルミンとその鋳造によって可能になった翼梁の強度だったが、そのよって立つ日本の資源と工業水準とは、実は、このようなものでもあった。やがて、お寺の鐘までが供出させられることになるのである。

片流れ屋根という建築術

「美の祭典」をもって知られるベルリンオリンピック(1936)の後継開催地は、東京(1940)ときまっていた。

その後JOCとなる五輪運営組織の、政治や行政から独立した運営が求められて、〈岸記念体育館〉の新築となる(1940)。東京・お茶の水の現・日立本社屋の場所が敷地、東京空襲にも焼け残って、私も大学院時代まで毎日のように前を通っていた。組織は64年の東京オリンピックを機に原宿の〈代々木体育館〉(国立屋内総合競技場)のとなり引越しているから、当時は空き家だったようだ。前川國男事務所の設計、丹下健三の処女担当で広く知られている。

いうまでもなく木造、本館が2階建てで、あとは平屋の、いまから思えば贅沢なランドユーズだったが、見るからに老朽していた。青味がかった灰色のペイントを全身にまとった姿は独特のものである。明らかな作意が看とれるのである。

当時、鉄材の規制は屋根のトタン(亜鉛鉄板)にまで及んでいた。屋根はセメント瓦で葺かざるをえないから4寸勾配²⁾、木材のほか使えるものは並板のガラスだけだった。厚さ1.9mm、3尺×2尺ときまっている。これを無駄のないように割りつけて開口部をつくるしかないのである。オリンピックの事務局となる施設でさえ、その例外ではなかった。

たったこれだけを材料にしていかに建てるか。それで近代建築原理を実現し、いかにディベロプメントするか、それが建築家の腕のみせどころだ。たとえば切妻屋根をかけて妻側にパラベットをたてたりして一般の商店建築は存在している。だが、こんなテンブラはアウトだ。だから、片流れ屋根を多用することになる。たまたま、コルビュジエが30年代に入ってバタフライ屋根を創案し、左右で大小がある屋根を架けて谷樋をガーゴイル放流するという建築術を、〈エラズリス邸〉(計画、1930)、〈マテの家〉(1935)

などに見せている。セメント瓦の4寸勾配だと、しかし、どうにもならない。切妻屋根をまんなかに架けて、その両妻側に片流れの屋根をつけるという方法を丹下は考えついた。しかし、これはずいぶんインフォーマルな建築術であって、オリンピック事務局に向くものではない。中庭を囲んで3方向に片流れ屋根をかけ、残りの一方向を切妻で結ぶ、などという方法も考えだして、これを克服している。あそこ、建築家はずいぶん面白いゲームをしていたんだな、窮乏もまた楽しからずや、などと思えてくる。

いずれにしても、片流れ屋根の高い方の平が外を向くのだが、窓の上にあらわれる額の巨大さは布袋様³⁾のようであって、これをなんとかしなければならぬという課題は常についてまわる。〈岸記念体育館〉のものの言いたげな正面は、この課題に丹下がいかに腐心したかを示しているのである。最上部にガリを切って換気口とし、柱をわざわざ丸太の独立柱にして、その腰に生子壁様のダイヤゴナルな格子を組んでいる。明らかに坂倉準三の〈パリ万博日本館〉(1936)からの引用だ。こうした工夫の結果、布袋様は作意をまもって常人に近づいたのである。

ここに、「日本的」というテーマと、構造表現という別のテーマが浮上する。

日本的表現という課題は、講堂にはわざわざ縁側をつけて太鼓側の障子で区切っていたりもしていろいろだが、窮乏時代の木造公共建築のおもしろさは、日本的表現をわざわざふっ切っているところにある。おそらく、木造を追求してゆけば、いつの間にか和風に戻ってしまうところがあるからに違いない。戦時窮乏体制のなかで、あえて合理に徹し、和風をふり切ったところに、帝冠様式の対局のような清々しさがあることは明白だ。技術者は、こういうことを通して体制批判に肩入れしていたようにも思える。そこがまた、戦前、戦中、戦後の窮乏時代に一貫して流れる底流でもあったのだろう。そのような意味では、丹下健三による〈岸記念体育館〉は、建物の性格にも基因するのだろうが、相当に特異とせざるをえない。

申し添えるが、1940年の東京オリンピックは結局は返上となる。64年の本番では小さすぎるうえに老朽化がすすみ、旧〈岸記念体育館〉はおそらく歯牙にもかけられなかったのではなかろうか――。

古典主義 vs 浪漫主義

日本の行政組織や官僚機関の全般を通じて、なぜ通信省系だけが最強の営繕部門を育み、徹頭徹尾、戦後にいたるまで自前の設計を押し通すことができたのか、私には謎だ。宮内省（戦後は「庁」）でさえ、警察・司法系でさえ、国鉄でさえなしえなかったことだ。

通信省は、戦後、郵政省と電電公社とに分かれるが、いまだに伝統は継承されている。営繕部門に独立性のある権限を渡し、なかでも設計部門を重んじ、日本有数の有能なアーキテクトを擁してきた長い歴史があるのだ。これは、建築学科をもつ大学にさえもなしえないことだった。早稲田はその例外だが、同様な例外が通信系にありえたと思うしかない。とくに戦前という時期にあって、官民を問わず、日本最強の設計チームはここにあったのである⁶⁾。

当時の通信省計理局営繕課の設計係長だった吉田鉄郎にどれだけの政治力があつたのか知らない。知られている人柄から推察すれば、とにかく、そういうタイプではない。営繕課長に推されながら「私は設計がやりたくてここにきたのだから、ハンコを押すのを仕事にしたい。ふさわしいのが部下にいるから」と山田守を推した。山田は吉田の1年後輩だったのである。その上で、通信省の顔も顔たる〈東京中央郵便局〉(1931)と〈大阪中央郵便局〉(1939)を自分で手がけている。それにて先だって、山田に〈東京中央電信局〉(1925)をさせ、〈東京通信病院〉(1937)という戦前日本のモダンデザインの到達点のひとつもつくらせた。のみならず、タテ長隷書体をつめて横書きの表示をするという全郵便局共通のコーポレート・アイデンティティをつくったのも吉田だし、組織は、これを今日まで守りぬいた。いずれにしろ、単なるお役人集団には、とてもできることではない。

吉田鉄郎は、その世代からしてドイツ好みであり（当時、重工業タクト生産段階の先端にドイツはいた。その意味で英国はすでに斜陽だ）、しかし建築家ではA.ベレに私淑するところがあった。産業革命に出遅れたフランスは使用鉄鋼量の節約のために鉄筋コンクリート（RC）を基幹素材とせざるをえなかったのだが、もともと土木用素材だったRCを剛接軸組（ラーメン構造）として建築に適応し、その与型者（form giver）となつた

のがベレだ。壁構造の素材としていかにも適性がありそうにみえるだけに、これはいかにも⁷⁾ 桐眼だった。

代表作〈ノートル・ダム・デュ・ランシー教会〉(1923)を見るまでもなく、ベレの好みは明かにゴシックにある。ビル型の業務用建物にすぎない〈ボンテュ街のガレージ〉(1905)でさえ、巨大な薔薇窓がつくのであって、この好みは徹底したものといえる。しかし、そこに古典主義を読みとったのが吉田ではないか――。

こういうものの言い方はいかににも乱暴だ。ゴシックとはロマンティズムの代表であって、その対局にあるはずのクラシズムだから、白から黒を読みとったと、私は言ったことになる。しかしである。軸組構造を採求するなかで「列柱」という規範を離れて考えうる西欧人がどこにしよう。木造ゴシックであるハーフティンバー木造でさえ、木軸小舞を外してレンガを積んで貼張り直したのが、近世西欧人だった。その正面に石を貼って、都市不燃化をさえ達成しようとした。これが西ヨーロッパの実相だった⁸⁾。

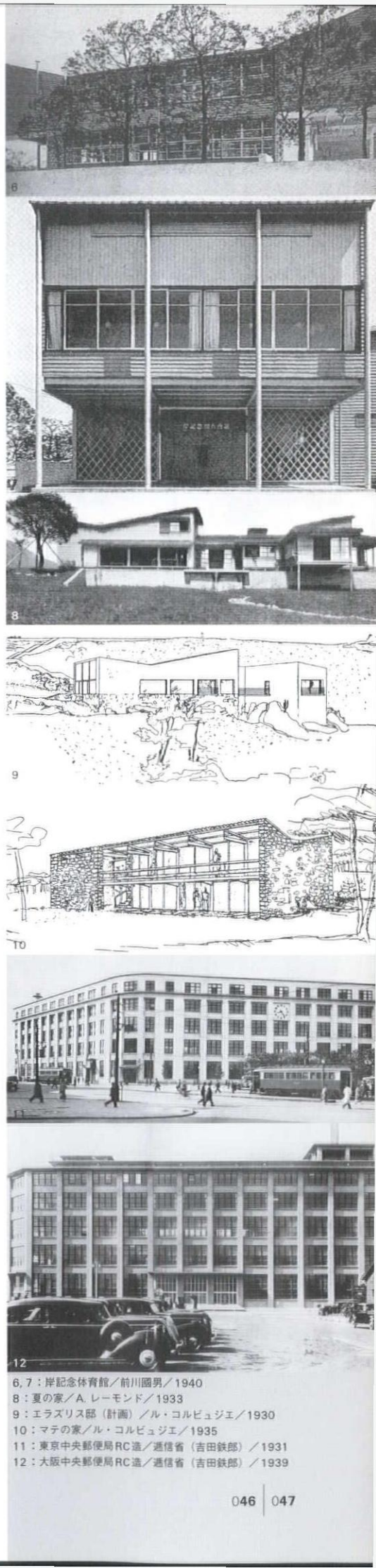
彼らの規範が組積造にしかないとすれば、軸組構造は結局は古典古代（クラシズム）の列柱に類例を求めるしかあるまい。吉田がベレのゴシック好みの彼方にクラシズムを読んだとしても不思議はない。まして、ドイツ近世の古典主義傾斜は何人も知るとおりであって、30年代になってナチズムが優勢となってもそのナショナリズム⁹⁾は、何と古典主義に向けられたという複雑な経過も辿っているのである。

構造表現と芯々制

ことに平面図表記にあって、日本は伝統的に芯々制をとってきたが、これは木造軸組構造にとつての必然にほかならない。

他方で、組積造の文化にあっては、図面表記は内法制となる。たとえば、芯々制では八帖間という呼称が成り立つが、内法制では何フィート何インチ×何フィート何インチの部屋という呼称にならざるをえない。組積造ではレンガ1枚積み（21cm）が最小の壁厚であって、階を重ねるごとに壁厚は巨大になっていくからである。上層階でたとえ8帖大でも、下層階になると4帖半大になったりもする。

古典古代の神殿建築にどんなカノン（寸法体系）が使われたか、直接文献が残っているわけではない。ヴィトルヴィ



6, 7: 岸記念体育館/前川國男/1940

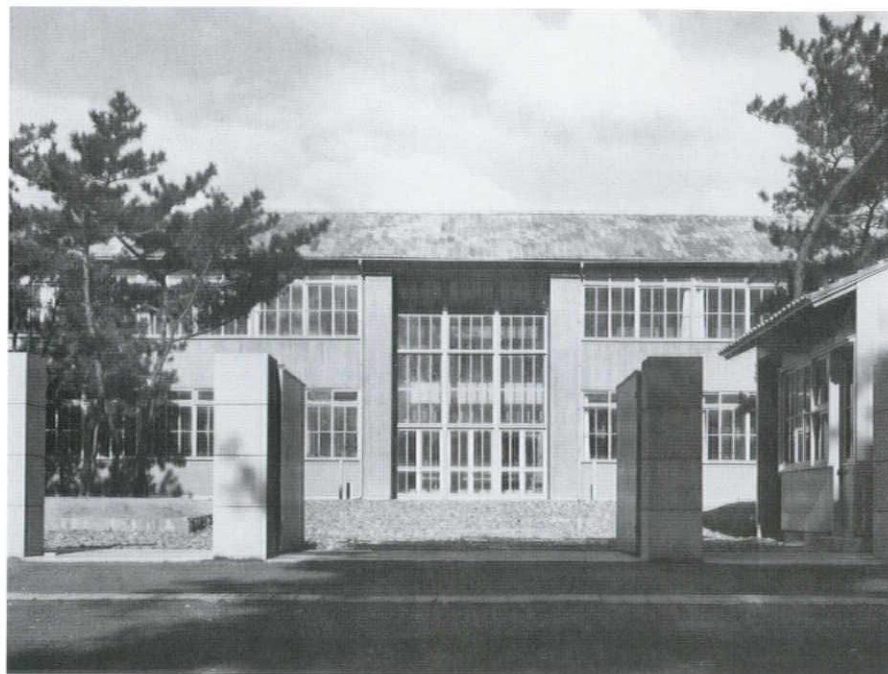
8: 夏の家/A. レーモンド/1933

9: エラズリス邸 (計画)/ル・コルビュジェ/1930

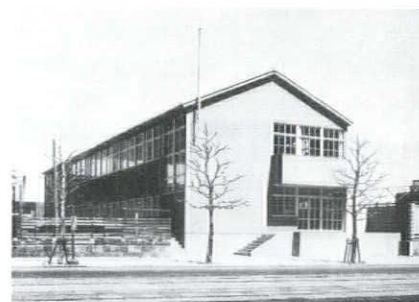
10: マデの家/ル・コルビュジェ/1935

11: 東京中央郵便局RC造/通信省 (吉田鉄郎)/1931

12: 大阪中央郵便局RC造/通信省 (吉田鉄郎)/1939



高等海員養成所／逓信省（吉田鉄郎）／1943



東京鉄道郵便局／逓信省（吉田鉄郎）／1940



灯台寮男子部／逓信省（吉田鉄郎）／1943



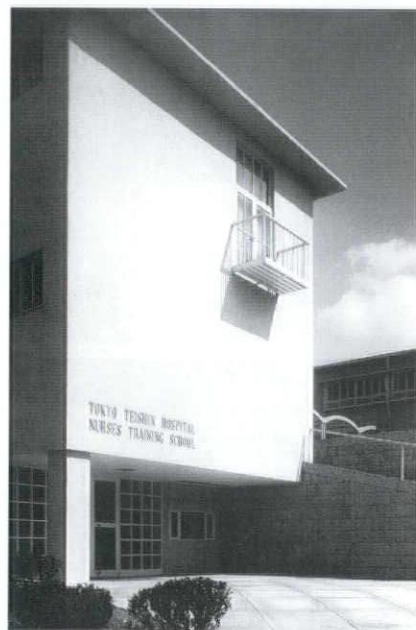
廿日市郵便局／郵政省／1950



其作郵便局／郵政省／1950



仙台荒町郵便局／郵政省／1951



東京逓信病院高等看護学院／郵政省（小坂秀雄）／1951



東京逓信病院静心園／郵政省／1954



中央郵政研修所／郵政省／1957

ウスやアルベルティは実測などによって、その秘密を明かそうとした。列柱のカノン研究では、やがて柱の太さを単位（ピット）として比例が論じられるようになるのが、いずれも内法寸法制を無言の前提として論じ継がれた。ギリシャ神殿は見るから木造軸組構造を組積造に移したものであって、実はもともとは芯々制寸法体系だったのかも知れない。

近代建築とは、技術的にみたととき組積造から軸組構造への転換なのであって（実はこれをトロッケンバウと呼んだ）、寸法表記も内法制から芯々制への転換を不可欠としよう。図面を内法制でかくか芯々制でかくか、これは設計内容にも微妙な差異をもたらす。つまり、架構が建物に秩序を与えているという意識を、設計者はもたざるをえなくなるからである。ルネサンス以後の近世建築の主流は一言でいえば、古典主義への傾斜なのであって、それは柱を西欧人に教えたことでもあった。この下敷きのうえに、おそらく、組積造から軸組構造への大転換がなされたのである。

吉田鉄郎にかえろう。

吉田はドイツもベレもともに好きだった。そしてベレに古典主義を読みとったとしても矛盾も不思議もない。〈東京中央郵便局〉の設計の主題に柱の建築を選び、そこに古典主義を重ね合わせたのである⁶⁾。

柱の建築とは構造体の露出の美学という意味にはかならない。梁までもが内外にわたって見えてくる。しかし、この時代、剛接軸組構造の実は梁のハンチによる柱への剛接に求められていた。これでは話にならない。なにしろ地震国日本あって、佐野利器にはじまる耐震理論は世界に先駆けてのものであった。鉄壁だ。吉田は、これを突き崩して部分的にしる、ユニフォーム・ラーメンを実現しているのである。このようにして、柱の外表面と梁の外表面とを合わせ、柱の芯に壁をたて、これにサッシを取りつけるといって、きわめてコンセプト的なデザインをする。芯々制寸法体系と構造体の露出とはまさに手を携えているのである。

〈東京中央郵便局〉につづく〈大阪中央郵便局〉では、ついに柱とサッシとの間の小壁はなくなり、サッシは直接柱型に取りつけられ⁷⁾、ユニフォーム・ラーメンはほぼ全面的に採用されるのである。川添登はかつて、戦後の丹下健三の活躍とその世界的な評価は戦前の吉田鉄郎に

よって準備されたと説いたが、ときに1939年、日米開戦はすぐそこまで迫っていた。ちなみに、これはRC造庁舎の最後を飾るものだったのである。

窮乏の時代

臨戦体制を前に、通信省も木造庁舎（各地の郵便局など）を余儀なくされるのが35年ごろだという。こうした趨勢下、吉田鉄郎設計係長もまた、そのお手本をつくってみせざるをえない。出来をみると、それどころか喜々としてつくったようにさみえる。それが〈大阪中央郵便局梅田分室仮局舎〉（1935）だ。

列車のように長い長い建物だ。総2階で短辺を妻にして切妻屋根がかけられ、この方向で1階より2階が大きい。長手方向は全幅ガラス窓、柱から柱までの引き違い窓だ。並板ガラスを縦方向に使って、このプロポーションは下見板目板貼りの腰とつりあって絶妙、全体が渋塗りでまとめられている。2階の窓は軒で、1階の窓は2階の張り出しで守られているのである。妻側は目板張りの壁のうえに屋根の妻ケラバが延びている。趣に味があるのである。日本と近代、建物のインフォーマルさと公共性（フォーマル）、デザインの匿名性と恣意などが微妙に釣り合っただけで一体となり、みる者に高揚感を与えずにはおかない。もしかすると吉田の最高傑作とさえいえる。当然、これを知って丹下健三は〈岸記念体育館〉に挑んだのだろうが、ふたつは異質なもののだ。

吉田は翌年、〈通信省大手町分室〉をつくり、部下の小坂秀雄も〈電気試験所第1部〉（1939）などなどをつくって、木造造営は〈高等海員養成所〉そして〈灯台寮男子部・女子部〉にゆきつく（ともに吉田、1943）。この過程で、下見板は目板張りからタテ羽目にかわり、渋塗りからグレイのペイントにかわり、ストレートに立ち上がる総2階建てになった。ディテールの工夫が進んで、風雨が吹きつけたときの漏水や隙間風の対策ができたのである。その一方で、妻側のケラバの延びがなくなり、破風板もなく三角台の家形の妻がすっきり立ち上がるようになった。マッサが明確に立ち現れてきたのである。

セメント瓦と並板ガラスと木材だけをつかって、しかし、明瞭なモダニズムが追われ、恣意の領域が拡大するとともに、公共建築としてのフォーマルさの追

求が重ねられたのである。

〈高等海員養成所〉では、それがドイツ的な古典主義をいかにも彷彿させる。まさかRC造ではここまでできなかったのではない。逆にいえば木造だからここまでせざるをえなかったのでもあろう。その恣意性のゆえに、〈岸記念体育館〉と〈高等海員養成所〉には類似がある。

これは、この時代に青春を迎えた人々、たとえば予科練（海軍飛行予科練習生）にあこがれ、共同体への献身と自己犠牲とを担保としてしかモダニズム先端につながりえなかった「時代」を、浮き彫りにする。それが、この時期における日本の「近代」の深度なのかもしれないし、中進国における「近代」の発展段階と読みかえた方が正確なのかも知れない。簡単に「ナチズム」とか「国粹主義」とか、言ってはならないのではない。

しかし〈灯台寮〉ではうってかわる。

そもそも、この建物は全国各地に点在する灯台の、灯台守の子弟の共同疎開施設のような性格をもつ。場所がら戦時に敵軍から狙われやすく、かつ守りにくい。でもなくてはならない。子弟だけでも集めて安全圏におき、学業に専念させようとしているのであって、つまり、ドメスティック（居住的）施設だからだろう、フォーマルさが消されている。これがいかに木造に似合っている。西欧や日本などの降水量に恵まれ森林を育みやすい自然環境がもたらす地域が生む文化になじむのである。

「文化」とは多数の人々が長い時間のなかで育んだ継承、というような意味であって、匿名性原理そのものにほかならない。それに、近代が塗り重ねられている。この、なじみの感覚は他にかえ難いのである。それでいて十分に進歩的であり、かつ開明的だ。それがまた、新たななじみをよぶ。

リリシズム 抒情精神の住宅

生田勉と立原道造は、一高時代からの友人で1934年東大入学組の同級生だった。文学青年同士仲良くなり、農学部にいた生田を建築学科に転科させたのは立原だったという。建築学科では立原の下級生になった生田だが、ふたりの間の学年に、丹下健三、浜口隆一、大江宏というトリオがいた。

卒業後、立原は石本設計事務所に入る。だが結核のために間もなく休職し、2年後に病死している。あまりに短い生

涯だったが、卒業設計（浅間山麓に位する芸術家コロニーの建築群）、卒業論「方法論」、そして数十枚の図面やスケッチとエッセイが残された。立原は堀辰雄、室生犀星など軽井沢を愛した文学者と深く親交を結んで詩人として知られた人だ。卒業設計はいかにも抒情詩人たちに捧げられたオマージュであった。

立原が早世したその年1939年に、生田は通信省管轄に身をおく。仕事場でも本ばかり読んでいて設計スタッフとして有能とはいいいようもなかったと自分で言っていたが、木造庁舎の設計にあたふたとする環境の中で建築家として自己形成を始めたことも確かだった。たとえば1階に便所があるときには天井にターフェルトを敷いていたとか、風呂場の天井には勾配をとり、水下に内樋をつけたとかの、通信の設計基準を生田から直接聞いたことさえあった。

このふたりをつなぐのは文学だけだったのではなかった。立原が残した（風信子ハウス）などの抒情詩人然としたスケッチは、結局、生田の戦後の木造住宅作品群の中で蘇ったのではないか、こう説いたのは津村泰範だった（『昭和伏流建築史』[j] 1996年11月号）。

この好論文が世に出てから、津村と会う機会があった。媒介項がある、それは通信木造庁舎ではないかと私見を提起した。津村は、立原の唯一の実作だったという（秋元邸）（横浜、1938）のスケッチを捜し出し、これを生田の40歳をすぎた処女作（栗の木のある家）（1956）と重ねあわせた。残念ながらスケッチの立面と平面とが合わないのだが、充分に興味深い発見だった。

立原の作風を詩情あふれるとでもいうとすれば、それは小手先細工にとんだものだ。たとえば出窓や霜除（窓や出口の直上についた小庇）が多用され、内部も造りつけ家具にとみ、外壁を切り返して羽目の張り方をかえたりしている。たしかに片流れ屋根が多用され、コルビュジェのあの時代そのものだが、それにもまして、当時の「文化生活」観や、その具体化である「文化住宅」の香りにあふれているのである。卒業設計は辰野賞に輝いたというが、中心施設たる美術館では、大きな片流れの主屋に連柱のある低層部がまといついているのだから、建築語彙のロジカルな咀嚼におおいに欠けている。むしろ、当時の「青白きインテリア」たちの、「文化住宅」観をそのまま

残したものと考えてよいのではないか。国立や玉川学園や鎌倉山など、当時の電鉄開発住宅地に、もしかすれば今でも残っているような内容だろう。おそらく、当時の日本の経済段階を如実に反映したものなのでもあって、たとえば汲み取り便所のままで、ミニマムスケールのワンルームは成立しえないのである。キッチンについても同様のことがいえる。ステンレスという素材に市井の財布が届かなければ、DKさえ成立しがたい。

戦後、生田勉がしたことは、そのうえでのことだったが、図学の教師としての意図は、正方形だの三角形だの六角形の半分だの、正12面体だのの幾何学形態に、人を住まわせるという関心もあった。したがって小細工を嫌っている。その意味では通信の木造時代の継承も色濃い。（亀甲の家）（1958）では3帖ほどの吹き抜けを仕掛けているが、この大きさではほんとに「studio type」になるのかの実験だったと後に語っている。それで効果ありと分かって（牟礼の家）（1961）に至ったのだと――。

民主主義の木造建築

敗戦の1945年8月までに、空襲などで300万戸を焼失させた日本だったが、復員や引揚げ者などの社会増を含めれば420万戸の住宅不足に陥った。残ったストックの約半分に達する住宅量を、早急に手当てする必要にせまられたのである。のみならず、学校や庁舎などの公共建築の焼失も激しく、基幹産業がまだ立ち直っていないのだから、結局は木造に頼ることになる。

戦前、戦中の総動員体制から、まず鉄鋼規制だけは外れたから、50年ごろからトタンの使用が容易になり、市場にコンクリートブロックも登場した。まずは戦後の新しい風だ。以前の4寸勾配からいっきに2寸勾配も1寸5分勾配も可能になる。

通信省は郵政省と電気通信省に分かれ、電気通信省はさらに電電公社になる。管轄部門も二分にされるが、「通信建築」の伝統は忘れなかった。『郵政省の建築——戦後の木造庁舎』（郵政省建築研究センター、1975）という作品集が残されている。局舎の建築は47年から始まっているのだが、このころはいかにも生硬だった。新しい風が吹き出すのが49年ごろからであろうか。妻は三角形のベディメントになり、平側からつづいた軒

天井が貼られ、その下に大型のガラス貼の開口部がとられたり、2階建てでは、妻下にロングウィンドウ（リボン窓）がとられたりする。タテ長のドイツのプローションから離れて、明るい局舎、民主主義の建築に変身してゆくのである。

当時、アメリカに移ったM.プロイヤーの自邸が話題をよぶ（コネチカット州、1947）。水平に長くのびた立面は一面にタテ羽目に覆われ、オイルステインで生地を見せながら色を合わせている。これが木造の新しいファッションになった。オイルステインそのものが戦後の素材であって、これさえが新しい。

一方、民間の建築では前川事務所の仕事が目立った。〈岸記念体育館〉を彷彿とさせる〈紀伊国屋書店〉が新宿に復興し（1947）、〈慶應義塾大学病院〉（1948）が信濃町に建ちあがった。エレベーターのかわりにランプで1階と2階をつないだ大木造建築だったが、前川國男はなぜかペンキ塗りだ。他方、今泉善一、西川足堯、高田秀三ら当時の人気作家たちは、好んでオイルステインを使い、片流れやバタフライ屋根をかけて、陽気で開放的なアメリカニズムをあおった。

私が中学に進級したのは52年のことだった。その鎌倉市立御成中学校は、御成小学校の充分すぎる校庭の一部をさき、校舎2棟、職員室棟、給食棟からなり、新築されたばかりだった。薄緑色にペイントされたタテ羽目が全身を覆い、妻側に、1階を後退させてガラス貼りにした正面玄関がある。これは「郵政建築」がそのまま校舎となった姿だ。

それが戦後第1期の日本なのであって、民主化と合理化と工業化とは、まさに日本の復興と完全に同期し、それが木造の造営に求められていたのである。

ちなみに、郵政省の木造局舎造営は58年までつづき、全国津々浦々に開明局舎を普及させた。郵便にしる電話にしる放送にしる、日本は公営をもって臨んでいる。それは「ユニヴァーサル・サービス」という基本的理念の実現にはかならない。『経済白書』を通じて「もはや戦後ではない」と政府が宣言したのは、この年だ。木造の造営をもって、日本はとりあえず、それをやりとげたのである。課題は一転して庁舎や局舎の不燃化と、サービスの質の向上となる。

「伝統論争」の効用

1959年1月号の建築各誌、ことに『建築文化』誌は、戦前戦後を通じて、建築ジャーナリズムのひとつのピークだったと、何度も私は言いつづけてきた。

丹下健三の〈香川県庁舎〉が巻頭を飾った。それは、丹下の戦後第1期の活動の総括と結論を示すものだった。30年代から課題だった架構の自律による、機能と形態との媒介、あるいは架構というテーマが、伝統的メタファをもとになって、ここに結実したということにはかならない。

この成果にたどり着く過程に、まず、コルビュジエの〈スイス学生会館〉(1932)がある。つぎに吉田鉄郎の地道なクラシシズムがあり、ついでA.レーモンドの〈リーダーズダイジェスト東京支社〉(1951)や、アメリカ大使館の宿舎〈ペリーハウス〉〈ハリハウス〉(1953)の、RC版架構体という新しい展開があった。

そしてミースのユニヴァーサルスペース概念とその実体化が〈ファンズワース邸〉(1950)や〈レイクショアドライヴ・アパートメント〉(1951)に示されたうえで、清家清の〈森博士の家〉(1951)や〈斎藤助教授の家〉(1952)を起点にした伝統回帰を経て、そのすべてを包含しながら、〈香川県庁舎〉は成立したのである。

日本の文化的伝統こそが近代の深化に資することを立証し、この時点ですら、工業生産において世界屈指の底力をもつことを、日本は世界に見せつけた。丹下健三は、その旗手だったのである。

『建築文化』誌1959年1月号はそれだけでは終わっていない。菊竹清訓の〈スカイハウス〉が、後半で紹介されている。今や、ごく普通の素材となって個人住宅にさえ使われるRCという素材の、潜在力を充分すぎるほど引出し、それによって、近代の定型そのものへのチャレンジも始まったのである。ここでも、文化的伝統は最新技術を誘導することが実証され、新たな意匠にも結びついた。

日本の場合、「もはや戦後ではない」どころか、この時点から、明白な追撃に移った。それではドイツではどうだったか。実はドイツの方が復興は早かった。すでに欧州全体への工業製品サプライヤーとして地位を確立していたが、しかし、フランスやイタリアもあるヨーロッパでは、美の探求者としてのドイツは影がうすい。それができたのは、文化的伝

統において西欧と差異のある北欧、なかでもフィンランドとデンマークだった。ここにもひとつの木質の文化があるが、残念ながら誌面はもうない。

アノニマスということ

いずれにしろ、文化的伝統という手掛かりは、グローバルな課題の深化に寄与するかぎりにおいて、正面課題たりうる。

窮乏とアメリカニズムと人民解放路線とに翻弄された敗戦国が、ほっと一息つけそうになるのが50年ごろであって、とき講和(1952)に向かっている。

アメリカニズムも人民解放路線も、ともにインターナショナルイズムだから、文化的伝統への回帰は表面的には反動現象のひとつだ。まずは、障子というみからに伝統文化的な建築語彙が建築誌に登場するのは、つぎの順番となる。

1951年 森博士の家(清家清)

1952年 私の家(増沢 洵)

1953年 斎藤助教授の家(清家清)

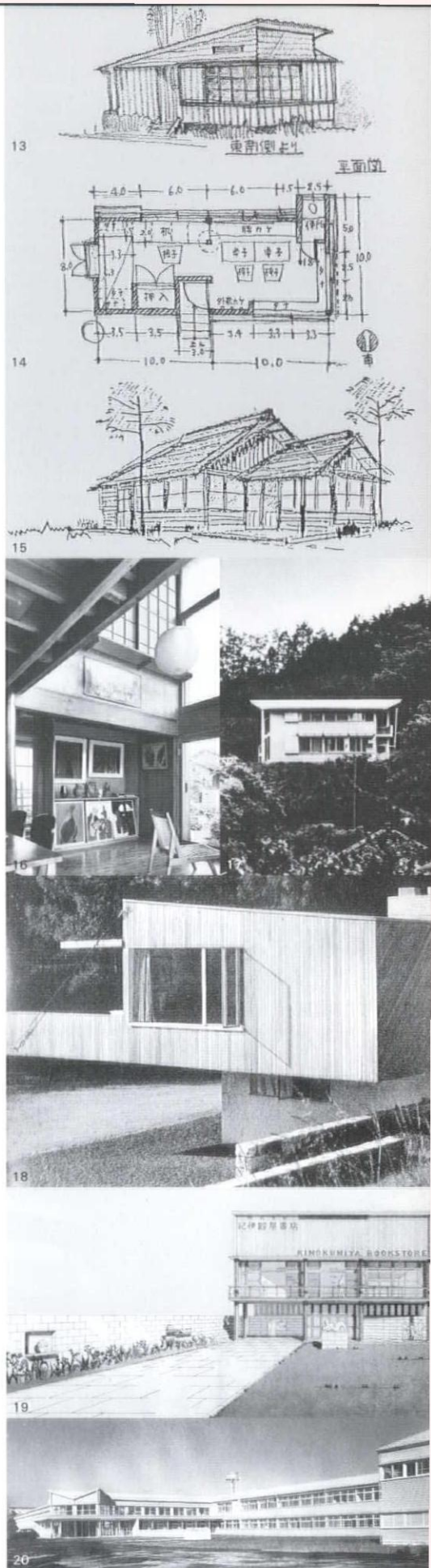
戦前の段階で洋間に障子を入れたのはまず吉田五十八だ(明治初期の宮殿造営を別にすれば)。戦後最初の障子はレーモンドが先か、清家清が先かを問われるところだが、清家のは、はじめから3尺をこえた広幅、組子組はあらく、意図的意識的に使われた。

1955年6月号の『新建築』誌は、戦後建築ジャーナリズム最初の「和風特集」をくむ。村野藤吾、堀口捨己、吉田五十八、大熊喜英……、というメンバーの堂々たる大作がここに集ったのである。時代はすでにそう動いていた⁸⁾。

しかし、伝統文化を軸に日本の近代建築が展開していったのも、1959年1月号『建築文化』など、前出)までのことだった。すでに見た通りだ。伝統は、急速に正面課題から遠のく。日本そのものが、文化的伝統や日本的なるものを総動員し、これを利して、そこから脱して、時代の先端に立っていたのである。

このとき木造という課題もまた、正面課題から急速に遠のいてゆく。

このつぎに木造という課題が時代の前面に立つのは、はるかに68年をまつことになる。世界中に野火のように拡がった若者たちの反権力闘争、「造反有理」の建築的テーマとしてだった。フォーマルではない建築、ハイスタイルではない建築、土着の建築、ゲニウスロキにかなう建築……。あたかも伏流水が湧きあがったように、木造は、時代のなかに返り咲

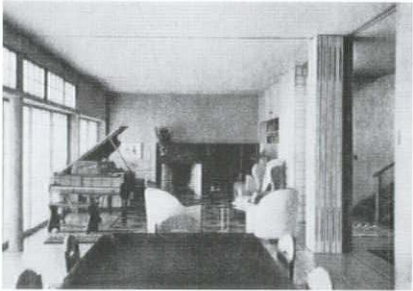


13, 14: ヒアジンスハウス設計図(計画)/立原道造/1937ごろ
15: 秋元邸(計画案)/立原道造/1938
16: 牟礼の家/生田勉/1961
17: 亀甲の家/生田勉/1958
18: プロイヤー自邸/M.プロイヤー/1947
19: 紀伊国屋書店/前川國男/1947
20: 慶應義塾大学附属病院/前川國男/1948

洋間に障子をつかった小住宅



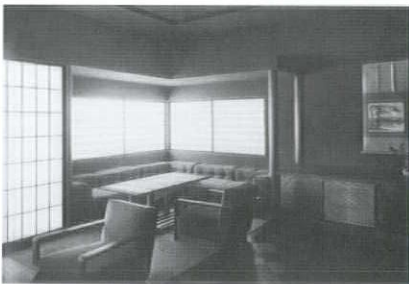
トレッドソン邸／A.レーモンド／1935



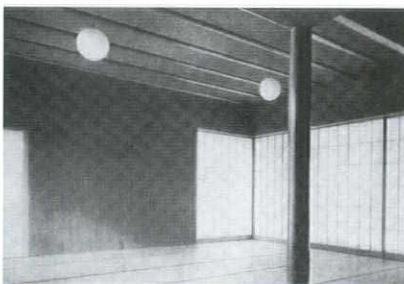
ブレイク邸／A.レーモンド／1935



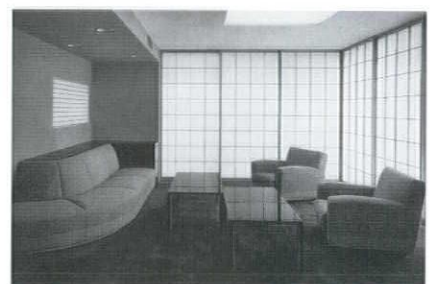
サロモン邸／A.レーモンド／1953



吉屋信子邸／吉田五十八／1936



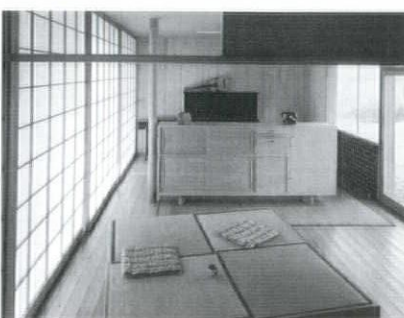
山口蓬春邸／吉田五十八／1940



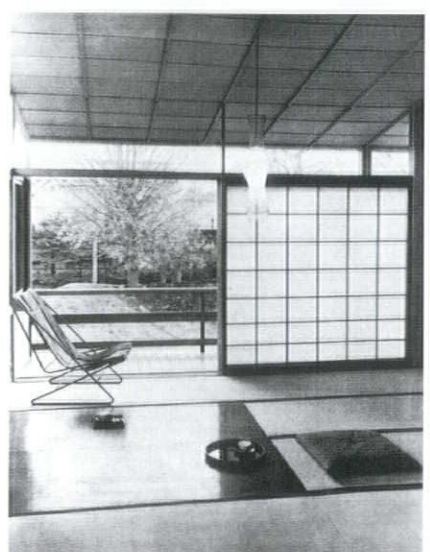
鈴木邸／吉田五十八／1957



私の家（最小限住居）／増沢 洵／1952



斎藤助教授の家／清家 清／1953



丹下自邸／丹下健三／1954

いた。

この勢いのなかで、近代建築はいっきに相対化され、ポストモダニズムに突入している。

思えば、L.H.サリヴァンが「Form follows function」と説きだしたのは1901年のことだ（『Kindergarten chatts』）。「Nutz still（必要様式）」をもってなるO.ワグナーがウィーン大学の建築学部長にむかえられたのは、もう少し早かった（1894）。

ついでA.ロースを代表とするキュビズム世代が純粋形態（幾何学形態）のなかに建築の理想をみた。

第一次大戦直後のパリに舞い戻ったコルビュジエは、しかし「キュビズム以後」に関心があった。サリヴァンやワグナーの説く「必然形態」と、ロースの説く「幾何学形態」とを架橋できないものか——。

家庭でもなにげなく使われている皿やフラスコ（ワインのデカンタとして使う）、あるいはフォークやナイフ、そして楽器の、誰かがつくったにはちがいないが時間の長い長い流れのなかで純化され、洗練され、改めて見直せば美しいものたちがある。みんなが共有している形にはほかならない。これに注目すれば、必然形態であると同時に純粋形態たりうるもの、それはいくらかでもあるのではない。こういうものこそ、本質的な形態のはずだ。「建築」と意識過剰になるからおかしくなる。同じ住居目的でも客船の艀装などに、学ぶべきはいくらでもあるのではないか——。

「レスプリヌーヴォー」（新精神）としてコルビュジエが主張しようとしたものは、このようなことだった。広く共感をよぶところだ。パウハウスもまた、この路線を追う。さらに「構成主義」をデザイン原理として重ねるのである（ペシクデザイン）。

こうして共作や共働そして共同設計はひとつの価値となった。それがなしうることそのもののなかに、近代性の深化をみようとしたのであろう。

1930年代に入って、コルビュジエは石や木などの非近代の素材にも眼を開き、片流れ屋根やヴォールト屋根など、田舎の建築語彙の採集にもおこたりない。しかし、それは構造体の視覚化の入口でもあったのである。コルビュジエは、「新精神」から急速に離脱しようとしていたが、欧州は戦火にのみこまれる。

遠く極東にあっても事情は似ている。

総動員体制のなかで窮乏建築を強いられ、節約を旨とした価値観を共有するなかで、共働は強く意味をもった。まして日本最強の設計チームは、逓信省営繕のなかにあった。皮肉なことに、聖戦の遂行はモダニズムの貫徹のなかでおこなわれていたのだった。

終戦後も、苦難の復興がまちうけていた。ここにも総動員体制に似たものがあったことは、極東でも西欧でも同じだった。

アノニマス（匿名性）への肯定は、ここでも立ちあらわれてくるのである。この時代やその残滓に少しでもかかわった人にとって、アノニマスとは永遠の聖女にはほかならない。付言すれば、伝統文化への指向もまた、変種のアノニマス指向であろう。グローバリズムからみて、それは個性の主張だが、その個性を育んだのは地域であり、それは地域内アノニマスに根ざしているからである。

「新精神」から離脱した30年代の課題は、結局、50年代に花を咲かせることになる。どこでもがそうなのであって、空白の期間は、世界大戦がもたらしたツメ跡にほかならない。

（くろさわ・たかし／建築家）

1) 計画原論：

「計画原論」という分野は吉武泰水の創案にかかるものであって、したがって日本にしかないことは知られている。これに先立って、在来の日本家屋を科学的に検討し、夏に高温多湿・冬に低温乾燥の気候のなかで居住性の向上が求められた。明治末期の『建築雑誌』などから、冬の採暖や夏の清涼を求めた提案があいつぐが、こうした検討の総集編となったのが藤井厚二の（随竹居）にいたる一連の実験住宅（1915～27）であろう。夏と冬の太陽高度差に注目して家屋を正南面させ、軒の出によって夏の日照をカットし、冬の日照だけを受け入れる設計術は、さしずめこの代表となり、やがて『計画原論』として集大成される。戦後の団地形成にあたって、住棟を南面配置したのはここが出発点だが、軒を出すことを忘れ、その後には大問題化する。

2) セメント瓦：

日本瓦の生産が急激におちるのは40年前後と思われるが、理由は瓦を焼く燃料の欠乏にあった。かわって焼きかためる過程なしの瓦として、セメント瓦が急浮上した。モルタルを型にいれて凝固させただけのものだから、C種ブロック（防水ブロック）程度の透水抵抗が少なく、したがって4寸勾配は少なくとも必要だった。

3) 岩本祥：

向井寛は「吉田鉄郎」「山田守」「岩本祥」の逓信建築家それぞれの評伝を相模書房から上梓している。近江栄によれば、逓信建築の伝統の基礎は、この岩本祥に求められるのではないかとされる。それにしても、早世をしながらなおすぐれた作品を岩本に残させる許容力がすでに逓信にあったことは事実だろう。

4) 木造の耐火性：

ハーフティムバーとは、丸太から角材を2本とったということだから、1：2に近い長方形断面となる（横架材では短辺が鉛直方向につくられる）。日本風といえば4寸角が2本分となり、しかも堅木主流だから、火災にあってもなかなか燃えない。いまでも大断面木造が中世からあったことになり、これが、ロマンチック街道などに古くからの木造民家建築が多く残っている理由のひとつだ。日本でもよく基準となった耐火性の大断面木造が一辺20cm以上からとなっているのは安全性のみにすぎないのだ。

5) 浪漫主義としてのニヒリズム：

ナチズムの哲学的根拠のひとつがニーチェのニヒリズムに求められているのは周知のことだ。最初の近代戦である第一次大戦の砲火を塹壕のなかで耐えて生き残ったのがニーチェの世代だった。合理の奥の不気味を身にしみ、これをフォアゾクラテッカー（ソクラテス以前）の思索のなかにみようと、ギリシャ悲劇にたどりついている。これは古典主義の深層をなす非古典的なもの——原浪漫主義——というものである。

ラングハウス（ブランデンブルク門）やシンケル（アルテスムゼウム）以後のドイツ建築がとりわけギリシャ古典主義に傾くのは、深層に浪漫主義があつてのことだろう。この延長線上に、シュベアのナチズム建築があること明らかだ。権力への希求という浪漫の建築言語が、皮肉にも、古典主義に求められたのである。

6) ペディメント：

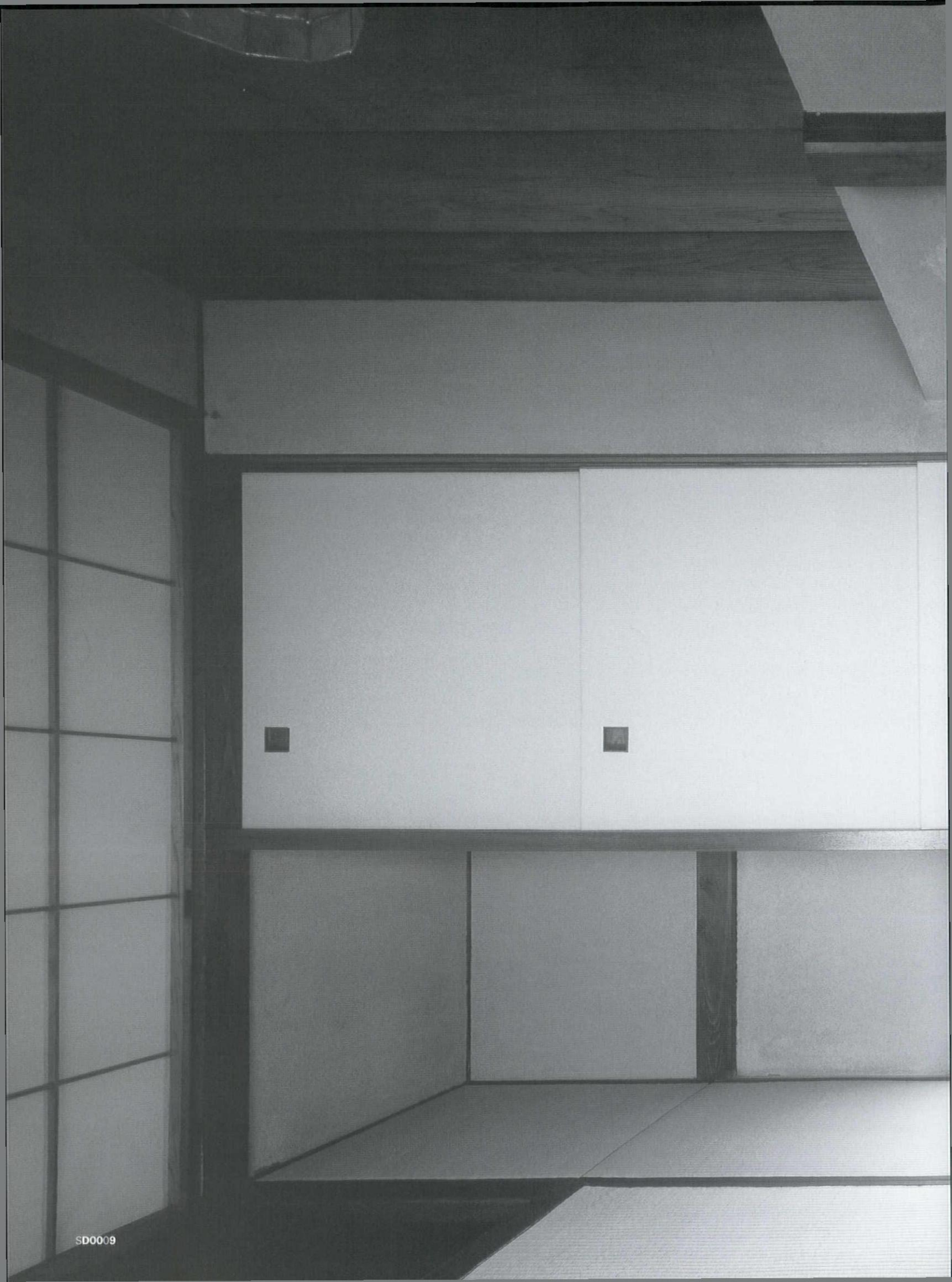
古典主義の規範は、基壇、列柱、三角楣（ペディメント）に求められるが、これが陸屋根建築に適用されるとき、ペディメントにかわるものを屋上手摺に求めたのがガブリエルの〈プテリリアノン〉（1764）であり、ついで、これをベナントハウス化した最初が渡辺節の〈日本勧業銀行本店〉（1929）だったのかもしれない。その後、吉田鉄郎の〈東京中央郵便局〉、岡田信一郎の〈明治生命館〉（1934）、渡辺仁の〈第一生命館〉（1938）と展開することになる。

7) 柱型のあるカーテンウォール：

ここで論じていることは、別の言い方をすれば柱型の明らかなカーテンウォール構成ということであろう。早くはサリヴァンの〈カーゾン・ビリー・スコット百貨店〉（1899～1904）があり、A.カーンの〈フォード・ハイランドパーク工場〉（1908）、ペーレンスの〈AEGタービン工場〉（1910）の長手方向、J.M.トルッコの〈フィアットの自動車工場〉（1922）などはあげておく必要がある。

8) 燃焼の5年間：

『新建築』誌1955年6月号の和風特集を結節点とする戦後の伝統文化指向ブームについては、拙稿「燃焼の5年間——吉田五十八1955～60」をごらんいただきたい（『数寄屋造りの詳細——吉田五十八研究』住宅建築別冊17、建築資料研究社、1985）。ただし版元品切れ。



モ デ ニ テ イ の 構 築

ヨーロッパ産のモダニズムが、日本で再構築されていったシチュエーション。

世界的にもアヴァンギャルドな構法、そして思想
「バウエン」 IN NIPPON

住宅のミニマムプランの源流はアーバンデザイン
木造「コア」イズム

「代用品工業」というプロダクトデザイン
戦時下テクノロジー

「バウエン」 I N N I P P O N

プリコラージュ
「機能拡張」された「技術＝トロッケン・バウ」のかたち

矢代真己

日本の木造モダニズムの展開を考える際、1930年代に繰り広げられた「乾式構造」の探求のプロセスは、外すことのできない重要な存在のひとつとなる。

これまで「乾式構造」については、一般にその技術的追求に重きをおいて解釈がなされてきた。だが、ここでは、その理念的背景を視野に入れながら、再考を進めていきたい。

その際の鍵となるのが、「バウエン (Bauen)=構築」という建築思想である。

これまであまり知られてこなかったが、「バウエン」という構想は、合目的性的などを主眼に据えることで、芸術性の観点から支えられてきた「建築」という概念を、社会性という観点から再編成することを試みていたものである。そして、1920年代後半から、ドイツ、オランダ、スイス、チェコスロヴァキアなど、世界的な拡がりをもちつつ、同時代的に発展・展開されていた。

それでは、現存する唯一の「乾式構造」の住宅である、土浦亀城の設計による〈土浦自邸〉をテキストとしながら、我が国に「乾式構造」が導入、展開されていった、その理念的背景を探る冒険の旅に出発しよう。

「構築派」という問題機構

「ごく少数だけど、その前に〈構築派〉」ということを言い出して、建築は人民のためのものでなくちゃならん、エジプトのピラミッドなどは単なる国王の虚栄心を満足させる、あるいは圧政の表現であるものとして見て、ピラミッドは建築ではない、すべてをこわしてしまわなくちゃならんとか、もう少し健全な言い方であれば、住宅問題が先であって、住宅建築をつくるということはその次でなければならぬということのいい、そういう運動をされた少数の方がおられたけれども……」¹⁾。

これは、1930年代なかばにおける日本の近代建築運動の開かれた可能性としての磁場の有り様について問われたこと

を受けての、生田勉による発言である。

ここに「構築派」という耳慣れない言葉が登場してくる。一般に30年代前半は、30年の新興建築家連盟の結成と瓦解、そして36年の日本工作文化連盟の結成の狭間に位置する、日本の近代建築運動の空白期あるいは停滞期と捉えられている。しかしその間に、構築派を標榜する一団＝運動が存在していたであろうことが、示唆されているのである。

さらに生田は、「構築派」の誕生こそが、やがて現出するであろう丹下健三の鮮烈なデビューに向けて、「急激な変化」をもたらす基盤を形成する契機となったのではないかと、との指摘も行っている²⁾。つまり構築派とは、日本における建築のモダニズム運動の転回点、ないしは分水嶺となる動向であった、という把握も示されることになる。

それでは、構築派とはいったいどのような存在であったのだろうか。これまでの日本近代建築史に関する言説では、残念ながらその実像については、まったくに黙して語られていない。

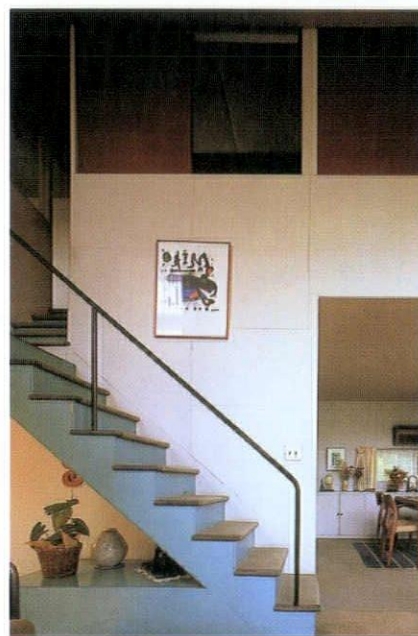
そして、冒頭に記したように興味深い発言を行った生田も、たとえば構築派を標榜した建築家の具体的な名前については、「ごく少数だけど」と述べるだけであり、口を濁している。

ただし、生田の言葉から、「構築派」を旗印とした運動は、建築を社会的な存在として再編成しようと試みていたであろうこと、そして、住宅問題の解決をその命題に据えていたであろうこと、が推定できる。

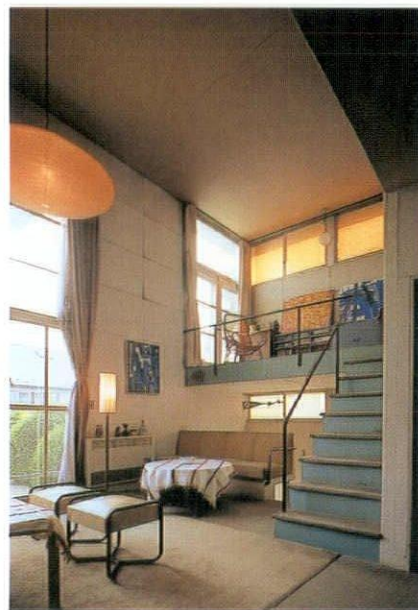
そこで、こうした特徴を手がかりとしながら、構築派の活動を見据えつつ、昭和初年の日本の建築界の風景を、眺望していこう。

「乾式構造」の登場

現状認識からみれば、構築派が「暗躍」していたということになるだろうが、30年代前半における日本の建築界の動向を、とりわけ構築派の命題となっていたであ



インテリアの核となる吹抜け。モジュールを示す壁面目地



半階ずつの変化により立体的に関係づけられた諸空間



庭から見た外観の夜景。インテリアの空間構成＝「機能構成」をありのままに表したファサード＝エクステリアのデザイン

土 浦 自 邸 (第2)

土 浦 島 城
1 9 3 5 年 (1938年増築)



敷地の高低差を巧みに利用したアプローチ



立体的に空間をつくる背骨＝階段の出発点となる玄関部分

ろう「住宅問題の解決」を補助線として手繰っていくと、「乾式構造（乾構造、乾構築などとも呼称されていた）」³⁾という主題が浮上してくる。

乾式構造を特徴に掲げた工法を用いての独立住宅の建設が、住宅建設という舞台の最前線を形成しているのである。戦前期に乾式構造を用いて建設された主な住宅をリスト・アップしたのが、【表-1】である。これを通覧すると、土浦亀城、市浦健、山越邦彦、蔵田周忠といった建築家が、乾式構造による住宅建設に取り組んでいたことが分かる。

また、乾式構造という主題に対する関心の強さは、たとえば『国際建築』誌が、32年3月号では「乾式構造の住宅」を特集し、また翌年4月号でも「乾構築」というテーマのもと、多数の乾式構造の住宅事例を紹介していることなどからも類推できる。

さらに、32年末には、市浦、土浦、蔵田、川喜田煉七郎らを中心として、「トロッケン・パウ研究会」も設立されており、川喜田が主宰する新建築工芸研究所で講習会を開催するなど、社会に向けての啓蒙活動も積極的に行われていた。

「乾式構造」という企図

なぜ、この時期、「乾式構造」という主題が住宅建設の表舞台へと一躍とびだしてきたのだろうか。

乾式構造とは、ドイツ語の「トロッケン・（モンタージュ・）パウ」を邦訳した用語である。建設工事から、左官工事など水を使用する工程を排除することで、

建設プロセスの合理化を図ろうとするものであった。そして、工事現場では、工場生産された材料を組み立てるだけとすることを理想としていた。また、その実現のためには、組み立てという構法の性格上、必然的に材料の企画化・標準化＝モジュール化が要請されることにもなる。

つまり、建設の工業化を推進することで、より廉価に、より迅速に、より堅牢に、より大量に、住宅を建設していくための方法論が提案されたのである。

これは、「住宅問題の解決」策以外のなにものでもあるまい。同時に、モジュール化が不可避とされることで、設計者の恣意的な芸術意欲にタガがはめられることにもなる。いいかえれば、建築（住宅）は、構法の合目的的な体系に則った合理的な存在、つまり設計者の主観を離れた社会的なものへと再編されることにもなるのである。つまり、乾式構造の実現を唱えることは、生田が語った「構築派」の目標を充足させることともなる性格を内在させていた。

すると、乾式構造に取り組んだ建築家こそが、構築派の中心を担っていた、と推定できることになる。

実際、たとえば市浦は、乾式構造を「無産階級又は夫に準ずる階級」における住宅問題解決のための手段と捉えており、その導入の理由としても、「建築とは科学と生活とを結び付ける最も強い触媒なのである。住宅はその作用の最も強く現れるものであらねばならぬ」と指摘していた⁴⁾。また、山越は、自邸である〈ドモ・ディナミカ〉に乾式構造を導入

した理由について、「要求と条件に従って、現在最も進歩した技術に解決を待てばよい」と、語っている⁵⁾。さらに山越は、総合的な科学性＝客観的な妥当性を内在させた存在としての建築像を、まさに「構築」という言葉＝構想として提起してもいた⁶⁾。

雛型としてのグロピウスの試み

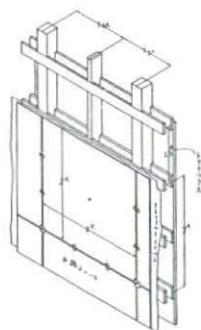
それでは、乾式構造という主題の源泉は、どこにもとめられていたのだろうか。

その雛型と位置づけられるのが、1927年に開催された「ヴァイセンホーフゾーデルンク」に際して、ワルター・グロピウスが設計した〈住宅 No.17〉である。この住宅では、まさに「トロッケン・モンタージュ・パウ」が主題とされていた。

1.06mのモジュールを設定したうえで、外周部に構造体をなすZ型の鉄骨を籠状に建て込み、これに6mm厚で1.06m×2.50mの寸法のアスベスト板の外壁パネル、11mm厚のセロテックス（繊維板）の内壁パネルを貼りつける、という構法が採用されていた。

アスベスト板など、現在では発癌性も取りざたされているが、当時においては最新の工業製品であり、耐熱性や防音性に優れた材料＝最新技術が、規格化された体系に則って、使用されていたのである。

ここで示されたグロピウスの創意工夫こそが、雛型となって基本的に我が国の乾式構造にも導入されていく。



市浦健が自邸で用いた乾式構造の施工法



市浦健、阿部邸、外観



蔵田周忠、古仁所邸、外観

「乾式構造」の実際

鉄骨造が導入されることで考案された「トロックン・モンタージュ・パウ」のあり方も、日本に移入される過程で、変形が加えられていくことになる。

端的に言えば、木造を前提としての展開が図られるのである。ただし、理想としては「鉄骨造」の導入が、将来的な目標におかれてもいた。そして、実際的には、「木骨ラス張りモルタル塗り」という仕上げに代わって、「木骨ルーフィング下地、石綿スレート張り」の導入が試みられていく。

これは、当時の我が国の工業水準では、鉄骨を用いると高価になり、現実的ではなかったからである。また、内外壁に使用される材料の組み合わせは、グロピウスのモデルを踏襲したものとされるが、そのモジュールの体系は、小型化されるとともに、尺貫法の体系へと置換されていく。3尺×3尺（市浦）、1.5尺×3尺（山越）、2尺×3尺（土浦）といったモジュールが採用されていくのである。これは、施工の容易化、規模に対する適応性の増大を図るための手段であったと同時に、日本の工業水準からくる限界でもあった、と考えられる。

たとえば、本来は工場で加工することが目されていた石綿スレートの外壁パネルは、実際としては現場で大工によって、モジュールをなす寸法へと切断されていたのである。

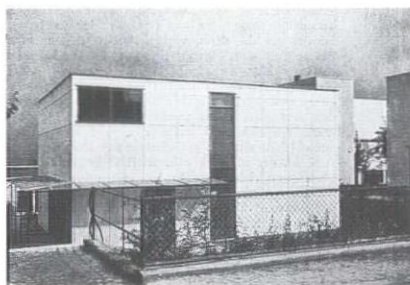


山越邦彦、ドモ・ディナミカ（自邸）、外観

表-1 木造乾式構造を用いて建設されたおもな住宅

建設年	住宅名	建築家名	1934	土浦亀城	高島邸
1931	土浦亀城	土浦自邸（第1）	1935	土浦亀城	土浦自邸（第2）
	土浦亀城	俣邸		市浦 健	阿部邸
	土浦亀城	平林邸	1936	本野精吾	乾構造小住宅試作
	市浦 健	市浦自邸		蔵田周忠	金子邸
	横山不学	佐々木邸		蔵田周忠	斉藤邸
	小林秀爾	福田邸		蔵田周忠	三輪邸
1932	井上房一郎	田中医院		蔵田周忠	古仁所邸
1933	池谷定雄	A邸		蔵田周忠	安川邸
	池谷定雄	B邸	1937	蔵田周忠	白柱居
	山越邦彦	ドモ・ディナミカ	1938	蔵田周忠	貝島邸
	豊口克平	西村邸		土浦亀城	土浦自邸（第2）増築
	友田 薫	穂積邸	1940	蔵田周忠	田中邸

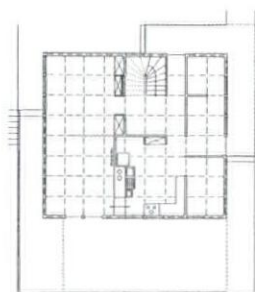
作成協力：矢木 敦（日本大学OB）



W.グロピウス、ヴァイセンホーフジードルンクに建設された〈住宅No.17〉、外観



同左、工事途中、外壁の施工手順



1階平面図



2階平面図



東立面図



南立面図



西立面図



北立面図

W.グロピウス、ヴァイセンホーフジードルンクに建設された〈住宅No.17〉 S=1:400

「乾式構造」の系譜での土浦自邸の位置さて、〈土浦自邸〉である。土浦は乾式構造を用いて2件の自邸を建設しているが、これは2作目の自邸である。

1作目の自邸が、乾式構造のバイオニアとなった作品であるとすれば、逆にこの2作目の自邸は、そのたそがれの兆しのなかで建設された作品とも位置づけられる。

この住宅が建設された35年以降、乾式構造に継続的に取り組んでいく建築家は、基本的に蔵田周忠のみとなってしまうからである。

現在の外壁は木板の堅羽目であり、外観からは乾式構造で建設されたことは識別しがたい。だが、もともとは、石綿スレート・パネルで仕上げられていた。そして、雨仕舞いが問題となる目地部分には、ルーフ・パテが詰め込まれていた。しかし、戦時体制に突入することによって、肝心のルーフ・パテの入手が不可能となり、事実上、目地のメンテナンスが不可能となってしまった結果、外壁が取り替えられたのである。

結果的に、すべての乾式構造の住宅が抱えていたであろうメンテナンス＝耐久性の問題が、乾式構造導入の所期の目的とは裏腹に、その下火を招く原因となっていくのである⁷⁾。

内部では、2尺×3尺というパネル（フジテックスという繊維板）のモジュールに基づいて建設されたことが、いまだ明瞭に読みとれる。そこには、大きなワンルームとも見なせる、スキップ・フロアで構成された立体的に流動する空間が形

成されている。

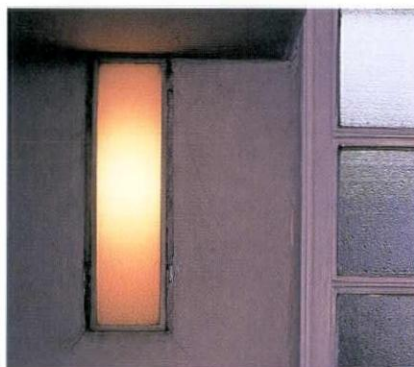
この空間のもつ特質について、土浦の師であるフランク・ロイド・ライトからの影響がしばしば指摘されている。しかし、35年に山越邦彦は、これをルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエの〈チューгентハット邸〉（1930）の空間構成になぞらえていることを、紹介しておきたい。山越は、部屋に分割＝区分していくことで必要とされる諸機能を達成しようとするのではなく、大きな空間を多様なかたちで使用可能なように空間的・造形的仕掛けをおこなうことの必要を説き、それを「機能構成⁸⁾」と呼んでいるのだが、その範例を〈チューгентハット邸〉に求めるとともに、日本における実例として、この〈土浦自邸〉を指摘しているのである⁹⁾。

この「機能構成」という課題を、より明確なものとさせているのが、台所や寝室、書斎の収納部分、そして、照明器具や郵便ポストまでが、造作として壁面にビルト・インされていることである。また、温水による暖房設備も、吹き抜けの天井部分に仕込まれている。こうして、壁面や天井部分にいくつかの機能をもたせることで、空間の各部分が、積極的に多様なかたちで用いられるように促されているのである。

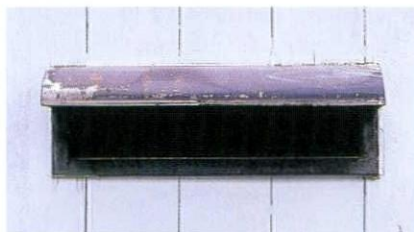
つまり、特定の建築要素が多重の機能を受け持たされているのであり、また、照明工学、環境工学、構造学、意匠学などに専門分化した建築の諸学問領域が、山越の言葉を借りれば、「客観的妥当性」をもって、総合化されてもいるのである。



浴室、玄関と連絡する台所部分の裏動線



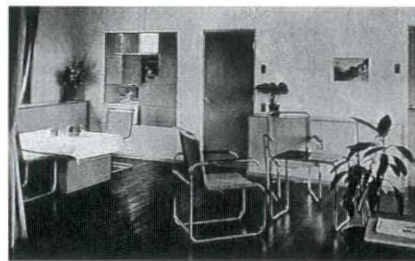
玄関部分、壁面にビルト・インされた照明器具



壁面と一体化された郵便受け（外部）



同上（内部）。ガラスの蓋により郵便物の到着が目瞭然



山越邦彦、ドモ・ディナミカ（自邸）、インテリア居間と食堂。扉の奥が台所。収納、そして時計までが装置化されて壁面にビルト・インされている



ミース・ファン・デル・ローエ、チューгентハット邸、インテリア「機能構成」の嚆矢と理解されていた住宅



システム・キッチンの萌芽ともいえる調理動線に基づき設計された台所。採光も考慮した調味料棚、食物別の使用を考えた4枚のまな板（正面・調理台にビルト・イン）など、様々な工夫がみられる



2階主寝室。左手は壁面全体に造りつけ収納家具。右手は障子を介して居間の吹き抜けに連結



温水暖房システム用ボイラーを活用して湯が沸かされた浴室

土浦亀城と近代建築運動

ところで土浦は、乾式構造という主題は共有していたが、実際、「構築派」というかたちで建築運動に参画していたのだろうか。これまで土浦は、一般に近代建築運動とは一定の距離を保っていたと位置づけられてきており、また、土浦自身も、建築運動に「呼ばれても客員としてであって、内には入りませんでしたね」と述べている⁹⁾。

しかし、土浦の積極的とも思われる近代建築運動との関わりも見て取れるのである。たとえば、山越などが中心となって結成された新興建築家連盟の設立準備段階において連絡先の窓口となっていたこと、31年にニューヨークの近代美術館で開催された「インターナショナル・スタイル」建築展の日本側窓口になっていたこと、石本喜久治や山越らとともにCIAM日本支部設立の立役者のひとりとなっていたこと、先述のトロッケン・パウ研究会の主要メンバーであったこと、市浦、山越らとともに日本工作文化連盟の創設会員であったこと、などを指摘できる。つまり、構築派との少なからぬ交流、共同歩調が認められるのである。

こうした状況を踏まえると、出典は定かでないが、日本で活躍した3人の弟子に対するライトの評価として神話化されている、「レーモンドは右を向いてしまった。土浦は左を向いてしまった。真っすぐに歩いているのは遠藤（新、のこと。引用者）唯一人である」という発言が、興味深く思えてくる。また、ライトが土浦への私信に記した「コルビュジエ

的——フランクフルト的な機能主義の模倣」をやめなさい、というたしなめも、より関心をそそることになってくる¹⁰⁾。

これまで、ライトの弟子という側面が強調されてきた土浦のもうひとつの貌が、そこにかいま見られよう。

ただし、聡明なライトも、ここでヨーロッパの近代建築運動を誤読している。ル・コルビュジエ的なものとフランクフルト的なものとを同一線上で理解しているからである。ここでは詳述する余裕はないが、実際としては芸術派のル・コルビュジエと、社会派つまり構築派のフランクフルト・グループとは、たとえばCIAMを戦場として、喧々囂々^{けんけんごうごう}の闘争を繰り広げていたのである。そして、誤解を恐れずにいえば、フランクフルト・グループの立場、つまり構築派の基盤にたって、ル・コルビュジエ批判を展開した人物として、たとえばオランダのマルト・スタムやチェコスロヴァキアのカレル・タイゲの名を、指摘することが出きる¹¹⁾。

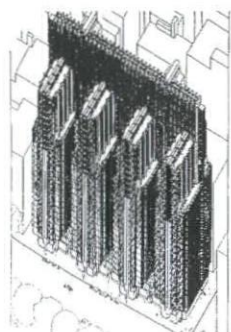
土浦の覚醒の契機

ヨーロッパにおける近代建築運動の動向を土浦に教示したのは、同じくタリアセンでライトのもとで働いていた、スイス人のヴェルナー・モーザー、ともにオーストリア人のリヒャルト・ノイトラ、ルドルフ・シンドラーなど、ヨーロッパ人建築家や、チェコ人であるペドジフ・フォイエルシュタインとの日本での親交をつうじてであったことは、すでに指摘されている。

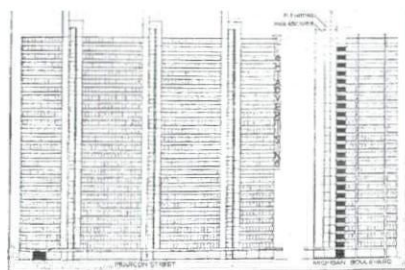
そして、これまではノイトラやシンドラーの役割が重視されてきたが、モーザーとフォイエルシュタインの役割をクローズ・アップしてみたい。すると、スタムやタイゲの思想を知りうる契機が、土浦にもたらされたであろうことが推定できるからである。

実は、スタムとモーザーは親友であった。そして、スタムが「パウエン=構築派」という立場から論陣をはっていた雑誌『ABC：パウエンへの貢献』を、スタムはタリアセンのモーザーのもとへと送付してもいた。また、モーザーも母国スイスに戻ってから『ABC』誌の作業に関与している。そして、たとえば土浦も設計に関与したといわれる「ナショナル生命保険会社」のカウンター・プロジェクトを発表している。おそらくライトに言わせれば、「モーザーも左を向いてしまった」こととなろう。一方で、フォイエルシュタインは、タイゲとともに、チェコ・アヴァンギャルド運動の中心にあった組織「デヴィエトシル」のメンバーであり、来日してからもその関係を保つてもいた¹²⁾。

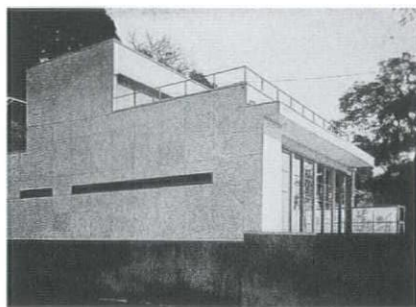
これらのことから、土浦は、モーザーやフォイエルシュタインをつうじて、スタムやタイゲの反芸術・技術至上を骨子として、社会的な存在として建築の再編に取り組んでいた「パウエン=構築派」の思想について、ほかの日本人の誰よりも、知見を得ていたものと推定できるのである。



F.L.ライト、ナショナル生命保険会社
土浦が設計に関与したと言われる



W.モーザー、雑誌『ABC』に発表された「ナショナル生命保険会社」案のカウンター・プロジェクト



土浦亀城、土浦自邸（第1）、外観

「乾式構造」のもうひとつの可能性

これまでの議論を踏まえると、〈土浦自邸〉に具現された風景も、これまでとは違う景観として現れてこよう。

土浦が確信犯的に構築派に属していたかは残念ながら確証できない。実際、既述した市浦や山越のような明瞭な姿勢を、管見では土浦は打ち出していない。

また、土浦の場合、無産階級の住宅問題に対するよりも、中産階級の住宅問題に対して、より大きな関心を抱いていた節もうかがえる。

しかし、構築派という理念の息吹と、その拡がりについては、ほかの誰よりもまして認知していたであろうことは確かなのである。

そして、土浦は、自らの設計態度について、いみじくもこう語っている。

「そうねえ、僕の住宅はね、今になると皆さん芸術的なものとして、見てくださるようだが、僕のネライは実験住宅だったんだ。住宅改良の関心から技術的な改革とローコストというものをいつも追求していた」¹³⁾。

つまり、芸術的な要素については、基本的には関心が向いていなかったことを吐露しているのである。

しかし、それでも〈土浦自邸〉は、私たちに惹きつける何かをはらんでいるのである。

原理的には設計者の恣意性＝芸術意欲にタガをはめる要素でもあった寸法の標準化、モジュール化を突き詰めていく過程で、言葉で語り尽くせるけれども、言葉で表現しきれない深みが、そこに出現しているからであろう。つまり、「技術」という本質的にニュートラルな磁場に、それを超えたかたちで拡張された姿が、接ぎ木されているのである。

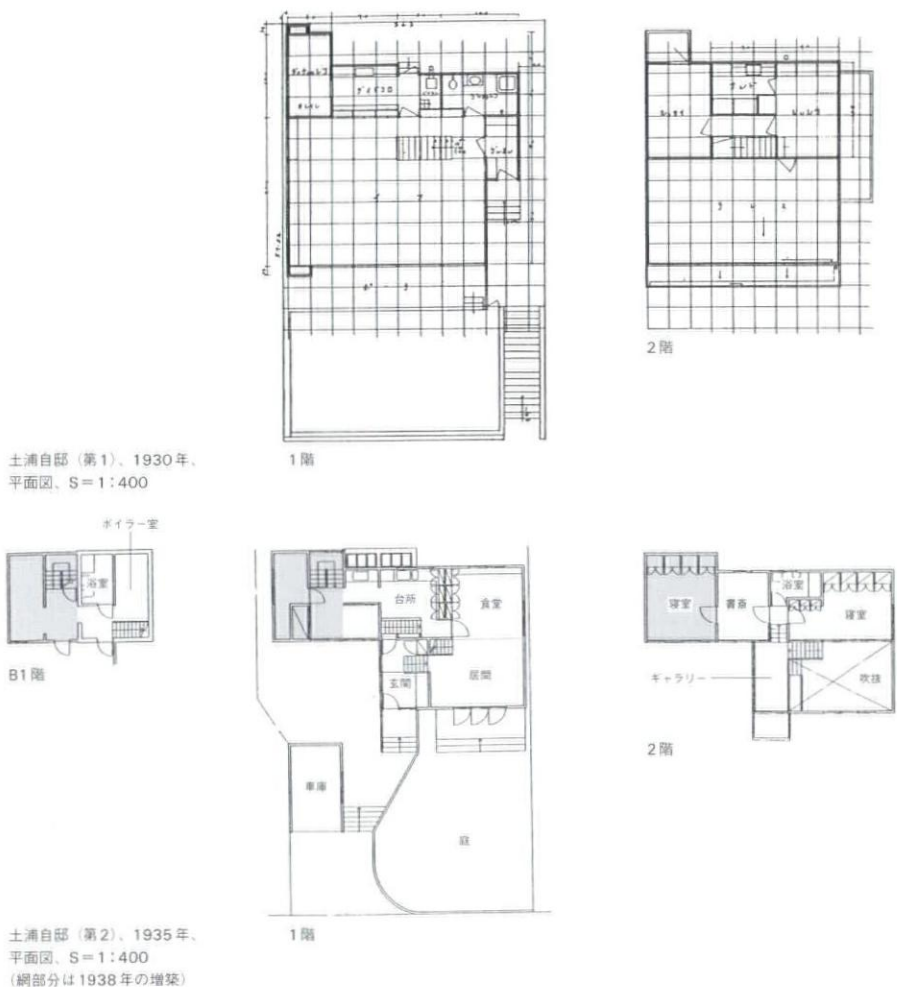
それは、技術のロジックと、構築派の想定外にあった空間のポエティクスとが、せめぎあっている結果ともいえる。あるいは機能拡張された技術のかたちとも、素朴な技術のもとに総合化された空間の形象とも、いいえよう。

構築派全体としてのターゲットとされた「乾式構造」は、工業技術の水準や気候風土といった日本の特殊性のもとで、衰退を余儀なくされていった。だが、この2作目となる〈土浦自邸〉において、日本的に換骨奪胎したかたちで、総合化された技術＝トロッケン・パウのもうひとつの可能性が、鮮明に切開かれたのである。

それゆえ、〈土浦自邸〉に現出された豊かな空間の質は、たとえば「構成」という20世紀的な芸術意欲に基づいたものとしてではなく、客観的妥当性を目標とした「構築」の意志に支えられて生み出された存在として、読み直さなければならないであろう。

(やしろ・まさき／建築史建築論、千葉工業大学、日本大学非常勤講師)

- 1) 磯崎新対談「建築の一九三〇年代——系譜と断絶」、鹿島出版会、1978年
- 2) 注1に同じ。
- 3) 現在では、乾式（組立）構造（工法）ともよばれている。
- 4) 市浦健、「住宅と乾式構造」、「国際建築」、1932年3月号
- 5) 山越邦彦、「DOMO DINAMIKA」、「新建築」、1933年9月号
- 6) 山越の近代建築観の詳細については、拙稿「〈建築→ルート・マイナス1建築→構築〉という冒険」、「建築文化」、2000年1月号を参照されたい。
- 7) こうした問題に対する疑念については、たとえば谷口吉郎、「自余の井」、「国際建築」、1936年6月号を参照されたい。
- 8) 山越邦彦、「扉一動く扉一扉のない部屋（機能構成）」、「今日の住宅」、1935年、朝日新聞社に所収。
- 9) 注1に同じ。
- 10) 西沢泰彦、「建築家土浦亀城と昭和初期モダニズム」、「SD」、1988年7月号に所収で引用されている。
- 11) スタムやタイゲの近代建築思想については、たとえば次の論文を参照のこと。拙稿「マルト・スタム：〈パウエン〉の殉教者あるいは虚空中に消えたアヴァンギャルド」、拙稿「カレル・タイゲ：〈構成〉の詩学を説いたイデオログ」、ともに「建築文化」、1999年5月号所収。
- 12) フォイエルシュタインとデヴィエトシルとの関係については、たとえば市川祐子他、「前衛芸術家組織（デヴィエトシル）の建築分野の会員とその構成について」、「AIJ1999年度学術講演梗概集F-2」を参照のこと。
- 13) 藤森照信、「昭和住宅物語」、1990年、新建築社



コアのあるH氏の住まい

増 沢 洵
1 9 5 3 年



木 造 「 コ ア 」 イ ズ ム

積極的「コア」／消極的「コア」

渡辺研司

試 作 小 住 宅

白 井 展 一
1 9 5 3 年



左上 道路側外観
右上 庭から居間を見る



日本における「コア」という概念の受容は、基本的には〈広島計画〉(1949～51)以降の丹下の活動と並行している。50年代の住宅に関していえば、コラムで指摘したような実体としてコアをとらえたのが、増沢洵あるいは池辺陽であり、一方、「不在のコア」を住宅で提案したのは、白井晟一であったといえる。ここでは増沢の〈コアのあるH氏のすまい〉(以下、コアのすまい)と、白井の〈試作小住宅〉を比較することで、コアという思想の住宅への受容の諸相を明らかにさせたい。

積極的「コア」

ふたつの住宅は、偶然にも竣工して同じように、ほぼ半世紀という時間を経てい

ながら、いずれも理想的な住人に恵まれ、当時のままに住まれつづけている。〈コアのすまい〉の設計者・増沢洵は、A.レーモンドの事務所に勤務しながらこの住宅を設計している。前年には自邸である〈最小限住宅〉を完成させていた。「最小限」という言葉のもつ清貧的あるいは倫理的姿勢は、戦前のCIAM2(1929)での議論と戦争を経て、戦後、経済的生産という合理主義に名を変えて全世界的に拡がる。

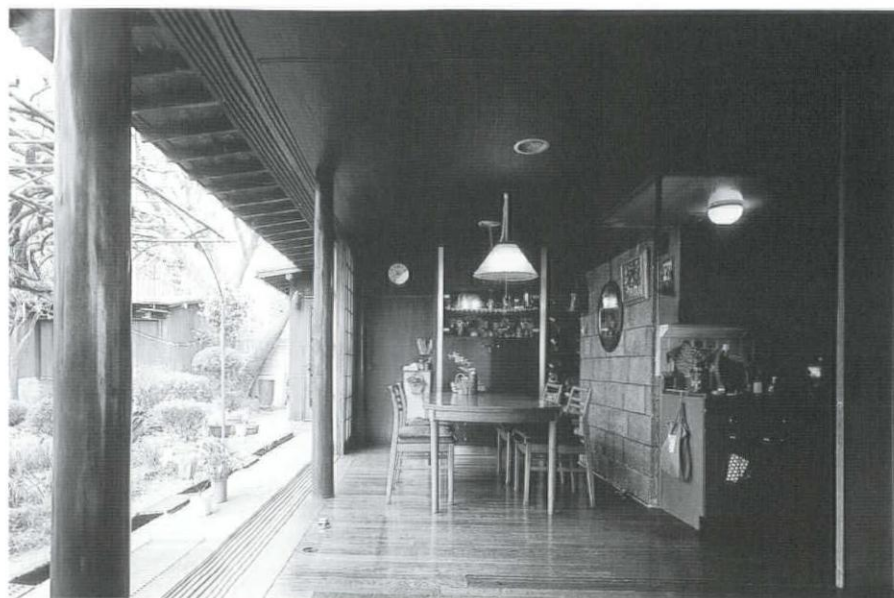
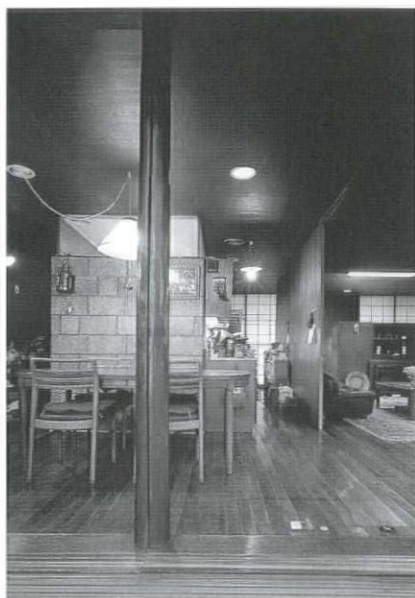
丹下が広島に不在のコア＝中心を構想していたとき、ミース・ファン・デル・ローエは、実体のコアを使ってユニヴァーサル・スペースができあがることを、ある住宅を通して発見した。〈ファンズワース邸〉である。そして、定まった使

い方を規定しない空間に、融通性＝自由をもたらす方法が、コア・システムとなる。いいかえれば、空間において自由を得るための方法には、実体としてのコア＝中心の構成が不可避免的に必要となる。このコアのありかたを「積極的コア」と仮に名づけてみる¹⁾。

ミースの提示するユニヴァーサル・スペースとは、結果からすると還元的思考、つまり事物をできるだけ削除していくという行為によってつくられたものと見えるが、実は、伝統的な西欧的思考である存在としての事物(空間)の集積であると考えられる。一見矛盾する〈ファンズワース邸〉、戦前の〈ガラスの摩天楼〉、〈バルセロナ・パビリオン〉とレンガ造のモニュメントは、ミースのなかでは

左下 西側外観
右下 玄関





事物の構築という一点でつながっている。

このユニヴァーサル・スペースとは階段、エレベータ、設備などを平面の中央に配置し、その周辺に自由な空間をめぐらすことで成立する。つまり現在のオフィスビルにおける空間原理である。その〈ファンズワース邸〉にならったP.ジョンソンの〈ガラスの家〉を、「ワンルームの室内をコアと家具とで仕切ることによって生活領域をつくり出す空間構成の手法」²⁾としてとらえてつくられたのが増沢の〈コアのすまい〉であった。

増沢によればその空間構成の方法論とは、「すまいを構成している各要素」である「主体構造とか、外壁とか、天井とか、壁、床など」を「分離して」扱い、「専門家の技術を導入すること」にあっ

た。この方法論により、各要素を「より質がよく、精密度の高いものへと進歩」させていくことが可能となった。また、「構造体の独立も、コア・システムも、間仕切りの軽量化も、その他私たちの周囲のすべてを一度独立させること」は、住宅が、ひいては建築が、「より技術精度の高いものとして総合される第一歩」となることを増沢は確信する³⁾。

いわゆる透明性という視点でコアのすまいをミースと結びつけることだけでなく、むしろ筆者は、一見、構造的架構によってユニヴァーサル・スペースを構成している〈コアのすまい〉が、分離した事物(要素)の集積の上に成り立っていることに注意すべきであると考え。目的はあくまで積極的コアを使い、自由な

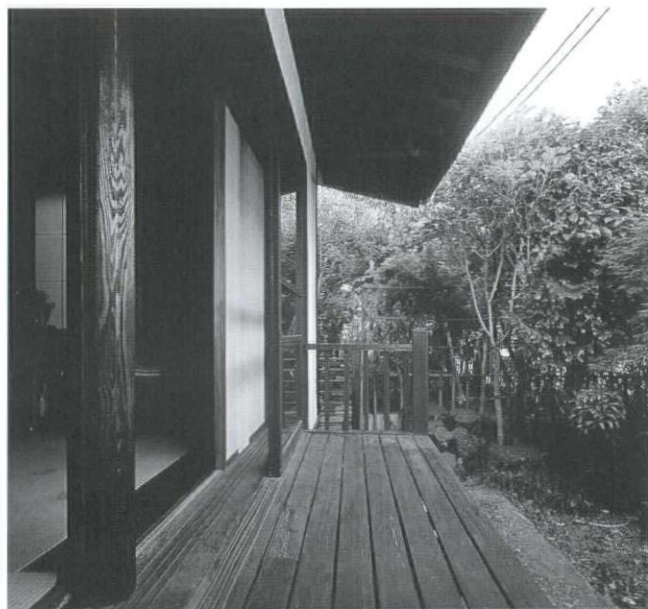
空間をつくり出すことにあった。

消極的「コア」

白井晟一は、「50年代に流行となったジャポニカという和風住宅に対する反抗というかたちで、一連の住宅を発表し、突如建築界になぐり込みをかけ、伝統論争に火をつけた」と戦後近代建築史において位置づけられている。

まず指摘しておかなければならないのは、「試作小住宅」という名前である。これは明らかに増沢の〈最小限住宅〉に対する応答と考えられる。当時、白井は次のように説明している。

「構造材は施主の郷里から送られた杉の素材で、造作・建具にはラワンを用いて悉くクレオソート、又はオイルステイ



左ページ左 コンクリートブロックとスライディング・パーティション
 左ページ右 居間から食堂を見る（障子を開けた状態）
 右ページ 食堂から居間を見る（障子を閉じた状態）



ンを塗った。屋根は緩勾配の鉄板瓦棒葺であるから垂木小屋のような極木構造でよいが、松丸太などが準備されて居り、将来あるいは瓦葺に変改されるような場合も考慮して和小屋の伝統的手法によった。軒出は4尺、妻出は3尺、壁体は構造材露出で一見真壁であるが、防音・保温・遮熱の目的のために二重壁とし、内部は石膏ボードを壁下地とした。もちろん諸配管は隠蔽される。尚外部開口は格子をもつ個所を除き全部錠戸の引戸をつけた」⁴⁾。

ここでは、白井のいう「一見真壁」である大壁のもつ設備的有効性と、住宅の構成要素の整合性が語られている。この文章の調子には、白井がいかに50年代に流布したジャポニカ風の住宅をつくり

だす建築家たちと距離をおこうとしていたのかが表れている。白井の対象としたのは、いわゆる西欧のモダニズムを学び日本のものへの議論に荷担しない建築家、つまり増沢洵、池辺陽のように実体としてコアをつくり、積極的自由への空間をつくりだす建築家たちであった。さらに白井は続ける。

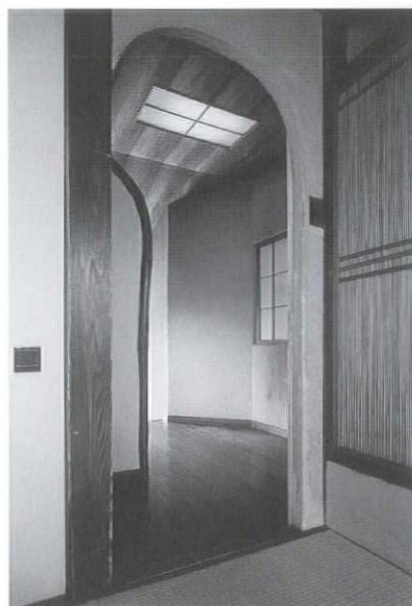
「都市の木造小住宅も此の頃は防火地帯と否とにかかわらず、殆ど構造材はモルタルで塗りつぶされることが多い。そして日本瓦の屋根と聚楽色のリシン壁で、いわゆる近代数寄屋という様式が氾濫している。これらの建物にあつては、当然、充分な考慮をほらなければならないインシュレーションや壁体内の通気には甚だ冷淡である。この様式は花柳挾巷には

よろしい。しかし健全なるべき階級の住居までこの様式に遂うのは問題である」⁵⁾。

白井にとって重要なことは、西欧が見出し理解できる日本の美学（日本的なるもの）に対して、単に「縄文」というおどろおどろしい概念を対置させることではなかったのだ。それは、西欧のモダニズム、つまりはミースのユニヴァーサル・スペースに対して、その不可能性、あるいは反駁性を示すことであった。

「この建物では軸材土台など13cm角で構造的には経済断面を上回っているが、住居は一生の間には度々つくれない。長くもない生涯を、強い風や雨に、或いは地震に堪え、見るからにがつしりした家で暮らしたいとは誰でも思うことではないかと考える。ロウコオストは建築のエ

左ページ左 玄関部分の深い軒の出
 左ページ右 南側テラス
 右ページ 和室より玄関を見返す





レメントである。しかし、人間の生活や精神を引き上げられるロウコオストでなければならない。(中略)かつての日本の民家にはこういう形式が多かった。白い漆喰壁とくんだ木部との階調は、新鮮を超えて素朴な故郷の感覚であると思う。此の『システム』は構造的にも、意匠的にも充分近代建築のはげしい陶冶の対象となり得ると考える」⁶⁾。

モダニズムのはげしい陶冶になりうる意匠、そしてシステム。白井のおそろしいまでの自信が顔を覗かせている。それは、空間は無限のものではなく、限界があるという認識。西欧的構築の方法では行き詰まるという確信でもあった。このような確信は、彼がドイツを中心としたヨーロッパで観念論と格闘した経験をも

つことよってのみ生じるものであった。その方法とは、実体としてのコアを設けず、代わりに不在としてのコア＝「消極的コア」を想定し、限定された空間＝非ユニヴァーサル・スペースを、空間の構築によってつくりだすことである。その構築の仕方に日本の茶室空間の構成が用いられている。

富永譲が指摘するように、これは、日本の建築の伝統に対して、白井の創作を通じてのもっとも具体的で精確な批評であるとともに、その視線の先にはミースがあったと筆者は考える⁷⁾。

川添登は、白井の独自性を極木構造と真壁の大壁に看とるが、この手法をつくり上げるために、現代建築家として白井がもっとも高く評価しているのがミ-

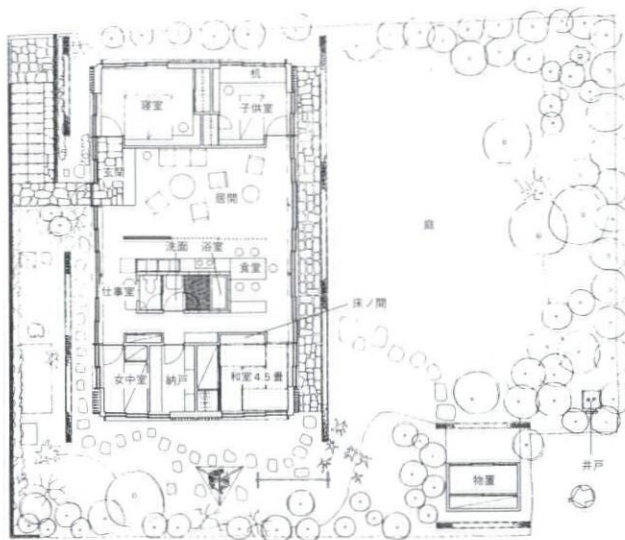
ースであり、その影響にある程度負っていると指摘している。そして、真壁の大壁がもつ白と黒の対比は、ミースの原理的構成に似ているという⁸⁾。これは似ているというような表面的な問題ではなく、前述したようにミースの原理的構成を使いながら、その限界を提示するという批判的な問いであるといえる。

コア＝中心の往還

CIAM8で生まれ、その後都市計画から住宅まで、建築設計の手法として広まった都市のコア＝中心という概念は、系譜学的にいうと第二次大戦前にすでに存在していた。それは西欧の建築がもつ構築性、理念としての空間が存在しているという形而上的確信にほかならない。ある



左ページ左 段差のない玄関
 左ページ右 居間から玄関を見る
 右ページ 平面図 S=1:300 (明瞭なコアの存在)



いは計画への絶対的な信頼（計画主義）ともいえる。ミースのユニヴァーサル・スペースは、実体的なコア＝積極的コアを前提として成立しているのである。

丹下健三は、不在のコア＝消極的コアを、〈広島計画〉においてはコア＝核の不在というレトリックを忍び込ませながら実現した。しかし、その後、旧〈東京都庁舎〉、〈香川県庁舎〉において、積極的コアを設備・構造のシステムと関係づけ、不在のコアという穴を埋めていく。

住宅のレベルにおいては、増沢洵、池辺陽は実体としてのコアをプランのなかに提示していく一方、それを批判的に検証し、コアのない家をつくって近代主義に反駁を唱えたのが白井晟一であった。さらに白井は、不在の核を広島において

実現した丹下健三に対して、〈原爆記念堂〉計画を「存在しない建築」として突きつける。それは実現（構築）されないことを承知した建築、あるいは不在の計画という計画主義に対する批判であった。丹下にとっても、〈広島計画〉は近代建築とモニュメンタリティ＝精神性の表現との間で葛藤した作品であったことは確かであり、白井の作品は精神性へと振り子は傾いているだけである。

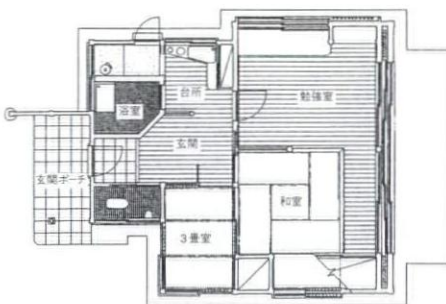
本質的に、この時点においては両者の作品に見た目ほどの差異はないと考える。この後、丹下は、存在する建築＝計画主義に、一方白井は、不在の建築＝反計画主義という反対の極に自らの振り子を大きく傾けてゆくのである。

(わたなべ・けんじ／建築家、東北工業

大学非常勤講師)

- 1) この積極的コアと消極的コアという二分法は、自由主義におけるものを参考にした。それは、イギリスの政治思想家、サー・アイザック・バーリン (Sir Isaiah Berlin) による積極的自由と消極的自由という概念である。これに関しては、バーリンの「二つの自由概念」、「自由論」(生松他訳) みすず書房 1971 年、を参照していただきたい。また、ほぼバーリンの自由主義の二分法の枠組みで、経済学者である F.A. ハイエック (F.A. Hayek) による「真の個人主義、偽の個人主義」市場・知識・自由 (田中他訳) ミネルヴァ書房、1986 年、も参考にしたい。ハイエックには、「隷属への道」という計画主義、設計主義に対する批判の著作もあり、社会主義がもつ全体主義的側面が浮き彫りにされている。
- 2) 『国際建築』、1950 年 11 月号、pp.21-29
- 3) 松隈洋、「『透明性』のありか 増沢洵の「コアのある H 氏のすまい」をめぐって」、『住宅特集』、1998 年 1 月号参照
- 4) 5) 6) 白井晟一、「試作小住宅 (1953.6.8 記)」、『新建築』、1953 年 8 月号
- 7) 富永謙、「様式の真空へ 秋の宮村役場から横濱館へ」、『白井晟一研究』、pp.105-133、南洋堂書店、1981 年
- 8) 岩田知夫 (川添登)、「伝統と民衆の発見をめざして 白井晟一の作品にかくされた現代的意義」、『新建築』、1956 年 7 月号、pp.13-16

左ページ左 和室の隅の勉強室 (木棚、テーブルも当時のもの)
 左ページ右 玄関から台所を見る
 右ページ 平面図 S=1:200



コア＝中心という思想

渡辺研司

CIAMにおけるコア＝中心

CIAMの書記官かつ広報的役割をしていたジークフリート・ギーディオンは、戦後CIAMでの議論をまとめた論文集、『現代建築の発展』のなかで、「都市生活の人間化」を語っている。

「個人の領域と集団の領域に釣り合いをとりもどそうとする努力は、今日、世界全体にわたってなされている。第8回のCIAM（イギリスのホデスドン、1951年7月）の主題として都市の核が選ばれた根本的理由は、このためであろう。核という言葉は、ロンドンのMARSグループ（筆者注：CIAMのイギリス支部）によってシビック・センターのかわりに紹介されたもので、間もなく一般に使われることになるであろう。オックスフォード英語辞典によれば、核という言葉は1300年ごろから中心の最も奥の部分、あるものの心臓を意味していた。そしてそれは、MARSグループによって『コミュニティを、ただ個人の集合ではなく、コミュニティとする要素』と定義された」¹⁾。

ところで、MARSグループの関係資料をみると、ギーディオンが指摘するように、「シビックセンター」が会議の主題として提案されたのは、CIAM7が開催された後、1949年11月3日のMARSグループ総会においてであった²⁾。しかし、MARSグループによって都市のコア＝中心³⁾という主題が、その後、積極的に議論されたかどうかは定かではなく、記録をみるかぎり、単独で議論のテーマに取り上げられた形跡はない⁴⁾。

つまり、MARSグループとしての関心は、都市のコア＝中心とは別のところにあったといえる。それは、CIAM8と同時開催されたイギリス祭にみられる都市におけるピクチャレスクの応用であったことだけを、ここでは指摘しておく⁵⁾。

都市のコア＝中心という主題を議論していたのは、MARSグループ内よりはむしろアメリカに移住してきたCIAMの主要メンバー、ホセ・ルイ・セルト、ギーディオン、ヴァルター・グロピウスが主体であり、その問題提議も彼らによって促進されたといわれる⁶⁾。また、CIAM7でル・コルビュジエが提案した「CIAMグリッド」を、アテネ憲章の都市計画への応用するという問題も継続され、グリッド化という方法論を使い、さらにコアのあり方を分析的に論議する動きが進められていた⁷⁾。

CIAM会議での議論と第二次大戦後という時代背景を鑑みれば、都市のコア＝中心という概念が生まれた理由として次の2点が指摘できるであろう。

1. 戦前からCIAMで活動をつづけていたセルト、グロピウスなどのヨーロッパの建築家が、終戦から5年がすぎてもいまだCIAM内の主義主張が明確になっておらず、それゆえ、アテネ憲章を都市計画に応用し、さらにそれ以上の強いアイデアが必要であると考えたこと

2. 戦後の思想史の潮流において、フランスのJ.P.サルトル、ドイツのM.ハイデガーの実存主義にみられる人間中心主義の思想が、社会的、文化的運動の背景となり、CIAMの都市のコア＝中心という思想を促進したこと

この2番目の思想的背景について補足すれば、ダルムシュタットでの「人間と空間」と題した討論会がCIAM8の1ヵ月後の51年8月に開催され、そこでハイデガーは有名な講演「建てること、住むこと、考えること」を発表している⁸⁾。

この3つの概念が、53年以降のCIAM会議で基本テーマとなった、「HABITAT」と結びついたという⁹⁾。また、この討論会は50年から始まっているのだが、その際、近代芸術の危機に関する歴史的考察を行った、ゼードルマイヤーの『中心の喪失』（1948）をめぐって議論されたことが注目される¹⁰⁾。

「中心の喪失」の公式とは、つぎのようにまとめられる。個々の芸術はすべて自律性、自足性、完全なる純粋性を求めて努力する。その結果、かつての個々の芸術がすべて和合し、互いに接触しあったひとつの共通の中心から離れ去ってしまう。造形芸術は、中心から外れ、人間全体の周辺に關係があるテーマに傾いている。総体的人間像はますます成功しくなり、不確かで、歪曲され、破碎され、混乱化し、デーモン化した人間存在の像が、ますます眩惑を獲得していく。

こうした、近代芸術が基盤とするものを喪失しているという危機感に対する認識は、もう一度、建築、都市におけるコア＝中心を取り戻そうとするCIAMにとって、思想的な強い奨励となる働きをしたと考えられる。

コアという思想の誕生の背景には、戦後アメリカに移動した、ヨーロッパ出身のCIAMの中心メンバーの建築家による、モダニズムのさらに強固な理論化（グリッド化）と人間中心主義への意図が存在している。そして、戦後CIAMの活動における世代間の齟齬は、都市のコア＝中心という概念をめぐる姿勢の差異にある。

丹下健三のコア＝中心

日本の建築界にコア＝中心という概念が広がった

契機で、まずもって考えられるのは、日本人初の正式なCIAM参加となったCIAM8での丹下健三の〈広島計画〉の発表がある。まずもってと断わったのは、CIAMの意図するコア＝中心の思想と丹下の〈広島計画〉にはズレがみえ隠れしているからである。

49年から被爆都市広島再生に取り組んでいた丹下は、「国際建築」¹¹⁾に載った〈広島計画〉をみたグロピウスから、CIAM8への参加を前川國男を通して受けた。つまり、参加を要請されたわけで、自ら発表するという積極的な姿勢は、丹下にはもともとなかった。実際、発表の際に述べたことは、日本には広場を都市の中心とする思想はなく、西欧とは異なるコア＝中心のイメージを説明している。そして自らの〈広島計画〉は西欧で考える理想的なコアでないことを断わっている。つまり閉じられた広場としてのコア＝中心をおき、放射状に広がる都市計画の伝統をもつ西欧に対して、軸線としてのコアを提案している。しかも軸線の焦点は、被爆することによっていわばその存在を喪失し抜け殻となった原爆ドームであり、それは丹下自身によって発見されたものであった。

また、コア＝中心に対して丹下が抵抗したもうひとつの理由には、「Core」ということばへの翻訳が、コノテーションとして少なくとも核＝原爆を丹下に想起させたことが存在していると思われる。

のちに丹下自身によって回想されるのは、CIAMあるいは欧米への抵抗ではなく、このCIAM8で、出版物の上でしか触れることのできなかったヨーロッパの建築家と実際に会えたこと、ル・コルビュジエから前川をとおして、「よかった」と声をかけられたという、ありきたりな印象にすぎない¹²⁾。

丹下がコア＝中心という思想に対して積極的ではなかったという証左は、CIAM8の報告を兼ねた小論「ヨーロッパの郷愁」でも吐露されている。

「……僕は正直のところヨーロッパに幻滅を感じました。このCIAMは殆どヨーロッパで、生粋のアメリカからはあまり来ませんでした。(中略)世界の第二の技術革命について行けない。新しい技術で新しいものを作り出すという、内部からの力がない。だからといって、日本のように簡単にアメリカをまねたり、Sovietに走ったりするには余にも自負心がある。ヨーロッパは今の世界的現実には足場を失っています。彼等は今、伝統の上に立とうとしています。しかし、CIAMは、(中略)今は何か観念的後退が目立ちます。内部から発展する力を失いかけているように思われます。」¹³⁾

丹下は、戦後ヨーロッパの焦りを感じとり、CIAMの主題が、CIAMグリッドなどの方法論から、すでにヨーロッパにはいない建築家によるドイツ的で、より強力な観念的思想の理論化である、都市のコア＝中心にシフトしている現状をとらえている。そして、そのコアが閉鎖的であり中世回顧的であることと、コアをめぐる問題に世代間で相違がみられる建築家の意見に結びつけ、次のようにもいう。

「Coreの問題も一部にはclosed societyへ後退しようとする傾向が非常に強くなって来ました。観念的なGemeinschaftの考え方が支配しています。形態的にも中世のPiazzaへの郷愁が非常に強く働いています。この傾向は、Le CorbusierやSertたちが南米や印度の未開社会に接したことにはじまっているように思われます。(中略)若い人たちは、伝統、風土の基盤に立つよりは、むしろ技術の上に立とうとしています。その人たちは、よりAmericaか、よりSovietに近づきつつあります。ここでは、二つのgenerationの隔たりが非常に感じられました。」¹⁴⁾

いわばヨーロッパ中心の観念論に対する丹下の批判は、CIAMのコア＝中心を「腐った芯」と唾棄したイギリスの若い世代の建築家、アリソン&ピーター・スミッソンと共通する姿勢であった。その3年後、54年に彼らは親(CIAM)殺し＝エディプス的組織、チームXを結成するのは、よく知られている。

スミッソンにとってみれば、都市にひとつのコア＝中心を形成しようとする動きは文字通り権威主義的(統制的)な一元論による運動に思えたのである。スミッソンがチームXで掲げる思想は、いわばコア＝中心の反対の概念である、クラスター、アソシエーション(連合)といった、多元主義、連想主義を基盤とするものであった¹⁵⁾。

丹下によるコア＝中心の理解は、西欧的に閉じられた広場中心主義的な発想、つまり実体としてのコアではなく、軸線を持ち、都市に開かれた空間であり、いわば「不在(虚)のコア」であった。不在のコアとは、前述したように、言外に「核」の不在＝平和を意味していることを丹下は無意識のうちに感じとっていたはずである。その視線の先には原爆ドームという虚としてのコア＝中心が配置される。

これまで多くの論者が、〈広島計画〉の配置計画、あるいは造形的源泉は、丹下による戦前のふたつのコンペ¹⁶⁾とル・コルビュジエによる〈ソビエト・パレス計画〉にあると指摘している。し

かし、コルビュジエやサーリネンからの剽窃をあげつらうより、丹下が不在のコアをこの〈広島計画〉でどのように表現しようとしたのかに注目すべきである。〈広島計画〉以降の丹下の関心は、不在のコアを、実体あるコアという空間で埋めることだった、といえるのではないだろうか。(わたなべ・けんじ)

- 1) S.ギーディオン著、生田鮎訳、『現代建築の発展』、p.142、みすず書房、1961年
- 2) MARS Archives, RIBA, SaG/94, A Minute of General Meeting 3. 11. 1949
- 3) coreの訳語は普通、芯、核、心臓などであるが、ここではコア＝中心とする。
- 4) 拙論文、「イギリス近代建築運動におけるMARSグループの活動に関する史的検討」、1999年、東京大学、補足資料「MARS (CIAM) 活動年表1933-1957」
- 5) 拙稿、「1951年CIAM第8回会議とイギリス祭についてーイギリス近代建築運動におけるMARSグループの活動に関する研究 1933年から1957年までを中心に その3」、1998年度日本建築学会関東支部研究報告集参照。
- 6) J.Bosman, CIAM After the War: a Balance of the Modern Movement, The Last CIAMs, RASSEGNA52, 1992, pp.6-21
あるいはCIAMの都市計画における言説を扱った著書として、E.Mumford, The CIAM Discourse on Urbanism 1928-1960, MIT, 2000参照。
- 7) J.Bosman, op.cit.
- 8) M.Heidegger, Building Dwelling Thinking, Basic Writing Martin Heidegger, Routledge, London, 1994
- 9) J.Bosman, op.cit.
- 10) H.ゼードルマイヤー著、阿部公正他訳、『中心の喪失』、美術出版社、1965年
- 11) 「広島計画 平和都市の建設 HIROSHIMA PLAN」、『国際建築』、1950年10月号
- 12) 丹下健三、「一本の鉛筆から」、pp.61-64、日本経済新聞社、1985年
- 13) 丹下健三、「ヨーロッパの郷愁」、『国際建築』、1951年10月号
- 14) 丹下健三、前掲
- 15) Edited by A.Smithson, Team10 Meetings, Rizzoli, New York, 1991
- 16) ふたつのコンペとは、大東亜建設記念堂設計(1942)、と在盤谷日本文化会館(1943)

テクノクラシー・ユートピアの両義性

「代用品工業」にみる戦時下のテクノロジー

田所辰之助

1937年にはじまった資材統制のもとで、木材をコンクリートや金属材料に代替して用いていくためのさまざまな研究がなされている。建築では、RC造に代わって在来の木造、あるいは新興木構造などの技術が応用されて、軍需工場や訓練所、バラック庁舎などの建設が進められていった。また、より身近な問題としては、生活用品の木製化やいわゆる代用品の研究がこの時期盛んに行われていた。こうした技術開発に建築家やデザイナーが関わっていくことで、それまで理念的に追求されてきたモダニズムの合理主義的側面に、戦時体制という特殊な状況下にあるにもかかわらず実践への回路が開かれていったともいえる。

ここでは、商工省工芸指導所における「代用品」をめぐる研究にスポットをあててみたい。木造モダニズムの建築が直接の対象となるわけではないが、木材という材料を介して記録される、日本のモダニズムの一側面についてみていきたいと思う。

航空機の木製化

1943年、第二次大戦もすでに2年近くを経過し、きびしい統制下にあつてなお軍需物資の欠乏が深刻さを増していったところである。この時期の『工芸指導』という工芸指導所の機関誌をみると、「航空機の木製化」という問題が盛んに取り

上げられているのが目を引く。アルミニウムなどの金属材料の不足により、木材を代用材とした飛行機の設計に指導所の木工技術の応用が試みられていったのである。木製の飛行機というのはいまから考えるとやや突飛な発想のように思えるが、当時はイギリスのモスキートやロシアのラグ3型などの高性能機もあり、それほど夢物語というわけではなかったようだ¹⁾。ただし日本の技術では、これらの海外の先例のような、機体の総木製化は不可能だった。そこで、座席や操縦桿など、木材を部分的に代用材として用いることがまずは研究の対象となり、指導所において蓄積されてきた木材加工技術の応用がここに求められることになったのである。

技術的には、強度、耐久性、耐候性や重量などの問題が課題となった²⁾。当時の荷重試験の様子をみると、鉛の板を何重にも積み重ねて破壊限界荷重をテストするという、きわめて原始的で、今日からみると涙ぐましい努力が実際になされていたことがわかる³⁾。また、木材の曲面加工などの指導所の技術はそのまま利用されていった。その結果、たとえば木製座席として試作されたもののなかには、従来の金属製座席とはまったく異なる独自の形態をもつものもあった。「飾り気はつかぬ」が、「材料の歩止りという点からかなり苦心が払われ」た、つま

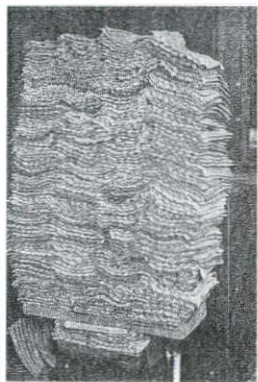
り、材料の無駄をぎりぎりまで省いた、極限の形態への挑戦がなされていたのである⁴⁾。

剣持勇は木製座席研究の実施担当者だったのだが、このプロジェクトについててきわめて実務的な観点からの関心を寄せている。当時指導所の嘱託だった山脇巖との連名で、「航空機体部品の木・竹製化」と題した論文を『工芸指導』誌に発表しており、従来の木材加工技術が航空機製作へいかにして適用されるべきかという、実施担当者らしい認識を披瀝しているのである⁵⁾。

そこに指摘されているのは、旧来の「目と指先と『勘』」に大きく依存してきた木工技術の、「近代化」に関わる問題である。

再編される木材加工技術

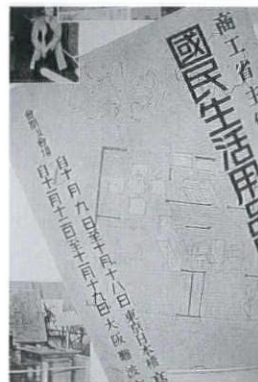
航空機製作にはその性格上、安全性の保証とそれを裏づける厳密な製作精度が要求される。たとえば、強度などとともに重要となる接着剤については、旧来の動物膠や大豆膠に代わる合成樹脂系接着剤の性質や用法に対する知識が十分に普及しておらず、その徹底化が急務だと剣持はいう。また、製品の強度に対する判断も、「これまでは経験的判断」であった「データ等により重きをおかぬやり方」を駆逐し、「力学的素養」の必要性を説く。そして、「これまでの木工技術は科学性



鉛板を積み重ねて行われた破壊限界荷重の実験



航空機の木製座席



商工省主催国民生活日用品展覧会ポスター

に欠けている」として、旧来の「工芸」を担ってきた経験的技術の、「科学」による超克が目指されていくのである。ここには、指導所が戦時下という時代に直面した新技術への対応が、具体的には伝統的技術の近代化を促していったという事態が示されている。

さらに、この技術の再編という点については、個別的な加工技術だけでなく、木工業界全体の再編を視野に入れた問題へも剣持は言及している。上記の論文の冒頭で剣持は、木工業者がしだいに戦時体制に回収されていく様子を、いくつかの段階に分けて説明している。

まず、支那事変期には商工省のキャンペーンに則り欧米への輸出工芸品の製作に携わった。また、大戦勃発後は、一方では軍需工業への転換が当然行われていくのだが、他方では生活用具の規格化や単純化など、やはり商工省主導による「国民生活用品工業」が奨励され、この分野においての技術提供がなされていく。そして最終的に、「国民生活用品生産業者は進んで椅子を作るに替わって飛ぶ座席を、筆筒、建具を作る手と工具を以ってグライダーを航空機体を産むべく日一日と結集」していく、とされるのである。

このように、木工業者が航空機の本質化に象徴される異分野への技術提供を行うようになったのは、戦争末期の急速な

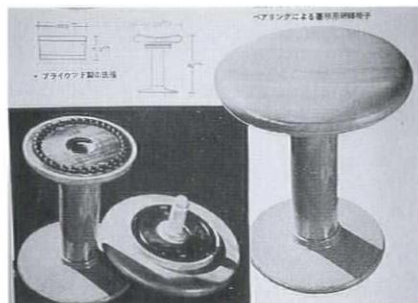
生産需要の拡大という要因だけでなく、輸出品工芸品や国民生活用品などの、一連の商工省の政策を経た後のことだった。木材加工技術の近代化は、緊迫した戦時体制における航空機製作という突然の要請によってなされたのではなく、商工省に主導された業界そのものの統合過程を介して、しだいにその推進がはかられていったのである。ここには、近代技術が戦時体制へ組み込まれていくひとつの典型的なプロセスが表れているのだが、ではこうした事態のなかで、当の技術者たちはどのような対応を示し、そこにどのような理念、あるいは理想を掲げていたのだろうか。ここでは、剣持が記している第2の段階、軍需工業に木工業界全体が回収されていく以前に、人々の生活必需品の改革が進められていった時期へさらに遡って、この問題についてみていきたいと思う。

代用品工業の誕生

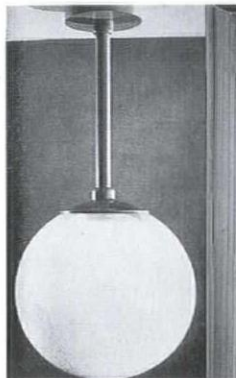
航空機の本質化などはその極端な一例もあるが、いわゆる「代用品」と呼ばれる製品の生産奨励が行われるようになったのは、37年の支那事変を受けての資材統制にもとづくものである。鉄や銅などの主要金属、また皮革やゴムなどの重要資材の使用がしだいに禁止または制限され、毎日の生活に欠かすことのできない実用品全般の代替が進められていった。

この時期、民間には代用品工業協会、国策代用品普及協会、戦時物資活用協会などが次々と設立され、また商工省内にも不足物資の代用技術を検討する科学審議会や、粗悪な代用品の駆逐を目的とした優良品選定協議会などが設けられている⁶⁾。さらに、一般への認知、普及という点からみると、38年から毎年開催されるようになった商工省主催の代用品工業振興展が大きな役割を果たしている。この展覧会は、工芸指導所が主導的役割を担って、代用品の品質向上と意匠の改善が目指されていった。展示品のなかには、たとえば、「硬化木材の回転板と合成樹脂のボールベアリングによる台所用回転椅子」や「ファイバーと木とガラスの天井照明具」などといった製品がみられ、合成樹脂やファイバーなどの新技術の応用が図られていることがわかる⁷⁾。そのほか、積層合板の家具、竹製品の試作など、藤井左内や剣持勇らを中心とした指導所のグループによる新製品の開発が行われていったのである。

だが、ここで採用されていった代用品の技術や新素材は、たんに元の製品の代用材として用いられるだけでなく、旧製品とは本質的に異なる性質を備えた、新たなデザインへの可能性を試行する場として考えられるようになっていくのである。



合成樹脂のボールベアリングを用いた回転椅子



ファイバーと木材を用いた天井照明具



アルミニウム製の調理器具類

代用品を越える「代用品」

1938年の『工芸ニュース』第10号は「代用材料特集増大号」と題され、工芸指導所における代用品技術の成果を広く公開したものである。所長の国井喜太郎は巻頭言で「代用品工業の重要性」という短文を寄せ⁸⁾、「代用品とは単に戦時下に於ける軍需資材の使用制限に依って生れ出た臨時的なものではなく、まして産業界は事変の終結に伴って再び旧原料に復帰すると云った一時的な考え方で之を見ているとすれば、それは甚だしい謬見である」と語り、代用品が戦時という特殊状況下における暫定的処置ではなく、「恒久的な変転となって、我が国産業機構を質的に一変してしまう」可能性を秘めていることを声高に主張している。国井は、代用品工業の成立が「明治維新後に進行した産業革命に匹敵する歴史的過程」とまで形容するのだが、それぞれの期待に程度の差はあっても、こうした認識は当事者たちにとってある程度は共有されたものだったにちがいない。たとえば、40年に工芸指導所において若手技術者たちによる「産業工芸の『外郭の問題』を拾ふ座談会」がもたれ、代用品問題がその際の中心的な話題のひとつとなっている⁹⁾。その冒頭で、「この頃は代用品と云ふ言葉もすっかり板に附いて、何時でしたか、名前が悪いから新興製品とかに代へるなんて事も云われました」と

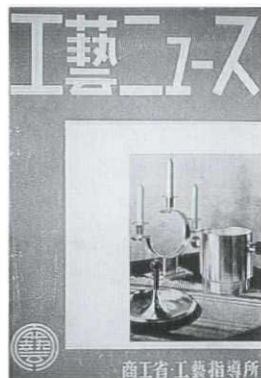
いう発言がなされるが、ここには、本来の製品の代用という意味合いを超えて、あくまでも新たな価値をもつまったく別種の製品であるというとらえ方が記されているのである。

この代用品の問題は、商工省を発信源のひとつとしながらも広く一般に知られることとなるが、たとえば建築界においても、「代用品の規格設計」というようなかたちで、木製の規格梁番や戸レールなどが当時の『新建築』誌に紹介された¹⁰⁾。そこでは、「生活用具及び建築、交通機関まで総て今日は所謂代用品といふ分類の内に包括され、既に代用品としての名称の価値を消失しつつある」などという状況認識が語られているが、これは工芸指導所の若手技術者たちとまったく同じ観点からの代用品に対する理解にほかならない。

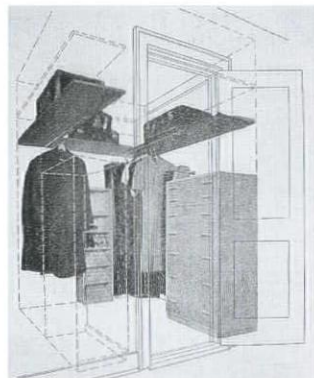
そしてさらに、代用品のデザインについて、「従来の代用品の大半の間違ひは、この過去の形態への無批判なイミテーションに基因する」との批判がみられる。代用品は、「過去に材料によって作られた物と、形態的には何等の関連も必要としない」はずであり、新たな材料に適した別の形態が可能性としてはありうる。そして、この新たな形態を生み出していく際の規範となるのが、「合理的な新形態で造形面に於ても優れたもの」、つまり「合理」という理念にほかならない。

代用品への理解が一般的になるにしたがって、このような代用品独自の価値の模索がはじめられていった。ここには逆説的ではあるが、代用品工業の確立を契機として、旧来の伝統的な工芸製品の超克とともに、合理性という近代的な価値規範もまた同時に定立されていったことが示されているのである。

こうした意味において、代用品工業とは、40年代以降の「国民生活用品」のキャンペーンなどともその枠組みを共有するものといえる。工芸指導所には、新材料に対する科学的分析、滞日中のブルーノ・タウトに指導されて開始された規格原型家具の研究¹¹⁾、そして工業品美化運動ともいわれるデザインの簡素化の試みなど、開設当初からの技術的蓄積があった。これらのテクノロジーが、戦時下における国民生活の標準を示すというこのキャンペーンに集約されていったのである。そこには、慣習にもとづく非効率的な生活を改善し、近代的で合理的な生活形態を実現させるという大きな目的があった。「代用品」がたんなる「代用」であることを越えて、新たな近代的な価値が投影されていく対象となりえたのも、人々が日常的に接している家具や実用品を通じての、生活の場自体の改善と近代化が望まれていったからなのである。



『工芸ニュース』第1巻の表紙



洋服の収納形式の研究



国民生活用品展における「啓蒙資料 簡素の美」と題されたパネル

国家統制のなかのテクノロジー

ところで、このように代用品工業が奨励されていった背景には、戦時の輸入制限による材料自給という経済的問題があった。つまり、満州や東南アジアを含む自立的な経済圏の獲得という国家的課題が、工芸指導所の活動を実践へ駆り立てていったのである。

工芸指導所が28年に開設されたのは、20年の戦後恐慌にはじまり、関東大震災による被害などもあって長期化していた経済不況の克服のため、外貨獲得を目的とする貿易産業の育成が政府主導のもとに実行に移されていったからである¹²⁾。その推進母体となったのが、25年の機構改革によって農商務省から分離独立した商工省だった。そして、この施策の中心にいた人物こそ、当時工務局長として産業合理化運動を指導していた吉野信次と、その直属の部下でもあった岸信介らの革新官僚たちだった。

とくに岸は、入省1年後の26年に派遣された欧米視察をとおして、ドイツ型の統制経済の手法に大きな影響を受ける。ドイツでは、第一次大戦の敗戦による経済的混乱を再建すべく、国家主導による産業合理化運動の推進が図られていた。帰国後まとめられたいわゆる岸レポートは、3年後に日本を襲った世界恐慌に対する有効な処方箋として、ときの浜口内閣に取り上げられ、日本における、そし

て商工省を中心とする産業合理化の大改革が実行に移されていくのである¹³⁾。

だが、この産業合理化運動は、テイラー主義やフォード・システムによる生産システムの再編という性格が一方ではあるのだが、他方では国家体制の強権化による自由主義経済の排除という面をあわせもっていた。後者の点は、ソヴィエトの第一次5ヵ年計画に触発された岸の国家社会主義的な経済統制論の立場を端的に示すものでもある。30年に商工省外局として設置された臨時産業合理局は、吉野の発案により生まれ、そして岸がその運営に辣腕を発揮した部局だが、商工省の全行政機能を駆使しうる強力な権限をもち、企業のカルテル、トラスト化など経済統制を推進しつつ戦時体制の基盤をつくっていったのである。

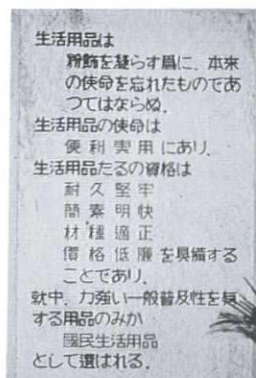
岸は42年に商工大臣として工芸指導所の東北支所を訪れて訓示を行っているが、その設立に際して、「直接仕事を取掌しておった」と述べ、みずからの関与を明らかにしている¹⁴⁾。工芸指導所は、こうした岸や吉野ら革新的テクノクラートによる国家統制論の最前線における実践の場であり、もっとも効率的なテクノロジーの行使が期待された機関でもあったのである。

産業合理化運動の回収

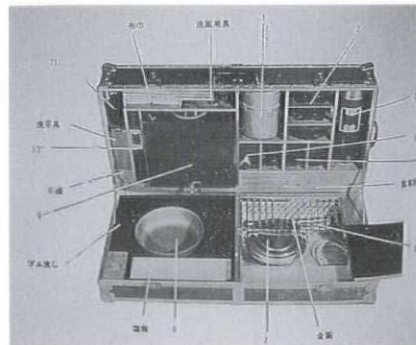
それでは、岸が参照したドイツの産業合

理化運動は、第二次大戦を迎えてどのような状況に至っていたのだろうか。1933年に政権をとったナチス・ドイツが、ワイマール期の合理化運動を担った技術者たちを排斥するのではなく、積極的に登用したことはよく知られている。「労働戦線」には、労働組合だけでなく、ジーマンズやAEG、IGファルベンなどの電機・化学工業を中心に、20年代前半に設立されたドイツ産業合理化局をはじめ、技術者たちを中心とする諸機関が統合されていった。また、軍需相フリッツ・トートはドイツ全土に張り巡らされたアウトバーン網の建設で知られるが、このトートの影響力のもとでドイツ最大の技術者組織VDI（ドイツ技師協会）はナチス体制への自発的参入を決定するのである¹⁵⁾。

また、こうした産業合理化運動の理念そのものが、ナチス・ドイツに包括されていったという側面もある。たとえば、AEGの総帥ヴァルター・ラーテナウは、ペーター・ベーレンスを芸術顧問として自社に登用し、電機製品のデザインの近代化を推進したことで知られる。だがその一方で、第一次大戦中には戦時原料局を舞台に統制経済の確立を目指し、戦後は復興大臣、外務大臣を歴任してワイマール共和国における合理化運動の理念モデルを構築した人物のひとりでもあった。とくに、「戦時会社」の設立による軍需物資調達と主要生産部門の組織化はナチ



国民生活用品展にて掲示された「国民生活用品」の選定基準



「現地用携帯家具」の試作品（携帯厨房）



商工省工芸指導所

ス・ドイツの経済政策にも影響を与え、トートの後任となったシュペアーによる、「工業の自己責任制」といわれる諸産業部門の一元化のモデルになったともいわれる¹⁶⁾。

このような、ナチス・ドイツにおける合理化運動の回収は、だが、ある両義性に彩られている。そもそもナチスは、ワイマール共和国における近代化、合理化路線の行き詰まりをその政治的躍進の大きな推進力としたものだった。19世紀以来のロマン主義的反動による西欧近代への反発のなかで、エンジニアたちはその社会的地位を長いあいだ確立できないままだった。合理化思想を統制的軍備経済へ結びつけ、全体主義体制を短期間に構築したナチスは、そのテクノクラートの操作性を保障しながら技術者たちを巧みに国家体制へ吸収していったのである。それは、ワイマール期における合理化運動の挫折を受けて、あらためて合理性、効率化などの近代的価値を採用するという逆説的な手法に依拠するものである。そして、このような戦略によってナチス・ドイツは、技術者たちの目には近代の超克とも映じた、技術主義的なテクノクラシー・ユートピアを彼らの眼前に提示したのである¹⁷⁾。

さらにもう一点つけ加えるとすれば、第一次大戦後の経済的危機への処方箋でもあった合理化運動は、科学的管理法な

ど社会的効率を最大限に追求するサン・シモン主義的な側面を導入しながらも、そのマルクスの社会主義へ至る回路を国家体制の強権化により回避するという性格をもつものだった。この意味において、技術者たちが全体主義体制へ吸収されていく過程は、西欧型のモダニズムでもなく、またマルクス主義的なモダニズムへのオルタナティブでもなく、こうしたイデオロギーによる潤色を避けながら技術者にとっての第三の選択肢をかたちづくっていったものでもあったのである。

モダニズムと全体主義

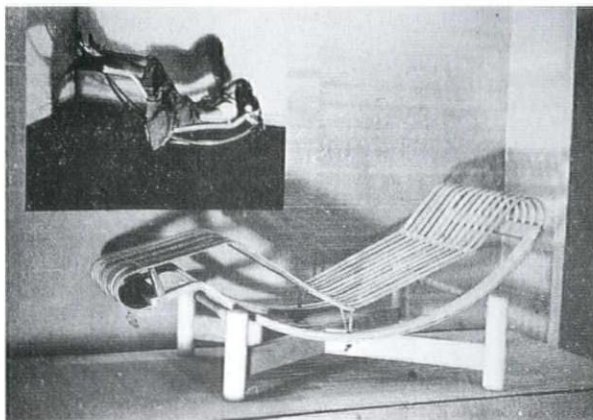
工芸指導所は、ある意味では、日本における、この第三の選択肢をデザイナーたちに用意したという側面もある。たとえば、のちに剣持勇は、やはり戦前、戦後をと通して工芸指導所に深くかかわった豊口克平らとの対談のなかで、とくに代用品を話題にして、「代用品だからゴムとか、皮とかにかわる……木材とか、竹とか。それは情熱燃やしたですよ。これはおもしろいから。それこそテクノロジー本位、機能主義的に正面からアプローチできるわけだからね」と述べ、当時の工芸指導所の様子を伝えている¹⁸⁾。ここには、戦時にもかかわらず、いや戦時であるからこそ可能となった、モダニズムの技術主義的ユートピアの実像が素直に回想されているのである。

剣持らが工芸指導所で代用品の開発に「情熱を燃やし」ていたころ、日本の建築、デザイン界には「日本的なるもの」の議論が席卷し、西欧型のモダニズムに対するロマン主義的な揺り戻しがみられた。資材統制下における、代用材としての木造によるモダニズム建築は、こうした議論のひとつの受け皿としての性格を持つものでもある。工芸指導所においても、「日本的即世界的」などとの標語が提唱され、日本主義の啓発が図られていた時期があった¹⁹⁾。また、タウトやシャルロット・ペリアンによる、日本の伝統的価値の発見、再定義も、工芸指導所の方向性に大きな指針を与えた。そして、こうした「日本的なるもの」のイデオロギーは、代用品やさまざまな生活用品を通じての国民生活の管理という、工芸指導所における計画主義的側面をも理念的に支えていったのである。テクノロジーが、「日本的なるもの」に表象される反西欧的価値と結合し、さらに反自由主義的な国家体制のなかでその効率を徹底化させていくという事態であるが、これは、ドイツにおいて合理化運動を推進した技術者たちが、ナチス・ドイツへ吸収されていった過程に一面では似通っている。

終戦を迎えると、豊口らを中心として、DH家具（DHはデペンダント・ハウスの略）とよばれる進駐軍の家族住宅



工芸指導所の試作品展覧会場のブルーノ・タウト夫妻。蔵田周忠と久米権九郎、指導所所長国井喜太郎とともに。



ペリアンのデザインによる、竹材を用いた寝椅子

で使用される木造家具の製作などが行われている²⁰⁾。

ここには当然のように戦勝国アメリカの諸技術が流入するが、それだけでなく、「代用品」や「国民生活用品」などに集約された工芸指導所の技術的蓄積も活用されていった。戦時下に開発された技術が、戦後になるとその対象を180度転回させる。こうした状況は戦後そこかしこにみられたものであるが、工芸指導所を舞台としたテクノクラシー・ユートピアもまた、こうした経路のなかにその痕跡を残すものである。

工芸指導所の若手技術者たちは、戦後の日本のインダストリアル・デザイン界を牽引するデザイナーへと育っていく。剣持は50年代のいわゆる「日本調モダニズム」の中心的人物のひとりであったし、豊口は70年大阪万博のディスプレイ顧問としてその力をつくすのである。

豊口は工芸指導所を「日本のバウハウスへの野心」と語りながら、当時の様子を、「何しろ商工行政下であって、工芸技術やデザインの量産性、科学性、総合性、国際性を一方でとりあげれば、他方では固有性、伝統性を強調する。国民生活の確立が先行だといえれば先ず輸出振興だといひ、大工業へのPRだといえれば消費者教育や中小企業の育成だという。そのうちに代用品だ、軍需用品だ、木製飛行機だ、戦争がおえると平和産業切換え

だ、進駐軍住宅だ、インダストリアル・デザインだ、クラフトデザインの世界進出だ、洵に目まぐるしい限りのゲリラ戦そのままである」と告白している²¹⁾。戦前、戦後をとおして、工芸指導所の歩んだ道程はたしかに「ゲリラ戦」であったのかもしれないが、一方では剣持や豊口らが、技術主義的なモダニズムの価値観を失うことなく、戦争という時代を通過することのできた、ひとつのルートを提供してもいたのである。

戦時下にあって、合理性をその内実とするモダニズムが、西欧近代の啓蒙的価値を排除したまま、全体主義的な国家体制と共存し合う。工芸指導所において観察されるこのような状況は、モダニズムと全体主義の関係を規定する問題が、全体主義という政治的状況の側だけにあるのではなく、モダニズムそのものに——テクノロジーが潜在的にもつ技術的合理性への盲目的追従という危険性も含めて——じつは内在するものでもあるという、「近代」という時代を再考するに際してのひとつの視座を示唆してもいるのである。

(たどころ・しんのすけ／ドイツ近代建築史、日本大学専任講師)

- 1) 宇野昌一、「航空機用木材の今昔と将来」、『工芸指導』、昭和19年9月号、pp.28-30
- 2) 剣持勇、「部品木製化の現況—基礎的な諸要項に就て」、『工芸指導』、昭和19年5・6月号、pp.4-9
- 3) 「木製機体部品の荷重試験」、『工芸指導』、注2)と同掲書の写真ページ
- 4) 航空機木製化研究係、「木製操縦者席の試作研究」、注1)と同掲書の写真ページ
- 5) 剣持勇、山脇巖、「航空機体部品の木・竹製化」、『工芸ニュース』、第12巻10号、1943年、pp.407-412
- 6) この詳細については、「物資統制の概要に就いて」、『工芸ニュース』、第9巻5号、1940年、pp.180-184
- 7) 図録「第三回代用品工業振興展出品本所試作工芸品」、『工芸ニュース』、第9巻10号、1940年、p.413
- 8) 国井喜太郎、「代用品工業の重要性」、『工芸ニュース』、第7巻10号、1938年、p.375
- 9) 金子至、「産業工芸の「外郭的問題」を拾ふ座談会」、『工芸ニュース』、第9巻2号、pp.60-66
- 10) 代用品協会指導部、「代用品の規格設計」、「新建築」、第19巻7号、1943年、p.109-111
- 11) タウトは1933年11月から翌34年3月までの短い期間だが、工芸指導所顧問として活動し、ドイツ工作連盟に範をえた「規範原型」の方法論を指導所にもたらした。ブルーノ・タウト、「タウトの提案」、『産業工芸試験所30年史』(工業技術院産業工芸試験所編)、産業工芸試験所30周年記念事業協賛会、pp.284-286、1960年
- 12) 工芸指導所の設立については、注11の『産業工芸試験所30年史』に詳しい。
- 13) 原彬久、「岸信介——権勢の政治家」、岩波書店、1995年
- 14) 「工芸指導所東北支所に於ける岸商工大臣訓示」、『工芸ニュース』、第11巻7号、1942年
- 15) 小野清美、「テクノクラートの世界とナチズム」、ミネルヴァ書房、1996年、p.357
- 16) 注15と同掲書、p.355
- 17) D.ボイカート、「ワイマル共和国——古典的近代の危機」、小野清美・田村栄子・原田一美訳、名古屋大学出版会、1993年
- 18) 国井喜太郎先生記念出版編集委員会、「デザインの先覚者国井喜太郎」、1969年。この対談部分は、柏木博、「日用品のデザイン思想」、晶文社、1984年、p.129に紹介されている。また、国民生活用品などの工芸指導所の活動については、柏木、「近代日本の産業デザイン思想」、晶文社、1979年、評述がある。
- 19) 国井喜太郎、「日本的即世界的」、『工芸ニュース』、第8巻10号、1939年、p.395
- 20) 小山正和編、「商工省工芸指導所編 デベナント・ハウス」、技術資料刊行会、1948年
- 21) 豊口克平、「日本のバウハウスへの野心」、注11と同掲書、p.260



ペリアンのデザインによる、臺座をクッションに用いた折り畳み用椅子

八幡浜市立病院伝染病棟

松村正徳（八幡浜市役所）
1954年





スロープ見返し

玄関と2階の隔離病棟をつなぐスロープ

インターナショナル리티の超越

木の白いモダニズム。

それは素材の転換という日本的なモダニズム再構築のひとつの結晶として輝き、

「インターナショナル・スタイル」を軽やかに突き抜けていった。

愛媛県八幡浜市役所建築課の一職員、松村正恒が1950年代にみせたデザインワークである。

生活世界の構築

反モニュメンタリズムへの密かな回路

田所辰之助

八幡浜市に残された作品群

松村正恒が八幡浜市役所の建築課へ職を得たのは1948（昭和23）年、戦後しばらくのあいだの浪人生活を経た後のことだった。「市役所に入ったのは、いわゆる食うため」とのちに回想しているが、1960年に退職、独立するまでの12年間は、松

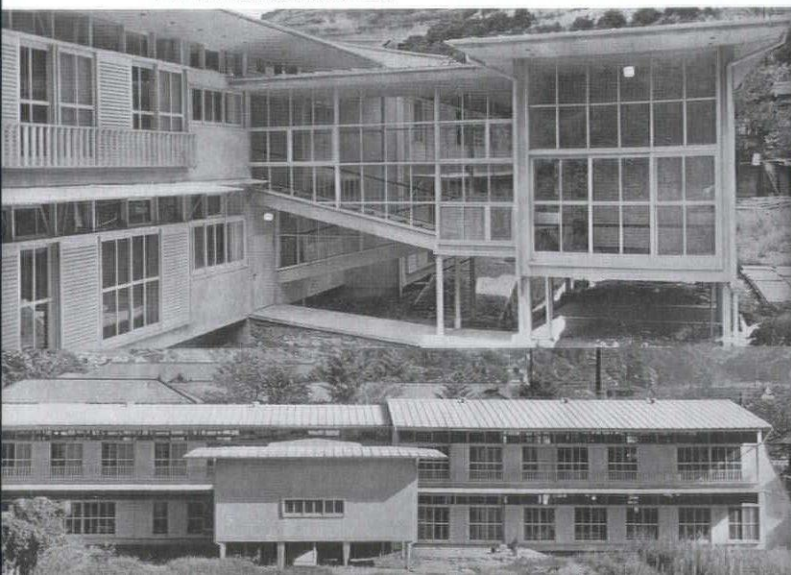
村の代表作がむしろ集中する時期でもある。

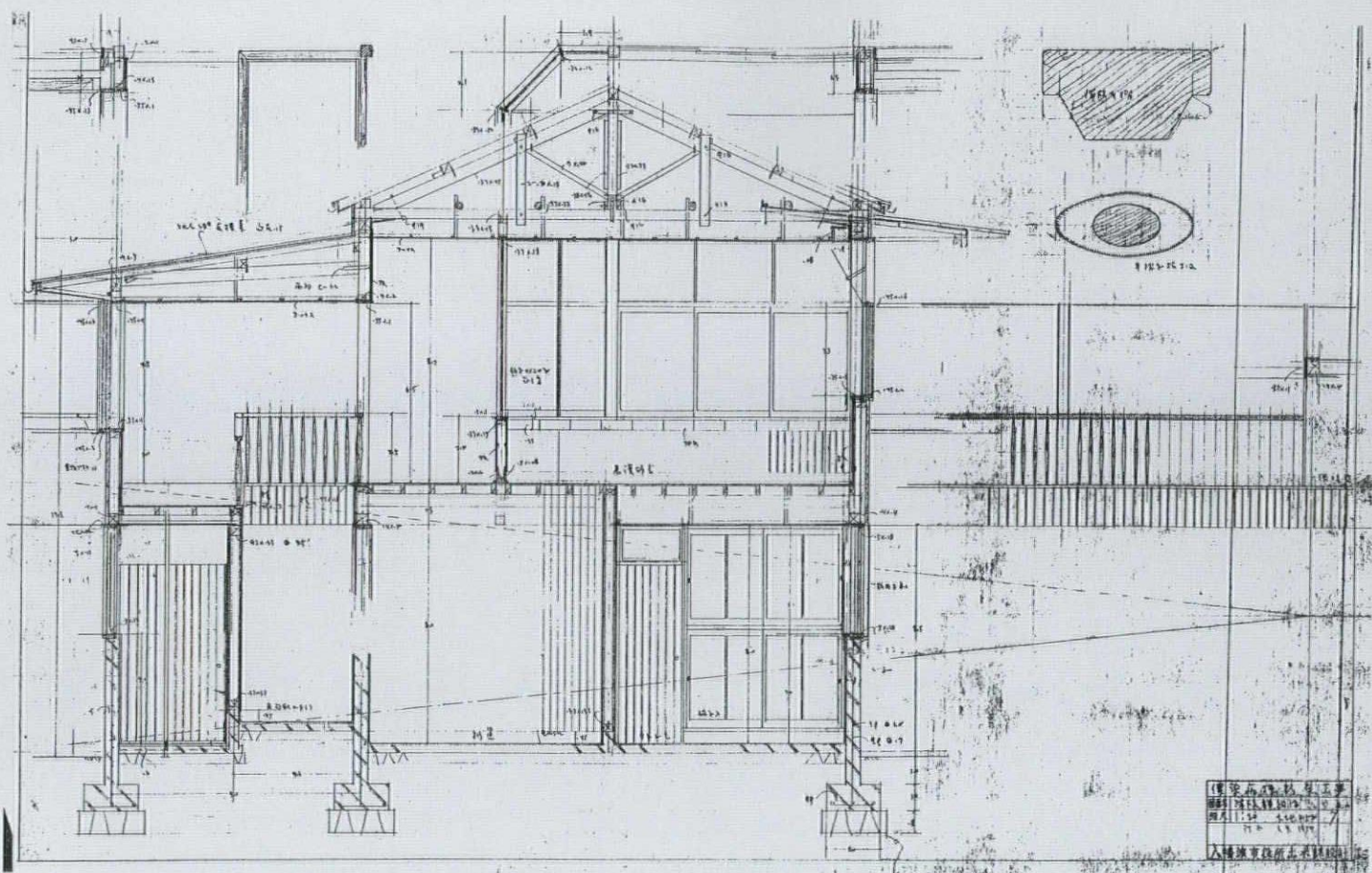
この間、松村は30を超える公共建築の新築、増改築の設計を担当している。公民館や魚市場、国体施設なども含まれるが、そのほとんどは、学校建築と市立八幡浜総合病院関係の諸施設である。しかし、いま現存が確認されているのは、そのなかでも三分の一に満たない。60年代になってからの数作品がRC造だが、それ以外はすべて木造の建築であり、老朽化を理由に多くが建て替えの対象となった。

松村への評価が集中する学校建築については、〈川ノ内小学校〉（1950）、〈長谷小学校〉（1953）、〈江戸岡小学校〉（1953～56）、〈日土小学校〉（1958）、そして〈白浜小学校〉（1960）の5校が残されている。〈白浜小学校〉をのぞく4校が木造で、ぬくもりのある親密な空間が、現在もそのままに息づいている。

上：八幡浜市立病院結核病棟の階段室
下：八幡浜市立病院結核病棟の立面

外観、中央のバルコニー下が玄関





八幡浜市立病院伝染病棟断面図。左側にスロープ部分の断面がみえる。右上に描かれているのは、このスロープの手摺のデザイン。S=1:80

すでに取り壊された〈新谷中学校〉(1955、大洲市)や〈神山小学校〉(1957)などを含めて、松村の学校建築が関心をあつめる背景には、50年代に活発となった学校建築の計画理論をめぐる論議があった(p.87コラム参照)。だが、学校建築に対する松村の姿勢は、むしろこうした計画学的な立場とは一線を画しており、たとえば、ユーザーの視点に立った細やかなディテール処理の集積が、その建築の性格を大きく規定しているともいえる。それは、八幡浜市役所時代における松村の仕事のもうひとつの軸となる、〈八幡浜市立病院〉関係の作品にも共通して見出すことができる。

ここではまず、学校建築という松村のイメージからすこし離れて、この〈八幡浜市立病院〉に関連した作品へ目を向けてみることにしよう。

八幡浜市立病院関連施設への取り組み

〈八幡浜市立病院〉関係では、東病棟の増築工事をはじめとして、〈結核病棟〉、〈給食棟〉、〈伝染病棟〉、〈看護婦宿舎〉(増築)、〈診察棟〉(改築)を50年代に松村は手掛けており、〈診療棟〉をのぞくすべてが木造の建築である。現在は「八幡浜総合病院」と改称され、建物もRC造に生まれ変わっているが、それ以前の本造時代は、あたかも松村作品の展示場のような観を呈していたにちがいない。

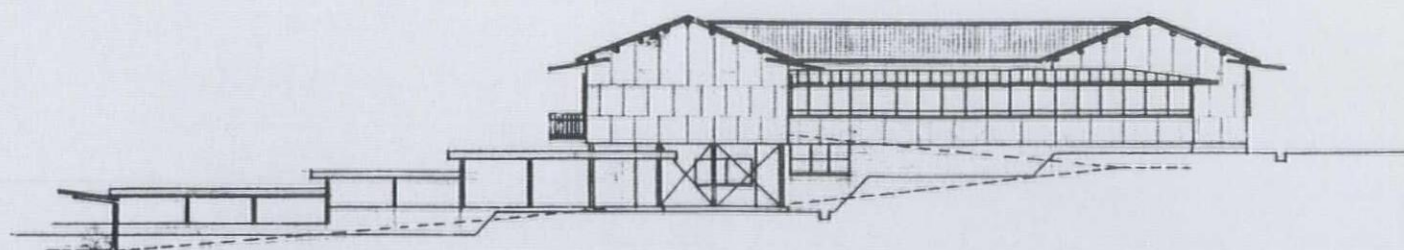
現存する市立病院関係の施設としては、54年の〈伝染病棟〉に松村の病院建築への取り組みをしるのことができる。この建築は、傾斜地に対応させて設けたスロープを、玄関と2階の隔離病棟をつなぐ媒介空間として用いており、松村の学校建築とくらべても遜色のない卓抜な構想力を示している。このスロー

プ空間の吹き抜けは、同時に診察室や看護婦室に隣接することで平面的にもこの建築のコアとなり、2階諸室の水平的な広がりや交差しながら開放的なプラットフォームを形成するのである。

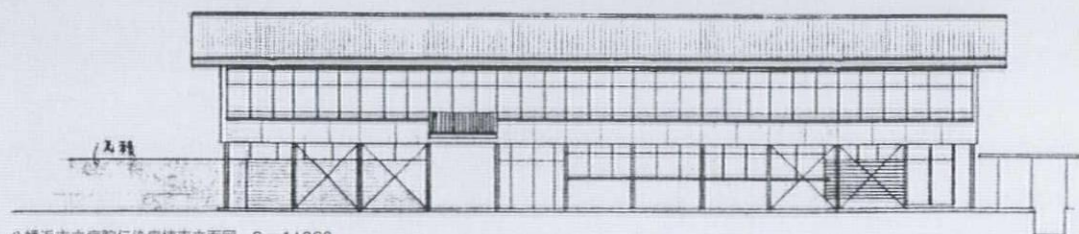
また、53年の〈結核病棟〉では、まるで「ガラスの箱」とでもいえるような、洗面所と階段室部分の造形が特徴的である。この部分はスキップフロアとなっているため、半階分のピロティのうえで軽やかに浮遊しているかのようにみえる。本来は鉄とガラスによって実体化されるはずのモダニズム建築の語法が、まさに木とガラスで代替されているのである。松村は竣工に際して、「二階へは、スロープで昇りたかったが、ゆるい階段でガマンした」と述べているが²⁾、〈伝染病棟〉のスロープのアイデアはこの〈結核病棟〉に由来しているのである。病棟部分では、棟全体にわたって外壁部分に欄間が設けられ、こちらも屋根が宙に浮いているかのような印象を与える。結核患者に十分な陽光と通風を確保するためのこうした工夫が、軽快で清潔感にあふれた表情をこの建築に付与しているのである。

だが、特徴はこうした外観ばかりではない。たとえば、清掃作業に配慮して床と接する部分を開け放した間仕切りや戸棚、結局は採用されなかったが1階病室の濡れ縁に設えられるプラントボックスのデザイン、そして直射光をささざるための鰹戸や上げ下げ窓などの建具の工夫など、限られた予算のなかで実現されたさまざまな仕掛けは、松村がつねに使用者の使い勝手にデザインを傾注していたことを物語っている。

それは、看護婦宿舎における内部空間の構成にもよく表われている。この建築は、薄く張り出した軒先や庇に特徴がある箱型のモダニズム建築だが、内部はテラスにつながる共有ホールの吹き抜けを2階部分の廻廊が囲み、「親しみのある陽気なフ



八幡浜市立病院伝染病棟東立面図 S=1:300



八幡浜市立病院伝染病棟南立面図 S=1:300

ンイキ」の形成が目指された。「ただ望むところは、若い人びとが、生活を明るく楽しむ術を体得してくれることのみ」と松村は語っている。このような使用者の日々の「生活」への眼差しは、松村の建築に一貫して見出せるものである³⁾。

回収されていく生活世界

このように、人々の「生活」という次元を公共建築のなかへ還元していこうとする意識は、松村の設計活動の大きなフィールドとなった学校建築においても、もちろんその主要なコンセプトのひとつとなっていた。病院や学校というビルディングタイプを超えて、公共建築が権威をまとうのではなく、あくまでも市民たちの生活の場として認識され、開放された建築が志向されていくのである。

たとえば、松村の代表作〈日土小学校〉を見てみよう。この建築は周囲の環境と密接に関係づけられながら設計された。それは、本来は敷地北側の道路側に校舎は配置されるべきところ、南側の喜木川との親水性を設計に組み込むために川岸の大木を切り倒し、あえて水辺に立地を求めたことにまずなによりも象徴されている。2階の教室からは、外階段を使って、裏側の喜木川のほとりへ出ることができる。そして、図書室から張り出したベランダからは、対面する蜜柑畑が一望のもとに眺め渡せるよう設えられているのである⁴⁾。

運動場側は、幅広の間口をもつ1階の昇降口を介して、子供たちがすぐに屋外へ飛び出していけるようになっている。また、上部のハイサイド・ライトから光が射し込む明るく開放的な廊下は、いつのまにか吹きさらしの渡り廊下となり、そしてふたたび内部化されて緩勾配の階段へとつながられていく。2

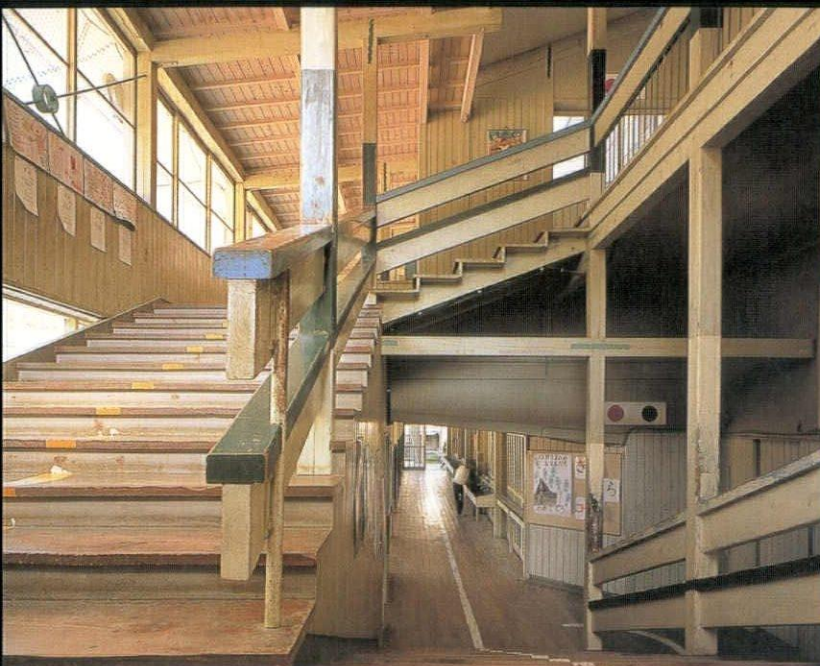
階の教室前の廊下においても、ところどころに本棚や陳列用の棚が設けられ、その下部は段状となって生徒が腰掛けられるようになっている。単なる通路空間ではなく、廊下空間を子供たちの生活の場として捉えていることが明瞭に理解されるのである。

松村の学校建築は、きわめて早い時期にクラスタープランを実現させた事例として知られるが、こうした平面計画上の刷新だけでなく、屋外や周辺の自然と密接に関連づけられた個々の空間の開放性や、生活空間としても機能する廊下のとらえ方にもその大きな特色がみられるのである。

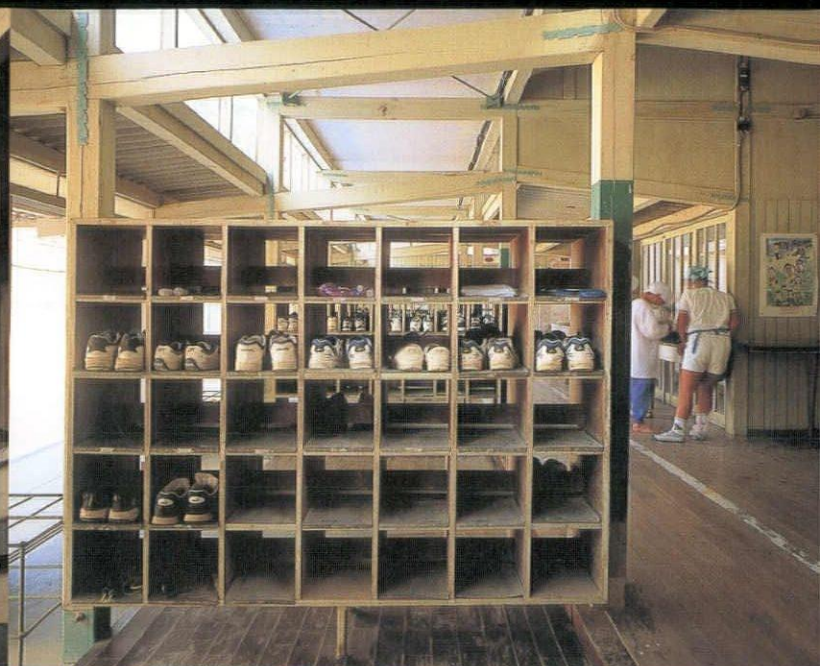
そして、このような、松村の建築にいわば血肉化しているかのような建築の開放性、親密性は、じつは松村の幼少時代の体験に遡ることができる。

松村は、八幡浜市の隣町大洲市に生まれ、父が小学校校長、そして垣根ひとつへだてて隣地が小学校という環境で育った。この学校では夜学校などが開催され、鍵をかけることなく地域に開放されて、青年たちが夜を徹して語り合うようなこともあったという。のちに語っているように、松村にとって学校とは「最初から生涯学習の場」であり、学校の設計は「ひとつの町、人の住む町の原型を造ること……。廊下は道、昇降口ホールは人の集まる広場」だったのである⁵⁾。こうした、地域の生活を支えるコミュニティセンターのような役割を担う、かつての開放的な学校の姿が、松村の学校建築の原風景をかたちづけている。

また、松村は、児童問題にも早くから関心をもち、学生時代には託児所建築の研究に没頭している。都内の施設の実地調査を行い、乳幼児の生活状況の観察に休日や当てていたという。保育問題研究会の会合に出席し、のちには同郷ということもあって教育科学研究会を主宰する城戸幡太郎とも知遇を得ている。



廊下をそのまま延長したかのような、緩勾配の階段



東校舎の昇降口に置かれた下足箱

さらに卒業後は土浦亀城事務所で修行時代を過ごす。その後竹内芳太郎に推されて農地開発営団に移り、新潟を拠点として数年間にわたり雪国地方の民家調査を行った。このときには社会事業研究所の浦辺史や、保育問題に関心を寄せていた塩谷アイらに同行し、東北地方の生活調査にも従事している。

学生時代からのこうした活動の成果は、雑誌『国際建築』の「特集・新託児所建築」にまとめられた⁶⁾。序文には「英米諸国における保育学校に関する最近の研究調査の紹介」とあり、多数の事例を紹介しながら、建築計画的な観点から幼児教育施

設の設計技術がまとめられている。30年代後半の『アーキテクチュアル・レコード』誌における保育学校建築の特集などが直接の参照源となっており⁷⁾、とくにイギリスにおける先進的な試みに松村が大きな影響を受けていたことがわかる。

そして、この論文の末尾で松村は、単に計画学的な留意点を総覧するだけでなく、学校建築の意匠に対する基本的な考え方を表明している。「終りに臨み保育学校の特質に関して要点を述べる」とことわりながら、「見栄を張ったり、誇張したスケールを暗示する様な建築は絶対に避けられる可き」として、学

喜木川に突き出したテラスと2階の図書室のバルコニー

日土小学校

松村正恒（八幡浜市役所）
1958年





中校舎の階段。階段上部に張り出しているのは、右側の音楽室倉庫



東校舎と中校舎をつなぐ1階の開放廊下

校建築に過度の造形的操作が加えられることに対する警戒感を示すのである。さらに、「記念性は学校建築において必要としない。保育学校の意匠は、大人の感情を満足させる必要は毛頭ない」として、象徴的な意味を担う記念碑的な形態が学校建築に持ち込まれることに強い忌避を主張している。

このような、建築がときとして具備してしまうモニュメンタリティへの強い拒絶の態度は、松村の建築につねに観察されるものである。そして、この認識は、人々との日常の生活世界と果敢に関わろうとするその建築像とまさに表裏一体をなしながら、

松村の設計活動をその根底において支えていたと考えられるのである。

開かれた眼差し：モダニズムとの接続

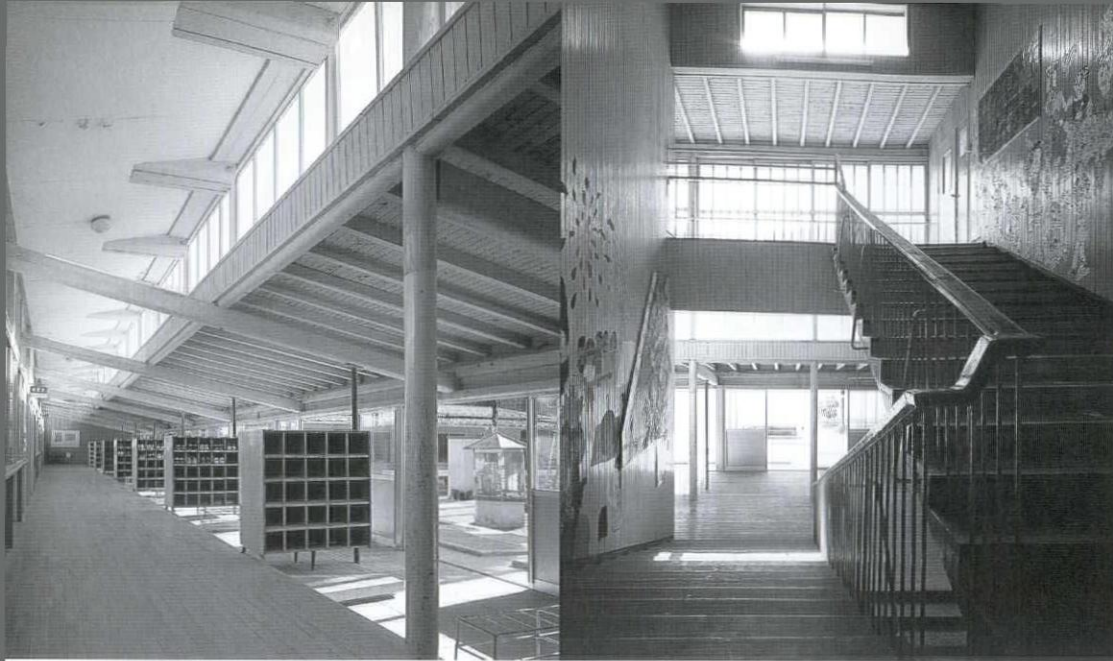
学生時代の松村は、こうした児童問題への関心の一方で、武蔵高工（現・武蔵工業大学）の師でもあった蔵田周忠に大きな影響を受け、海外の近代建築へしだいに目を向けるようになる。蔵田をとおして『国際建築』誌の編集長・小山正和と出会い、掲載論文の翻訳をしばらくつづけている。松村がおもに担当し

校庭側外観



江戸岡小学校

松村正恒（八幡浜市役所）
1953年



昇降口と採光用のハイサイド・ライト

階段室見返し

た論文には、W.グロピウス、R.ノイトラ、J.M.リチャーズなどによるものが多くみられる⁸⁾。翻訳というかたちではあるが、同時代の近代建築の理論を直接知る機会がこうして得られていたのである。また、当時銀座にあった新建築工芸学院にしばしば通い、川喜田煉七郎や市浦健からバウハウスに範を得た建築理論を学び、ヨーロッパの最新の近代建築についての知見を深めていったともいう⁷⁾。

さらに松村は、蔵田を助けて1958年にグロピウスの『生活空間の創造』を訳出している⁸⁾。この翻訳の底本となったのは、『Scope of Total Architecture』（1955）とそのドイツ語版の『Architektur』（1956）であるが、英語からの訳出部分は、ほとんどが松村の手になるものであるという。よく知られるようにこの著書のなかでグロピウスは、『「国際様式」なるものは存在しない』と言明し、『凝り固まった美学の適用』を廃した相対主義の立場を鮮明にしている。松村の反モニュメンタリズムへの視線も、蔵田を介してグロピウスの近代建築像から学ばれたものである可能性もある。

学校建築についても、ドイツからイギリスへ亡命していたグ

ロピウスが設計した学校建築から、平面計画の考え方などについて影響されたと語っている。グロピウスはイギリスにおいて、『村民学校（Village College）』という考えのもとに教育改革を進めていたケンブリッジシャー市教育委員会のヘンリー・モリスと知己になり、インピングトンという町にマックス・フライと協同で1936から39年に学校を設計した⁹⁾。この建築は日本へも紹介され、たとえば当時の『新建築』誌には「学校であると同時に、村の文化の中心として、成人の教養のための設備が併設」と解説されるが¹⁰⁾、これは「生涯学習の場」であり「地域の生活を支えるコミュニティセンター」という松村の学校建築の規定とも重なるものである。松村は、「あの頃、グロピウスがちょうどイギリスに亡命して、田舎の学校を設計したのが出ておりまして、昼間は学校ですけれども、村民の学校でもある、というふうにやっておりました」と回想している¹¹⁾。

松村はのちに、「伝統とか風土とか、まして地方性など、日本が既に世界の一地方に過ぎない。それさえ国籍を問われている今日、問題にするには当らぬ」と述べている¹²⁾。いわゆる「地方作家」として紹介されることの多い松村だが、雑誌や書

職員室棟の外観





松村正恒（八幡浜市役所）
1950年

川ノ内小学校

1階開放廊下と昇降口

外観、1階の底下が昇降口となっている

階段室、右側の通路を抜けて校庭へ出る

籍をとおしてであるとはいえ、このように海外の建築情報を貪欲に吸収していたのである。八幡浜時代、松村は上司の理解にも助けられて、海外雑誌の購入を怠ることはなかったという。回想にあるように、「相談相手もなく孤独な地方の暮しでは外国雑誌は親しい友の代りをした。中央の建築運動には全く無縁であったが、外国雑誌は自分の考えと力量を確かめる唯一の手がかり」だったのである¹³⁾。四国の一地方都市が松村の建築の舞台であったことはたしかだが、モダニズムに対する認識のありようは、世界の潮流に緊密に接続されていたのである。

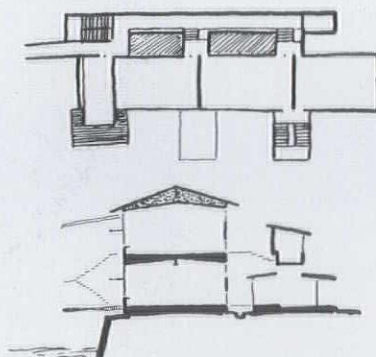
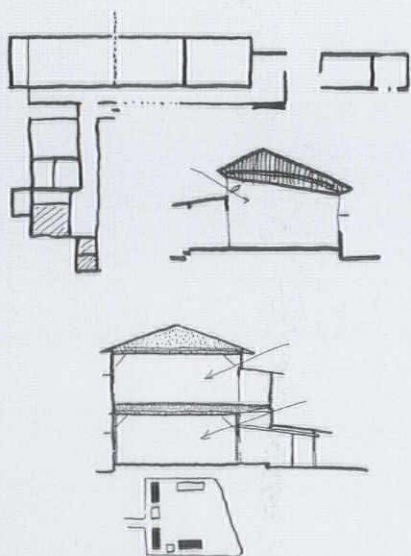
迂回される「伝統」という回路

松村の作品は、学校建築や病院建築などの種別にかかわらず、その多くが木造建築であり、繊細なサッシュの割りつけや細部のデザインに大きな特徴がある。だが、それらは、けっして「日本的」、あるいは「和風」といったイメージに収斂していくものではない。戦後の資材窮乏期、まだRC造が一般的ではなかった時代、木材の使用は経済的、技術的に不可避の条件でもあった。それゆえにこそ、木造という在来の工法を展開させる

ことによって、独自の近代建築の表現が目指されていったともいえる。佐々木宏が語っているように、「いわゆる和風でない木造デザインが、日本で育ったかという問題」¹⁴⁾に対するひとつの解答を、いみじくも松村の建築は体現しているかのように見える。

土浦亀城は、自邸に代表されるように、木造建築の特性を乾式構造（トロッケン・バウ）という新技術に置換することで、近代建築の表現を日本に定着させた建築家のひとりだった。だが、「白い箱型モダニズム」とも象徴的にあらわされる土浦の建築は、やがて前川國男や丹下健三などの、ル・コルビュジェの影響下にあった次世代の建築家たちによって乗り越えられていく。

丹下の「ミケランジェロ頌」にうたわれたコルビュジェ賛歌は、芸術家の「創造」への回帰を、戦争への傾斜をつよめる動乱の時代にあって、あらためて声明したもののでもある。〈大東亜建設記念営造計画〉、〈在盤国日本文化会館〉などのコンペを舞台にした丹下のその後の足跡は、直喩としての伝統的形態とその造形的強度を近代建築へ召喚することで、戦時下の日本に



松村による各小学校のスケッチ
左上：長谷小学校（1953年）
左下：江戸岡小学校（1953年）
右：日土小学校（1958年）



八幡浜市立病院看護婦寄宿舎

においてモダニズムの方法論を延命させながら戦後の展開の地盤を用意するという逆説的なものだった。

丹下と同じ1913(大正2)年に、同じ四国の地に生まれた松村の足跡は、だが、こうした伝統の問題をめぐる日本のモダニズムの潮流からは大きく距離を隔てて、その道程をまったく異にしたものである。「伝統とは、形式の問題ではない。……伝統を超えたとか、超えぬとか、棒高跳とは、ワケが違う。……ただ、形式だけ拝借して、伝統をうけついでなどとは恐れ入る」と後年になって松村は批判的なコメントを書き残している¹⁵⁾。日本の近代建築が自律的な表現の獲得を模索していた時代、それは同時に形式主義への傾斜という危険性を内在させながら進行していったのだが、松村はそうした日本のモダニズムに批判的に対峙し、「伝統」という回路を経ることはついになかったのである。「伝統とモニュメントという言葉が一脈相通じるようで仕方がない」とも語っているように¹⁶⁾、松村にとって伝統とモニュメンタリズムはたがいに、警戒すべき形式主義の変数として認識されている。松村の視線は、こうした潤色されたイデオロギーを回避し、学生時代から長い期間継続してなされた託児所建築の研究、また、今和次郎や農地開発営団の竹内芳太郎のもとで行われた民家調査のフィールドワーク¹⁷⁾などをとおして、人々の生活世界を強く志向するものとなっていたのである。

資材不足のなか、前川や丹下も木造による設計活動を余儀なくされた。だが、RC造による建設が本格的になると、それらの試みはつぎつぎと生み出されていく戦後のモダニズム建築の名作に受け継がれながら、一方で木造による独自のモダニズム表現の模索はその命脈が絶たれてしまったようでもある。しかし、八幡浜市における松村の一連の作品は、学校建築や病院建築などの建築型に限られるとはいえ、「木造」という日本固有の在来技術を介したモダニズム建築の可能性をあらためてわれわれに開示しているようにみえる。

そして、この可能性の発露は、反形式主義、あるいは反モニュメンタリズムとしての近代建築と、人々の日常の生活が接続されていくという、松村の近代建築像に裏書きされたものにほかならない。このような密やかな接続の回路を、日本の近代建築が戦時の混乱を超えてじつは架橋し得ていたことを、松村の建築はしずかに、だが雄弁に語りかけているのである。

(たどころ・しんのすけ)

1) 八幡浜時代を含め松村の活動全般については、松村正恒、「無級建築士自筆年譜」、住まいの図書館出版局、1994年。あるいは、建築家会館編、「素描・松村正恒」、建築家会館、1992年において概観できる。

2) 松村、「八幡浜市立病院結核病棟」、「建築文化」、1953年10月、pp.6-10、35

3) 松村、「八幡浜市立病院看護婦宿舎」、「新建築」、1956年5月号、pp.36-37

4) 日土小学校については、松村、「日土小学校」、「建築文化」、1960年2月、pp.35-39、有名建築その後「日土小学校—設計者は教育にどう貢献し得るか」、「日経アーキテクチャ」、1976年10月4日、pp.94-98、花田佳明、「モダニズムというノスタルジア」、「建築文化」、1994年9月、pp.55-60など。

5) 注1の松村、p.45

6) 松村、「新託児所建築」、「国際建築」、1939年9月、pp.375-398

7) 注1の建築家会館(編)、p.31

8) ウルター・グロピウス、「生活空間の創造」(蔵田周忠、戸川敬一訳)、彰国社、1958年

9) この設計経緯については、Reginald Isaacs: Walter Gropius, Bulfinch Press, 1991, pp.206-211に詳しい。

10) 「村のCollege」、「新建築」、1940年2月号、pp.70-74

11) 注1の松村、p.72

12) 松村、「地方営繕への提案」、「公共建築」、第37号、1967年、pp.37-42

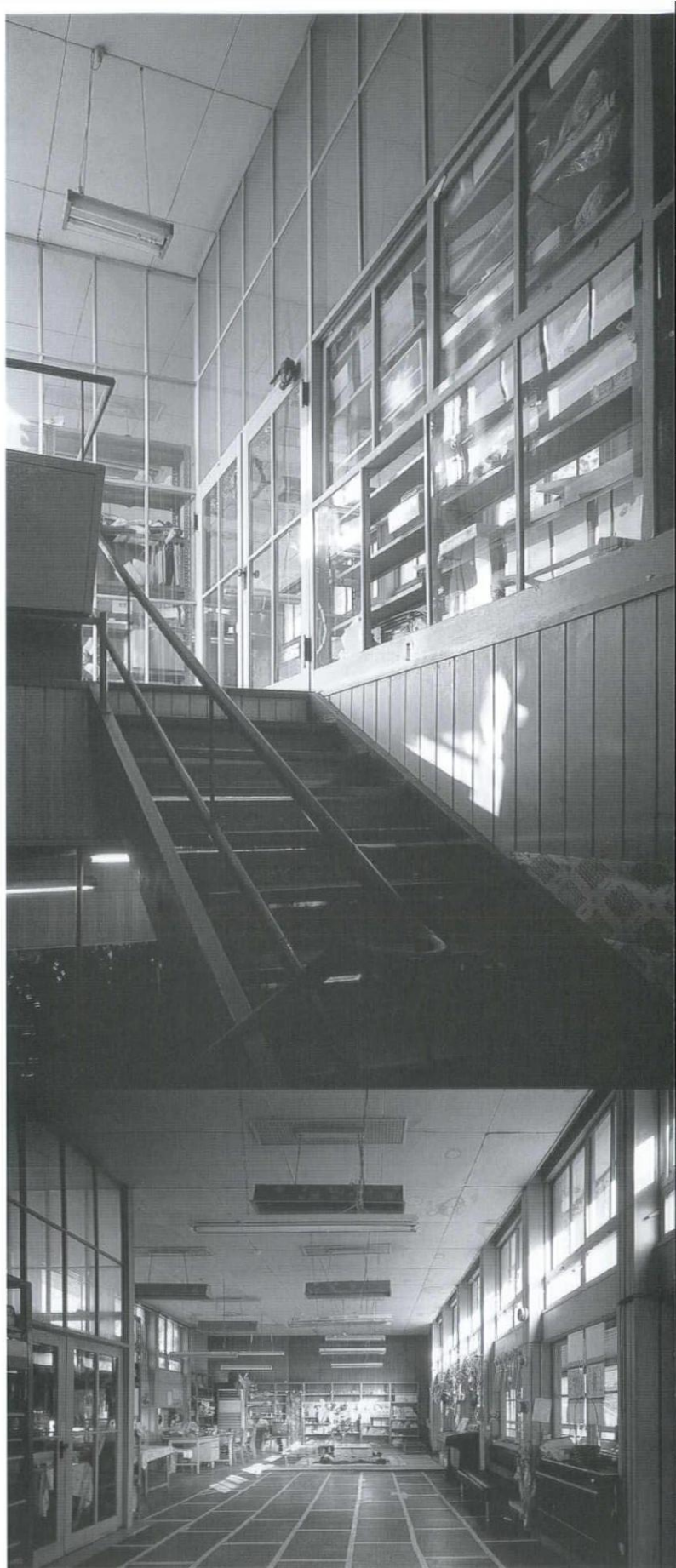
13) 注1の松村、p.39

14) 佐々木宏、「松村正恒の作風のことなど」、「近代建築」、第21号、1967年5月、p.106

15) 松村、「伝統論私見」、「国際建築」、第32巻1号、1969年1月、pp.15-18

16) 注15と同じ

17) 民家調査に関しては、たとえば、松村、「伊予の民家」、『今和次郎先生古希記念文集』(竹内芳太郎編)、相模書房、1959年、pp.177-187。



上：階段室見上げ

下：2階の一般閲覧室（現在は児童館遊戯室として使用）

八幡浜市立図書館

松村正恒（八幡浜市役所）

1951年



西側立面

コラム：

松村正恒の学校建築

両面採光という課題

戦後、学校建築の平面計画をめぐっては、50年代なかばから、配置計画における新たなユニットプランの模索がはじめられた。建築学会では当時、軽量鉄骨造による学校建築の設計規格を検討する研究が進められていた。その成果は、〈宮前小学校〉（東京都目黒区、1955）の建設に向けられていく。その過程で、従来の片廊下型平面や、その発展形である「フィンガー・タイプ」といわれるプランの欠点を克服するための方法として、「クラスター・プラン」の可能性が追求されていった。クラスターとは葡萄などの房のことで、教室が廊下から切り離されて、ホールなどを中心にひとまとまりになる平面形式のことをいう。この言葉がはじめて用いられたのは、54年の学校建築講習会においてであるといわれる。だが、じつはこの同じ年には、松村の設計になる〈新谷中学校〉がはやくも着工していた。この〈新谷中〉こそ、クラスター・プランの特徴を具現化させた、斬新な平面計画のもとに構想された学校建築だったのである。

松村がこうした平面計画を構想するに至った経緯には、学会で取り上げられた問題とはことなる背景があった。

松村は、旧来の一般的な木造校舎が、教室前の昇降口を兼ねた開放廊下のために、教室内への採光という点で大きな問題を抱えていることに着目していた。八幡浜は海に向かって山が迫り出し、場所により著しく日照を遮られる地域も多い。この問題を解決するために、教室の廊下側の壁面上部にも採光窓を設け、反対側の窓面からの採光とあわせて、2面からの同時採光を得るという方法が考案されていく。

この試みは、〈川ノ内小学校〉（1950）の開放廊下部分に、はやくもその原型となる姿をみることができる。ここでは、深い庇の出のために暗くなりがちな廊下に対し、横長の連続窓を庇の上部に設けることで採光がはかられている。松村が八幡浜市役所で設計にたずさわるようになって2年後のことである。

53年の〈長谷小学校〉では、廊下にかかる庇の位置を下げて、庇の上側に採光窓を設けるという断面形が考案され、教室への両面採光が実質的に可能となった。この断面形は、松村の学校建築のいわば基本型であり、以降くり返し、そのヴァリエーションが模索されていくことになる。たとえば〈江戸岡小学校〉では、はね出しの合わせ梁が2階の廊下を支え、そのため1階の昇降口は柱のない広々とした空間となっている。そして、庇上部の採光窓から射す明るい光がこの昇降口を満たし子供たちを招き入れるという、巧みな演出がみられる。

さらに50年代なかばになって、この両面採光という課題は、ひとつの抜本的な解法にいたる。教室への採光をさまたげているのは、教室前の廊下の存在にほかならない。松村は、この廊下と教室を分離することで、教室への採光の確保という問題を根本的に解決しようと試みる。前述した〈新谷中学校〉の平面計画がよく紹介されるが、〈日土小学校〉（1956）では、教室と廊下のあいだに設けられた中庭を光庭として機能させることによって、教室への両面採光が実現している。結果として、廊下から切り離された3つの教室がひとつの集まりをかたちづくり、ここにクラスタープランが形成されることになったのである。（田所辰之助）

『現代建築』（現代建築社）／第3号。1939年8月：p.15-6、p.44左下／第10号、1940年5月：p.44右下、p.48上段右上／第2号。1939年7月号：p.45-3, 4, 5

『吉田鉄郎建築作品集』（東海大学出版会、1968年）：p.15-4, 8、p.44上2点、p.47-11, 12、p.48上段左と右下

『JA』33号（新建築社、1999年）：p.025左下、同右下（©井上工業）、p.27中下（©新発田建設）

『前川國男作品集——建築の方法ⅠⅡ』（美術出版社、1990年）：p.38上の2点（©前川建築設計事務所）、p.51-20（©奥平精造）

『白井晟一全集 図集Ⅲ 公共施設』（同朋舎出版、1988年）：p.41右上の2点（©白井登麿）

『大きな声——建築家飯倉順三の生涯』（大きな声刊行会、1975年）：p.043

©潮書房：p.45-1, 2

『建築』1964年11月号（青銅社）：p.45-5／p.52上段3点（左©平山忠治）

『現代建築の軌跡——1925—1995「新建築」に見る建築と日本の近代』（新建築社、1995年）：p.47-6, 7

"Le Corbusier et Pierre Jeanneret Œuvre Complète de 1929—1934, 1934—1938", Les Éditions d'Architectures Zurich：p.47-8, 9, 10

『郵政省の建築——戦後の木造庁舎』（郵政建築研究センター、1985年）：p.47下段6点

『新建築住宅特集』1996年11月号（新建築社）：p.51-13, 14, 15

『現代日本建築家全集13』（三一書房、1972年）：p.51-16（©村井修）、p.51-17（©村沢文雄／彰国社）

Vincent Scully, "American Architecture and Urbanism", Frederick A. Praeger, Publishers, 1969：p.51-18

『数寄屋造りの詳細——吉田五十八研究』（建築資料研究社、1985年）：p.52中段3点（左と中©東京藝術大学、右©平山忠治）

『近代——時代の中の住居』（改訂版、メディアファクトリー社、1993年）：p.52下段中と右（中©清家清）

『国際建築』（国際建築協会）／1932年3月号：p.58左／1936年8月号：p.58右／1933年5月号：p.59左下／1932年3月号：上の図面2点

『新建築』（新建築社）／1935年6月号：p.58中／1956年5月号：p.85下段右

Deutscher Werkbund, "Bau und Wohnung", Akad. Verlag Dr. Fr. Wedekind & Co., 1927：p.59左上、右上

Karin Kirsche, "Die Weissenhofsiedlung", Deutsche Verlag-Anstalt, 1987：p.59右下の図面4点

『今日の建築』（朝日新聞社、1935年）：p.60左下、中下

『SD』／1988年7月号：p.62左／1996年7月号：下の図面3点／1992年4月号：p.51-19（©前川建築設計事務所）

"ABC; Beiträge zum Bauen", Serie 2 No.3, 1926：p.62中

『建築の東京』（都市美協会、1935年）：p.62右

『住まいの探求——増沢洵：1952—1989』（建築資料研究社、1992年）：p.69上（©増沢建築設計事務所）、p.52下段左（©平山忠治）

『住宅建築』1996年11月号（建築資料研究社）：p.69下

『工芸ニュース』（第1, 2, 8, 9, 10, 11巻）および『工芸指導』（第1, 13巻）：pp.72—77

『建築文化』1953年10月号（彰国社）：p.79下段左の上下2点

『素描・松村正恒』（建築家会館、1992年）：p.85下段スケッチ（©松村妙子）

上記以外の写真は清水襄

図面提供

愛媛県八幡浜市役所：pp.80—81

撮影協力

嶋村泰輝、佐藤民部、白羽根丈史

江戸東京たてもの園、ほか各建築の所有者の方々

大川三雄／おおかわ・みつお／建築史家

1950年 群馬県生まれ

1973年 日本大学理工学部建築学科卒業

1975年 同大学院修士課程修了

現在、日本大学理工学部専任講師。工学博士。

専攻は日本近代建築史。コンペ史や建築ジャーナリズム史など研究分野は広い。著書に、『近代日本の異色建築家』（共著）朝日新聞社、『近代和風建築——伝統を超えた世界』（共著）建築知識、『都市建築博覧・昭和篇』（共著）住まいの図書館出版局、『図説 近代建築の系譜——日本と西欧の空間表現を読む』（共著）彰国社、ほか。

矢代真己／やしろ・まさき／建築史建築論

1961年 東京都生まれ

1985年 日本大学理工学部建築学科卒業

1987年から89年にかけてオランダ政府給費留学生としてデルフト工科大学に留学

1996年 日本大学大学院理工学研究科博士後期課程修了

現在、千葉工業大学、日本大学、湘北短期大学非常勤講師。博士（工学）。

著書に、『オランダの都市と集住』（訳書）住まいの図書館出版局、『オランダの集合住宅』（共著）プロセス・アーキテクチュア、ほか。

田所辰之助／たどころ・しんのすけ／ドイツ近代建築史

1962年 東京都生まれ

1986年 日本大学理工学部建築学科卒業

1994年 同大学大学院理工学研究科博士課程修了

現在、日本大学専任講師。博士（工学）。

論文に『20世紀初頭のドイツ近代建築の発展過程における近代工芸理念成立史の研究』（学位論文）、ほか。

濱寄良実／はまぎ・よしみ／建築家

1964年 東京都生まれ

1990年 日本大学理工学部建築学科卒業

同大学院理工学研究科修士課程修了

1994—98年 中央工学校非常勤講師

1996年 同大学大学院理工学研究科博士課程修了

現在、浜崎工務店一級建築士事務所所長、日本大学非常勤講師。博士（工学）。

論文に、『世紀末転換期のオランダ近代建築にみる設計方法論の形成過程とその影響に関する研究——J.L.M.ラウヴェリクスの諸活動を通じて』、ほか。

清水襄／しみず・じょう／写真家

1951年 静岡県生まれ

1977年 日本大学芸術学部写真学科卒業

著書に、『近代和風建築——伝統を超えた世界』建築知識、『颯爽たる上州』煥平堂。雑誌連載として、『外国人技師の業績を訪ねて』、『橋のある町』、『近代日本の土木遺産』（以上、『建設業界』）、『近代産業建築』、『1・2清水の建築漫遊記』、『再読・日本のモダニズム』（以上、『建設知識』）、ほか。

黒沢 隆／くろさわ・たかし／建築家

1941年 東京都生まれ

1965年 日本大学理工学部建築学科卒業

1971年 同大学院理工学研究科博士課程修了

1973年— 黒沢隆研究室を開設計活動を展開

芝浦工業大学、山崎学園短期大学、日本大学理工学部などで講師を歴任し、現在も日本大学芸術学部、同生産工学部で教鞭をとる。学校法人・早見芸術学園理事長。

著書に、『住宅の逆説』（生活編／匠編）レオナルドの飛行機出版会、『翳りゆく近代建築』彰国社、『建築家の休日』丸善、『近代——時代の中の住居』メディアファクトリー社、『個室群住居』住まいの図書館出版局、『集合住宅原論の試み』鹿島出版会、ほか多数。

内藤 廣／ないとう・ひろし／建築家

1950年 神奈川県生まれ

1974年 早稲田大学理工学部建築学科卒業

1976年 同大学院修士課程修了（吉坂隆正に師事）

フェルナンド・イゲラス建築設計事務所（マドリッド）、菊竹清訓建築設計事務所を経て、

1981年 内藤廣建築設計事務所設立

1986—88、1990—95年 早稲田大学非常勤講師

1995年— 東京大学非常勤講師

作品・受賞に、『海の博物館』にて芸術選奨文部大臣新人賞、日本建築学会賞、吉田五十八賞、〈うしぶか海彩館〉にてくまもと景観賞、〈牧野富太郎記念館〉にて第13回村野藤吾賞、IAA国際トリエンナーレグランプリ、など多数。

著作に、『素形の建築』INAX出版、『Silent Architecture』Aedes、『建築のはじまりに向かって』王国社、ほか。

渡辺研司／わたなべ・けんじ／建築家

1961年 福岡県生まれ

1987年 日本大学大学院修士課程終了

1987—93年 芦原建築設計事務所

1993—98年 ロンドンAAスクール大学院

AA GradDip、博士（工学）

現在、連健夫建築研究室勤務、東北工業大学非常勤講師、ドコモ・ジャパン・ワーキンググループ・サブ・コーディネーター。

論文に『イギリス近代建築運動におけるMARSグループの活動に関する史的探究』（学位論文）、著書に『DOCOMOMO 20 JAPAN——文化遺産としてのモダニズム建築展カタログ』（共編、2000年）など。

●今回の特集に関連して写真展とフォーラムが開催されます。

「木造モダニズム

——A.レーモンドと松村正恒のマテリアル・デザイン」展

期間：10月11日(水)～10月23日(月)

11：00～19：00 土日祝休館 入場料500円

フォーラム：

「木造モダニズムの諸相——現代日本のオリジン1930s-50s」

講師：大川三雄・矢代真己・田所辰之助・濱寄良実

日時：10月20日(金) 18：30～21：00 会費(予定)

一般2,000円 学生1,000円

会場・問い合わせ：建築家倶楽部

東京都中央区銀座8-3-4 DKビル3F

Tel: 03-3289-1888 Fax: 03-3289-1897 (担当：藤岡)

知られざる名作 もうひとつの閑室をめぐって

西澤英和

本稿では余り知られていない〈聴竹居〉に付属した〈もうひとつの閑室〉について一構造研究者の視点から思いつくまま気楽に述べたいと思う。

藤井厚二博士は大正中期から昭和始めにかけて、京都大山崎の地に実験住宅を次々と建設したが、とりわけ第5番目の〈聴竹居〉は意匠の秀逸さにおいて夙に有名である。しかしながら、個人住宅ということもあって実際に接する機会には恵まれなかった。幸い、昨夏 日本大学の大川三雄博士の調査に同行し、初めて〈聴竹居〉を訪問させて頂くことができた。

玄関から客室を通って居室に入った室内はやや古色を帯びているように感じられたが、ひとたび家具類に掛った覆いを外し、照明器具にスイッチを入れたと、当初の流刺とした空間が70年の歳月を経て蘇った。そして真夏の強い日差しのもと、縁側の硝子戸を開け放つと、爽やかな風が室内を吹き抜けていった。

芝生の庭に出て豊かな樹木の間から遙か対岸の山並みを眺めながら、ふと東側の斜面に目をやると、瀟洒な建物の屋根が灌木越しに見え隠れしている。御当主にお聞きすると、博士が〈聴竹居〉に引き続いて作られた茶室とのこと（図1）。

俄に興味が湧いて見に行こうとしたが、庭からの通路はない。一旦玄関に続く石段路を下って、脇の細い藪を分け入ると、随分永い間使われていない茶室風の建物にやっと辿り着いた（図2）。北側には洋風玄関、その脇は水屋らしい。周囲を巡ってみると東と南面は急斜面で、数メートル下の雑草の繁った窪地には石組みが見える。「ここは

もとは池で、茶室は滝口の上に建っている」と教えて頂いた。

この時以来、〈聴竹居〉の丘の斜面に建てられた茶室のことが気になった心が落ち着かなくなった。そして何とか博士の図面を見ることができないものかと、偶々石田潤一郎博士にお聞きすると、京都大学建築学科本館の旧電話交換機室の奥に遺作図面が残っている筈とのこと。こうしてこの間から蒸風呂のような倉庫で埃にまみれながら資料を少しづつ自分なりに紐解き始めたところである。

こんな経緯のなか、梅雨の合間をぬってほぼ一年ぶりに〈聴竹居〉を訪ね、待望の〈もうひとつの閑室〉に初めて入ることができ、その見事な空間に感動した次第である。

いずれにせよ、本建物はよく知られている立礼のやや公的な〈閑室〉と対をなすもので、座式を基調とした私的な〈閑室〉として、美術品や茶を楽しむために建てられた、知られざる名作であることを少し紹介させて頂きたい。

もうひとつの閑室

建物概要

この建物の建設時期は明確ではないが、作品リスト（図3）の中に微かな記載が手掛かりになる。すなわち第1回から4回までの住宅に続いて、〈聴竹居〉と〈閑室〉のあと2行の空白を挟いて「他ニ住宅三戸」とタイプしてあるが、その空白部に「32 茶室 昭和六年五月ヨリ十月」との鉛筆書きがある。後述の博士の著作『床の間』の初版は

昭和9年6月であったが、その中に既にこの建物の床の間の紹介されているので、〈聴竹居〉の竣工後の昭和6年に建設されたとみてよいだろう。なお、この資料より「茶席」とも呼ばれたことがわかった。

博士の直筆の平面図や立面図（図4）などを見ると、上段の間として東側に長四畳と南に二畳中板（一畳台目中板）の席が設けられ、これに約三畳の板間が接する。また東北隅には三畳ほどの水屋があり、玄関の脇は雪隠、玄関の西側の底は待合の腰掛で、飛石伝いに中板の茶席西側ののにじり口に通じる。しかしながら路地としてはやや変則的でつくばい等何処に配されたのかよく分からない。或いは昔、石段路の脇あたりに庭門などがあったのだろうか？ なお戸の東側の襖は茶道口で、板の間の一角には腰掛け式一枚板の文机が造りつけてある。

屋根は〈聴竹居〉が東と南面を正面としているのに対して、この建物は入口のある北面と滝口のある東面を見せるように設計されたようである。また、中央には瓦屋根の越屋根が設けてあるが、これは妻面が〈聴竹居〉の芝生の庭から見えるように配され、煙抜けのがらりがアクセントとなっている。ただ屋根の印象は閑室や〈聴竹居〉とやや異なっている。恐らくこれら2棟の屋根は中央の4寸5分の瓦屋根から、同じ流れで2寸の銅板屋根に勾配を戻しているのに対し、この茶室は中央の瓦屋根を周囲の銅板屋根に被せているためと思われ、この建物の方が伝統的な和風の納まりに近い。いずれにせよ、入口付近の谷の流れを短く



図1



図2



図4 北立面図 S=1:200



図4 平面図 S=1:200



図4 東立面図 S=1:200

するとともに、表面からの通風を安定化させるためか、越屋根の北側の庇と東西両端の出は随分深い。

もうひとつ面白いのは青磁色の雁振である。(聴竹居)の瓦が黄色い釉薬瓦であるのと好対照をなしている。ところで岡崎の流水端に(藤井有燐館)という中国風の建物がある。これは大正15年、武田五一博士が設計された京都でも最初期の鉄筋コンクリート造の個人美術館であるが、面白いことにこの建物にも、黄色の釉薬瓦が使われている。この釉は中国では皇帝を象徴する最高の色で、古代からウランを使って作られたと聞いたことがある。ひょっとしたら、博士は恩師設計の同姓の藤井善助氏の(有燐館)に倣って珍しい黄瓦を(聴竹居)の本屋に用い、下の茶席には木立と調和する対比的な青緑の瓦を「藤焼」で自作したのではないだろうか—そんなことをつい想像した。

床の間の設計について

●長四畳の席

昭和9年に博士は京都の田中平安堂から『床の間』という青磁色の和紙に雲母を散らした和綴じの凝った表紙の本を出版、同13年に増補された。この本には38葉の床の間の図案に簡潔な解説が添えられているが、この中には現在(閑室)と呼ばれている建物の内部写真4葉とともに、実は「閑室の床の間」の図案(図5)が載せられているのである。これから判断すると博士は昭和9年頃には、本茶室とよく知られている(聴竹居)の北側の茶室の2つをどちらも(閑室)と区別せずに呼んでおられたようである。

ここで注目されるのは、其の一の解説に「室全体が約十二平方メートル(六畳)の広さで、之に畳を縦に並べた四畳と半畳とを敷いて、床の幅を四米とし、其のゆか面にも天井面にも高低を付して居ります。此考案は狭い室内に於ては、多くの陶磁器或いは生花などを配列して、鑑賞するに適せしめむと試みたものです。……必要に応じて其の下に膝を容れて体を近づけるに便ならしむるため

に……」とあり、この長い床は陶磁器(おそらく藤焼等)の鑑賞を目的としたことがはっきりと書かれている。

其の三には「十六・・右の小窓は床の間に對して必要ないかも知れませんが、眺望のため座しでの眼の位置を標準として設けたものです」とあり、淀川や対岸の山並みの眺望を楽しむように設計されたらしい。眺望を目的とした趣味の茶席としての(もうひとつの閑室)の意味が少し理解できそうである。

●二畳中板の席について

倉庫の資料の中に、墨書の覚書らしいもの(図6)があった。筆跡の他、候文であることや、「天井」を「天上」と表記していることなどから判断して、恐らく江戸期に書かれた指図の一部と思われるが、飛び石やにじり口の関係など、二畳中板の当該茶席と大変よく似ており注目される。博士はこのような茶室に関する古文書を多数収集研究されたいが、更に興味深いのは茶室の設計諸元表が野帳らしいメモとともに見つかったことである。そこには利休・宗旦の茶席の平面図とともに、床の間・窓・にじり口・茶道口・給仕口など各部の設計寸法が纏められていると共に、国宝妙喜庵(待庵)の各部の詳細寸法が方眼紙に細かく記載されている。これらはどうも現地実測のメモをもとに整理して比較表に纏めたものらしく、一寸した用紙の隅にもしばしば名席の各部詳細寸法が走り書きされている。これをみると、博士は名席の細部寸法を全て完璧に記憶されていたように思えてならない。

また、見つかった茶席のスケッチ(図7)と平安堂の『床の間』に掲載された本建物の二畳中板の席の竣工時の写真(図8)をみると構想から略設計を経てどのように最終案に到ったか臘氣なら辿ることができよう。

今ひとつこの席で注目したいのは、その建築環境——特に換気や照明に関する工夫の数々である。同書には次の記述がある。「右正面を床として居りますが、一畳代目中板の小室ですから、室内の気積の小なるに対しては、床の天井を高くなく、

其の見返しの壁に開閉自在の排気孔を設け、屋根裏を通じて換気の調節なし、床及び炉辺を主とした室内の照明に就いては、床脇の床に近い天井内に其の装置を施して居ります。にじり口に於て板戸の裏面に露はすのは、現代の茶室建築の如き仕上げの行届いて居る場合には、他と不調和であると思増すし、又其の大いさは周囲の状態に応じて定め、いづれの茶室にあつても之を一様にせねばならない筈はありませんから、此案では向かつて右の窓をにじり口に兼用します。」

一方、このような天井からの換気と対をなすのが、博士考案の「クール・チューブ」といわれる床下からの室内給気システムである。(聴竹居)では玄関を入った正面上段間と板間の段差部分に給気チューブが隠されている。このチューブの上部は木製、先端は陶製で外気の給気回路を形成しているが、これと同一のシステムがこの茶室の長4畳と板の間の境の段差部分にも設置されていることが分かった。実は筆者自身はこのような給気管は床下の埃っぽい湿った空気が入るのではないかと疑っていたのであるが、今回本建物の陶製管のAir-in-takerがどうなっているのかが分かって、その巧みに驚いた。室内側では、床の段差の中央に見えるのが木造の通気管で、その先端左方向に緩やかに傾斜して床下の地盤に潜りこんでいる。一方、室外側では、陶製管の先端の空気取れ口が今では植栽が失われているが、吸気口は前栽の石組の中に隠されており、当初は東斜面の森の爽やかな空気を植え込みを介して取り込めるようになっていたらしい。ここにも、「用」をさり気なく「美」に転ずる博士の奥床しさと、洒落気を感じない訳にはいかない。ひょっとしたらこの陶製管は小鳥のさえずりと一緒に妙なる音色を奏でたかも知れない。森の水琴窟のように……。

●にじり口のこと

博士の建物には雨戸が見当たらないのが前から気になっていたが、その理由が上記の解説によって理解できた。どんなに美しい和室でも、雨戸が室内から見えるほど野暮なものはない。茶席では下地窓など「付雨戸」にして障子しかないのが普

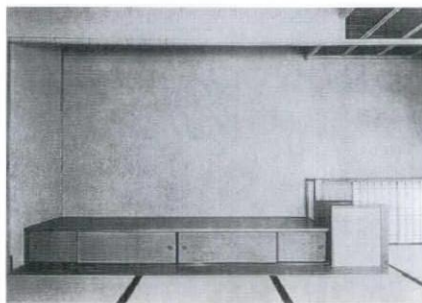


図5 閑室の床の間 (其の一)

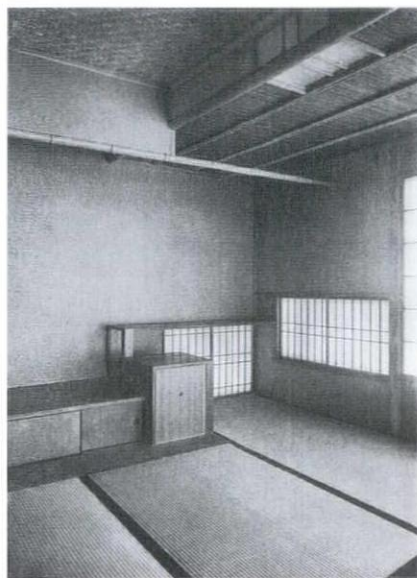


図5 閑室の床の間 (其の三)

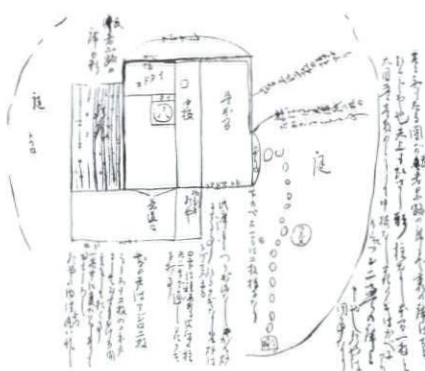


図6 茶室の指図

通である。この様な考え方を拡張して、にじり口の板戸をガラス戸に置き換えて粗野な感じを避けながら、その寸法も2尺×2尺2寸という古式に拘泥せず、時代に応じた斬新な視点でにじり口をデザインされたのであろう。

平面計画について

平面計画の下書き(図9)を見ると、1ミリ方眼紙に縮尺1/100で基本設計されたためか、よく博士はメートル法で設計したとされているが、実際には必ずしもそうではなかったように思われる。つまり京間畳の寸法を6尺3寸×3尺1寸5分とし、これに町屋の柱寸法3寸5分を内法で割りつけると、柱芯間寸法は6尺3寸+3寸5分→6尺6寸5分となる。一寸を30mmとすると、6尺6寸5分=1995mm→2000mmとなるので、これをメートル法の芯2メートルモジュールと言い換えてもよいが、基本はあくまで尺寸体系であることに変わりはない。因みにこの建物では畳の寸法を1910×955mmとし、大坂間のように芯で略設計されたことがわかる。但しこの建物の柱は2寸5分、壁厚はせいぜい1寸2分と極めて薄い。草庵茶席では通常柱は2寸8分、著名な千宗旦の1畳半の極限の茶席が2寸5分であることを考えると、国宝〈待庵〉よりも華奢な本柄で広間を実現しているのに驚嘆せざるをえない。博士の構造デザイナーとしての力量がいかに素晴らしかったかを雄弁に物語っている。

これと関連して博士の作品には二間四方即ち八畳間が案外少なく、梁間一間もしくは一畳半のやや縦長の間が多い。また畳の間に板の間が付属するという手法がしばしばもちいられている。この理由として、京間で内法設計することで人体尺に沿った無理のないデザインを実現できる一方、大工仕事の面からは梁間を一畳半以下に絞ることで構造的な無理を回避し、さらに板の間だけでは吸収しにくい寸法誤差を畳で調整できることを指摘できる。これと関連して思い出されるのは〈聴竹居〉の玄関・客間・縁側・居間の教室に渡る板間の仕事である。ここでは敷居と各室の床面が大工

泣かせの所謂「さすり」(今様にいえばユニバーサル・デザイン)の床を数厘の狂いもなく納めてある。荒床でしかも70年を経てこれほど見事な精度を保つ木工事を極自然に行った酒徳棟梁の並々ならぬ技量が伺われるところでもある。

一般に日本家屋では八畳間が何かと便利であるが、博士は長四畳など余り一般的で無い部屋割を採用しているにも拘らず機能性は極めて高い。恐らくこれは時に大きな床の間を付属させることによって、実質的には八畳より大きな開放空間を実現させているためであり、更に、構造デザインの面からは、主要居室の一部に床の間状の空間を貫入させると、その隅に柱が増えて構造強度が向上するというメリットもうまれる。これを保証しているのが、正方形グリッドを用いた貫入デザインである(図9右上)。博士の設計した部屋は大抵細長いのが、実は正方形を基本に半間または間中分を部屋のユニットを適宜ずらして、各室を鴈行させて細長く見せている例が多い。このような計画手法は御殿など大規模な伝統的和風建築によく見られるが、これを室内という小さな空間単位に応用した点が大変興味深いのである。これもまた極限まで細い柱で、強靱且つ優美な木造建築を実現しようとした博士の高度な構造テクニックと言える。

室内展開図について

展開図(図10)をみる限り天井高の最大値は長四畳の床の間-3500mmである。この部分は瓦葺きの腰屋根に相当しているが、これ以外は長4畳の竹網代天井の2500mmである。この数字で思い出すのはF.L.ライト設計の国重要文化財旧山邑家住宅の客間などの基本階高がこれと同じ100インチだったことである。内法は173という記入からみて、京都の町屋に多い5尺7寸を基準としたようである。

なお、天井高を実測すると、当初設計案よりやや低く、長四畳の竹網代天井部が2250mm、萩天井部分が2000mmなど250mmほど低く設定されていた。また板間の天井高は2400mm→8尺

で、床や畳の間の上がりは1尺であった。

また、室内の水平分割や横材の取付け方法にも独特の手法が採用されている。例えば部屋の中柱に3方向から取りつく鴨居(写真11)については、南北方向の鴨居の内法高さは5尺8寸で東西方向のそれは1寸落として5尺7寸としている。また窓台(写真12)についても一方を畳寄天端から400mm、他方を370mmとして一寸の段差を設けているのである。この理由としては、柱への横掛材を同一高さで「ほぞ差し」にすると、柱の断面欠損が大きくなる。特に本建物の柱はのた付2寸5分の杉である。襟輪で軸部を固める上で、このような一寸段違いにする構造的に有利である。これも博士の構造強化への配慮のひとつと思われる。

これと関連して気になるのは軸部を固めるために、筋違や力貫を用いたかどうかである。和風建築に通し貫をいれるのは常道であるが、ひとつ気になるのは、偶然見つけたメモ書き(図13)である。ここには「藤井先生が……」と随所に書かれているので、酒徳棟梁自身かもしれないが、棟梁からの聞き取りを記したものと考えられるが、次のような構造にかかわる一節は興味深い。

- (1) 〈聴竹居〉では柱に穴を掘ると弱すぎると云うので大壁にし、柱に欠込みを設けて貫を側面から釘打ちとした
- (2) 筋違を針金で十字に引っ張ったりしたが、面白くなかった
- (3) 「第2回住宅ハ研究の為注意 土台ナシ 壁貫ナシ 屋根ハ裏板ナシ」
- (4) 第3回住宅は研究のために胴差に小梁を落とすと(たとえば大入れ蟻のように)弱くなるというので、手違いで留めた……など、伝統的な和風建築の手法である貫を避けようとしたことが示唆されており、興味深い。恐らく、博士の目指した建物は極限の美意識——例えばこの茶室のように柱、敷居ともに2寸5分、襖の框の厚みはわずか6分5厘である。これほど小さい杉材に貫穴を設けるのは、筆者でも避けた

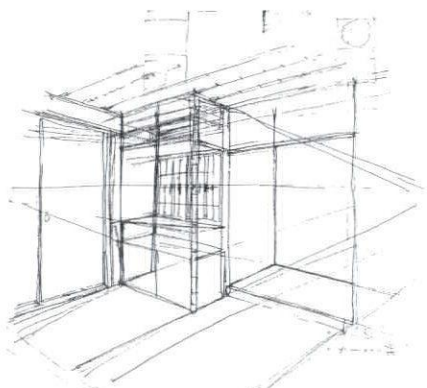


図7 二畳中板の席のスケッチ

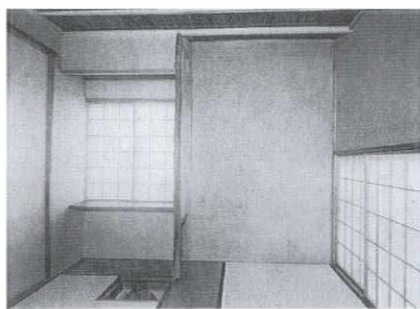


図8 二畳中板の席の竣工写真

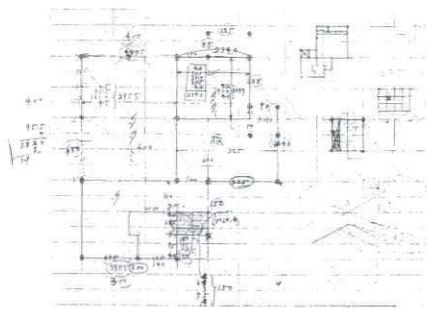


図9 建物の平面計画のプロセス

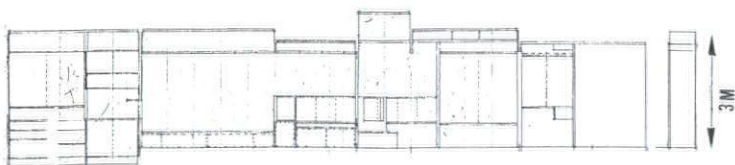


図10 展開図 S=1:200

いところである。恐らく博士は貫穴を出来るかぎり少なくする方法として、上述のように横材の取付け高さをわざと1寸逃げたり、さらに板の間を低く、畳の間を1尺あげるなど、わざと床面に段差を設けることによって、柱の断面欠損を避け、かわりに何段もの位置で細い柱を横材に固めるといふ手のこんだ構法を採用したのではないだろうか？ よく腰掛と座式の視線高さを同じにするためなどと言われているが、もうひとつの重要な意味は極小断面の柱梁架構の構造強化にあると思われるのである。

このように本建物では、貫や切壁など数寄屋系の技法が用いたのか、あるいは上述の第2、3回住宅や〈聴竹居〉のように独特の添え貫などの工夫を凝らしたのか、あるいは全く別の手法を考案適用したのかなど、土壁の技法ひとつについても興味をつきないものがある。

このように博士の構法の奥深さには限りがないが、もうひとつ付言したいのは、随所——特にあまり見えないところに使われた桐などの厚板広幅の良材である。例えば〈聴竹居〉の客間の雲板は普通8寸でよいところ、尺2寸位はありそうだ。欄間もしかり。造り付けの地袋や文机の天板もこれら意匠要素の全てが実は重要な耐震・耐風の構えとして機能するように計算されているようである。このように建築における「構造」：「真」、「機能」：「善」、「意匠」：「美」の完璧な融合を随所にみることができるもの博士の作品ならではのである。

このような視点から今改めて「床の間」を読みかえてみると、博士は自由で近代的な設計の規範として、書院風のもしくは武家風の「真」の広間よりも、「草」に流れる一歩手前の「行」の空間を好んだことの意味が少し分かる気がした。構造デザインの観点からみると、長押を用い内法高さを厳格に守る「真」の作法よりも、室内の横掛材についてその寸法や位置を自由に選べる草庵茶席風の設計のほうが、限界まで部材性能を追求するうえにおいて、構造家としての技術を発揮できる余地が大きく、それだけ新しい空間表現を創造

できる可能性が高いためである。

博士の下書きには所々に構造計算の跡が残っている。恐らく、計算尺や時には算盤を縦横に使いながら、数学的に綿密に検討されたのであろう。博士は大正2年という早い時期に恩師武田五一博士の指導のもと、構造の大家日比忠彦博士とともに、大阪朝日新聞社という最初期の大規模な鉄骨鉄筋コンクリート建築の設計施工に携わったが、実はまだこの頃の日本はフランスのHennebique社の特許に縛られていたのである。このような時代に先駆的な高層建築を実現したことを思うと、藤井博士がいかに優れた構造のバイオニアであったか想像されよう。博士の作品には、このような世に先駆けた構造家ならではの構造技術の確かさが伝わってくるのである。

まとめにかえて

博士の作品の根底にあるのは、紛れもなく堂々たる日本建築の古典への造詣の深さである。しかしながら、博士の造形は明らかに古典に学びながら、それを越えた独創性に満ちている。その空間は今見ても鳥肌が立つほど美しく、斬新且つ現代的である。今から70年以上も前、このような洗練された前衛の和の空間表現を眼にした人の驚きはいかほどであったろうかと想像せずにはいられない。ひょっとすると、近世初頭千利休が創出した草庵茶席という全く新しい空間造形に接した人々の驚きにもやや通じるものがあつたのではないだろうか？

博士は何故、欧州巡遊後京都帝国大学に奉ずるや広大な大山崎の山麓を購入し、妙喜庵の隣に初の実験住宅の建設に着手したのかを改めて思う。再び〈聴竹居〉を訪れて直観したのは、博士は我が国の近代建築の理想を草庵茶室——その原点としての国宝〈待庵〉——に見出したからではないだろうか？ 今に残る伝統的木造建築は、社寺仏閣や書院建築、民家町屋など全て世界に誇りうる文化遺産であるが、博士はそのなかでも草庵茶席に建築手法の普遍性と近代性、そしてなによりも「美」を見出したのではないだろうか？ そして、

このような独創的な建築美を創出した大茶人千利休に博士は建築家として、また研究者としての理想像を見たのではないだろうか？ 今一度利休の原点とその視線に立つべく、その緑りの地、大山崎の自然のなかで独自に国宝妙喜庵〈待庵〉に学ぼうとしたのではないだろうか？——そんなことを帰りがけ坂道を下りながら思った。

世事にまみれず「和敬静寂」の姿勢を貫きつつ、芸術性豊かに生きた博士の僧形の肖像を見ると、利休を理想とし、一人の茶人、一人の大いなる町人、そして学者としての生きた博士の姿が彷彿としてくる。

〈聴竹居〉の岡は今も荒らされることなく、〈待庵〉とともに悠久の自然の中にある。殆ど語られることのない此の茶室も、草木とともに博士の美意識を今に伝えている。

この〈もうひとつの閑室〉もそろそろ一度手をいれるべき時期が近づいているが、最近〈聴竹居〉の床下などから白地に絵付けされたばかりの花器等が沢山発見された(図14)ので、これら未完の「藤焼」を70年ぶりに焼成し、滝口や池庭を修復して、〈もうひとつの閑室〉からの眺望がどのようなものであつたかは是非再現したい——そんなことをふと思った。

知られざる名建築——〈もうひとつの閑室〉について気楽に話させて頂いた次第である。

(にしざわ・ひでかず／構造学者、京都大学講師)

■著者略歴

1951年大阪生まれ
1974年京都大学卒業
1994年京都大学講師
現在に至る

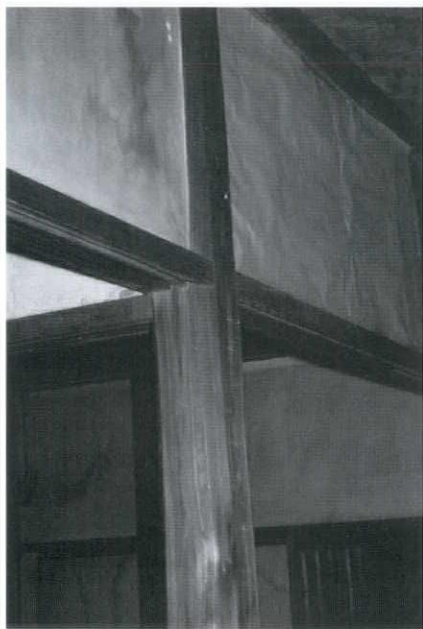


図11



図12



図13 棟梁のメモ書き

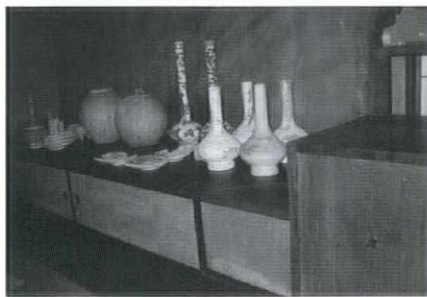
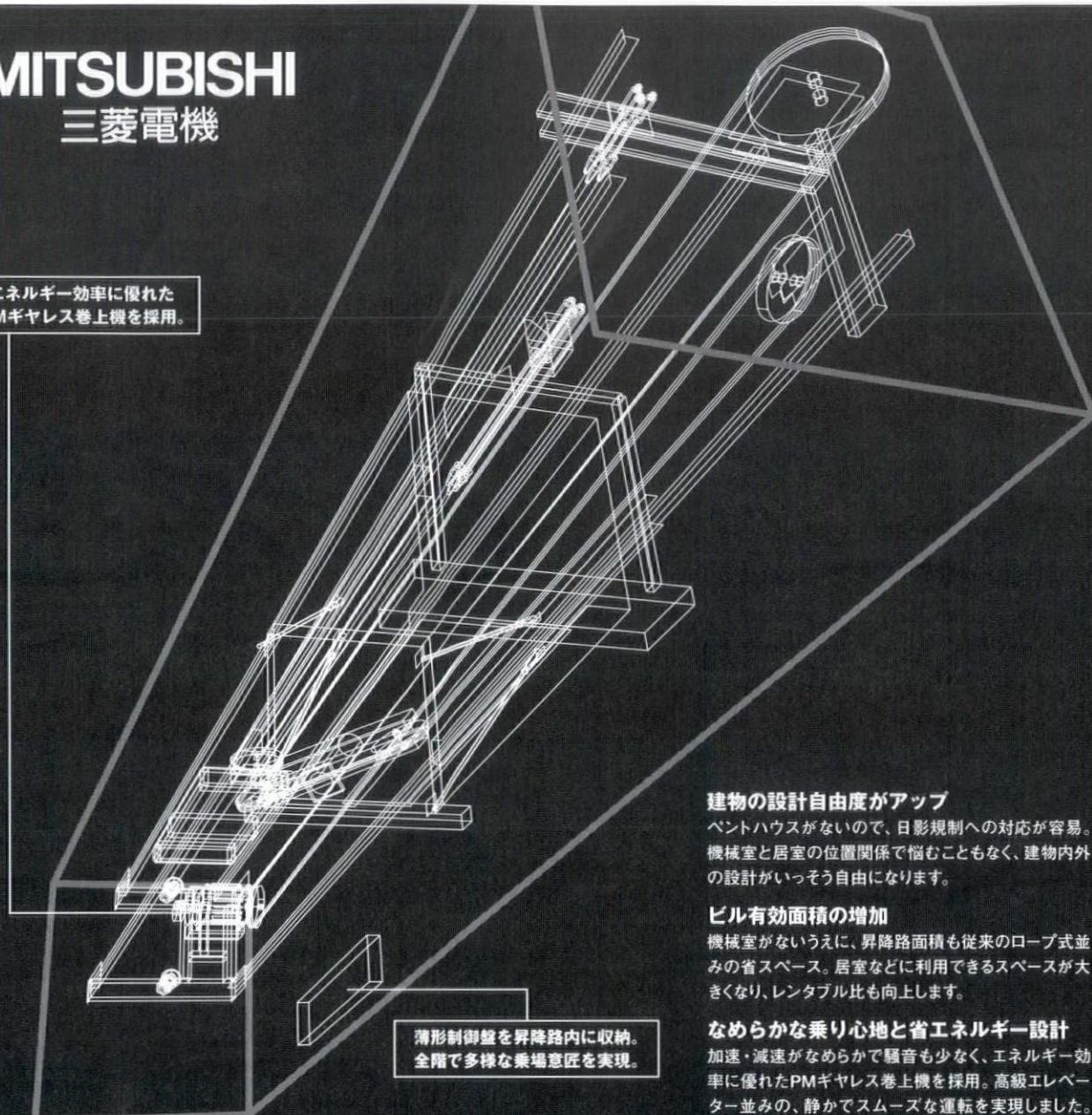


図14

MITSUBISHI
三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。



薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

新登場

エレパック

ELEPAQ

三菱エレベーター
機械室レスタイプ/乗用・住宅用・寝台用

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

快適な移動空間の創造 (Comfortable)

エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社 〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-2-3 (三菱電機ビル)
本社ビル事業部 TEL. (03) 3218-4544

SD Review 2000

The 19th Exhibition of
Winning Architectural Drawings and Models
Space Design

SDレビュー2000

第19回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

[入選者]

岡田周也+大庭 晋+住谷 覚

川人洋志

齋藤 誠+石田建太郎+アレックス・エレンバーガー

三分一博志+坂野博行

末包伸吾

中島貴光+安宅研太郎+西澤徹夫+儀賀咲恵

二宮 博+菱谷和子/Studio 2 Architects

野澤良太+栄元正博+中村秀樹+日立建設設計

原田真宏+原田麻魚

藤本杜介

矢口博幸+I.C.A

安田光男

山岡嘉彌

吉田 晋

ライフ アンド シェルター社/松野 勉+相澤久美

[主催]

鹿島出版会SD編集部

[大阪展共催]

大阪芸術大学

[後援]

朝倉不動産株式会社

[協賛]

ノールインターナショナルジャパン

大阪芸術大学

[審査員]

横 文彦(建築家)

岡部憲明(建築家、神戸芸術工科大学教授)

芦原太郎(建築家)

小川晋一(建築家、近畿大学工学部助教授)

鹿島昭一(鹿島建設 取締役相談役)



[東京展]

会期：

2000年9月20日(水)→10月1日(日)

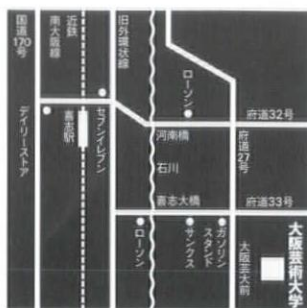
12:00→19:00

土・日・祝日も開催

会場：

東京都渋谷区猿楽町18-8

ヒルサイドテラスF棟 ヒルサイドフォーラム



[大阪展]

会期：

2000年10月5日(木)→10月15日(日)

10:00→17:30

土・日・祝日も開催

会場：

大阪府南河内郡河南町東山

大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール

[問い合わせ先]

鹿島出版会SD編集部

107-8345東京都港区赤坂6-5-13

Tel: 03-5561-2555

Fax: 03-5561-2565

大阪展：

大阪芸術大学建築学科合同研究室

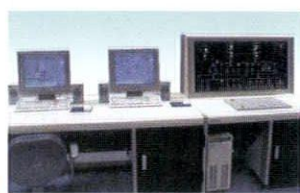
585-0001大阪府南河内郡河南町東山

Tel: 0721-93-3781

SD Review 2000

Space Design

リーズナブルって
いいなあ



ビルオートメーションシステム「A&A」や工場計装システム「FACIAS」フレイシヤス」は、ハードウェアを汎用機器で構成するオープンシステム。だからリーズナブルでフレキシブル。しかも付加価値の高いシステムで設備の機能を引き出します。

「ビルや工場が生き生き。オープンシステムだから可能です」



ネット社会に
頼もしいわ

大量の情報を伝送できる光ファイバの先行配線システム「GIGALINE（ギガライン）」や統合配線システム「KSCS」で、次世代情報化オフィスをご提案します。

情報の洪水がきたって
大丈夫。光ファイバで
余裕の対応

地球環境を配慮した「パンチングメタル」のシステム天井や「潜熱蓄熱式床暖房用OAFフロア」。総合設備会社としての長年の経験がかたちになりました。これからも、もっともっと二歩先行くオフィス環境を実現します。

もっと快適に、もっと機能的に。
欲張りなオフィス環境を
サポートします

リニューアルすれば
まだまだ使えますよ



きん がつくヤツと評判です。



「太陽光や風力も
最大限にいかします」

長年培ってきた電気設備の技術力で太陽光や風力を最大限に活用。クリーンなエネルギーで、環境保護にしっかり貢献できる発電システムを強力にサポートします。

地球に
優しいんです

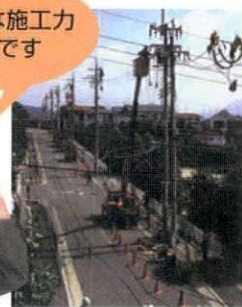
「電気や熱にも思い
やり。エネルギーを
有効活用します」

豊かな実績と技術力によって、コージェネレーションや地域熱供給の最適システムを構築。環境性・経済性に優れたトータル・エンジニアリングで、エネルギーの高効率な利用を可能にします。



省エネなんだな、
これが

「トータルな施工力
が自慢です」



「地球にやさしくスムーズに。
交差点でも非開削で掘り進めます」

きんでん独自の技術で、交差点でも非開削で掘り進める「急曲線ヘJカーブ推進工法」。交通支障もなく、工期の短縮でコストも削減できます。



技術力で
コストを削減します

「社会を支えるエネルギーや情報
通信。ネットワーク構築からメ
ンテナンスまでお任せ下さい」

エネルギーや情報通信ネットワーク。品質・安全・環境に配慮した高い技術と経験を生かして、ネットワーク構築からメンテナンスまでトータルにエンジニアリングを行います。

私たちは、情報・エネルギー・環境の幅広いフィールドで、高品位な技術を駆使するシステムインテグレータです。だからこそ、お客様のニーズに応えるだけでなく、さらにその一歩先のご提案をしていける。いつも「気がつく」、名前に**きがつくきんでん**ですから「もっとお役にたてるご提案を」とがんばっています。

きんでん

本 店:大阪市北区本庄東2丁目3番41号 TEL:06(6375)6000
東 京 本 社:東京都品川区東五反田5丁目25番12号 TEL:03(3447)3151
国内事業所180カ所/海外事務所12カ所/国内関係会社18社/海外関係会社11社
<http://www.kinden.co.jp/>

La Biennale di Venezia 2000

第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展



1

◎project.co.jp

ビエンナーレ2000開幕

去る6月18日、第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展2000が始まった。国として約40カ国、個人として巨匠から若手まで約80チームの提案がノミネイトされているこの展覧会は10月28日まで約4ヵ月開催される。会場は昔の造船所跡であるアルセナーレ会場と各国パビリオンが立ち並ぶジャルデーニ会場の2ヶ所に分かれている。われわれ[Project.co.jp]はアルセナーレ会場全体のエントランスにもなっている「コルデリエ」という長さ280mのリニアなパビリオンの一角にサイトを得ている。1チーム約7m間口で40弱の提案が立ち並びその逆側一面が長さ280m、高さ7mの巨大なスクリーンになっており、そこに今回のビエンナーレの総合ディレクターである建築家マッシミリアーノ・フクサスの手により、世界のさまざまな都市風景が38台の液晶プロジェクターで映し出されている。この巨大映像を筆頭とにかく展示会場はプロジェクションの洪水である。日本館のコミッショナーである磯崎新は個人でも出展している。「Isolotto」（個人名のパビリオンネームはここだけ）と名づけられ、廃虚として構成された空間に「メディテーションによる世界平和」のための装置が準備されている。審査のためのプレ・オープニングに合わせて、数人のグルによるメディテーション、そして空中浮遊が企てられ、大勢の人々の注目を集めた。

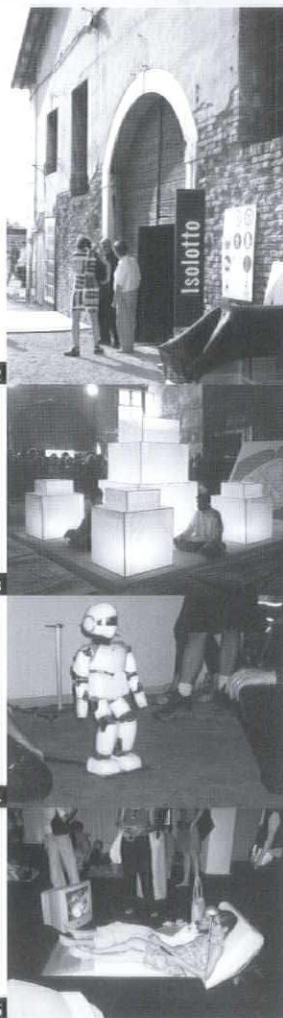
また、[Project.co.jp]のメンバーでもある北野宏明もイタリア政府館の1ブースで、開発中の子供サイズのヒューマノイド「Pino」を初公開し、歩行させることを試みた。「浮く」と「歩く」、身体の可能性とテクノロジーの可能性が期せずして起きた共演は、まさに都市・人間・テクノロジーの関係を、言い換えれば「Less Aesthetics」というテーマとして観衆に突きつけているのではないだろうか？

最も優れた提案に対して贈られる「金獅子賞」は、一連の低所得者層向け集合住宅のその後を実証的アプローチで取り上げたジャン・ヌーベルが受賞。パビリオン賞としてスペイン館が選ばれた。また昨年来行われていたコンペ部門の佳作に遠藤秀平が選ばれている。コルゲートのクルクルが都市的スケールで展開していた。

- 1.コルデリエ全景
- 2.Isolotto 外観
- 3.Isolotto 祈り
- 4.Pino 歩行
- 5.オランダ館

パブリックの中のプライベート。

病院のベッド+モニターでプライベート空間を提供。国有地国家というバックグラウンドのなせる牙えか。

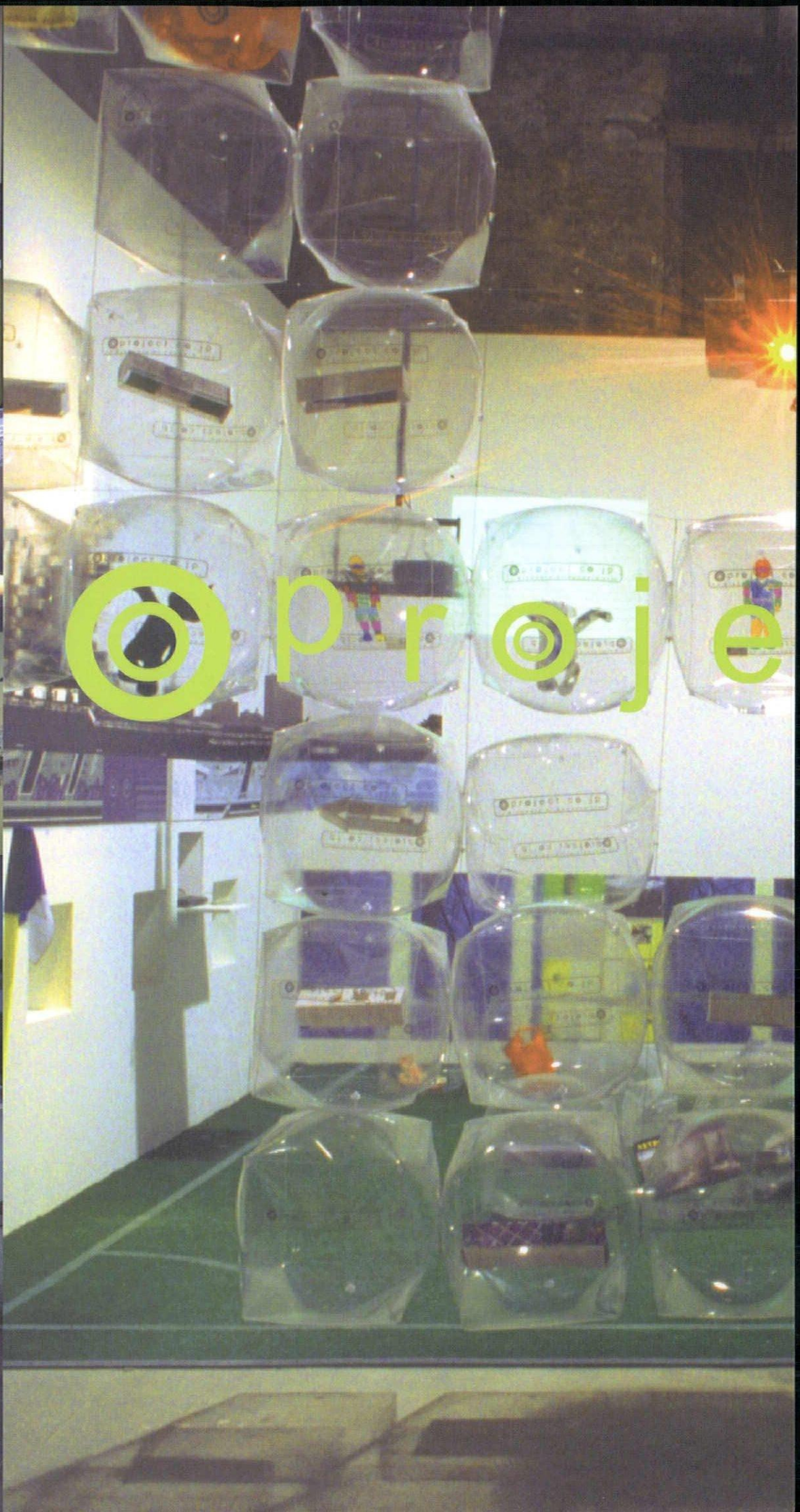
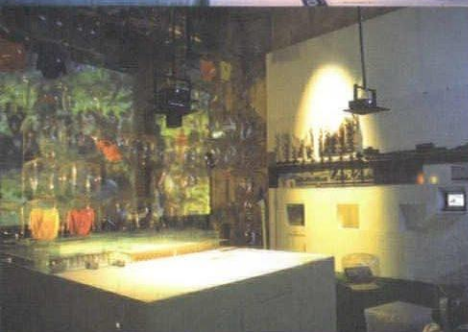
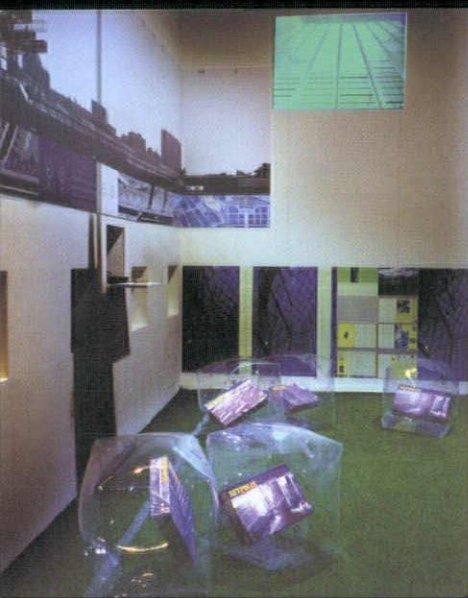


2

3

4

5



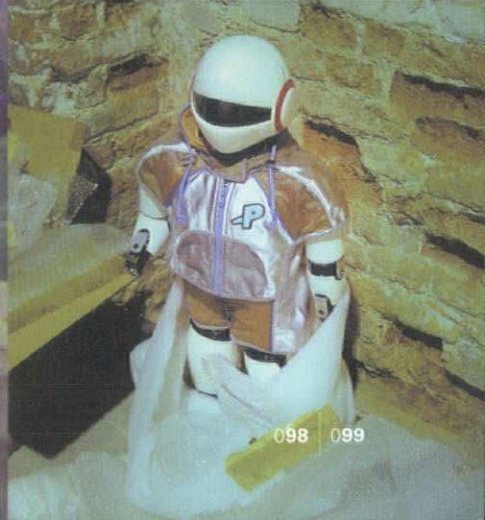
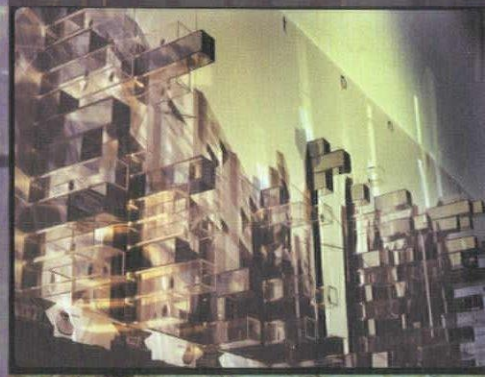
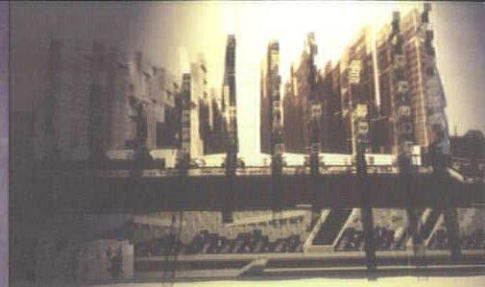


PHOTO BY YUKINORI TOKORO



振り返ればビエンナーレ参加のために「Project.co.jp」が発足したのが昨年の11月。それから8ヵ月間、脈々と議論し続けてきた成果を「形」にするべくはるばるヴェネチアに乗り込んでいったのである。（本誌4〜7月号を参照）

十分な準備期間があったわけでもなく、また十分な資金があるわけでもない。会場設営に費やせる日数は約1週間あまり。そうしたなかで現地での工程表も組み、少ない設営期間を有効に使うための計画が取られたにもかかわらず、多くのトラブルに見舞われることになる。

最初のトラブルは、成田空港から始まった。展示のメインになるエア・キューブを接着するための溶剤が揮発性であることから機内に持ち込むことができず、現地で代替品を探すことになった。また、ビデオプロジェクターやビデオデッキなどの機材がヴェネチアの税関でストップして、書類作成から引き渡しまでに3日間も費やされてしまい、入国早々に用意していた工程表は意味がなくなってしまった。

会場に到着してみると、他の出展者の作品が箱詰めのまま乱雑に置いてあるだけで、準備に取りかかっているのはわれわれのほかに5チーム程度で、閑散としている。なかでも「Project.co.jp」のブースにはひととき多くの資料が運び込まれていることがわかる。それだけ「Project.co.jp」の展示は大掛かりなものなのだ。

まずは、ネットポリスのケーススタディとして提示する丸ノ内ネットポリスの断面模型とヴェネチア・ネットポリスのアクリル模型の製作に取りかかる。

それぞれ、日本で作り込んできたパーツを組み上げていくのだ。

ヴェネチアモデルはW2000×D1800×H1000mmの木造の台にガラスを置き、その上にアクリルと木で作られたリアルト・マーケットの模型が乗せられ、下からスライドプロジェクターで時間ごとに変化するマーケットの機能を映し出すというもの。丸ノ内モデルはA0サイズのパネル8枚に及ぶ東京駅丸ノ内内の断面模型で、東京駅上空にセル模型が設置される様子を表現している。

ヒューマノイドの「Pino」は、急速イタリア館への出展も決まって、展示用、歩行用を合わせて3台が用意された。Pinoを組み上げるスタッフも混雑した会場の片隅での緻密な作業に苦労している。

資材や道具関係はあらかじめ日本から持ち込んだり、現地で手配していたのだが、いざ作業に取り掛かると足りないものが続出してくる。その度にヴェネチア島の内外で探し回り、思うようにはかどらない。

また、ブース前面に吊るされるエア・キューブの準備も、キューブを膨らますスペースが足りず、やむなく準備の始まっていない隣のブースを借りて約40個のキューブを膨らましていく。

ネットポリス・コントロールサイトは、日本のスタッフからネットで送られてくるデータを処理しなければならないが、会場からはサーバーにアクセスすることができないためホテルに戻ってからとなり、作業は深夜まで続く。

プレ・オープンの3日前になるとさすがに他の出展者も続々と会場入りして、準備が始まりだした。

それまで迅速な対応をしていたビエンナーレ事務局も対応しきれていない様子で、現場職人の取りあいなど各所で口論が絶えない。ピリピリした空気が会場に流れている。

そんななか、われわれもエア・キューブを吊る作業を始めたのだが、280mのスクリーンに投影されるフクサスの映像にエア・キューブを吊るワイヤーの影が映ってしまい、事務局側からクレームがきた。ワイヤーをテグスに変え、左右に引っ張ることでどうにか影の問題は解決したのだが、事務局はコトあるごとにわれわれに対してクレームを付けてくる。イタリア語、英語、日本語、入り乱れての口論が続き、その度に作業が中断され、スタッフの疲労も頂点に達する。

結局、最後の作業の人工芝貼りはプレ・オープン当日の早朝までかかり、ギリギリのタイミングで完成までたどり着いた。

苦勞の甲斐があり、賞こそ取れなかったもののプレス関係者や一般来場者、他の出展者からの評判は良く、ビエンナーレ会場で「Project.co.jp」のパンフレットを持ち歩く人々が多く見掛けられた。

「Project.co.jp」は今回の展示だけでは終わらない。ネットポリス・コントロールサイトでは「Netpolis」成立のシミュレーションを会期を通して行っていく。

Netpolis Control Site → www.npcs.nex.co.jp

最後に今回ビエンナーレ参加にあたって協力していただいた多くの人々に感謝したい。

コラボレーション

岡崎泰之、所幸則、松下計、松野勉

スタッフ

安藤宗一郎、石岡桂奈、伊東毅、Eddy Basso、大橋渉、小笠原泰樹、小栗新、小俣岳見、榎村奈美、木村健太郎、桐本潤子、近藤創順、佐藤ふみ、澤井条二、沢井ヒデノリ、Jaime Manca、篠塚正博、Tang Yu Nin、高田哲仁、田辺雄之、田山公一、中三川基、野村知世、番場俊宏、藤本理絵、星野裕之、山崎文敬、山永奈奈、夜川顕太郎、渡辺常二郎（五十音順）

出展グループ「Project.co.jp」とは……

30代の若手建築家グループの有志が発端となり、今までにない新しい都市像を切り拓くため、異分野のデザイナー・評論家・科学者の参画を求めて発足したプロジェクトチーム。

メンバー：井坂幸恵（建築家）、佐々木龍郎（建築家）、西森陸雄（建築家）、山崎あかね（建築コーディネーター）、北野宏明（科学者）、津村耕祐（ファッションデザイナー）、福田和也（文芸評論家）、松井龍哉（デザイナー）、豊島浩次（メディアデザイナー）

文・デザイン＝「Project.co.jp」



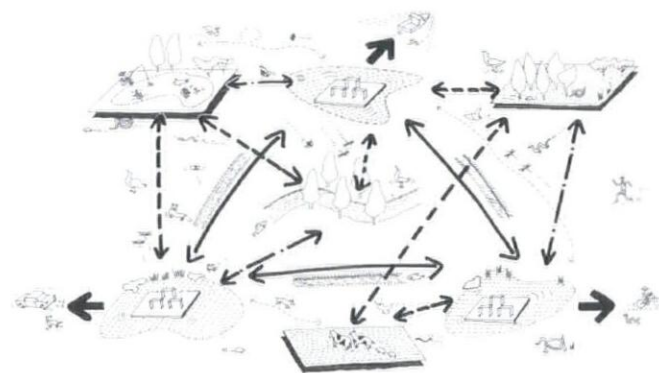
Amphibious Living

Floating Flop / Competition fase

Toshikazu Ishida and K.I.D.I

水陸両用居住のためのデザイン

石田 壽一 + 九州芸術工科大学石田研究室



アンフィビアスリビング
“designs for amphibious living”を直訳すると「水陸両用居住のためのデザイン」となるでしょうか。日本ではあまり聞き慣れないジャンルかもしれませんが、海面下に人為的な高密度環境が広がる低地オランダでは、水面は地面と同様、建築や都市を計画する場として、たいへん重要なフィールドです。一般に低地オランダというと、高密度といいつつも、わりあい広々とした平野が水平にのび、風車が点々と佇む牧歌的な光景を思い浮かべますが、ロッテルダム付近では一時間もポンプがとまると、あたり一面の水位が2メートルもあがるというのですから、当地の水の恐ろしさはよそものには想像もできません。そんなところですから水面に居住空間を考えるのもあたりまえと思われる方も多いでしょう。ところが実際は、低地オランダでも“amphibious living”はそれほどなじみのあるリビングコンディションではないようです。海の下とはいえ、せっかく苦勞して手に入れた乾いた地にわざわざ水を入れるのはやはりトラウマチックなことなのでしょう。

ですからオランダと水との関係は実に複雑です。「親水」という表現がありますが、オランダ人にとっての水環境は確かに身近かで、傍から見ると水を熟知し、親しい関係を築いているように映ります。ところがプライオリティはもちろんその美を愛でるのではなく、むしろ逆に防御的で徹底的に制御する対象になっているともいえます。やはりオランダ人にとっても住まいは乾いた地面のうえに、水面はそこより低くが当然、ということなのでしょう。

“designs for amphibious living”がコンペで募ったアイデアは、水で苦労し続けてきたオランダ人にとって至極当然な人と水の上下関係を、もう一度水平に並べて、そこから次世紀の居住環境を考える上での新機軸を探ろうというものです。従来より一歩踏み込んだ親水空間と人々の共棲関係の獲得です。

昨年末に要項がウェブ上にアップロードされ、今年3月末に締め切られたオランダのアイデア&インプレメンテーションの二段階国際コンペ“designs for amphibious living”に、九州芸工大の石田一壽十石田研究室による“floating flop”案が入選した。引き続き実際のサイトへのインプレメンテーションワークショップが6月にロッテルダムで開かれた。“floating flop”は、昨年のSD Reviewに入選した石田氏の“flop/フロップ”案をベースに、ウォーターランドスケープと居住空間とのあたるリビングコンディションとインターフェースをテーマに発展させた案ということである。SDでは今月号と11月号の二回で環境デザイン先進国オランダのユニークなプロジェクトと石田氏の“flop”案の実践に向けた取り組みをご紹介します。

[Summery] proposal for floating housing structure that provides water purification and ecological stepping stone network for the polder inside of the “Greenheart”. The housing unit called “flop” forms any pattern of living environment that consists of three different functions: shared accomodation container, ecological water garden and amphibious open space.

amphibian/アンフィビアンといえば生物界では両生類を指しますが、その代表選手のカエルのように、水中にあって地表を、あるいはその逆を、環境に応じてエラ呼吸と肺呼吸を使い分けるごとくに、身体性とアクティビティを柔軟に変化させ、異った領域を横断的に捉えようとする、あらたなメンタリティへの冒険と言いかえられるかも知れません。ファイナルハウスとしての次世紀モデルを探るための隣接性の実験ともとれるでしょう。いずれにせよ、フィールドと主体が存在すれば当然その両者を媒介するリビングコンディションとインターフェースが必要なわけです。したがって今回のコンペの主眼を要約すれば、水の王国低地オランダにおいてもまだ一般的ではない“amphibious living”を考えるうえでの具体的なリビングコンディションの確定と実際のインターフェースとしての住環境のデザインということになると思います。

こうした興味深いテーマに惹かれ応募した実際のコンペは、2段階のアジェンダに進みました。まず“amphibious living”をテーマにしたオープンコンペの第一フェーズ。つぎにコンペ入選案とその上位チームからなるインプレメンテーションプロポーザルを行うワークショップを交えた第二フェーズです。また、第一フェーズは、応募者がプロ（建築専門）とアマ（学生他）にわけられ、プロの部門はカテゴリー1のランドスケープ／都市部門とカテゴリー2の都市／建築部門にそれぞれ提案を行いました。我々が提案を行った都市／建築部門は5haの集合住宅の要求があり、第二フェーズでは入選者とオーガナイザーが選任したエキスパートによる混成チームの合同ワークショップが開かれました。合同ワークショップはロッテルダム市のアイセルモンド地区とロッテルダム近郊のパレドレヒト市からそれぞれ具体的なサイトが主催者によって用意され、2チームに分れ提案を行いました。以上のプロセスとその結果は、10月にキンデルダイクで開催される展覧会のカタログに掲載される予定です。



Optimum interface between human territory and ecotope / 人的領域とエコトープのオプティマムインターフェース



リビングコンディション

コンペ案の“floating flop”が想定したリビングコンディションはつぎのようなフレームです。まず、オランダで現在進行中のランドスタット計画の裏面にある環境問題に注目しました。日本ではあまり知られていませんが、オランダの酪農はEU内部でもたいへん競争力のある産業です。それほど気候に恵まれない小国のオランダがフランスやスペインといった太陽の降り注ぐ南の大国に農産物で優るのは、製品と輸送インフラの近接関係にあります。近代建築の牙城を為したロッテルダム、アムステルダム、ユトレヒトは、それぞれ船舶、航空、陸運の拠点になっており、水陸路によるEU内輸送はもとより、世界トップレベルの貨物取扱高を誇る空路を用い、オランダ製品の即日全世界輸送を可能にしています。グリーンハートと呼ばれるランドスタット内部の一見のどかな緑地景観は、実は極めて集中的に管理された生産農地を形成し、かつ他に類例をみないほど輸送インフラに隣接しているという利便性も持ち合わせている、というわけです。このように書くとオランダの集約農業がよいことづくめであるかのごとき印象を与えますが、実際はそうではありません。太陽に代わって製品としての成長を促進させる様々なホルモン剤や農薬による土壌や水質汚染が大きな社会問題になっているのです。

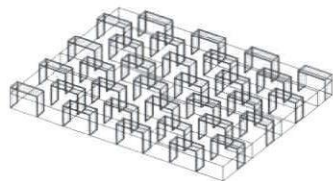
フローティングフロップ案では、ランドスタットを巡る環境問題に焦点を当て、つぎのようなリビングコンディションのフレームを導きました。すなわち、人が多量に集まって住むことが、エネルギーの消費、汚染のフィールドを誘因するのではなく、逆に生産、浄化のプロセスに関わるフィルターになること、そして人々の居住とアクティビティを包括的なエコバランスの一ファクターととらえ、食物連鎖の最上位の存在としてではなく、複数の中間的な過程における媒介項とし、エコトープのネットワークを形成することの2点です。

このようなリビングコンディションに最適化された物的環境として、コンペの与件でもあった水上住居のアイデアを用い、グリーンハート内部の複数のボルダーに浮島状に点在する「エコロジカルステッピングストーン」と呼ばれるエコハウジングネットワークを提案しています。

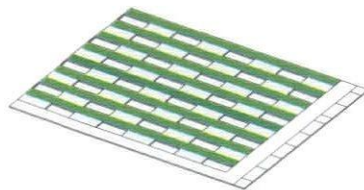
こうしたサステナブルエンバイロメントの提案についても、欧米の先進的なエコロジストによる多くの取り組みが最近をよく知られています。が、その一方で「フローティングハビタブルアイランドネットワーク」というアイデア自体は、もとをたどれば、中世、近世を通じて形成されたオランダの居住環境獲得の歴史と実践に重なるものです。干拓によって水面を地面に換え、基本的には地耐力ゼロの湖沼地帯に泥を固めたレンガや木造住居といった軽量な構造によって居住空間を獲得し、風力や水力といったパッシブエネルギー利用を取り入れ、運河や海路のネットワークによる交易によって富を築いてきたオランダの浮島群島型の都市計画実践の下絵をなしています。オランダはハウジングと教会以外にめばしい建築がないとよくいわれますが、このことは逆にいうと、どんなに富を貯えてもパリやロンドンのように一極集中型の巨大都市開発を行わず、コンパクトな町のネットワークとベラベラの軽い建築を是とし、人的環境をエコサステナブルな総体と捉える恒常的なメンタリティの源泉に繋がっているといえるでしょう。13世紀前後から17世紀にかけて行われたオランダの都市形成が、つねに経済隆盛期のピークに重なりながらも、消費型ではなく、環境共棲型であったことは特筆すべきです。こうした継続的な社会ストックが、今日の環境デザイン先進国オランダをオランダたらしめる礎になっていることを忘れるわけにはいきません。そして17世紀から400年経った今、再びあらたな社会ストックとしての“amphibious living”が取り沙汰されていることは、ある意味史的必然といえるかもしれません。

[Urban development context] Historically speaking, the Netherlands provided an unique urbanization model different from neighboring countries. The so-called "Dijkstad" with huge polder farms is a good example of contemporary "compact city" idea. It shows neither centric metropolis nor rural periphery but small scaled towns linked with water management network. The current "Randstad" idea also shows this fine Dutch tradition. It is not a physical high-rised metropolis built area but a town network on the ring of core cities surrounding the "Greenheart".

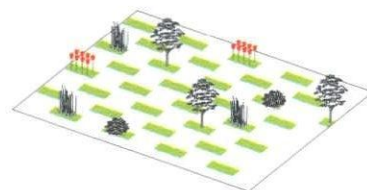
[Specific location for the proposal] This proposal is set on any typical Dutch polder site near by small scaled town inside the "Greenheart". The purpose of the project aims to establish an optimum interface both for light architectural design and for ecological environment's network. In spite of the unique concept of "Deltapole", it has not solved yet many environmental issues caused by rapid increase of human settlement such as water pollution by human waste, agricultural pesticide and also the fragmentation of ecological field balance. In this regard, many polders inside the "Greenheart" hold quite significant value for designating future Dutch urbanization plans both for environmental and aesthetical space concerns.



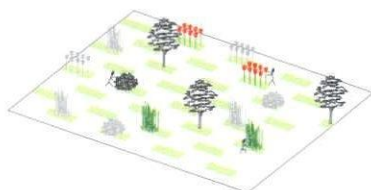
1. flop / accommodation container
アコモデーションコンテナ



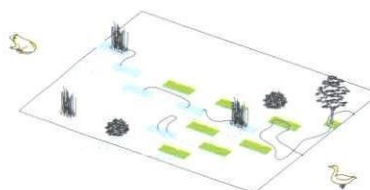
2. flop / amphibious open deck
アンフィビアスオープンデッキ



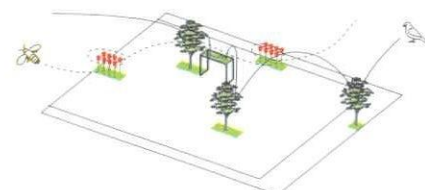
3. flop / ecological water garden
エコロジカルウォーターガーデン



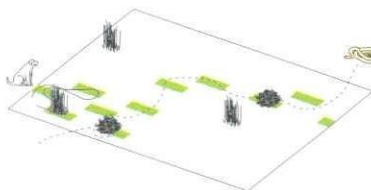
6. Human activity participation / Maintenance
ヒューマンアクティビティ



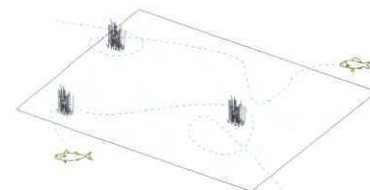
5. Amphibious creature Activity landscape
水中／水上生物のアクティビティ



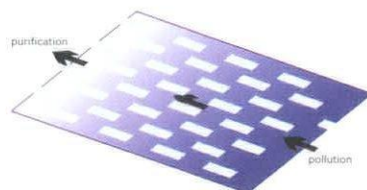
4. Flying creature Activity landscape
飛来生物のアクティビティ



7. Walking creature Activity landscape
歩行生物のアクティビティ



7. Walking creature Activity landscape
歩行生物のアクティビティ



9. Water purification process
水質改善のプロセス

インターフェース “floating flop”

既往のプログラムの隣接性を水平化し、その媒介性を問い直し、新たな隣接性のマトリクスを成立させるリビングコンディションを探り、これに相応しいインターフェースとしての建築を創ろうとするフレームは、昨年SDレビューに出展した「flop／フロップ」案の視点に重なります。案では住居プログラムに付与された既存の主従関係を水平化するために、動線と滞留空間の関係性をいったん切断し、行為密度や必要ボリュームとは独立した共通の最小限容器を反復的に配列し、いわゆるnLDK型とは別種の構造を有する住居提案を行っています。

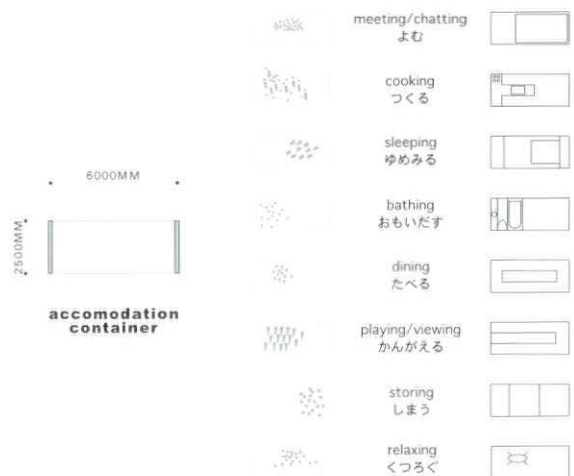
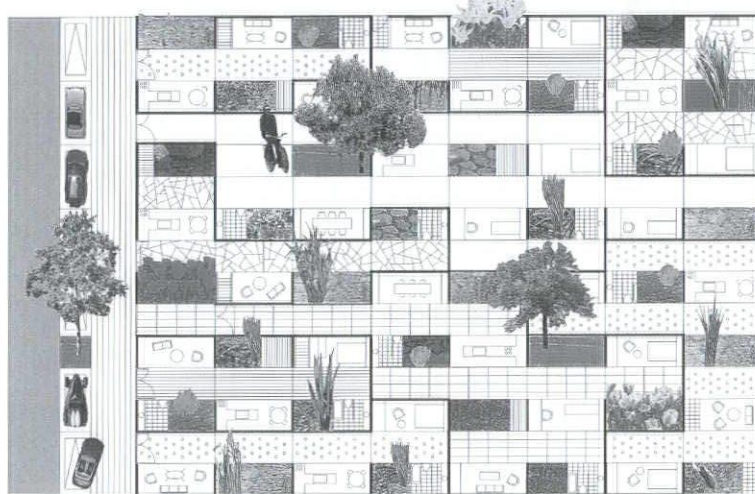
一般に機能主義と呼ばれる計画手法が人間のアクティビティをパラメータ化できるのは、特定行為のピーク時とその前後の近傍域であり、行為が起きないオフピークの状態や中間的な状態は対象にはなりません。けれども人間の

平均的な生活において、特定の機能空間に集中的な使用が継続するのは睡眠や飲食といった比較的頻度の高い行為でも一日のうちせいぜい3割程度ではないでしょうか。時間にすると8時間以下です。その他の機能継続時間はもっと少ないわけです。残りの時間は空間のシンボリックな意味性を無視すれば、ただの収納が空白な箱ということになります。flop／フロップ案では、こうした認識から、特定空間の機能的な使用が集中的に継続する最長時間を便宜的に6時間程度／25%とし、この行為／時間の比率をそのまま行為／空間のパラメータに変換しています。つまり一日の時間使用比率の25%を全体面積のうちの機能空間比率としているわけです。そして残り75%のうち、25%を外部環境との媒介空間、残りの50%をリビングコンディションのなかではパラメータ化しにくい、人間が意識／無意識にかかわらず関係するグレーとも呼ぶべき曖昧な行為空間に対応させています。

[Network for stepping stone ecotope housing] The proposed 5 hectare housing block functions as[not only for] human living accommodations but also for the network of biological "ecotope". It provides a rich ecological environment for one site, but is also laid out as a multiple polder site as steppingstone inside "Greenheart". This would establish an island network of ecological conservation.

[Dutch architectural tradition] The elemental and horizontal hierarchy space organization is denotive of the so-called Dutch structuralism group's in the 60's. This is not a kind of surface style issue but a connecting to more fundamental space ideas that links back to medieval town planning's vision based on water management. The miracle of polder control was attained not by central power but by the network of independent light compact human settlements. There should remain a certain climatological consistency for architectural thinking in the Netherlands beyond the centuries.

[Same sized container with free topping] Different from French cuisine, Japanese Sushi shows non hierarchical eating order with free topping, not chef to decide topping dishes but the guest's spontaneous choice. The flop idea also resembles Japanese traditional (relatively amphibious) food dining manner: being compact, independent, free combination, easy installation and little waste.



アクティビティランドスケープ

こうしたフレームは今回のフローティングフロップ案にも適応されています。ここでもヒューマンアクティビティのピークに対応するアコモデーションコンテナを全体面積の25%、周辺の水質環境を向上させるエコロジカルウォーターガーデンを25%、そして人間とそれ以外の生態系生物との様々なアクティビティを媒介するアンフィビウスオープンデッキを50%にそれぞれ分け、基本的なゾーニングとしています。

フロップの“flop”とは、もともとニューヨークなどでホームレスの寝床を意味するスラングとして使われていますが、ホームレスのアクティビティ総体を機能的に分類すると、その多くが直線／合目的ではあるものの、即物的なためかふつうの移動／滞留とは異なり、多くが付帯状況的な因子の偶発的隣接が形作る地勢のように思われます。飲食、就寝、排泄等の行為空間の善し悪しが、建築計画学的適応性とは全くことになったパラメーターによって評価されているということでしょう。彼らにとって「あたたくて、だれにも気にとめらず、わりあい簡単に食事にありつけ、安全な寝床＝地下コンコース」といった図式化は、至極合理的な選択ですが、こうした横断的機能ピークと場所との関係は、既往の都市計画学では評価不能な行為地勢にほかなりません。

その一方で、既存の空間ヒエラルキーや媒介性をいったん切断し、任意のマ

トリックスとして組み換え、新たな隣接性を無媒介かつ無数に生成可能な複雑系のリビングコンディションと簡素なインターフェースの在り方を探るというフレームは、なにもホームレスに限られた環境認識であるはずもなく、ネット社会がいやおうなく拡大する次世紀的な居住環境の在り方を考える上で避けがたい視点のように思われます。

このような関心から、今回のフローティングフロップの提案においても、主眼にいたのは、プログラムに付与された既存のヒエラルキーをとりあえず水平化し、あらたな隣接性として再編するうえで必要な簡素なインターフェースデザイン／物的環境と、それとは対比的な複雑系のリビングコンディションを成立させる行為地勢＝アクティビティランドスケープの在りかたです。これが実際のサイトでどのような提案となるかについては、6月のインプレメンテーションワークショップの報告およびテーマに関連した展覧会の様子を交えて次回紹介したいと思います。

メンバー：石田壽一、根本修平、伊東佐知子、山下雄弘、佐藤誠、野崎誠

構成：根本修平

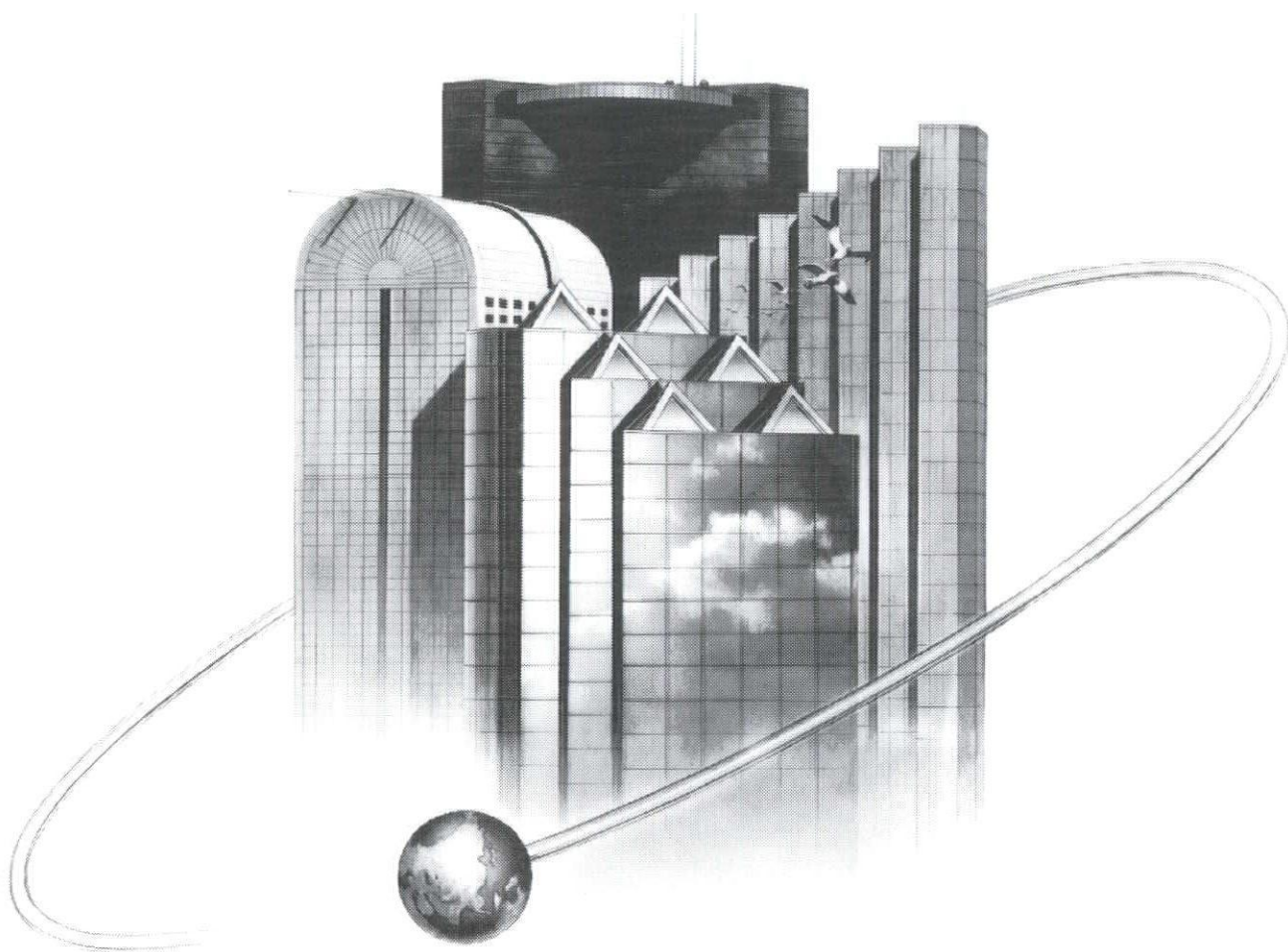
Amphibious Living HP: <http://www.amfibischwonen.nl/>

九州芸術工科大学石田研究室HP: <http://efantoma.kyushu-id.ac.jp/landscape/frame.html>

[Floating flop] Floating flop idea partly derives from Dutch structuralism architectural design concept. It is not for the visual concern but for the invisible network of space organization. The word “flop” is extracted from the “floppy disk” and homeless’ daily accommodation’s slang: “flop”. Both are characterized for minimal container capacities for the function. Especially homeless flops show a potentiality as transportable and flexible human accommodations detached from each site context.

[Family portrait] It is difficult to illustrate an average family portrait today without any specific condition. There is no more standard rather than co-existence of heterogenic individuality. This tendency is accelerated more rapidly by current net-society. While at the same time, it is also clear everybody prefers to live in a comfortable house that is privacy oriented and with highly customized interior design.

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

Book Review

書評

「中間」のダイナミックスを集成 郊外住宅地という

評者 植田 実



『近代日本の郊外住宅地』
片木 篤十・藤谷陽悦・角野幸博＝編
A5判 608頁
鹿島出版会 8400円

A5判600頁あまり、巻頭文を除く本文2段組には図表や写真も組み込まれた、郊外住宅事例30の、27人による報告。

一般読者としてはまず、このヴォリュームに圧倒されて、各事例は必要に応じて拾い読みするしかないと思う一方、いざ目次を見ると、日本全土および旧植民地にかけての30事例だから意外にというか当然疎らな分布になるわけで、たとえば関東では7事例、うち東京は3にとどまるのが物足りなくも思えてくる。

となると、ある程度の密度で日本全土をおおうには、この倍の頁があっても追いつかないのかも知れない。編者も、この本は悉皆調査の成果というよりは中間報告だとことわっているし、東京の事例については、同じ鹿島出版会から十数年前に刊行されされた『郊外住宅地の系譜』が東京圏を対象として14事例を報告していることにも関係があるのだろう。

つまり一般読者にとっては対応のしにくい、研究者による研究者のための報告集といった印象がちょっとあったのだが、読みはじめて驚いた。巻を措く能わざるおもしろさである。この本のかたちが俄然リアリティを帯びてきた。

事例は、書名どおり「近代日本の」、すなわち明治維新から第二次世界大戦終戦までに建設された郊外住宅を対象にしている。驚かされるのはその成立形態の多様さで、そもそも郊外住宅地というものの定義をもたないままに読んだのだが、いやだからこそ、漠然とイメージしている現代のそれに比べて、上の時代における郊外住宅への夢の多面体（とりあえずは30面体か）が際立つのだった。そして事例それぞれの個性的な成り立ちの報告はその原型を示すだけではなく、自立―成熟あるいは統合―消滅その他の展開のなかに、郊外住宅地というものの見方を教えてくれたのである。

たとえば「盆栽村／大宮」（鈴木博之）の基本は「技術集約型の産業であり、現代風に考えるなら一種のハイテク産業のアトリエ的郊外集住地」であって、その「軌跡は、法規と都市計画による都市史ではない、そして開発業者による町づくりでもない、江戸以来の日本の都市の伝統のなかから生まれた近代住宅地の姿」であると明快に指摘される。その裏がえしとして、「北白川・下鴨／京都」（石田潤一郎）では「東京の市区改正事業の準用にはじまる」都市計画法の適用、すなわち「都市計画の実施は、ある種普遍的な

近代都市という目標を京都も追求しはじめ」、そこでは「『古都』の景観の否定」、すなわち「周辺地域への市街地拡大」が「『京』そのものを『田舎』視する契機ともなった」ことが語られる。

また「甲子園／西宮」（角野幸博）においては、浜甲子園健康住宅地が「健康をキーワードにしながら宅地分譲にとどまっていた阪神に対して、健康を直接ネーミングに採用し、中流家庭向きに商品化した」戦略を教えられるし、「六麓荘と松風山荘／芦屋」（三宅正弘）では、かの六麓荘が「『防備地』として宣伝された」つまり「戦局に近づいていた」時期の開発でもあったという思いがけない視点を与えられる。

あるいは「高見住宅／北九州、八幡」（土居義居）という社宅街区が「身分制度が場所に強く投影された近世都市そのままの継承であるとさえいえる」一方、「朝鮮銀行社宅群／ソウル」（富井正憲）の「超モダンな」鉄筋コンクリートブロック造の社宅建設が、国内における旧東京市営古石場住宅や鉄筋コンクリート造の同潤会アパートに先行する試みであったという事実は、郊外住宅地という多面体の性質が時間軸においても現れていることを示している。

思いつくままにアトランダムに拾ったにすぎないが、巻頭の総括（片木篤）では、全体の問題点がじつにうまく整理されていて、事例報告を読みすすめるなかで、何度もそこに立ち戻って全体のなかでの位置を確認する格好のキーステーションになっている。この本のなかにおいての参照だけでなく、関連文献の多くを呼び込めるキーステーションである。限られた頁数で全体を見通しているために簡潔に徹した概論ではあるものの、いやそのためにか、途方もなく鮮やかなイメージに満たされている。

「地球構造における『中間』の領域、社会構造における『中間』の階級から成り立っているがゆえに、明示され得ない」郊外住宅の、「この『中間』のダイナミックな運動そのもの」がくっきりと見えてくる。それが「近代都市であり、近代社会であると言えないだろうか」と総括者は示唆している。近代建築・都市史ののもっとも見えにくい部分を見えるように構成した。それがこの本の最大の魅力である。こうなると次には海外（欧米その他）事例集が、ぜひとも欲しくなるのだが。（うえだ・まこと／編集者）

『モダニズム建築の軌跡

——60年代のアヴァンギャルド

内井昭蔵＝監修

A5判 416頁

INAX出版 3200円

代々木〈国立屋内総合競技場〉、代官山〈ヒルサイドテラス〉、〈スカイハウス〉……。都市にアヴァンギャルドな建築が登場していった1960年代。「現代」のオリジンをつくったこの時代を代表する15人の錚々たる建築家が、監修者と対談。

丹下健三、吉村順三、芦原義信、池田武邦、大高正人、清家清、大谷幸夫、高橋誠一、菊竹清訓、内田祥哉、鬼頭梓、横文彦、林昌二、黒川紀章、磯崎新。これだけのメンバーのトークが一冊の本となっただけでも貴重な存在といえよう。いかに時代を切り拓いていったのか——建築理念と方法論を確立しながら、その精神を具現化していった、モダニズムの旗手たちの軌跡をたどる。そして対談にあわせて、今日の若手建築家たちがそれぞれの作家論を披露している。

たとえば菊竹清訓であれば、自邸〈スカイハウス〉にスミソソ夫妻やL.カーンが訪れたエピソードや、「か・かた・かたち」理論をホテル〈東光園〉に即して語り、弟子の内藤廣が菊竹論を語る。横文彦であれば、J.L.セルトから学んだスケール感、ル・コルビュジエに〈豊田講堂〉の図面をみてもらった話を語り、横の初期作の古典主義的な性格を大野秀敏が論じる。

そして巻頭では、序説として長谷川亮が第三・四半世紀（1950～75年）における日本のモダニズムを論じ、変わらぬ牙えを見せている。

さらに巻末にある各建築家の年譜が秀逸である。膨大な作品と著作リストにはすべて掲載誌が明記され、優れたレファレンスとなっている。

精緻なロジックをもつ評論もよいが、迫力やリアリティといった点では「生」の声や情報に勝るものはない。そう感じさせるのがこの本である。

モダニズム建築の軌跡

監修 内井昭蔵 60年代のアヴァンギャルド

丹下健	Ken Tanaka
吉村順	Junji Kuroki
芦原義信	Yoshinobu Ashihara
池田武邦	Takafumi Ikeda
大高正人	Masahito Ohtaka
清家清	Kiyoharu Kiyonaga
大谷幸夫	Koichi Ohtani
高橋誠一	Seiichi Takahashi
菊竹清訓	Kiyonuki Kikuchi
内田祥哉	Shigeaki Uchida
鬼頭梓	Shigeaki Onoda
横文彦	Yoshihiko Yokoi
林昌二	Shoji Hayashi
黒川紀章	Kisho Kurokawa
磯崎新	Shin Isozaki

INAX出版

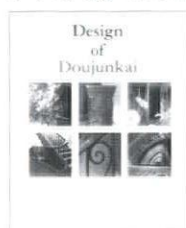
『Design of Doujunkai』

ユナイテッドデザイン＝編

A4変型 218頁

建築資料研究社 3200円

住まいの文化遺産「同潤会アパートメント」の、デザインの総決算ともいえるべき写真集。生活空間の豊かなディテールまでとらえたオールカラー387点のショットでつづる。現在建替中の鷺谷をふくめ、現存の7カ所を収録。テキスト和英併記。



建築巡礼46

『ニューメキシコの建築——石と土と光の教会』

ヨウ箱守十市原 出＝著

A5判 112頁

丸善 2900円

北米の先住民のなかで唯一定住したプエブロ・インディアン土着文化と、17世紀以降のキリスト教文化との混合が生み出した、石と土の教会。その歴史を紐解きながら、各地を巡礼するガイド。



『図説 大聖堂物語——ゴシックの建築と芸術』

佐藤達生・木俣元一＝著

A5変型 120頁

河出書房新社 1800円

中世ヨーロッパの生んだ壮麗なゴシック芸術の粋、大聖堂のガイド。建築の見方、建設プロセスの詳細な解説、彫刻やステンドグラスの読み方、極限の高さに挑戦した職人たちの姿など、「神の国」のつくられ方が多彩な図版で描きだされた。



『モダニズム出版社の光芒

——プラトン社の一九二〇年代』

小野高裕・西村美香・明尾圭造＝著

A5判 284頁

淡交社 3500円

女性誌の刊行でモダニズムをリードしたプラトン社。その全貌をあきらかにした画期的な研究書。メディアとデザインの変容を、編集者や執筆陣、デザイナーの人間像で鮮やかに浮き彫りにした。



『芸術学の100年——日本と世界の間』

金田 智＝編著

A5判 228頁

劉草書房 2400円

ヨーロッパと向きあいながら形成された日本の「芸術学」の100年を再考し、次世紀へのパラダイムシフトを探る論文集。メディアと観客、あるいはアフリカ美術やビクチャレスク庭園といったキーワードから近現代を見直す知の痕跡である。



『デザインの未来考古学』

黒川雅之＝監修

物学研究会＝編著

B6判 216頁

TOTO出版 1857円

21世紀を予感させる20世紀デザインを約100点選定し、ヴィジュアルに読み解く「モノ」づくりの宣言書。サヴォア邸からスウォッチまで、デザインされるモノすべてから、優れた遺伝子を解剖。



安藤忠雄 建築展 ON THE SITE 思考の軌跡

建築の発想段階から、設計・建設さらには竣工後の使われ方に至る全過程を、様々な媒体を通じて紹介する展覧会。各プロジェクトにおける、設計者の絶え間ない思考の軌跡を、VTR映像等により臨場感をもって追体験できる。

会期：9月9日(土)～10月22日(日)

時間：12：00～18：30

月曜日休館（但し、10/9は開館）

会場：GAギャラリー

東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-14

Tel: 03-3403-1581 Fax: 03-3497-0649

入場料：500円（前売り・団体割引あり）

出品作品：直島コンテンポラリー・アート・ミュージアム、FABRICA、兵庫県立新美術館＋神戸市水際広場、南岳山光明寺、淡路夢舞台、大阪府立狭山池博物館、他。

問い合わせ：GAギャラリー（担当：山口）

Tel: 03-3404-1461 Fax: 03-3404-1462

未来身体フォーラム2000 参加者募集

身体と場所との関係を見極め、新たな価値を発掘するオープンワークショップ。ダンスと建築＋情報デザインの同時並行／交錯的なワークショップを通じて、「場所の身体」また「身体の場所」を考察する。

会期：オープンワークショップ 8月28日(月)～9月1日(金)、パブリックプレゼンテーション 9月2日(土)～9月3日(日)

会場：新宿・角筈地域センター、新宿・若松地域センター、辰巳倉庫特設会場

講師：福原哲郎（スペースダンス舞踏家）、野老朝雄・山中祐一郎（d.d.d.）

募集人員：スペースダンス・ワークショップ20名、建築＋情報デザイン・ワークショップ20名
参加費（ワークショップ）：全日程への参加 12,000円、一日ごとの参加 2,500円

入場料（パブリックプレゼンテーション）：

前売・電話予約 2,000円、当日 2,300円

問い合わせ・申し込み：福原哲郎（Tel: 03-5333-3040、070-5369-2147）、山中祐一郎（Tel: 03-3368-3063）

月齢——西川慎展

会期：9月12日(火)～10月6日(金)

時間：10：00～18：00 会期中無休

会場・問い合わせ：ギャラリー仲摩

東京都大田区田園調布2-48-12

Tel: 03-3721-5670 Fax: 03-3721-1408

第3回グッドペインティングカラー2000 カラープランニングコンペ 作品募集

応募期間：10月1日(日)～10月31日(火)

応募内容：景観や環境に調和した、塗料・塗装を中心とした建築物・構造物等のカラープランニング。新設、塗り替えを問わない。ただし、他のコンペで表彰されていない作品に限る。

応募資格：不問（ただし、応募者及び被表彰者はカラープランナーであること）

賞：最優秀賞1点 20万円（施主には記念品）、優秀賞3点 各10万円（施主には記念品）、特別賞数点 各5万円

審査員（予定）：泉真也（委員長）、伊東敏雄、西川 潔、日原もとこ

問い合わせ：グッドペインティングカラー事務局（日本塗料工業会内）

Tel: 03-3443-2011 Fax: 03-3443-3599

東京ガス主催

第3回 あたたかな住空間デザイン・コンペティション 作品募集

応募期間：9月1日(金)～11月30日(木)

応募作品：「新築の部」、「リフォームの部」からなり、1999年1月1日以降に竣工した物件で、温水式床暖房を組み込んでいる住宅に限る。また、建て主（及び住み手）が応募を承諾しており、かつ受賞した場合の取材協力を条件とする。ひとり何点でも応募可。住宅展示場、モデルハウスは対象外とする。

応募資格：住宅の設計者またはインテリアプランナー。建て主や施工者との共同応募も可。

賞：「新築の部」、「リフォームの部」それぞれについて、最優秀賞1点 100万円、優秀賞2点 各30万円、入選3点 各10万円、東京ガス賞数点 各3万円

審査員：中村好文、林 雅子、室伏次郎、秋元壮一郎

問い合わせ：「あたたかな住空間デザイン」コンペティション事務局（担当：橋田、鈴木）

Tel: 03-5322-6512 Fax: 03-5322-6513

ライト・ミース・カーン 3大巨匠の名建築を訪ねる 参加者募集

期間：10月28日(土)～11月5日(日)

費用：348,000円

訪問地：シカゴ、ダラス、サンアントニオ、マジンソン

問い合わせ：トラベルプラン（担当：酒井）

Tel: 03-3403-8911 Fax: 03-3403-8395

セゾン現代美術館 セゾンアートプログラム 公開講座 受講者募集

テーマ：歴史と現在——今、20世紀日本美術史で再考すべき事柄

開講日程・講師：第1回（9/13）「太平洋戦争画に見る画家フジタの魔性（菊畑茂久馬）、第2回（9/21）「アヴァンギャルドと接触する——久米民十郎を中心に」（五十嵐利治）、第3回（9/28）「実験工房と半世紀間の展開」（山口勝弘）、第4回（10/5）「ネオ・ダダと吉村 応答と変容」（吉村益信）

時間：18：50～20：30（18：30開場）

会場：東京ウイメンズプラザ・ホール

東京都渋谷区神宮前5-53-67

定員：150名（申し込み先着順）

受講料：各講座500円

問い合わせ：セゾンアートプログラム

Tel: 03-5464-0197 Fax: 03-5485-0285

桑沢デザイン塾 2000年第3期 受講者募集

ますます関心の高まる「ユニバーサル・デザイン」について、通産省、運輸省、厚生省をはじめ関係団体から講師を招き、対談形式により、これからのユニバーサル・デザイン思想について総合的に見地に立って考察する。

日程：9月30日、10月14日、10月28日、11月11日、11月25日（各土曜日、全5回）

時間：18：30～20：30

会場：桑沢デザイン研究所（予定）

受講料：25,000円（学生15,000円）

定員：50名（申し込み先着順）

問い合わせ・申し込み：桑沢デザイン研究所同窓会事務局（担当：渡邊）

東京都渋谷区神南1-4-17

Tel: 03-3462-4029 Fax: 03-3462-4090

お詫びと訂正

SD0008号に誤りがありました。以下のように訂正してお詫び申し上げます。

前付けバックナンバー一覧ページ

誤：ガウディの愛弟子ジュジョールの夢→正：ガウディの愛弟子ジュジョールの夢

誤：桃小川晋一→正：小川晋一

p.111掲載の「ダラス邸」写真について、フォトクレジットに誤りがありました。版權所有者、GA photographersの了承なく使用しておりましたので、これを追加訂正致します。

p.114

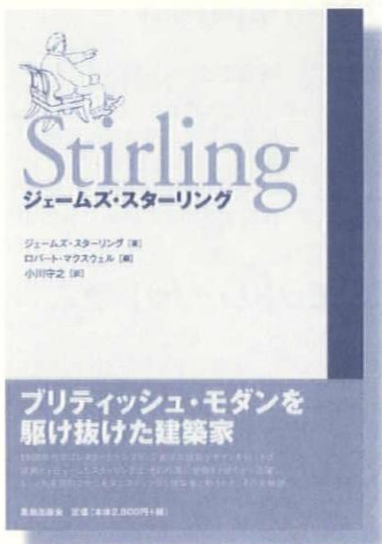
誤：勝美勝→正：勝見勝

今月の新刊

建築図書の最新刊書と、それに関連した書籍を紹介しております。

当社の新刊すべてをご覧になりたい方は隔月で奇数月発行の「新刊案内」をご請求ください。

当社のホームページ上でも新刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



ジェームズ・スターリング

ブリティッシュ・モダンを駆け抜けた建築家

ジェームズ・スターリング 著 小川守之 訳

四六判・272 頁 本体2,800円+税

1960年代半ばにレスターとケンブリッジ大学の建築デザインを引っさげ
颯爽とデビューしたスターリングは、その作風に変貌をとげながら活躍し、
もっとも英国的でかつモダニスティックな建築家と称された、その全軌跡。

●主要目次

ジェームズ・スターリングの文章について (ロバート・マクスウェル)

ヴィラ・ガルシェからジャウール邸へ

ロンシャン

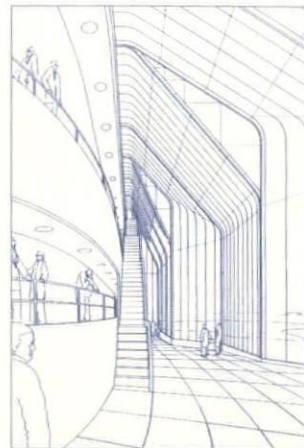
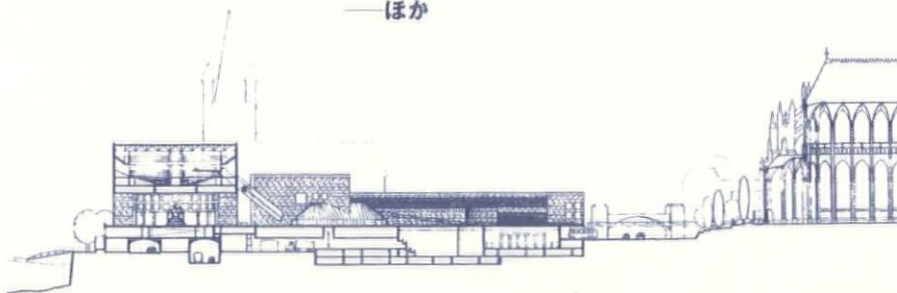
地域主義と近代建築

ファンクショナル・トラディションと表現

アンチストラクチャー

表現の方法と材料

— ほか



ジェームズ・スターリング James Stirling

1923年に生まれ、1950年リヴァプール大学を卒業。20世紀後半の英国に現れた最も興味深い人物のひとりである。スターリングの建築家としての活動期間は1950年から、逝去した1992年までである。その作品は常に社会的な意味、具体的なコンテキストに意を注ぎ、ドグマに捕われぬ、絶え間ない探求の賜物である。その過程で近代建築の定義は常に更新された。1955年ジェームズ・ガッワンと一緒に事務所を開き、ハムコモンのフラットを設計し、「ブルータリズム」という概念に新しい意味を付け加えた。またレスター大学工学部では、「近代建築」に対する、英国におけるひとつの解釈を提出した。ガッワンと離れたのち、1964年から1970年にかけてスターリングはケンブリッジ大学歴史学部、オックスフォード大学フローリー・ビルディング、セント・アンドリュース大学学生

寮、ヘイズルミアのオリヴェッティ・トレーニング・センターと、たて続けに傑作をものした。1971年以降、不慮の死に至るまではマイケル・ウイルフォードとパートナーシップを組んだ(スターリングの死後、事務所はウイルフォードが引き継いでいる)。デュッセルドルフ、ケルン、そしてシュトゥットガルト(ノイエ・シュターツガレリーと呼ばれる)と続いたドイツの3つの美術館計画は、ポストモダン建築の先駆けと称されたが、スターリング自身としてはあくまでもファンクショナル発想の産物で、決してポストモダンに留まるものではない、という見解であった。1978年にはアルヴァ・アアルト賞、1980年ロイヤル・ゴールド・メダル、そして1981年にはプリッカー賞を受賞して国際的な建築家としての地位を確固たるものとしたが、1992年に惜しまれながら建築家としての生涯を閉じた。

好評既刊書

建築図書の既刊書を中心に、話題の本を紹介しております。

既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。

当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



建物情報管理と ファシリティマネジメント

EXCELで長期修繕計画と
ライフサイクルコストを考える

柳瀬正敏 著 A5判・96頁 本体2,200円

長期修繕計画にとって建物カルテの作成には建物情報の記録・蓄積が肝要。EXCELで誰にでもできる簡便なデータ入力および計算結果事例を解説。



Space Structure 木村俊彦の設計理念

渡辺邦夫 監修 佐々木睦朗、金箱温春 他著
A5判・244頁 本体3,800円

前川国男、丹下健三など20世紀の著名建築家と共に歩んできた天才的構造デザイナー木村俊彦の仕事構造デザイン、素材、解析技術、工法などの側面から紹介。戦後の日本の建築の歩みを検証する。



西村幸夫 都市論ノート まちづくり・景観・都市デザイン

西村幸夫 著
A5判・208頁 本体2,900円+税

かつての「まちづくり」に活かされた工夫は、歴史的景観、自然環境、小都市の町並みに学ぶ点が多い。都心の景観保全、これからの都市風景、アジア都市等、自己ノートとして啓蒙する斬新な「都市論」書。



新しい高齢者住宅と環境 スウェーデンの歴史と事例に学ぶ

ヤン・ポールソン 著 今井一夫 監訳 石黒暢 訳
A5判・152頁 本体3,100円+税

21世紀の高齢社会で求められるのは、従来の老人ホームのような「施設型」ではなく、それまで住んでいた「まち」で、「すまい」により近い居住環境を実現することだ。先進国スウェーデンに学ぶ。



次世代ビルの条件 ロングライフ/フレキシビリティ&キャッシュフロー

オフィスビル総合研究所 ベースビル研究会 編著
四六判・288頁 本体2,500円+税

21世紀のオフィス建築は、社会資産として長持ちすること、フレキシブルで居住性に優れていること、地震に強く、省エネなど環境への配慮など、様々な視点が求められる。次世代ビルについて50の提案。



源氏物語空間読解

安原盛彦 著
四六判・232頁 本体2,500円+税

源氏物語に描かれる空間構成では、貴族社会の生活、生活方法の支え、意識感覚など複雑な心理描写がドラマチックに展開する。寝殿造を背景に、平安時代の建築様式および空間描写の情景を、新物語的な仮想現実で読解。文学を超えて建築空間を再現し再認識する。



巨匠 エットレ・ソットサス

ミルコ・カルポーニ 編 横山正 訳
B5変型判・280頁 本体3,200円+税

オリベッティのタイプライターのデザインで一躍有名を馳せたイタリアン・デザインの巨匠ソットサスの全貌をフルカラーで紹介。その活躍の場を都市計画、建築デザインにまで広げている。



建築プロデューサー

浜野安宏 著
四六判・240頁 本体2,000円+税

建築プロデュースという未踏の領域を切り開き、精力的に実践にいまそむくこと四半世紀。その豊富な経験をもとに、建築プロデューサーが心得るべきこと、建築家に求められるものを熱情をもって書き下ろした書。



近代日本の郊外住宅地

片木篤、藤谷陽悦、角野幸博 共編
A5判・608頁 本体8,400円+税

明治以降、近代化に伴って日本各地に造られた様々な郊外住宅地30事例を紹介。住宅地の様々なタイプの代表例が、600点に及び写真、図面と共に紹介される。日本各地に造られた郊外住宅地研究の集大成。



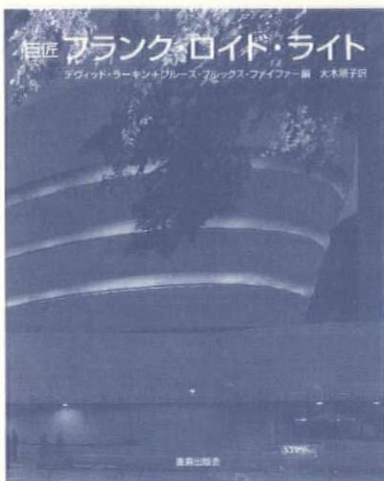
高齢化・介護福祉のための ヘルスケア施設づくりの実例

野口哲英、中田利夫 著
A5判・208頁 本体4,200円+税

高齢化社会の到来を迎え、医療は予防治療からケア回復へと転換。介護法施行により、今後の施設づくりに不可欠な医療特性の模索、地域に密着した併設機能のあり方を、事業収支、補助金、計画設計例で解説。

フランク・ロイド・ライト

フランク・ロイド・ライトに関する既刊書を紹介しております。
既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。
当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



巨匠 フランク・ロイド・ライト

D.ラーキン、B.ファイファー 編 大木順子 訳
B5変形・240頁 本体3,200円+税

コルビュジエ、ミースとならぶ近代建築の巨匠であり、
アメリカン・スピリッツの象徴である建築家フランク・ロイド・ライトの全貌を
美しいカラー写真と平易な解説で紹介。
没後40年を経た今日でも新鮮な感動を呼び起こす。



フランク・ロイド・ライトと日本文化

ケヴィン・ニュート 著 大木順子 訳
A5・256頁 本体3,800円+税

ライトの建築作品の解釈に新たな光をあてると同時に、
日本と西洋という2つの文化が相互に作用しながら生
まれ変わる魅力ある過程を、実証的に分析する建築論、
論、比較文化論。



《SD選書123》 ライトと日本

谷川正己 著
四六・220頁 本体1,800円+税

ライト研究家として知られる谷川正己が、日本におけ
るライトの作品とプロジェクトのすべてを解明し、ライ
トにとっての日本という国、またライトが日本に残した
ものを書き下ろしたライト研究の手引書。



知られざる フランク・ロイド・ライト

E.ターフェル 著 谷川正己、谷川睦子 共訳
B5・240頁 本体5,700円+税

フランク・ロイド・ライトに永年師事した著者が、その
貴重な体験をもとに、我々の知らないライト像と様々
なエピソードを活写。未公開の写真や図版も多く、ライ
ト研究のための必読の資料といえよう。



《SD選書158・159》 建築について 上・下

F.L.ライト 著 谷川睦子、谷川正己 共訳
250頁 本体(上)1,800円(下)1,200円+税

アメリカが生んだ現代建築の巨匠ライトは、沈黙の創
造者ではなかった。膨大な史料の中から厳選し年代
順に収録された各論文は、フランク・ロイド・ライトが
創造した建築哲学の全体像を示している。



《SD選書7》 フランク・ロイド・ライト

谷川正己 著
四六・230頁 本体1,800円+税

アメリカの生んだ近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライ
トが遺した偉大な業績を紹介し、その建築と思想と
の関連を語る、ライト研究の入門書。



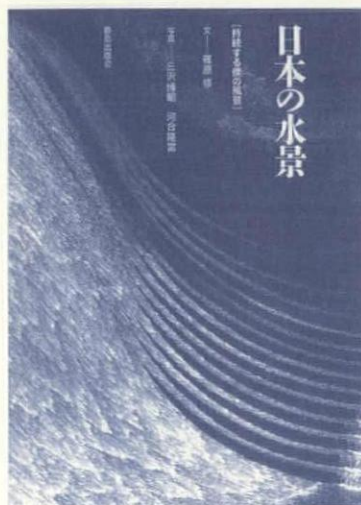
《SD選書132》 タリアセンへの道

谷川正己 著
四六・248頁 本体980円+税

ライト研究家谷川正己が、アメリカ国内のライト建築
および、彼のスタジオであるタリアセンなどを巡った
旅行記である。ライト周辺の人々との心温まる友情
を通してライトの人間像、作品を紹介している。

景観関連図書

建築図書の既刊書を中心に、景観に関連した図書を紹介しております。
既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。
当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



日本の水景 持続する僕の風景

篠原修 文 三沢博昭+河合隆富 写真
B5判・108頁 本体4,600円+税

シビックデザインの原点として、時代に耐え愛され続ける形を求め、
エンジニアたちが創造した風景。
周囲の自然を巧みに取り込んで優雅な美をつくりだしている
日本の水辺の風景を紹介するビジュアルなフォトエッセイ集。



日本百名橋

松村博 著
A5判・304頁 本体3,800円+税

架設が強く望まれた橋。技術的に優れた橋。姿・形の美しい橋。周辺の優れた環境に調和した橋。古い歴史や伝承をもった橋。利用者に親しまれている橋。歴史的価値と様々な文化的要素によってつくられる橋の魅力を記述。



《SD選書230》 風景のコスモロジー

吉村元男 著
四六判・224頁 本体1,800円+税

サステナブルな世界とは何かをさぐる地球環境が瀕死の重症を陥っているとき、地球の自然のなかで人類に文明の位置を明らかにするべき時代がきている。本書では、古代世界の風景のなかに、楽園の思想を探り、持続可能な世界とは何かを考える。



エコミュージアムへの旅

大原一興 著
A5判・184頁 本体2,500円+税

地域全体を博物館と見立て、その文化・風土を研究・保全・学習し、地域社会の次代の担い手を育てる博物館活動をエコミュージアムと呼び、まちおこしにつながる活動として注目される。その概要と先進諸国の事例を紹介。



風景の調律 景観体験の構築

小林享 著
四六判・192頁 本体2,500円+税

「移ろいの風景論」「雨の景観」に続く新しい試み。風景の解釈力、創造力、構築力のおもしろさや伝統を、「食と風景」「辞世と風景」「景観デザイナーとしての画家」といった斬新かつ大胆な視点で読み解く。

SD選書

本選書は、高度に細分化し、専門化した現代文明のあらゆる課題をあつかいながら、新鮮でダイナミックな視点を提供し、各領域をつなぐかけ橋となるものです。

写真・図版を豊富にとり入れて、ヴィジュアルに編集し、今日の造形文化に関心のあるすべての人々の感性と知性に鋭く訴えかける、新しいタイプの選書です。

建築思潮 (建築家の建築論)

15 ユルバニズム	ル・コルビュジエ 著 樋口清 訳	本体1,800円
17 私と日本建築	A.レーモンド 著 三沢浩 訳	本体2,000円
21 建築をめざして	ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳	本体1,800円
33 輝く都市	ル・コルビュジエ 著 坂倉準三 訳	本体1,800円
49 住宅論	藤原一男 著	本体1,800円
95 建築とは何か	B.タウト 著 藤田英雄 訳	本体1,800円
96 続・住宅論	藤原一男 著	本体1,800円
111 モデュロール I	ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳	本体1,800円
112 モデュロール II	ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳	本体1,800円
120 人間の家	ル・コルビュジエ 他共著 西沢信弥 訳	本体1,800円
128 オレゴン大学の実験	C.アレグザンダー 著 宮本雅明 訳	本体1,800円
138 三つの人間機構	ル・コルビュジエ 著 山口知之 訳	本体980円
141 続建築とは何か	B.タウト 著 藤田英雄 訳	本体980円
142 四つの交通路	ル・コルビュジエ 著 井田安弘 訳	本体980円
143 ラスベガス	R.ヴェンチュリ 他共著 石井和雄 他共訳	本体1,800円
148 東方への旅	ル・コルビュジエ 著 石井勉 他訳	本体980円
154 住宅と宮殿	ル・コルビュジエ 著 井田安弘 訳	本体1,200円
157 エスプリ・ヌーヴォー	ル・コルビュジエ 著 山口知之 訳	本体1,200円
158 建築について (上)	F.L.ライト 著 谷川睦子 他共訳	本体1,800円
159 建築について (下)	F.L.ライト 著 谷川睦子 他共訳	本体1,200円
172 建築家の発想	石井和雄 著	本体1,800円
174 建築の多様性と対立性	R.ヴェンチュリ 著 伊藤公文 訳	本体1,800円

185 プレシジョン (上)	ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他共訳	本体1,500円
186 プレシジョン (下)	ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他共訳	本体1,500円
191 アルド・ロッシ自伝	A.ロッシ 著 三宅理一 訳	本体1,800円
204 ミース・ファン・デル・ローエ	D.スペース 著 平野哲行 訳	本体1,800円
205 表現主義の建築 (上)	W.ペーント 著 長谷川章 訳	本体1,500円
206 表現主義の建築 (下)	W.ペーント 著 長谷川章 訳	本体1,500円
207 カルロ・スカルパ	A.F.マルチアノ 著 浜口オサミ 訳	本体1,800円

評論 (現代建築)

63 近代建築	V.スカーリー 著 長尾重武 訳	本体1,500円
82 アメリカの建築とアーバニズム (上)	V.スカーリー 著 香山壽夫 訳	本体980円
83 アメリカの建築とアーバニズム (下)	V.スカーリー 著 香山壽夫 訳	本体980円
97 建築の現在	長谷川義 著	本体980円
131 アメリカ住宅論	V.スカーリー Jr. 著 長尾重武 訳	本体980円
139 インターナショナル・スタイル	H.R.ヒッチコック 他共著 武沢秀一 訳	本体1,800円
144 ル・コルビュジエ	C.ジェンクス 著 佐々木宏 訳	本体1,800円
150 近代建築の失敗	P.ブレイク 著 星野郁美 訳	本体1,800円
155 イタリアの現代建築	V.グレンゴッティ 著 松井宏方 訳	本体1,200円
212 建築計画の展開	W.M.ベニヤ 著 本田邦夫 訳	本体1,500円

建築家論

7 フランク・ロイド・ライト	谷川正己 著	本体1,800円
34 アルヴァ・アアルト	武藤章 著	本体1,800円

123 ライトと日本	谷川正己 著	本体1,800円
132 タリアセンへの道	谷川正己 著	本体980円
165 アドルフ・ロース	伊藤哲夫 著	本体1,200円
170 ブルネッレスキ	G.C.アルガン 著 浅井朋子 訳	本体1,500円
181 ジュゼッペ・テッラーニ	B.ゼーヴィ 著 鶴沢隆 訳	本体1,500円
187 オットー・ワグナー	H.グレンツェンガー 他共著 伊藤哲夫 他共訳	本体1,800円
189 ルイス・マンフォード	木原武一 著	本体1,500円
196 オーギュスト・ペレ	吉田綱市 著	本体1,500円
197 アントニオ・ガウディ	鳥居徳敏 著	本体1,800円
217 ボッロミーニ	G.C.アルガン 著 長谷川正允 訳	本体1,800円
218 ヴィオレ・ル・デュク	羽生修二 著	本体1,800円
219 トニー・ガルニエ	吉田綱市 著	本体1,800円
222 パラディオへの招待	長尾重武 著	本体1,800円
226 ウィリアム・モリス	藤田治彦 著	本体1,800円
227 エーロ・サーリネン	穂積信夫 著	本体1,800円

建築論

78 実存・空間・建築	C.ノルベルグ=シュルツ 著 加藤邦男 訳	本体1,800円
124 空間として建築 (上)	B.ゼーヴィ 著 栗田勇 訳	本体1,800円
125 空間として建築 (下)	B.ゼーヴィ 著 栗田勇 訳	本体1,800円
130 建築空間…尺度	P.ブドン 著 中村貴志 訳	本体980円
134 思想としての建築	栗田勇 著	本体980円
168 モラリティと建築	D.ワトキン 著 榎本弘之 訳	本体1,200円

SD選書

221 古典建築の失われた意味

G.ハーシー 著 白井秀和 訳 本体1,800円

224 芸術としての建築

S.アバークロンビー 著 白井秀和 訳 本体1,800円

都市論

22 メガロポリス

J.ゴットマン 著 木内信蔵 訳 本体1,500円

58 新しい都市の人間像

R.イールズ 他共編 木内信蔵 監訳 本体780円

81 爆発するメトロポリス

W.H.ホワイト Jr. 他共著 小島将志 訳 本体980円

85 アーバン・ゲーム

M.ケンツレン 著 北原理雄 訳 本体980円

162 見えがくれする都市

横文彦 他共著 本体1,800円

164 環境計画論

田村明 著 本体1,800円

171 装置としての都市

月尾嘉男 著 本体1,500円

208 都市の街割

材野博司 著 本体1,500円

210 まちづくりの新しい理論

C.アレグザンダー 他著 難波和彦 監訳 本体1,800円

228 都市デザインの系譜

相田武文、土屋和男 共著 本体1,800円

232 都市・住宅論

東孝光 著 本体1,800円

236 都市デザイン 野望と誤算

ジョナサン・バーネット 著 兼田敏之 訳 本体2,100円

デザイン

1 現代デザイン入門

勝見勝 著 本体1,800円

5 日本デザイン論

伊藤ていじ 著 本体1,800円

42 道具考

榮久庵憲司 著 本体1,500円

56 環境とデザイン

G.エコボ 著 久保貞 訳 本体2,000円

149 建築鑑賞入門

W.W.コーディル 他共著 六鹿正治 訳 本体1,800円

156 バウハウス

杉本俊多 著 本体1,800円

167 水空間の演出

鈴木信宏 著 本体1,800円

178 木のこころ

G.ナカシマ 著 神代雄一郎 他共訳 本体1,800円

182 水のデザイン

D.ベミングハウス 著 鈴木信宏 訳 本体1,800円

188 環境照明のデザイン

石井幹子 著 本体1,800円

192 屋外彫刻

M.A.ロビネット 著 千葉成夫 訳 本体1,800円

194 トーネット曲木家具

K.マック 著 宿輪吉之典 訳 本体1,500円

198 インテリアデザインとは何か

三輪正弘 著 本体1,800円

202 椅子のデザイン小史

大廣保行 著 本体1,800円

203 都市の道具

GK研究所、榮久庵二 著 本体1,500円

209 日本の伝統工具

土田一郎 著 秋山実 写真 本体1,800円

215 行動・文化とデザイン

清水忠男 著 本体1,800円

216 環境デザインの思想

三輪正弘 著 本体1,800円

223 ディスプレイデザイン

魚成祥一郎 監修 清家清 序文 本体1,800円

225 フラクタル造形

三井秀樹 著 本体1,800円

住宅

111 プライバシーとコミュニティー

S.シャマイエフ 他共著 岡田新一 訳 本体1,800円

110 現代のコートハウス

D.マッキントッシュ 著 北原理雄 訳 本体980円

133 建築VSハウジング

M.ボウリー 著 山下和正 訳 本体980円

190 いえとまち

鈴木成文 他共著 本体1,800円

211 建築環境論

岩村和夫 著 本体1,800円

日本建築史

4 江戸と江戸城

内藤昌 著 本体1,800円

12 新桂離宮論

内藤昌 著 本体2,000円

37 日本建築の空間

井上充夫 著 本体1,800円

53 茶匠と建築

中村昌生 著 本体1,800円

152 日本の近代建築(上)

稲垣栄三 著 本体1,800円

153 日本の近代建築(下)

稲垣栄三 著 本体1,500円

173 日本の空間構造

吉村貞司 著 本体1,800円

235 間(ま) 日本建築の意匠

神代雄一郎 著 本体2,400円

世界建築史

25 都市形成の歴史

A.コーン 著 星野芳久 訳 本体1,800円

66 天上の館

J.サマーソン 著 鈴木博之 訳 本体2,000円

140 北欧の建築

S.E.ラスムッセン 著 吉田哲郎 訳 本体980円

169 ペルシア建築

A.U.ボープ 著 石井昭 訳 本体1,500円

175 広場の造形

C.ジッテ 著 大石敏雄 訳 本体1,800円

176 西洋建築様式史(上)

F.バウムガルト 著 杉本俊多 訳 本体1,800円

177 西洋建築様式史(下)

F.バウムガルト 著 杉本俊多 訳 本体1,800円

195 劇場の構図

清水裕之 著 本体1,800円

200 ヴェネツィア

陣内秀信 著 本体1,800円

213 スペイン建築の特質

F.チュエッカ 著 鳥居徳敏 訳 本体1,500円

214 アメリカの巨匠たち

P.ブレイク 他 著 小林克弘 他共訳 本体1,800円

SD選書

美術・文化論

- 8 きもの文化史**
河端実英 著 本体1,800円
- 14 現代絵画の解剖**
木村重信 著 本体2,000円
- 19 芸術空間の系譜**
高階秀爾 著 本体1,800円
- 20 日本美の特質**
吉村貞司 著 本体1,800円
- 27 イタリアの美術**
A.プラント 著 中森義宗 訳 本体2,000円
- 35 幻想の建築**
坂崎乙郎 著 本体1,500円
- 46 キュビズムへの道**
D.H.カーンワイラー 著 千足伸行 訳 本体1,800円
- 55 空間の生命**
坂崎乙郎 著 本体1,500円
- 75 部族社会の芸術家**
M.W.スミス 編 木村重信 他共訳 本体780円
- 106 光の死**
H.ゼーデルマイヤ 著 森洋子 訳 本体980円
- 114 ロマネスク 上**
H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円
- 115 ロマネスク 下**
H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円
- 116 ゴシック 上**
H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円
- 117 ゴシック 下**
H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円
- 146 鏡:虚構の空間**
由水常雄 著 本体980円
- 234 さあ横になって食べよう**
バーナード・ルドフスキー 著 奥野卓司 訳 本体1,800円

環境・アメニティ・都市

- 28 明日の田園都市**
E.ハワード 著 長素連 訳 本体1,800円
- 103 プライド・オブ・プレイス**
シヴィック・トラスト 著 井出久登 他共訳 本体980円
- 118 アメリカ大都市の死と生**
J.ジェコプス 著 黒川紀章 訳 本体1,800円
- 119 遊び場の計画**
R.ダットナー 著 神谷五男 他共訳 本体1,800円

- 129 都市はふるさと**
F.レンツロー・マイス 著 武基雄 他共訳 本体980円
- 135 人間のための都市**
H.ペーターズ 著 河合正一 訳 本体980円
- 136 都市憲章**
磯村英一 著 本体980円
- 147 イタリア都市再生の論理**
陣内秀信 著 本体1,800円
- 220 住環境の都市形態**
P.バヌレ 他共著 佐藤方俊 訳 本体1,800円
- 233 ふれあい空間のデザイン**
清水忠男 著 本体1,800円

素材・技術

- 9 素材と造形の歴史**
山本学治 著 本体1,800円
- 36 カテドラルを建てた人びと**
J.ジャンベール 著 飯田喜四郎 訳 本体1,800円
- 67 木の文化**
小原二郎 著 本体1,800円
- 72 ヴィラール・オヌクルの画帖**
藤本康雄 著 本体780円
- 89 江戸建築と本途帳**
西和夫 著 本体980円
- 183 ゴシック建築の構造**
R.マーク 著 飯田喜四郎 訳 本体1,500円
- 201 自然な構造体**
F.オートー 著 岩村和夫 訳 本体1,800円

庭・ランドスケープ

- 23 日本の庭園**
田中正大 著 本体1,800円
- 43 ヨーロッパの造園**
岡崎文彬 著 本体1,800円
- 87 日本の公園**
田中正大 著 本体1,800円
- 98 都市の景観**
G.カレン 著 北原理雄 訳 本体1,800円
- 163 街の景観**
G.パーク 著 長素連 他共訳 本体1,200円
- 193 作庭記からみた造園**
飛田範夫 著 本体1,800円

- 229 サウンドスケープ**
鳥越けい子 著 本体1,800円
- 230 風景のコスモロジー**
吉村元男 著 本体1,800円
- 231 庭園から都市へ**
材野博司 著 本体1,800円

心理学

- 145 デザインの認識**
R.ソマー 著 加藤常雄 訳 本体980円
- 161 建築形態のダイナミクス(下)**
R.アルンハイム 著 乾正雄 訳 本体1,200円
- 166 空間と情緒**
箱崎純一 著 本体1,500円

フィールドワーク(デザインサーベイ・人類学)

- 54 住居空間の人類学**
石毛直道 著 本体1,500円
- 59 京の町家**
島村昇他 編 本体1,800円
- 61 住まいの原型 I**
泉靖一 編 本体1,500円
- 76 キモノ・マインド**
B.ルドフスキー 著 新庄哲夫 訳 本体2,000円
- 77 住まいの原型 II**
吉阪隆正他 共著 本体2,000円
- 126 かいわい**
材野博司 著 本体1,800円
- 184 建築家なしの建築**
B.ルドフスキー 著 渡辺武信 訳 本体1,800円

情報

- 71 現代建築事典**
W.ベアント 編 浜口隆一 他監修 本体1,900円
- 91 イギリス建築の新傾向**
R.ランダウ 著 鈴木博之 訳 本体980円

9月号 8月25日発売

SD

本体1905円+税

特集：木造モダニズム1930-50s 素材を転換させた日本の発想
建築界をこえてひろがるモダニズム再考のムーヴメント、そして「木」という素材への回帰。これらを包みこむテーマが、第二次大戦をはさんだ1930~50年代の日本にあった。モダニズム再構築の手がかりがここにある。
企画協力：大川三雄・矢代真己・田所辰之助・濱崎良実 写真：清水 襄
作品：〈カルメル会聖テレジア修道院〉今井兼次／〈新発田カトリック教会、他〉A.レーモンド／〈前川自邸〉前川國男／〈秋の宮村役場〉白井晟一／〈八勝館〉堀口捨己／〈土浦自邸〉土浦亀城／他

http://www.kajima-publishing.co.jp 鹿島出版会 ☎03-5561-2551

9月号 8月18日発売

建築技術

本体1762円+税

特集：杭基礎の設計・施工の動向 監修／杉村義広（東北大学教授）この特集では、杭基礎の設計・施工管理について、実務への適用という観点から、技術開発の動向をコンパクトにわかりやすく解説し、今後の課題を提示していきます。**基礎の設計・施工をめぐる現状と今後の展望／設計（杭基礎の要求性能と基礎形式の多様化他）／施工管理（性能設計に対応した施工管理手法他）／事例（パイルドラフト基礎他）** 好評連載：建物と電磁環境（電磁環境対策技術②）／建築技術のアクション

http://www.kenchiku-tosho.co.jp/gijutsu 建築技術 ☎03-3222-5951

隔月刊
No. 29 9月16日発売

造景

本体2800円+税

〈特集1〉交通実験都市
地方都市中心街を活性化するためのさまざまな実験
〈特集2〉田園風景の夢―「神戸の里づくり」
人と自然との共生ゾーンをめざして
〈特集3〉杉のふるさと、雪の降る町、木の住まい
人と自然との共生ゾーンをめざして
〈連載〉同潤会アパートとまちづくり③
鷺谷、三ノ輪、上野下、三田

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

隔月刊
No. 44 9月5日発売

confort

本体1905円+税

〈特集〉：建築を生かす庭
庭と共に生きる家／榊野俊明の庭園デザイン／多様な生き物が共に暮らせる環境とは？／空間デザインのための植物図鑑／ニューヨーク郊外のアゼリアの庭／木製エクステリア建材・家具カタログ／環境から発想する庭・インディジネスガーデン
〈新連載〉：おきなわでたもの ①満月と想像力

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

9月号 9月1日発売

住宅建築

本体2333円+税

〈特集1〉集合住宅＜集まって住むこと＞再考
谷内田章夫、泉幸甫、横河健、元倉真琴、染谷正弘ほか
同潤会の今／斎部功、大月敏雄
〈特集2〉生活をあらわす器のかたち／堀部安嗣
〈記事〉沖縄県糸満市摩文仁の丘／平良敬一

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

2000

8

9

ARCHITECTURAL MAGAZINES INFORMATION

■ご購入は最寄りの書店でお願いいたします。ここに掲載されている雑誌は、建築関係雑誌発行出版社の協力により最新号を告知してまいります。雑誌の一部は予定価格の表示がされたり、最新号を告知してまいります。詳しくは各出版社にお問い合わせください。（BNE事務局）

9月号 8月28日発売 商店建築 本体1943円+税

●業種特集／ファッションブティック

ブエアル・セシオン（札幌パルコ）一河崎デザインスタジオ、ピビアンタム（原宿）一ブラックス、ピーシーピー（岐阜）一西脇一郎、ジャンヌ・マリ（大阪）一澤田デザイン 他

●特集／コマーシャルオフィス

おーえるコング・コミュニケーションルーム（大阪）一カウデザイン、レオパレスワールド（大阪）一リカルド・トッサニ、コンピュータソフトラティステクノロジー（九段）一鈴木敏彦 他

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

商店建築増刊

創刊2号 好評発売中

I'm home.

本体1905円+税

〈主な内容〉デザイナーのつくる非日常のあるホームデザイン
上質なデザインと上質な暮らしをテーマにインテリアデザイナーや建築家による都市型ホームデザインを多数紹介します
特集／光と風を感じる家に暮らそう
イキイキとした暮らしを与えてくれる自然と隣り合わせの家を紹介
特集／バルコニーガーデンのデザイン
広告企画／ナチュラルにこだわるインテリアパーツ 他

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

別冊商店建築
好評発売中

SKブックス

本体 ⑦1400円+税
他1800円+税

〈好評発売中〉シリーズ「SKブックス」は読む商店建築。設計のコツや施工現場で直面するトラブルを具体的に解説。成功するための商品づくり、売場づくり、繁盛店、消費動向やその背景を豊富な実例を基にレポートします。
①よくわかる現場学 ②アイラブプレストラン ③困ってしまった設計の話 ④急成長するHMRの秘密 ⑤クレーム・トラブル・バスターズ ⑥飲食トレンド最前線 ⑦空の高さ ⑧U.S.A. ショップ・ウェーブ2000 ⑨ホテルクラシック

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

My GARDEN 別冊
No.1 好評発売中

GARDEN&LANDSCAPE

本体1429円+税

特集ーロビン・ウィリアムスの世界

建築・景観設計の専門家のための新シリーズがスタート
第1号はグリーン博みやぎ'99で日本で初めて公開されたロビン・ウィリアムスの英国式庭園を徹底解説。
ガーデンデザイン実践講座一庭を飾る／遊びの場所としての庭／ガーデンプランのいろいろ 植栽デザイン／造園施工とメンテナンス／ガーデンハウスのウェザリング／日本庭園との違い／オリジナル植栽図面／植物リスト／他

http://www1.newweb.ne.jp/wa/marumo-p/ マルモ出版 ☎03-3496-7046

季刊
No. 21 好評発売中

LANDSCAPE

本体2505円+税

特集ー商店街が生きる街
街の活性化をさせる事例を紹介

歴史と文化が息づく「大江戸麻布十番商店街」[座談会]／商店が支えるコミュニケーション・スペースー神戸市大日六丁目商店街／サンアントニオに見る水辺と緑の商空間／観光地の商店街は今・／ベルリン「大規模団地再生」の国際ワークショップ／廃棄物リサイクル対策の推進とランドスケープ ●連載ー現場の知恵袋ー屋上緑化の施工技術／他

http://www1.newweb.ne.jp/wa/marumo-p/ マルモ出版 ☎03-3496-7046

N 日章工業株式会社

代表取締役社長 福田 三 丈

●本 社 〒101-0047 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
●大 阪 支 店 ●横 浜 支 店 ●仙 台 支 店 ●広 島 出 張 所 ●福 岡 出 張 所

日立製作所電機特約店
日立化成工業特約店
日立機材特約店
日立建機特約店

旭化成建材代理店
新明和工業特約店
大和ハウス工業特約店
大昭和製紙特約店

施 設 商 品

エレベータ・エスカレータ
ホームエレベータ
機械駐車設備
ゴミ処理設備
バスユニット・流し台
洗面化粧台
集中浄化槽・パネルタンク

空調衛生電気設備工事
受変電・自家発電設備
空調機・ポンプ・送風機
監視防犯システム
節水バルブ・節水トイレ

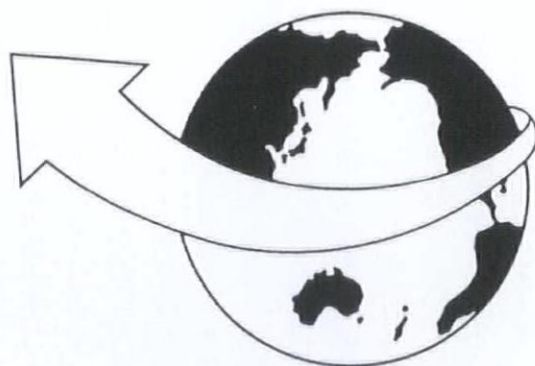
建 材 商 品

PHCパイプ・シテイガイ
イーゼット・現場造成杭
地盤改良
ヘーベル・グランデ
押出成形版・金属パネル
屋根・硝子工事
フリーアクセスフロア・OAフロア

クリーンルーム床工事
ハイベース・ハイスブリット
ユーボード・軽量鉄骨
プレハブ規格建築
大昭和ユニボード
九木ライトフォーム・シールド
クローラクレーン・耐火被覆

未来に向って...

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105-0013 東京都港区浜松町 1-25-7 電話 03(3434)5711
大 阪 支 社 〒532-0031 大阪市淀川区加島 1-58-59 電話 06(6302)2273
支 店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

あなたが触れると、 私達が動く。



**私達はより快適な
人間環境を追求します。**

スイッチON。私達の技術がフル回転をはじめます。あなたがより創造性豊かに思考したり、より機能的に活動できるよう働きはじめます。あなたの身のまわりの、なんの変哲もないスイッチひとつの裏側に、私達のノウハウがいつばいつめこまれていきます。あなたはただ触れるだけ、私達の出番です。あなたが普段、なにげなく使っている設備、なにげなく過している環境に、より快適であるよう生命を与えつづけること……これが私達の仕事です。あなたの目には見えない所で、私達は快適な環境をプロデュースし、クリエイトしつづけていきます。

いろいろな快適、笑顔でつなぐ。



住友電設